ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第01章 段落001 [2015-08-27]

1. DEFINITION
001 Philosophy has been defined as the love of wisdom. A systematic general conception of principle as applied to a philosophy of life. The knowledge of the cause of all phenomena both of mind and matter.

第１章 定義

001 哲学とは英知を愛することと定義されて来ました。それは人生観に適用される系統立った原理の一般的な概念です。また、それは心と物質の両面に関する全ての現象の因への知識でもあります。

【解説】

アダムスキー氏の哲学３部作の内、「テレパシー」に続いて執筆されたのがこの「宇宙哲学」とされています。３部作のいずれも正式な出版物ではなく、学習者の要望に応じて配布する形をとっていたものです。この内、「宇宙哲学」はクロス装丁の上質な仕上がりとなっており、「手に松明（たいまつ）」を掲げる図柄が描かれています。
この松明の意図は今となっては不明ですが、世の中の暗闇を照らす著者の意気込みが感じられます。

冒頭、著者はそもそも哲学とは何かを読者に問いかけています。遠くギリシャの時代から現代文明の起源はあるようですが、当初活躍したソクラテスその他の哲人の貢献はとにかくとして、それを受け継ぐ現代のギリシャは国の存続が危ぶまれる程の経済危機に陥っています。この間、私達が如何に無意味な議論を行って来たかを象徴するように思うのは私だけではないかも知れません。

しかし、哲学本来の役割は本項に記されているように、現象の奥に潜む因の作用にまで遡る広くて深い見識を学ぶことなのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第01章 段落002 [2015-08-28]

002 Cosmic philosophy embraces the Universe conceived as an orderly and harmonious system complete in itself.
002 宇宙哲学は整然として調和が保たれ、それ自体で完結している一つの体系として理解される宇宙を奉じるものです。

【解説】
そもそも著者アダムスキー氏がこの著書を執筆するに当たって、何故「宇宙哲学」と命名したかが、本項に表れています。つまり著者が観る「宇宙」とは、これまでのようなただ膨大に広がった空間というようなものでなく、秩序があり、整然とした構成の下に調和的に動く有機的な空間として洞察していたことが分かります。
その内容は言うまでもなく、著者自身、他惑星の人々から宇宙の真実の姿として学び取ったものでもある訳なのですが、本来の著者の意図はその宇宙に流れる法則をこの著書によって整理し、私達に教えるものであったように思われます。
哲学３部作には各々の意図があるように思いますし、私達もその著者に意図を汲み取りながら、学習を進めて行くことだと思っております。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第01章 段落003 [2015-08-31]

003 Our present perception of mind and matter must be expanded to the realm of Cause in order to understand and take our place in the class room of everlasting learning.
003 私達の現在の心と物質に関する知覚力を理解の為に因の領域にまで広げ、永遠の学習の教室における私達の席を手に入れなければなりません。

【解説】
「心と物質」の理解について、著者は私達一人一人に改めてこれまで何が何処まで分かっているのかを問いかけ、合せてそれが現象（結果）の奥にある因の領域にまで広がった理解を持つようにと説いています。
これまで私達は、「心」は自らの内面の活動を取り扱う領域として観察して来ましたし、「物質」についてはあくまで利用する対象として取り扱うだけのものではなかったでしょうか。
しかし、これまでの私達の学習の過程において、私達は物質の究極の微小単位である原子には知性があり、それらの持つ精神作用は私達自身の生命活動ともつながる宇宙的な知性であることを学んで来ました。
この微小単位に息づく知性がこれまで「因」と称されて来たものの所以であるように思われます。こうした壮大な宇宙観を各自が養うことが本講座の目的でもあるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第01章 段落004 [2015-09-01]

004 Observation is our greatest teacher but we must learn to see the Cause or the related purpose of all forms or manifestations.
004 観察は私達の最大の教師ですが、私達は因、即ち全ての形あるもの・創造の現れの相互に関連した目的を観るよう学ばなければなりません。

【解説】
私達は人間社会の諸問題から、火山や地殻の活動、気象や海流の動き、また動植物の営み等、自然界の全てを観察によって学びます。この観察の中で、私達は自然界を貫いている法則や季節の循環回帰、そして人間も含めその中に生きているもの達の生涯を見て、学んで来たと言えます。
このように観察が私達を成長させてきたキーポイントであることは確かですし、多くの優れた芸術家はその観察過程の中で感銘を受けた美しさを自らの作品として制作して来たとも言えるでしょう。
宇宙哲学を学ぶ私達は、この自然界の観察の中で何を掴むべきかについて、著者は万物の相互関係に着目せよと説いています。目には見えないが相互に関連付けられ、助け合って万物が生きており、それは私達も例外ではありません。その目に見えない各自の関連性こそが因であるとさえ断言しているのです。とかく「因」については神秘的なものに捉えられがちですが、著者はもっと身近に物や生き物、あらゆる存在をつないでいる存在として「因」を捉えていることが本項で読み取れます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第01章 段落005 [2015-09-02]

005 Principle, or source of origin, and nature's laws remain forever the same for they are immutable. Man's concept of the law expands as he desires to know more and more of his purpose in relation to the Cosmos

005 原理、即ち起源の源と自然界の諸法則は永遠に同じであり続けます。何故なら、それらは不変であるからです。人のその法則に対する概念は、その人が自らの存在目的を大宇宙に関連して知ろうとすればするほど、拡がって行きます。

【解説】

起源とは私達が何処から生まれて来たかであり、自然界の諸法則とはその後、今日まで変わることなく万物を支配して来た諸活動の規範とも言えるものでしょう。この両者がこれまでも、またこれからも永久に変わることなく宇宙を貫いていると著者は洞察しています。

言い換えれば、このような私達が拠って立つ基礎的条件はこれまでも私達を支えて呉れていましたが、今後もそれは変わることなく続いて行くと説かれていることになります。永遠に続くものがこの２つということになりますが、これはイエスが「天地が滅びるとも私の言葉は滅びない」と説いたことと重なります。

しかし、一見したところ私達の個人の生涯には限界もあり、また人生の途上で命を失うことも有り得ます。自然災害にも出会う等、各自が立つ基礎は大変不安定にならざるを得ないことも確かです。しかし、そのような移ろい易い結果の世界だけに囚われていると本質的な見識を養えません。変化する環境の中で変わらない要素をしっかり見つめて行くことが大切で、そういう意味で私達が生まれた創造の起源と宇宙空間を支配する諸法則について学べと著者は説いている訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第01章 段落006 [2015-09-03]

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第１章－段落００６

006 Our neighbors on the sister planets of our solar system came to the realization a long time ago that every minutest particle in the Cosmos is inter-related with every other particle. Thereby in order to have even a small perception of the purpose of life, each phase must be studied in relation to the Whole. They shared a theory with all who were interested and gradually theories grew into facts as they explored further and further and unified all life. A humble reverence and love for All Knowing Intelligence as It expressed in every living form became their inspiration. Human relationship and behaviorism was taught to their children to aid them in individual expression of their own divinity.

006 私達の太陽系の姉妹惑星群上の隣人達は、遠い昔に大宇宙の中の一つ一つの極微細な粒子も他の一つ一つの微粒子と相互に関連しているとする認識に至りました。それ故、生命の目的に対する例え小さな理解を得るためにも、一つ一つの側面を全体との関連において学ばなければならないのです。彼らは一つの理論を関心のある者全てと分かち合い、次第に諸理論は、彼らが進んで探求し、全ての生命を統一するに至って、発展し、諸事実になったのです。一つ一つの生きる形あるものの中に表現されている全てを知る英知に対するつつましやかな敬愛が彼らのインスピレーションになりました。人間関係と行動主義が彼らの子供達に、自分達自身の神性の表現を助けるため、教えられました。

【解説】

自然界の諸法則は不変だと前項で説明がありましたが、そもそもその法則は遠い昔、私達の太陽系の金星や土星における一部の人によって洞察が為され、研究が進んだ結果、次第に確信に至るまでになり、以後はその根本原理を実生活に広く応用するまでに至ったのだと説かれています。

今日まで何年要したかは知らされていませんが、このような物質を貫く法則に気付くことによって、文明全体が精化され、惑星全体が進化するということなのでしょう。

そういう意味でも、万物が如何なるものでも全体として相互に関連し合い、影響し合って存在していることを各自が今後、どのような機会で認識できるかが重要になります。「生命の科学」においても度々「原因と結果」について観察すること、相互関係を学ぶことが強調されています。互いに影響し合いながら、存在することは、一方では孤立無縁の自己流の哲学の取組では成果は得られないことが分かりますし、絶えず自然万物の観察を通じて生きた法則を学ぶこと、またそれらの知見を共有して互いに実生活に応用して成果を確かめることが重要であることが分かります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第01章 段落007 [2015-09-04]

007 The following lessons I humbly present with the hope that they may act as stepping stones in your quest for knowledge.
007 以下に続く教課を、私はそれらがあなたの知識への探求の道における踏み石として役立つことを願いながら、謹んで贈呈するものです。

【解説】
奇しくも本項は、毎日のように皆様にお示ししているこの逐次解説をも示唆するような表現となっています。
私達は一歩ずつ歩んで行くしかなく、その一歩を支えるのが本文で言う知識への探究の道に置かれている踏み石である訳です。 この踏み石が事前に用意されていることで、仮にぬかるんだ場所でも滑ることなく、一歩一歩着実に歩み、導かれた道程を歩むことが出来るということでしょう。
また、著者はこの「宇宙哲学」を偉ぶって私達に教えるという態度は微塵も無いことについても私達は良く心に留めて置く必要があります。後から来る私達の為に、自ら踏み石を用意しましたと著者は実に謙虚にこの第１章を締めくくっています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落008 [2015-09-07]

2. Introduction
The Truth about Truth
008 Political factions are clamoring against each other for the right of opinion; philosophers and scientists are arguing about the truth of their various theories; all over the world conflicting thought centers are springing up, each professing itself the only dispenser of the absolute truth and man finds himself wondering just what is truth.

第２章 まえがき
真理についての真実

008 **政治の党派達は互いに意見の正しさを巡って大声を出して主張し合っています。哲学者達や科学者達は自分達の様々な理論の真実性について議論しています。世界中で互いに争っている思想の諸々の中心が急速に出現し、互いに自分だけが唯一絶対的な真理の提供者であると明言しており、人はただ、何が真実であるか知ろうと思い巡らせているのです。**

【解説】

科学が発展し、科学知識については皆が共通に理解し、その上に立って生活物資を作り、生活上便利になる品物を得られるようになっているにも拘わらず、現在の地球上には、様々な意見の応酬があり、主義主張による争いが多くあります。

政治体制や支配構造を巡る争いもさることながら、宗教上の争いも深刻化し、過激な思想も増えています。

本来、互いに宇宙を貫く法則や真理を探究しようとしているにも拘わらず争いにまで至るのは、私達自身の進化レベルを物語る訳ですが、それでも真の真理の姿について、古い思想に束縛されるあまり、私達が十分には掴み切れていない点も大きな原因となっているのです。

私達は現代科学によって得られた知識をベースに自らの拙い心自体を育みながら、他の宇宙文明から伝えられた言わば本物の真理についてこれから学習して行くことになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落009 [2015-09-08]

009 As long as man has been in existence I suppose he has sought for truth without recognizing it when he had it firmly in his grasp

009 人間が存在するようになってからというもの、人間は自分自身の手の中にしっかりそれを握っていたにも拘わらず、それに気付かず、真理を求め続けて来たように私は思います。

【解説】

私達が長年求め続けて来た「真理」は、実は元々自分の中にあったと本講座においては冒頭から結論が説かれています。これはとかく外に真理を求め歩き回ること、外部の者が説く教えを探し求めるのではなく、自分の中に息づく真理こそ本来私達が求め続けて来たものだということでしょう。丁度、仏陀の時代、様々な教師の元を多くの求道者が巡り歩いた時代を思い起こさせます。

言い換えれば、万物は皆、自身の中に宇宙と繋がるしっかりした法則を有しており、いつも創造主と繋がるチャンネルを保っているということでしょう。従って、他に求めるものは何一つ無い、不自由しない環境であるとも言えるように思います。

問題は、私達はこのような恵まれた環境に本来あることをどのように自覚するか、また、その環境を毎日どのように活用し、自らの役割を果たして行くかが重要となります。

放蕩息子の例のように、結局は元の自分の家の素晴らしさが身に沁みる訳で、人生経路の中では様々な本や人との出会いがある中ですが、最終的には私達は自らを教材、手本として研究する中で、日々真理を学んで行くことになるのではないでしょうか。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落010 [2015-09-09]

010 Many generations ago when the Roman Empire was at the height of her glory and the weight of her dominance was felt by a host of people there arose in her midst a master mind who said to those oppressed, "You shall know the truth and the truth shall make you free." And the people eager for deliverance, cried out, "The truth! Give us the truth that we may be free!" They were told the meaning of truth but they could not comprehend and so we hear the echo of those words and of the billions like them quivering down the ages with an insistent appeal - "The truth! what is truth?"

010 何世代も前、ローマ帝国が栄光の絶頂にあって、その支配の重圧が多数の人々によって感じられていた時、その只中に抑圧された人々に「あなた方は真理を知り、そして真理はあなた方を自由にするでしょう」と言った一人のマスターの心の持ち主が現れました。そして抑圧からの救出を求める人々は、こう叫びました。「真理！私達が自由になれる真理をお与え下さい」と。彼らは真理の意味を教えられましたが、彼らは理解できず、私達は以来、何世代も揺れ動くひとつの一貫した訴え、「真理！真理とは何か？」という言葉のこだまや何十億という類似した声を聞いています。

【解説】

言うまでもなくローマ帝国支配下のユダヤにイエスが降り立った時代のことです。既にアダムスキー研究の関係者の間では知られていることですが、1952年11月20日に始まった宇宙からの来訪は遠大な支援プログラムの一環であり、それはイエスの時代或いはそれ以前にまで遡るものとされています。

多くの優れた魂の持ち主が地球を訪れ、「真理」を人々に授けて来たのです。しかし、私達地球人は文明の興隆と崩壊の連続であり、これら教師の教える深い内容について、理解出来ないままとなっていたのです。

本項はイエスが語ったとされる「私の言葉に留まるならば、あなたたちは本当に私の弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」（ヨハネ福音書8:32）を示唆しているものと思われます。ここでも著者アダムスキー氏が使途ヨハネの言葉を引いているところが、長年、使徒ヨハネと相似されていることとも繋がり、興味深いところです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落011 [2015-09-10]

011 And for every such questioning voice there is another calling, "Follow me, I alone can give you the real truth!" And blindly the people follow, little knowing or understanding the purpose of life.

011 そしてこのような疑問の声の一つ一つに対しては、「私に従いなさい。私だけがあなたに本当の真実を授けることが出来るとする、別の呼びかけがあります。そして人々は生命の目的を少しも知ることも理解することもなく、盲目的に従うのです。

【解説】

これまでも多くの宗教の教祖とされる人物は、皆一様に何らかの体験を通じて「真理」を悟り、その結果、身に付けた知識と人並み外れた能力を誇示して、人々を自らの庇護の下に導いて来ました。そのこと自体はある意味、自然な流れであり、イエスもそうした言葉を語っています。

しかし、問題はこれに従う私達の側にあるのではないでしょうか。真理を悟るには各自が研鑽し、日常の中で少しずつ掴んで行く必要があるのですが、とかく私達は盲目的に信奉し、ただ教師の言葉を鵜呑みにすることが多いのです。

また、一方では宗教組織が大きくなると教団を維持する仕組みが必要となり、人々は本来の学習の道から遠ざかる結果になることも多いように思えます。

時代が混乱する時、人々を救済する為、多くの教師が現れますが、その中にあっても私達は冷静に自らの力で真理真相を掴めるように研究しなければなりません。政治の分野でも同様に誰が真実を語り、何を目指しているのか、政治家の本性を見極めることもこれと同様です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落012 [2015-09-11]

012 So to you of this present day - you who have acquired much knowledge of many things, I ask, "What is truth?"
012 そこで、多くの事柄の知識を多く得て来た今日のあなたに、私は問い掛けます。「真理とは何かと」

【解説】

確かに私達はこれまで科学の分野では、過去地球の文明には無かった程の進歩を遂げ、昨今では他の惑星の探査まで行えるようになりました。これは大きな進化ということになります。

しかし、科学技術と言えど、人間の内面、精神作用や生命そのものの躍動感のような要素については、依然認識は低いままという訳です。

これら宇宙をどのように観るか、その中でどのような法則性を洞察するかが重要なところであり、本項で著者が重視しているが故に、私達に改めて問い掛けているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落013 [2015-09-14]

013 Those who are idealistically inclined will answer, "It is reality!" And those who are founded upon a cold scientific basis will answer, "Fact." Others will say that truth is that which is opposed to untruth or is that which is good. To those who gave the first two answers I shall say you are correct so far as you have gone but I shall proceed to catch you in a net of your own weaving. The latter answer that truth is that which is good is utterly misconceived and evasive.

013 理想的な傾向がある者は、「それは現実だ」と答えるでしょう。また冷徹な科学的基礎に立つ者は「それは事実だ」と答えるでしょう。他の者達は真理とは偽りに対立するものだ、あるいは良きものだと言うでしょう。その最初の２つの回答を出した者については、私はあなた方がそう言う限りにおいて、あなた方は正しいと言うべきでしょう。しかし、私は更に進んであなたをあなた自身の編目で捕らえようと思います。一方、真理とは、良きものだとした後者の回答は全くの誤解であり、言い逃れです。

【解説】

「真理」をどのように認識するかは、大事なところです。自らが宇宙を流れる永久不変の原理、私達を含めて万物が拠って立つ原則がどのようなものとして各自が認識しているかが、問われている訳です。

この点について、以降の講座を通じて学んで行く訳ですが、著者は先ず、私達に「真理」とはどのようなものとして認識しているかを問い掛けているということでしょう。丁度、禅の入門者にその見識を問う問答のようなものかと思われます。

私達はこれまでの善悪や好き嫌いの観念では広大であらゆる要素を包括する原理をイメージすることが出来ません。地震や津波、火山噴火等、時に生命を奪う自然の活動もこの中に含まれますし、私達が毎回の食事を摂り、仕事をする中でも他の生命を収奪しているケースも数多いのです。そうした段階の生き方も含めての真理があり、そのイメージはこれまでの私達が想像も及ばない拡がりを持ったものだと言うことでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落014 [2015-09-15]

014 Let us, therefore, get down to real analysis. Just what is the truth about truth? You have said that it is Reality and if I were to ask you to define reality you would be compelled to admit that it is that which has actual existence, and yet you speak of the real and the unreal. You have a set standard for Reality. Does not everything that is known have apparent existence? How else should it have become known?

014 ですから、真の分析に取り組みましょう。真理についての真実は何かということに対して、あなたは真理とは現実だと先に述べましたが、もし私が現実を定義するようにあなたに問えば、あなたはそれは実際に存在するものだと認めざるを得ないでしょう。そしてあなたは現実と非現実について話していることになります。あなたは現実性に対して固定化した基準を設けていることになります。しかし、これまで知られているもの全ては、明白に存在していないのでしょうか。そうでなければ、どうして知られるようになったのでしょうか。

【解説】

目の前に現れる現象や事物等、あらゆるものについて、私達は現実のものとして受け取る必要があります。しかし、真理は何かと問われた時、私達が仮に現実性だと答えたとすると、その概念の中には、反対に現実に無いものとの対比の中でイメージしていることになるのではないでしょうか。

著者はその「現実性」を対極の「非現実性」との関係でイメージしていることを問題視しているのです。そもそも何か存在するもので非現実であるようなものは存在しないと説いているのです。

これは、例えば本人が何かのイメージを持ったとして、それは通常、単なるイメージであり、現実性は無いと判断されがちですが、実はそうではなく、抱く想念自体が先行してそのような現実を造り出し始める、或いは既に何処かにその現実が起こっていることを示唆しているように、私には思えるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落015 [2015-09-16]

015 What of those that say truth is fact - explaining further that it is that which can be proven. Let me ask you this - proven to whom and by what and for how long? Again you must have a set standard of discrimination. Must it be proven by man's laws or theories that have already been given recognition? Then you are putting a limitation on truth. Must it be proven to all people or only to one who is able to see beyond the perception of his fellow-men? Proof can only go so far as a man will accept and truth to each man is only that which he has experienced either by mental realization or physical expression, and yet truth is universal. It is the sum total of action. Every smallest quivering frequency in the whole cosmos is truth - true because it perpetuates action. I shall bring all of my statements down to a perfectly logical, matter-of-fact foundation.

015 真理とは事実であるとする者達の言うことは、更に推し進めれば、それが証明され得るものだということです。このように質問させて下さい。誰にそして何によって、またどれくらいの間、証明されるのかと。ここでもまた、あなたがたは差別のための固定化した基準を持っているに違いないのです。それはこれまで既に認められた人間の法則や理論によって証明されなければならないのでしょうか。そうであるなら、あなたは真理にある限界を置いていることになります。それは全ての人々にあるいは仲間の者達より奥先を観ることが出来る者のどちらに証明されなければならないのでしょうか。証明とは人が受け入れるまでのものであり、個々の人にとっての真理はその人がかつて心の自覚あるいは肉体の表現によって体験したことでしかありません。しかし、真理は宇宙普遍のものです。それは行為の総計です。全宇宙の中の個々の極微の震える振動は真実です。それが永続する活動であるが故に真実なのです。私は私の論述を全て完全なる論理的で事実に即した基礎に基づいて書き起こすつもりです。

【解説】

真理は事実であると主張する者に対して、著者はその事実とは誰によって証明されたものなら良いのか、また事実であるとそもそも誰によって証明されるべきかと問い直しています。

その議論の中で著者は所詮、現代の私達が前提とする諸法則もその適応性には限界があり、いずれ新しい「原理」によって置き換えられるものに過ぎないと説いています。

こうした中、宇宙自然の営みは未来永劫継続する訳で、その継続するということ自体が真理に属すると観なければいけないと諭しています。私達は真理の只中に生活しており、少しずつではあっても、真理を探究する毎日を送るべきなのです。

ご連絡 [2015-09-17]

いつもご覧いただき、有難うございます。
都合により、明日から連休明けまで、更新をお休みさせて戴きます。

２０１５年９月１７日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落016 [2015-09-17]

016 Most of the world's intolerance is due to the misconception of truth. Men fight to death for their individual concept of it when a little wisdom would show them that they are only a step apart in the same hall of learning, but due to the fact that every individual intelligence has a slightly different degree of understanding, truth to each is slightly different. Intolerance is a mark of ignorance, for a developed intelligence is able to view sequences of action that shows each separate action to be relatively true. And because all sides of a question are understood he is bound by none. This type of intelligence does not condemn those who see only one phase of the whole truth. Instead he will point out the pitfalls or limitations that follow the course of thought that the individual is indulging in.

016 世界の不寛容の大部分は真理への思い違いに起因しています。人々は自分達が同じ学びの会堂で互いに一歩だけ離れていることをわずかな智恵が示す時、自分達各自の概念の為には死に至るまで戦うのです。しかし個々人の知性は理解においてわずかずつ異なるために、各自にとって真理はわずかずつ異なります。不寛容は無知の印（しるし）です。何故なら進化した知性には個別の行為が相対的に真実であることを示す行為のつながりを観ることが出来るからです。そして一つの疑問に関する全ての側面が理解される為、その者は何ものにも囚われることがありません。この種の知性には全体の真理の内、わずか一つの側面のみを見る者を非難することはありません。代わりにその個人がふけっている思考の道程に続く落とし穴や限界を指摘することでしょう。

【解説】

本項で説かれている私達地球人の「不寛容さ」については、数多くの事例を紹介できるものと思いますが、その最たるものは、目下中東シリアから何十万もの難民がヨーロッパを目指して逃げていることにも関連しています。

誰しも好んで自ら生まれ育った故郷を捨て、或いは逃げようとする人は居ません。そこでの生活に絶望した上での行動が今回の亡命避難民なのですが、その原因の大きな部分が宗教観の違いによる過激な行動があることは皆さまご存じの通りです。

宗教というものは本来、深遠なる真理を洞察する為、先にその境地に達した教師が説いたテキストを学ぶ中で、日々精進すべきものですが、極端な信奉者は意見の異なる他の者を許さないとする「不寛容」に陥るという訳です。それも人類の今後の歴史をも揺るがしかねない大きな影響をもたらしてしまった事例となっています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落017 [2015-09-24]

017 Truth is action - the whole action of which every part is true. Small truths lead into greater truths and one small truth cast out as false can block the progress of a civilization, as has been shown by the history of the past.

017 真理とは活動です。あらゆる個々の部分が真実である活動の全体です。小さな真理はより大きな真理へと導き、偽りと投げ捨てられる一つの小さな真理も、過去の歴史によって示されて来たように、文明の進歩を妨げる可能性すら持っています。

【解説】

私達自身の身体の中で行われている膨大な種類の生命維持活動も含め、活動しているものが真理であると説いています。宇宙に刻々流れる原理に従っているからこそ真理という訳です。

このように膨大な数の真理が存在する訳ですが、そのどれを取っても欠くことは出来ない存在であり、もしその内一つでも不要だと捨て去るなら、この文明の進歩を妨げる程の大きな影響を与えるまでになり得るとしています。言い換えれば、生命活動についての私達の概念は大変重要であり、もし誤った概念のまま突き進めば文明全体を誤りかねないと警告しています。昨今の遺伝子操作等のこれに属するのかと考えてしまいます。

また、真理はどのような小さな側面であれ、私達はそこから大きな意味を学ぶべきだと著者は説いているように思えます。自然観察の中では、様々な微小生物の生活風景を観ることが出来ますが、彼らは活動にやむことなく真理を表現し続けています。道端の蟻の群れからも多くを学べるように思うのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落018 [2015-09-25]

018 Because men do not understand the meaning of truth and are therefore intolerant, there has been a span of over a thousand years of scientific darkness that might have been used to bring the slowly evolving civilization to a higher standard of human expression.

018 人々は真理の意味を理解しない為に、そしてそれ故、不寛容である為に、何千年もの長きにわたり科学的に暗黒であった時代がありましたが、そうでなければ、その期間、この緩慢な進歩の文明に、より高度な水準の人間の表現をもたらしたかも知れないのです。

【解説】

著者は本項で当時、頑なな宗教観の支配の下、少しでも異なる思想の持ち主を異端者として糾弾し、拷問死や火刑にしたいわゆる中世暗黒時代を示唆しているものと思われます。

数年前、チェコを旅したことがありますが、一見美しい石造りの小都市の街の広場の一角に拷問を行った部屋があり、今日では見学場所となっていることに驚きました。ノストラダムスの時代、カトリックは民衆の生活の隅々を教義に則り支配していたという訳です。

幸い今日では自由解放の時代になり、人々が自由に物事を探究し、主張を公言出来る時代になり、産業も発展しましたが、一方では経済が人類を支配することになっているだけで、私達は未だ真理の意味を十分理解したとは言えません。

遠く仏陀誕生から２５００年も経た中、当時とは異なる環境の下で生活している私達は、イエスも含め当時の賢者が自覚していた「真理」について、これまで得た知識を十二分に活用して再度自ら究明する必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落019 [2015-09-28]

019 "You shall know the truth and the truth shall make you free." And the truth is that all things are true - true in a relative sense, I grant you, - relative to all other parts, but until men recognize and give due consideration to the Cause of all actions they will never be free. Only in uniting our efforts, acknowledging a common purpose can we bring civilization to a unified state of understanding and progress.

019 「あなた方は真理を知ることでしょう。そしてその真理はあなた方を自由にする筈です」。その真理とは全てのものが真実であるということ、相対的な意味において真実であるということであり、私としては全ての他の部分との相関性においてとあなた方に認めましょう。しかし、人々が全ての行動の因を認め、当然支払われるべき考慮を払わない限り、彼らは決して自由にはなれません。私達の努力を結集し、一つの共通の目的を認めることにおいてのみ、私達は文明に統合された理解と進歩の状態をもたらすことが出来るのです。

【解説】

仏陀やイエスの時代から私達は自らの生きる拠り所としての真理を求めて来ました。多くの国で寺院に詣でたり、日々の祈りを心に抱きながら生活している人々も多いことでしょう。その中には自ら求める真理を体得し、自信をもって自らの人生を歩み始めた者も居る一方、様々な事情から真理の片鱗され掴めず、苦悩の中に留まる人も少なくないと思われます。

しかし、私の浅学でも、仏陀にしてもイエスにしても皆同様な真理を語っているように思われます。それは何ものも否定せず、真理を受け入れ、その意義を学ぶという姿勢です。死をも恐れることなく、自らの生命を見つめ自分と他者、とりまく環境とのつながりを自覚する姿勢が重要なのではないでしょうか。場合によっては動物達の方がこの心境に到達しているかも知れません。

少し横道に外れますが、実は先日仕事である国の屠場施設を調査したことがあります。明日には屠られる水牛達が実に穏やかに柵の中に佇んでいました。自らの運命や役割を受け入れ、静かに時を待つ姿に敬意を払わざるを得ない気持ちになったものです。たとえ死を前にしても、自ら掴んだ真理があれば、このように穏やかに過ごせるということなのでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落020 [2015-09-29]

020 Truth is like a great picture puzzle - a mosaic, as it were, and each man's individual expression is a part of the total composition. The mature individual realizes life as a succession of duties to be performed. Because there are diversified concepts of life does not mean that only one can be correct. No, all are true. Whatever is conceived in the mind of man is true to him for the moment just as every act of nature is true whether it be of creation or disintegration. Man's ideas may be used unwisely because he has not enough knowledge to use them constructively in relation to other truths, but that does not mean that the results establish a fact.

020 真理とは巨大なジグソーパズルのようなものです。丁度、各個人の表現はその全体の構図の一部になっているモザイク画のようなものです。成熟した個人は生命とは達成されるべき義務の連なりと認識しています。生命についての多様化した概念がある為、一つだけが正しいとすることはありません。いいえ、全ては真実なのです。人の心の中にどのような事柄が思い浮かぼうとも、それが創造的であるか、崩壊の性質であるかに関わらず、その瞬間、その人にとってそれは真実なのです。人間のアイデアはその者が他の諸々の真理に関連してそれらを建設的に用いるだけの十分な知識を持たない故に、誤って用いるかも知れません。しかしそれは、その結果が事実を打ち立てることを意味するものではありません。

【解説】

今日では生物多様性や生態系という言葉が広く知られるようになりました。これは人間についても言えることで、異なる人種、民族、宗教が共存する中で、総合的には豊かな社会が出来上がるという概念かと思われます。

この達成には、前々項以来述べられている「不寛容さ」が最も大きな支障となっています。相手の考え方の違いを認め、各自の真理感を尊重し合うことが必要だという訳です。

この点、宗教分野では仏教の教えは特筆しているように思います。各自に内面の精進を求め、自ら真理を探究して道を進めよと説く仏教は他の信仰の者とも共存して行ける理解を持っています。また、日本神道にもその許容があるように思います。

いずれにせよ、哲学を学んで行く私達にとって、自分が正しいと思っている内容は、お互い異なることも多い訳ですが、それでも各自の想いを尊重し、その示す側面の真理を認めつつ、それらを包含する全体のイメージを思い描こうとする姿勢が重要なのだということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第02章 段落021 [2015-09-30]

021 Our purpose in life, then, is not personally judge between the true and the untrue but to so coordinate our own being with nature that we may unite the knowledge of Cause and Effect.
021 そこで私達の人生における目的は、真実と真実でないもののどちらかであるかを個人的に裁定することではなく、私達が因の知識と結果を結合させられるよう、私達自身を自然と調和させることにあります。

【解説】
物事に対する姿勢としては、先ずはありのままを受け入れ、その中に意義や他との関連性を観るように努めるということでしょう。仮に相手の主張が偽りのように思えても、先ずはその主張を拒絶せず、相手に寄り添ってその主張が描こうとするイメージを明らかにすることです。そうすればそれが本人だけの一時的なものか、永続的な真実かは自ずと明らかになるものと思われます。

カウンセリングにおいては、「傾聴」という姿勢が重要だとされているようです。その過程を通じて相手が自分が受け入れられていることに気付けば、次の改善プロセスに繋がるということでしょう。

日々、私達は様々な事象や情報、他者との関係に巡り合います。その中で良好な関係作りを実践して行く為には、先ずは出会う全てを受け入れ、その中に宇宙を流れる法則性や相互関係を観る中で、真理に対する自らの視野を広げて行く必要があります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落022 [2015-10-01]

3. THE MAGNIFICENT PERCEPTION
PRELUDE
022 The roll of the tides and the waves and the rising and setting of suns, the whirling of atoms and worlds are all tuned to the Cosmic Plan yet are subject to time and to space.

第３章 壮麗なる知覚
序章
022 潮汐や波のうねり、太陽達の出や入り、原子や世界の旋回は全て、宇宙の計画に調律され、しかも時間と空間とに従属しています。

【解説】
個人的には本章が宇宙哲学の中で最も優れた箇所ではなかろうかと思っています。広大な宇宙をどのように知覚すべきか、著者は自らの視点・観点を私達に例示しているのです。

大は太陽や惑星、小は原子の回転に至るまで、あらゆるものが活動の状態にあり、調和した中で動いていると著者は説いています。もちろんオーケストラ同様、調和する為には全ての旋律を頭にイメージ出来ている一人の指揮者が居て、各々の演奏者に指示を出す必要がある訳で、それが「宇宙の計画Cosmic Plan」なのだと私達に諭しているということです。

一方ではこうした活動を続ける私達はまた、時間や空間の中で暮らしており、各個体は活動を永続出来る訳ではなく、変化・変遷の過程にあるということでしょう。最近の天文学でも星の寿命もあるとされており、文字通りライフサイクルの中で生きて行くことになります。

私達は何故かは未だ知らないにせよ、一大調和した宇宙の中で他の構成員と共に生きており、先ずはその世界の壮麗さを十分に知ることが最も大切だと言えるでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落023 [2015-10-02]

023 Time is the instrument used to measure the movement of Beings - the element action creates in its path from the formless to the formed. In Eternity always you are, but in time you're unstable, inconstant.

023 時間は存在物の運動を計るために用いられる道具であり、その基本的作用は形無きものから形あるものへの道筋の中で、創造的な働きをします。永遠の中ではあなたは常に居ますが、時間の中ではあなたは不安定で変わりやすいのです。

【解説】

著者は時間というものは、何かあるものの運動を測定する手段に過ぎないと説いています。即ち、時間への束縛を取り去れば、もっと基本的な姿が見えて来るということでしょう。そこにはあらゆるものの活動が形を持たない「無」や「空（くう）」という状態から、形あるものに移り変わって行く姿が見える筈だと説いているのです。

丁度、一見何もない空から雲が湧き、雨を降らせるのと同じく、全てのものが「形あるもの」、「創造物」へと転身する過程の中に生きて居る訳です。

確かに一度これら「形あるもの」になってからは、それらは一定程度の過程の下、やがては形を失って行く訳ですが、それも再び同様のサイクルの中に生き続けるのです。これを一つ一つの個体に目を囚われれば、変化の中にあるのですが、視野を広げ、自我の枠を超える視界を持てば、この生命活動は永続していることを理解出来るというものです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落024 [2015-10-05]

024 Sit here at the center of all and look out on your flux of expression. As the moon to the vision of man passes through all the various phases yet remains still an orb complete without change or point of division, so you through your phases shall pass; mortal eyes shall see change and division yet you are a circle complete - you're endless, eternal, abiding.

024 全ての中心であるここに座って、あなたの絶え間ない表現の変化を見渡しなさい。人間の視覚にとって月は様々な位相を通じて変化しますが、それでも変化や如何なる区分けも無く、それは完全な球体のままです。あなたも様々な位相を経ることでしょう。死すべき肉体の目は変化や区分を見るでしょうが、それでもあなたは完全な円（まる）のままです。あなたは絶えることなく、永遠で不変です。

【解説】

先日(2015年8月）、Wayne Dyer(ウェイン・ダイヤー）氏が亡くなりました。氏は幼い頃、家庭の事情から決して幸せとは言えない生活を送っていましたが、やがていくつかの転機の中、成長され大学教授にまでなった方で、いわゆるアメリカのスピリチュアルの騎士として長らく活躍されて来ました。その彼も遂には病に倒れ、遺骨はハワイ・マウイ島の海に散骨されたとのことです。その氏の最期の言葉として、"couldn't wait for this next adventure to begin and had no fear of dying"（自分はこの次に始まろうと待っている冒険が待ち遠しい。死に恐れは無い）と述べていたとされています。

私達、形あるものは全て変化の過程にあり、月の満ち欠けに似ている訳ですが、それでも私達自身の本体は月がその球体のまま存続するように永続するということでしょう。肉体はやがては寿命が尽きるものですが、私達自身は永続する存在であることをよく認識して置くようにと本項は諭しているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落025 [2015-10-06]

025 Look forth from these eternal heights, from the heart of your unified being; look down towards the plains of desire where your destiny finds its fulfillment. Look closely and firmly perceive that the break which you one time envisioned is nothing but mortal illusion; that there is but the unified whole.

025 これら永遠の台地から、そして一体化したあなた自身の中心から前を見なさい。あなたの運命がその成就を見い出す望みの平原を見下ろしなさい。よく見て、あなたが一時、心に描いた割れ目は人の思い違いであること、そして一体化した全体のみが存在することもしっかり気付きなさい。

【解説】

山の頂から眼下を見れば、これまで辿って来た道程やこれから歩む行程がどのようなものであるかが良く分かります。人生行路の中、自分がどのような歩みを辿って来たかは、この高い視点から眺めることが出来ます。

ここで著者が私達に示したいのは、人の死、即ち「割れ目（break）」が、実際には生命活動が途切れることではなく、それはあくまで心から見た現象であり、この永遠を見渡す台地から観る限り、人生は永続するのだということでしょう。

丁度、至仏山から尾瀬ヶ原を通る木道の行く末を眺めるように、私達の人生行路は遠い先まで続いているということでしょう。そうした中、自らが望む方向の先には、その望みの実現への出会いもあり、各々自ら望む通りの道を歩むことになります。そしてその中で重要なことは、それら全てが統一された宇宙の中で行われているということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落026 [2015-10-07]

026 Always you are One, you are All, as a centralized point of Being. Undying, unchanging - the Consciousness, Cause, and the Action - evolving, transmuting a form to a unified state of awareness.
026 存在の集中化した一点として、いつもあなたは一つであり、全てです。あなたは不死、不変の意識であり、因であり、また進化し、一つ形あるものを統一化された知覚状態に変える行動なのです。

【解説】
私達自身、自分をどのように観るかはとても重要です。ここでは、ある特定の目的の下に集中したもの、変わることのない宇宙的意識体が集中した活動する本体として、自分があると説いています。この人体という集約物は創造主が望む活動を物質世界で実現・行使するため、創られているといっても良いでしょう。
やがてはその身体も擦り切れ、年老いて生命活動を維持することが出来なくなる訳ですが、その本質・本体の歩みは止むことなく、次の肉体に転生し、永続して行くと説いているのです。
時々の出会いにより歩みの方向は変わることもあるでしょうし、問題にぶつかって足踏みする期間もあるかも知れません。しかし、重要なのは私達が各自これら壮麗な道程の中で、宇宙知性の集約物として生き続けるという自覚です。人生の歩みは永遠であるとの視点に立って、急がずその本質的視点を忘れることなく、自らの心身を精化させ続けることを著者は私達に求めているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落027 [2015-10-08]

027 From action to action you pass like a great shuttle weaving new patterns - on the loom of Eternity weaving a pattern of beauty called Life. The fine silver thread which you use is Cosmic Consciousness, binding together each stitch in true lines of perfection; creating in patient evolvement the unified Love Mantle of All. Each thought and each conscious emotion weaves the Pattern of exact direction, in time uniting the parts and the Allness, absorbing the All in the One.

027 行動から行動へとあなたは新しい模様を織る大きな杼（ヒ）のように過ぎ去ります。あなたは永遠という織機の上で生命と呼ばれる美の模様を織っています。あなたが用いる細い銀の織り糸は宇宙の意識であり、それは極致の真実の線の一つ一つの編み目を結び付けています。そして辛抱強い進化の内に、全てのものに対する統一された愛の外套を造り上げます。想念の一つ一つ、意識的な感情の一つ一つが寸分たがわぬ方向に模様を編み進め、やがては各々の部分と全体とを結合させ、全てを一つに吸収させるのです。

【解説】

私にとってこの「宇宙哲学」の中で最も好きな文章が、本項の表現です。

一日一日、一瞬一瞬の行動が機織の杼（ヒ）のように織物の一筋を織り上げて行くと著者は私達に説いています。

その時、自分（即ち「杼」）にとっては、自分が何を織り上げようとしているのかは分からなくても、一瞬一瞬を因なる指導の声に従って行動を続けて行けば、後になって自分が織り上げた紋様の素晴らしさが理解できるというものでしょう。

大事なのは折り続けること、行動し続けることです。途中で杼（ヒ）を止めては織り機が中断し、物事が完全に成就しないまま捨て去られることにもなるからです。

果たして生涯の間で天命とも言えるような織物を自ら完成させることが出来るかどうかは本人次第ということになります。

織物は一糸ずつ縦糸と横糸を組み合わせて造り上げられますし、それは人生の成果にも繋がります。デザイナーである宇宙の因の指示の下、心身を整え、他者と協力・協調して一歩一歩成果を積み重ねること、そんな象徴が織物の中に秘められていると著者は説いているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落028 [2015-10-09]

THE WORD
028 In the beginning there was but the Word: no mortal mind can know the Word in full for it contains all knowledge and all Power, and only that which is Itself the Word can know or understand potentially. But through a mighty action the Word was imaged into primal form; in form so fine that only Cause could know its attributes or view its being. It incarnated through the whole of substance and impregnated all matter with Its presence till in the place of a tremendous void there grew the second or the form-creation.

大いなる言葉

028 原初は大いなる言葉のみがありました。如何なる人の心もその大いなる言葉を完全に知ることは出来ません。何故なら、それは全ての知識と全ての力を含んでいるからであり、大いなる言葉自身がそれを知り、理解し得るからです。しかし、ある壮大な行為を通じて、大いなる言葉は最初の形態に描かれました。それはあまりに繊細で、因のみがその性質を知り、あるいはその存在を観ることが出来ました。物質全ての中にその存在が宿り、そしてついには巨大な空虚の場所に第２の創造、即ち形あるものの創造が生じました。

【解説】

本項で著者は万物創造の経緯を解説しています。

まず最初に「言葉ありき」とは旧約聖書の一節を引用しています。私達はこの「言葉」なるものの本質について十分知るものではありません。日常、私達が用いている言葉とは、何かの事象か事物に対して名づけている抽象的なイメージかと思いますが、それと同様のものが宇宙創世の時期に存在したという訳です。その「言葉」と呼ばれる存在の中に全ての知識と英知が詰まっていたと説かれています。日本古来から伝承される「言霊（ことだま）」についても同様な意味があり、人が発する言葉の持つ実現力に注目した概念も含まれているものと思われます。

次に創造の第二段階が始まり、今日的には素粒子等と呼ばれる極微小な粒子が生成され、その後、第二段階として宇宙空間において具体的な創造活動が進められたとしています。

つまりは宇宙創造の起源がこの言葉に遡ると説かれている訳です。これら大地の創造活動は今、日本列島の地下でとりわけ顕著になっており、各地で火山活動が活発化しています。これらは私達の目の前に現れた猛々しくも力強い創造作用と言えるでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落029 [2015-10-13]

029 Virgin was this creation in the image of the Word, and filled with all the power of pure wholeness, for it was but one great united form, the body of Cosmic Cause whom we in reverence have called "The Word."

029 乙女とはその大いなる言葉のイメージに創られた創造物でした。またそれは、全ての無垢な完全さの力に満ちていました。何故ならそれは一つの偉大な形、私達が敬愛して「大いなる言葉」と呼んで来た宇宙の因の肉体であるからです。

【解説】

人間は創造主の似姿であるとは古来から繰り返し言われてきた言葉です。人間誰しも幼年期はかわいらしく、また素直であり、この世に存在すること自体に喜びを感じ、表現しています。また身体も柔軟であり、日々成長する等、創造の息吹、生命の活動を身体全体で表現しています。

本文に記されている乙女の姿はその究極の美の表現でありましょう。大いなる言葉の持つ創造力が完全な形で表現されたのがその姿であるという訳です。

同乗記の中に多くの他惑星人がそれぞれ地球人から見れば類まれなる美しい人達であることや千年を超えてもなお若々しい長老のお話が出てきますが、宇宙哲学を学び身に付けた彼らにとって、美は自身を表現した結果であり、長年の精進の結果、形づくられる姿形であるのです。

もちろん私達は表面上の形や色だけで物事を判断することは出来ませんが、長年の内面浄化の結果は人の表情に現れることは間違いありません。私達は毎日のように自身の内面にあるものを自身で表現しているからです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落030 [2015-10-14]

030 Throughout all space the Word reverberated; It set in motion all the Primal Essence until the whole span of Infinity swayed to the Heart-beat of the Mighty Oneness. Rhythm on rhythm rose and fell in one great undivided harmony, for deep within the bosom of the Word there surged the wondrous Love Song of Creation.

030 全宇宙にその大いなる言葉が鳴り響きました。無限の広がりの中でその力強い一体感の鼓動に従って揺れ動くまで、それは全ての基本的存在を揺り動かしました。律動に次ぐ律動が起こり、また過ぎ去りました。何故なら、大いなる言葉の胸の奥深く、創造の素晴らしい愛の歌が沸き上がったからです。

【解説】

創世記に「神が光あれと言われた」等々の記述がありますが、本項もこれと同様に万物創世の時の状況を記しています。

現代科学では今のところ「ビックバン」と称していますが、いずれにせよある時を発端として宇宙が造られたと解釈できることは間違いないでしょう。重要なのはその発端が本項で記されているような大いなる言葉が空間中に響き、素粒子から物質、物質から事物へと具体的な創造作用が始まったということです。

最初は激しい造山活動であったりした訳ですが、やがて調和的な旋律が湧き起こり、宇宙全体を貫く今日の生命活動の源になったという訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落031 [2015-10-15]

031 Greater and greater the Heart of Space was stirred until at last the Song was breathed into a living thing. Each motion as an elemental tone within the mighty symphony and every tiny particle of substance was tuned into accord with every other unit in all space. And thus the impulse of Cosmic Will became a law that ne'er can broken be within the scope of everlasting action. (This Law involves the principle of true affinity.)

031 大きく、また更に大きく宇宙空間の中心は揺り動かされ、遂にはその大いなる歌は一つの生けるものに吹き込まれました。その力強い交響曲の中の基本的な調べの中の一つ一つの運動と、物質の一つ一つの微粒子は全宇宙のあらゆる他の単位と調和させられたのです。そしてこのようにして、宇宙の意思は永続する活動の範囲の中で決して壊れることのない一つの法則になったのです。（この法則は真の親和性の原理を含んでいます）

【解説】

丁度、砂場で採った砂鉄が紙の下に置いた磁石に引き寄せられ、紋様を描くように粒子一粒一粒がこの宇宙の旋律に同期し始めることとなったと述べられています。

また、一粒一粒の粒子がこの宇宙的波動に同期し互いにも影響を与えることになる為、一度大宇宙に浸透した基本リズムは永久に継続されることになります。

私達が日常的に表現する宇宙的調和とは、このことを指しているのです。即ち、宇宙空間に存在する全ての構成物がこの一大法則に身を委ねている訳です。宇宙には善なるものしか存在できないという訳は、仮にその旋律から外れたものが生じたとしても、それらは長続き出来ず、やがては本来の宇宙的旋律に吸収、凌駕されてしまうのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落032 [2015-10-16]

032 Were it possible for any of the Cosmic vibrations to unite contrary to this Primal Law and cause a discord in the mighty paeon their span of such expression would be contained within one moment's quivering vibration, for discord cannot last within the Whole whose very fact of being rests upon the immutable law of harmony. There is no loss of equilibrium within the scope of Cosmic Rhythm that shall not be again absorbed and reunited into Wholeness. For nothing can break the Melody that has forever throbbed within the Heart of That which is, Itself, Infinity.

032 仮にその宇宙的振動のどれかが、この基本法則に反して結合することが可能であったとしても、また、その力強い音節に不協和音をもたらしたとしても、それらの表現の範囲は、一瞬の震える振動の中に封じ込められることでしょう。何故なら、その存在の事実そのものが不変調和の原理に基づく全体の中では、不協和音は継続することは出来ないからです。宇宙的リズムの中では、再び全体性に吸収され、再統合されないような均衡の喪失はありません。何故なら何物もそれ自身、即ち永遠の中心で鼓動しているメロディーを壊すことなど出来ないからです。

【解説】

要は悪事は長続きしないということです。圧倒的な存在である宇宙的調和波動に対し、それにそむくような如何なる種類の波動も永続することは出来ません。またそのような誤った波動や不協和音自体、それらが引き起こす自然界の作用によって、因果応報その発信源もやがて駆逐されてしまう筈です。

よく言われることに、上達の秘訣は闇雲に自ら頑張るということではなく、自分というものを無くして、その場その時のインスピレーションに従って行動し、その行動の中に奉仕する歓びを味わうというような趣旨の表現があります。

この宇宙に響く調和の旋律に従って自由自在に行動することが理想です。丁度、お花畑を乱舞する蝶達のように、自由活発に行動する姿を創造主は喜ばれるということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落033 [2015-10-19]

033 Creation as a whole makes up the song that rises and falls in its impassioned cadence, expressing in the glory of calm Silence all that the Word has been, is, and shall be; voicing with soundless sounds and formless beauty the pulsing force that blends and inter-blends into new rhythms. The Breath of the All-Creative Intelligence is sent forth in peaceful, silent tones of consciousness and in the womb of illimitable space each new creation stirs with quickened life and becomes another true note in the endless Song of Action.

033 創造作用は全体としてその感動的な抑揚の上げ下げのある歌を作り上げ、大いなる言葉がかつてそうであった、また現にそうであり、未来もそうであろう静寂な沈黙の栄光の中で、音無き音と形無き美しさで新たなリズムに融合し、再融合する脈動する力を表現しています。全ての創造的英知の息吹は平穏で無音の意識の抑揚の中で発信され、無限の空間の子宮の中でそれぞれの新たな創造が奮い起こされた生命とともに起こります。そして終わり無き行動の歌の中でもう一つの真の調べとなるのです。

【解説】

目を閉じ耳を塞いでもなお、私達に語りかけ、印象によって様々な指示を与えるのはこの宇宙的な生命力というものでしょう。無言の印象ではありますが、それこそが宇宙創造の根源力だという訳です。

過去の偉人達は、それを悟り、その存在を後に続く者達に語り継いで来たのではないでしょうか。

時々の言葉で表現されたこの存在は、時には「空」と呼び、またアダムスキー氏は「宇宙意識」と呼んだものと思われます。重要な点は、これらいわば五感には感じ取られない印象レベルの作用が実際の創造的力を発揮するということです。「沈黙の世界」は決して何も無い世界のことではなく、そこには大いなる言葉、強烈なる印象が働き、満ちているという訳です。

日常、このことを如何に理解し、実感して生活するかが重要な所で、そうする過程で印象の感受力、即ちテレパシー能力も自ずと高まることになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落034 [2015-10-20]

034 Out of Cosmic Cause are worlds and planets whirled into existence; out of such formless beauty has evolved form upon form until at last there came one form so perfect in its geometric pattern that it possessed the possibilities of understanding Cause. And so into this form was poured the Breath which speaks the rhythm of creation into being, and it was given power to perceive all existence; and it was also blessed with power to name that which before had been but nameless.

034 宇宙の因の中から、諸天体や諸惑星が渦を巻いて誕生しています。このような形の無い美しさの中から、次々に形が進化し、遂にあまりにその幾何学的パターンが完全である為、因を理解する可能性を持った一つの形あるものが出現しました。そしてこの形あるものの中に創造のリズムを語る大いなる息吹が注ぎ込まれました。そしてその形あるものは全ての存在を知覚する力を与えられたのです。そしてその形あるものはまた、それ以前には名前が無かったものに名付ける力を授かったのです。

【解説】

本項では創世記の記述を宇宙的視点からより具体的に説いています。惑星誕生後、数々の生命が生まれ、進化の過程を辿りました。その結果、最終的には人類という最も理想的な形を持つ存在が生まれたと本文で記されています。

このことは、地球の各地で太古から生命の進化の痕跡が見られ、化石も多く発見されている訳で、私達も十分、その歴史を学ぶことが出来ます。地球は万物創造から今日に至るまで、進化の歴史を体験しているということでしょう。

そして最終段階として人類が誕生したという訳です。「２００１年宇宙の旅」ではそのきっかけを宇宙的知性の象徴として描かれた石版に触れた猿人から進化したことを示したことは皆様ご存知の通りです。実は私達にとって重要なことは、本文にあるように、この惑星における私達人類の位置づけをよくよく認識することです。あらゆるものを理解し、その創造の目的を認識出来るが故に、万物を名づけ、支配する権限が与えられたというところが大事なところです。いわば創造物の管理一切を委任された存在でもあるということです。それに相応しい自分であるか否か、改めて問う必要があるように思います。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落035 [2015-10-21]

035 And this creation, highest of them all, was known as Man, born out of That which has no ending; given dominion, consciousness and love and power over all the lesser things. But he descended into depths of sleep, became unconscious of the vaster kingdoms, forgetful of the Glory that exists and dreamed, instead, into existence, the changing image of mortality.

035 そしてこの全てのものの最高位の創造は人として知られ、終わりなきものの中から誕生したものとして知られました。それは全てのより下位のもの達への統治、意識と愛そして支配力を授けられました。しかし、人は眠りの奥深く身を落とし、広大な王国を自覚せず、存在し夢に描いた栄光を忘れてしまい、代わって移ろい行く死すべきイメージを存在させてしまいました。

【解説】

私のような年代になると、これまで歩んで来た人生を時々、振り返ることも多くなるものです。その中で幼年期の断片的記憶も時に懐かしく、既に亡くなっている肉親との思い出も甦るものです。しかし、一方ではこれら全ての記憶の主人公である自分は何一つ変わることなく、今日に続いていることにも気付くものです。外観は変貌しても、自分という存在に変わる訳ではないのです。

更に進んで、この私という身体内部の存在は、肉体が活動を停止しても、更に続くというのが本項の説くところです。既にイエスはじめ多くの先人が死後の復活について自ら証明する「奇跡」を見せていることは、皆様ご存知の通りです。また、前にも何処かで述べましたが、自然界の動物達は生きている間は皆精一杯生き抜こうとしますが、避けられない死を前にした時は実に潔いように思うのは私ばかりではないと思っております。

そこには肉体の死後、更にその生命活動の流れは何処かに引き継がれ継続するという揺るぎない信念があると考えています。それ故にかくも堂々と死を向かえるのです。しかし、一方で本項の表現のように長く惰眠の中で過ごした者は、迫り来る死に直面して初めて自らの学習内容の不備に気付くのではないでしょうか。私達も他惑星に転生出来るレベルに到達する為には、自ら精進を怠ることは出来ません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落036 [2015-10-22]

036 Oh, Son of God and Son of Man, lift up all things within your sight; let your heart make known that which the sight doth not reveal and from the womb of Cosmic Cause which is the source of all creation awaken into the birth of a Magnificent Perception. Awaken into the realm of true Being. Let the strong fingers of your will draw you again into full consciousness. Rise from your earthly couch of slumber and perceive the beauty of your present Existence.
036 ああ、神の息子、人の息子よ、あなたの視界にある全てのものを高揚させなさい。あなたの心に視覚は真理を現さないこと、そして全ての創造の源である宇宙の因の子宮から壮大な知覚の誕生が覚醒されることを知らしめなさい。真実の存在の王土の中に目覚めることです。あなたの意志という強い指であなた自身を完全な意識の中に再び引っ張り入れることです。あなたの地球でのまどろみの長椅子から立ち上がって、あなたの現在の存在の美しさを知覚することです。

【解説】
こうして一日一日、本文を読み込み、著者が執筆に当たってイメージしていたものを理解しようと努めている中で、最近ようやくそのイメージが掴めるようになって来たように思われます。その内容は原子物理学にまで遡る人間の感受性・洞察力の育成でもあるようです。先日もノーベル賞で素粒子であるニュートリノの研究が評価された訳ですが、それら素粒子の活動も私達が推進している感受性の守備範囲であるように思われます。想念波というものがそのような素粒子の活動と近いか、そのものであるかも知れません。私達の洞察力とは、これら証明という過程を経らずとも、瞬時に理解するものでもあるのです。
本項では私達の肉体の既存の感覚が伝えきれない精妙な領域こそ重要であり、そこに私達の原点があると説いています。全てはそのことに帰着するということでしょう。私事になりますが、実家の宗派日蓮宗では何かと「妙」という言葉を大切にしているようです。戒名やお経の中にも度々その言葉が出てきますが、そもそもこれもこの宇宙創造の実世界が精妙なる性質を持つことを理解してのことかと考えています。身の回りの世界をよく観察する中で、その「妙なる」仕組みを学ぶことが重要だということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落037 [2015-10-23]

037 This planet earth that we call our home was brought into its present state of being through that cosmic law of affinity, the great magnetic principle of attraction, and all that therein grows and multiplies is of the one and only Cosmic Power.
037 私達が母国と呼ぶこの地球という惑星は、親和の宇宙的法則、偉大な磁気的引力の法則を経て、今日の状態になりました。そして地球の中で成長し繁殖する全ては、唯一無比の宇宙的パワーによるのです。

【解説】
本項の内容を良く理解しているのはアメリカ・インディアン、その他日本のアイヌも含めた、いわゆるネイティブと呼ばれる民族でしょう。私達日本人もかつてはそのような認識の下、日々の生活が営まれていたようです。
大切な点は、私達各自の認識を私達を生み出し育んでいるこの惑星に感謝し、その源である宇宙根源の生命波動を敬うことだということでしょう。
既にこの文明においても地球環境というような地域を越えて惑星レベルの視野を持つ視点が芽生えており、後はこうした観測データから私達が各自の生活との関連性を自覚することが残るだけとなっています。
言い換えれば、既に私達は母である惑星の今後を左右する程の影響力を有しており、母体は病んでいると言うこともできます。私達が今必要なのは、そうした病んだ惑星をいたわり、より健全な状態ｎ戻すよう、私自身の生き方、生活の仕方、そして何よりも日々の想念のレベルを改めることです。「地球に優しい」という言葉の背景には、本項のような母なる大地、全ての地上の創造物の母である惑星への慈しみがあるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落038 [2015-10-26]

038 Each form that with our mortal eyes we view is but a point of action in the whole - a minute bit of elemental substance moving to ever changing patterns and designs; impelled and impregnated with all-abiding consciousness. There is no tiniest unit in the Whole that does not bend an ear to the Law which Fathers it and causes it to be. And all that we perceive with mortal eyes and know with our consciousness is but the effective image of the Cause Intelligence, which formless is, yet causes forms to be; which knows no limitations and no bonds yet creates transient dense conditions that move and change within the bosom of incomprehensible Eternity.

038 私達が肉眼で見る個々の形あるものは、全体の中の一点の活動でしかありません。絶え間なく変化するjパターンとデザインに移行する基本的な物質の小さな小片であり、全てを永続させる意識によって促され、受胎されたものです。全体の中でそれを生み出し、そうなる原因を成す法則に耳を傾けないものは如何なる微細なもの一つとしてありません。私達が肉眼で見、そして私達の意識で知るもの全ては、形なきものであるが、形あるものを作り出す因なる英知の結果としてのイメージに過ぎません。その因なる英知には制限も制約も無く、しかも無限の永遠の胸の中で移行し変化する過渡的な密度状態を作り出しているのです。

【解説】

おそらく何十年と毎日の自分の姿を写真に撮っていれば、年月とともにご自身が変化して行くのが分かる筈です。植物も同様、季節の変化に応じて若葉を出したり、紅葉の葉を見せてくれます。このように変化するのが万物であり、私達の目はその変化の中の一瞬を見ているに過ぎません。

しかし、自身の姿の変化の例でも分かるように、これら外見は変化しても、その内側の自分自身は何ら変わることはありません。幼児期から今日まで同じ自分である訳です。更に言えば、これらの変化は内なる因の指令に基づいて生じている訳で、一刻一瞬ともにそれら生命の基本的法則に拠らない活動はありません。

私達は物質の世界、結果の世界では絶えず変化の過程にありますが、その内側、目には見えない実体の部分では常に変わらず、因との関係においては因の表現者としての役割は不変であり、未来永劫継続するということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落039 [2015-10-27]

039 And every unit in the whole of Being, each atom and each spark of consciousness reveals without a mark of limitation, if we but seek its heart, the perfect image of Infinity. And each of the little passing points of action which we in earthly terms have labelled time, speak within the moment of their being the fullness of Eternity. Just as the drop of water from the ocean reveals the character of that from which it came; and every sunbeam traveling through space reflects the composition of the sun and revibrates the image of that orb in all of the glory of its full expression.

039 そして大いなる存在全ての中の一つ一つの単位である各々の原子と各々の意識のスパークは、もし私達がその本質を求めさえすればその永遠に関する完全なイメージを一点の制限もなく、私達に明かしてくれます。そして私達が地球的な用語として時間と名づけた行動の小さな通過点はそれらの存在する瞬間の中で永遠の全てを語ります。丁度、大洋の水の一滴がそれが来たったものの特徴を現し、また宇宙空間を旅した太陽光線の一つ一つが太陽の構成物を反映し、その球体のイメージをその完全なる栄光の表現の全てにおいて再現するようにです。

【解説】

私達が探求しようとしていることの本質は、原子にまで遡る物質の極限、物質と精神（意識・想念）との関わりにあるように思われます。本項はこうした物体の行動を宇宙普遍、物質を貫き統制している永続的法則が動かす一瞬の姿として捉えています。

私達はこうした活動の中の一点、一瞬に過ぎません。しかし、その限られた要素ではありますが、宇宙の本質的要素には全てが含まれているというのです。丁度、どんな小さな水滴からでも太陽が当たる時、虹色に輝く宝石を見せるのと同様です。質を表すのに大きさは関係ないという訳です。

必要なことは、周囲のあらゆる事物をその一瞬一瞬の活動の側面として見ることで、その中に宇宙的作用、宇宙的意識を知覚することです。「一期一会」の出会い、宇宙的創造作用の学びの場とすることが出来れば最高です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落040 [2015-10-28]

040 We, as children of the Cosmos, are in the process of reflecting the understanding of our Source. All action is the echo of the Word as It passes through the vast arcades of space, and in Its passing creates time and form.
040 宇宙の子供である私達は、私達の源泉に対する理解を反映する過程の中に居ます。行動は全て大いなる言葉が巨大な宇宙空間のアーケードを通過する際のこだまであり、その大いなる言葉が通過の際に時間と形あるものを作り出すのです。

【解説】
実はこの短い本文の中に宇宙哲学の要旨が詰まっているように思えます。
私達は自らの源泉を探求し、理解する為に生きていると言えるでしょう。この究極の目的は「真理」を知るということ、仏教では「悟り」を得ることにある筈です。それは独り哲学のみの分野ではなく、物理や化学、生物学に限らず、あらゆる分野に当てはまる訳です。芸術家は自ら受けたインスピレーションを楽譜やカンバスに再現しようとするでしょうし、哲学の学徒は文章でその世界を陳述する筈です。
これらの行動はいずれも本項で言う「偉大な言語は空間を通過した際に生じる波動を表現したもの」と言うことが出来るでしょう。
自ら印象に従った行動を継続することが出来れば、それは本人が宇宙的生命の源泉から発せられる波動を表現していることとなり、自ら進んで生命を体験していることにもなるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落041 [2015-10-29]

041 We must open our eyes of consciousness and view in all Its magnitude and beauty, the living, breathing image of the Word.
041 私達は自分達の意識の目を開いて、その全ての壮大さと美しさの中に生き生きと息づく大いなる言葉のイメージを見なければなりません。

【解説】
意識（consciousness）は、アダムスキー哲学では特有の意味合いを持っているように思われます。しかし、そのイメージする所は、日本語で言う「意識」と差異は無いと考えるべきでしょう。即ち、著者は私達の日常の意識状態の中に印象や物質を生み出す因を知覚出来る要素があるとしている訳です。
その意識状態は、従来の目や耳という既存の感覚とは異なる存在であることも重要な所です。即ち、目や耳に頼らずとも意識を拠り所として十二分に生活して行けるということです。これは光の無い深海や地中にあっても様々な生物達が各々の生活を楽しんでいることも、意識を目とし耳としてひたすら印象に鋭敏な生活姿勢をとっていることから分かります。
私達も、もし真理を知り、学びたいと思うなら、自らの意識状態を観察し、その意識をより具体的なものとして自覚し、それに拠る生き方に切り替える必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落042 [2015-10-30]

THE NAME
042 The Word is changeless, whole and complete. The Name personifies the Word - divides Its vastness into many parts, gives place and form to each and every part and power of utterance in an auditory state. The whirling mass of substance called the Earth is to the mortal ears a mighty name, for on its surface humankind evolves and learns a tongue with which to speak the Name of That which in Itself is nameless, yet Earth shall change and pass away in Time, to reunite within the Cosmos. The Word has always been, will always be, the Name has a beginning and an ending.

名前
042 大いなる言葉は変化することなく、全てであり、完全です。名前はその大いなる言葉を個人化し、その広大さを多くの部分に分割し、各々の部分に場所と形を与え、耳で聞こえる発声の力を与えています。地球と呼ばれる高速で回転する物質の塊は人間の耳にとっては強大な名前です。何故なら、その表面で人類は進化し、それ自身名前が無かった大いなるものの名前を話す言語を学んでいるからです。しかも地球は変化を続け、時間経過の中では、宇宙の中で再統合するため、亡くなります。大いなる言葉は常にあり続け、将来もあり続けますが、名前には始まりと終わりがあるのです。

【解説】
本項では大いなる言葉と名前（名称）の関係について説かれています。

大いなる言葉は、天地創造に遡る始原の時から万物を指揮し、創造して来ました。しかし、その創造物は名前が無く、名付ける権利は最上位の創造物である人に委ねられた訳です。

古来、日本では物事の名前を口にすること自体が、影響を与える程、人の発する言葉の持つこれら潜在能力に気付いていたように思われます。つまり、口に出して音として空間に発するとそれはやがて同種の作用をもたらすという訳です。これは本項の本文でも触れられているところです。

しかし、これらのいずれもは所詮、物質世界での作用であり、やがては悠久の時間の中では崩壊し、再生される中で、皆失われて行くものと思われます。そうした中で、唯一永続するのは、未だ形を持たない段階の創造主の意思とも言える大いなる言葉であり、その内容は未来永劫変わることは無いと説かれています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落043 [2015-11-02]

043 The Word has never given forth a Name and never shall, for in such act would lose its endless and eternal state of Being. But Man, to whom free-will and power was given, who slumbers deep and dreams his mortal dreams, has in his waking moments labelled action and given name to consciousness and form. His eyes at first were dim with mortal slumber; he saw but vaguely through the mist of sleep, and only felt the coarsest of frequencies that shaped the holy substance into form, but those he named so he might build a memory of parts to guide his future waking states, for only by such means can he evolve to recognition of Cosmic Allness.

043 大いなる言葉は決して名前を発したことはなく、今後もないでしょう。何故ならこのような行動を行なえば、その終わりのない永遠の存在状態を失うことになるからです。しかし、自由意志と力を与えられ、深くまどろみ、自らの死すべき夢を見ている人間は、目覚めている間、行動にラベルを付け、意識そして形あるものに名前を付けて来ました。その目は最初は死すべきまどろみで霞んでおり、人は眠りの霧の中でかすかに見るだけで、形あるものに聖なる物質を形づくった振動の最も粗いものを感じるだけでしたが、自分が名付けたものに対して、人は将来の目覚めに導く役割を持つ記憶の部品を作ります。何故なら、この手段によってのみ、人は宇宙の全体性を認識するよう進化出来るからです。

【解説】

そもそも名称（名前）というものが何の為に必要であったかについて、本項は解き明かしているように思います。つまりは人が物事を記憶する上で役立つ集合的なイメージを代表するのが名称であるという訳です。

私達は一つ一つのものに名称を付けることによって、そのものを記憶しやすく、また互いにイメージを伝達し易くしています。しかし、これらは所詮、音声言語による伝達であり、名称自体もやがては廃れる過程を辿ります。しかし、イメージの本体の姿は永続するのです。

これら一つ一つの名前は以後しばらくは互いにイメージを伝える糧となっています。例えば、日本語には赤青黄色その他のいわゆる原色の他に、様々な色調を表現した言葉があります。これは色彩の各々を古来の日本人が認識し、名前を付けて来たもので、その数は３８０色以上と言われています。色彩感覚の繊細さを示すものと言えるでしょう。名称はその人が記憶に留めたいとする中で生まれた一つの道具のように思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落044 [2015-11-03]

044 Little by little man's awareness of that which he encounters expands, and clearer grows his vision till at last his conscious awareness beholds the transcendent Cause behind the Name.

044 自ら出会う中で少しずつ人の気付きは拡がり、次第に自らの視野を済ませ、その意識の気付きを成長させて遂には名前の奥の超越的因を見守るまでになります。

【解説】

「気付き」や「悟り」というものの意義について、本項は簡潔に記しています。この内容から分かるように、私達はとかくある悟りの一瞬を越えた以降は、全てが分かるようになるものと憧れているかも知れませんが、事実は、物事、少しずつ前進するということでしょう。

学習が効果を上げるにつれて、私達は自ら名付けた様々な物事に対し、その名称を超えて更なる深部にまで理解を深めることが出来るようになります。全ての物事の背景にはその存在を支える目に見えない働きがあり、それらの活動を見通せる知覚力を少しずつ身に付ける必要がある訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落045 [2015-11-04]

045 Out of the Primal Essence has come forth, charged with the Power of the Word, the manifested utterance of Cause. The planets, worlds, the moon, the stars and suns, the leafing trees, the song bird and the rain, the beasts, the crawling reptiles and the dew, each in its own tongue expresses the Word. But man has given unto each a Name and it is there that his attention lies. Manifestation has become his God and he has placed the Name above the Word, which nameless is and silent and unseen yet causes all the named things to be.

045 原初の本質から大いなる言葉のパワーを授けられて、因の現れとなる声が生み出されました。惑星、天体、月、星々そして諸太陽、葉を繁らす木々、さえずる鳥や雨、獣達、地を這う爬虫類、草露、それらの各々は各自の表現方法でその大いなる言葉を表現しています。しかし、人は各々の名前を付け、それに自分の関心を置いています。創造物が彼の神になってしまい、人は名前が無く、無音で、見えず、しかも名付けられた全てのものをもたらした大いなる言葉よりも、名前を大切に考えてしまいました。

【解説】

私達は各自の抱くイメージを伝える手段として名前をつけ、そのことにより、より広範囲に自分達の抱くイメージを伝えることには成功しました。しかし、一方ではその名前にこだわる為に、名前がそれら創造物の上位に据え置くことになっています。

更に、その創造をもたらした原動力である”大いなる言葉”について、皆目知覚出来ない状況となっているのです。本文では各創造物はそれぞれの言葉で、この大いなる言葉を表現しているとしています。つまりは枝先で鳴く鳥や、その下の茂みでささやく虫も、この因なる生命波動を自覚し、称えているという訳です。日々の散歩の途中でも出会えるこれらのさえずりに対し、私達はその意味合いに気付かなければなりません。

人間を除く他のあらゆる生きものは自らの生命の源泉に対する忠誠心と生かされていることへの賛歌において、私達の良き手本となっています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落046 [2015-11-05]

RELATIVITY

046 Matter manifests as an effect of the Cause impulse that rises from the Word. As a pebble dropped in the center of a still pool will send an impulse through the whole clear mass and stir its farthest boundaries into motion, so was the Primal Substance caused to vibrate by the Cosmic Impulse. And as the nearest wavelets are finer than those at the ultimate extreme so is the substance close to the heart of Creation finer than that upon the outer edge. Each impulse of the Word that has manifested in the realms of matter has evolved into its formed state of being through a primal motion or centralized impulse, out of which grew a heavier motion, swelling to greater perceptibility. The primal frequency goes into expansion without the smallest loss of energy.

相関性

046 物質は大いなる言葉から起こった因なる衝動の一つの結果として現れます。静止した池の中央に落とされた小石はその透明な物体の塊全体に一つの衝動を伝え、その最も遠い境界に運動を促すように、宇宙的衝動によって原始の物質は振動させられたのです。また中心に近いさざ波は最極地のものより精緻であるように、創造の中心に近い物質は外側の縁のものより精緻です。物質界で創造作用をもたらした大いなる言葉の各々の衝動は集中化した衝動の主要な行動を通じて形ある存在状態に進化し、そこからより重い行動、より大きな知覚作用に拡大しました。その主要な振動数は少しのエネルギーの損失もなく、拡張しています。

【解説】

本項は、私達創造物は、静寂な物質の海にあって根源の生命波動により、揺り動かされて形あるものとして生まれ出たものであり、その波動を体現するものであることを記しています。また、同時に想念波動というものは、これら静寂な物質界に作用して、その持つ意思を実現化するということでもあるでしょう。私達の想念と根源の生命波動の違いはその持つパワーの差であると考えられます。

同時に本項で例示されている静止した水面上に中心から発した波が周辺に伝播する状況から分かるように、あらゆるもの（即ち宇宙空間に存在する全てのもの）は、悉くこの波動（感動）と同期でき、自らをその表現者とすることが出来る訳です。

例え何処に居ようとも、波動は惜しげなく伝播され、全てのもの達に同じ内容のメッセージを伝えて呉れる訳です。千手観音の手はあらゆる方向に広がっていますが、そのように救いの手も、これら波動を通じて差し伸べられていると言っても良いでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落047 [2015-11-06]

047 We know that in the pool of clearest water the first wave that was started, in its passing, gave to the next its force and animation. And that, in turn. imparted added motion unto the following molecules of water. Without the unity of the whole mass no particle could know the primal action. The cosmos is like unto the pool from out whose center flows the rhythmic motion - it is the clear calm sea of undivided consciousness upon whose surface there arises innumerable wavelets of vibration. Each form, in turn, contains the same - beginning with one basic impulse evolving to countless particles of motion, each one attuned unto the primal urge. Again, each tiny central point of action is offspring of the Great Heart of motion. To the understanding of the mortal man these countless points of action are perceived as separate entities within the varied kingdoms. Upon the earth man gives the name of mineral unto the denser substance that he sees; a little higher is the vegetable, and then there comes the animal and fowl, which leads up to the consciousness of man who separates the Allness into parts and draws a line where no such line could be, for through the whole vastness of the Cosmos the Primal Impulse incarnates itself and as the ripple in the pool gave up itself to create something greater, so does each manifested form of each kingdom release itself into evolvement. The innumerable minerals give up their impulse to plant life, the plant, in turn, releases energy unto the higher consciousness of flesh. There is nothing that can live alone, nor any spark of energy destroyed. All impulse lives and acts eternally, passing from form to form and in its passing charges all substance with emotion and creates ripples on the Sea of Being.

047 私達は透き通った水からなる池の中で、始まった最初の波は進む中で隣にその力と行動を与えていることを知っています。また、そのことはそれに続く水の分子に運動を伝達することでもあります。全ての物質の一体性が無ければ、如何なる粒子もその原始の行動を知ることは出来ませんでした。宇宙とはその中心からリズミカルな運動が流れ出る池のようなものです。それは表面に無数の振動するさざ波が起こる、分裂の無い意識からなる清澄な静かな海です。各々の形あるものは、今度は同じものを含んでおり、無数の粒子の運動を展開する一つの基本的な衝動から始まり、各々はその始原なる衝動に調和しています。更に各々の小さな行動の中心は運動の偉大な中心でもあります。死すべき人間の理解にとって、これらの無数の行動の中心は様々な王国の中の分離した実体のように受け取られます。地球に対して人は自分が見るより密度が高い物質を鉱物という名前で名付けますし、より高次なものを野菜、そして次に動物や家禽類等が入ります。これらは人間の意識にまで至りますが、それは全てを部分に分け、本来、そのような区別のあり得ない所に線を引いています。何故なら宇宙全体の広大さの中に始原なる衝動が化身し、池のさざ波のように自身をより大きな何かを創り上げる為に捧げているからで、各々の創造された形あるものは進化の為に自身を解放しているのです。無数の鉱物が植物の命の為に自分達の衝動を捧げ、植物はより高次な肉体の意識にエネルギーを放出しています。独りだけで生きて行けるものは何一つありません。また、破壊される如何なるエネルギーの火花もありません。全ての衝動は形あるものから形あるものに移行しながら生き続け、永遠に行動し、移行する過程で全ての物質に感情をみなぎらせ、実在の海にさざ波を創り出すのです。

【解説】

海岸に立って波の動きを見ると、太古から現代まで休みなく波が砂浜に寄せ、再び帰す光景に目を奪われます。その波のエネルギーは見渡す限りの海の向こうの目に見えない源泉から源を発していることでしょう。しかし、さすがのその原動力も一つ一つの水の分子の協力が無かったら、このように遠くに届き、最後に陸地にその意図を投げかけることは出来ません。

外から見ると波は源泉から伝播して来るように思われがちですが、実際には水の分子はその場所で上下運動し、その運動を隣の分子に伝えているに過ぎないことは物理の授業で習った筈です。

重要なところは、各々の位置の水の塊が順次、波の持つエネルギーを後続のものに１００％伝える、言わば波の意思を身を持って伝達しているということでしょう。そしてこのことは本文後半に記されているように、鉱物界から植物、動物界への身を挺した奉仕活動によって生命波動の意思をより高度な世界へ伝達していることでもあります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落048 [2015-11-09]

048 Substance is in the process of evolvement; consciousness, in the process of expression. Up and down the vast scale the force moves rapidly into expression, touching one particle of matter, then another - blending the two or more into a chord of harmony, just as the fingers of a man pluck music from the mute strings of his harp. To produce a perfect melody the strings must be set in motion many, many times, making new tonal combinations - now soft and low, now rising to crescendo; one time in rapturous swinging rhythm, then changing to a lingering minor key - all strings awaiting the touch that stirs them to life within the melody. Each string is vital to the total Song.

048 物質は進化の過程に、意識は表現の過程にあります。広大な規模に上下しながら、力は表現に向けて素早く動き、物質の粒子一つ一つに次々に触れながら、二つあるいはそれ以上の粒子を一つのハーモニーの和音に融合します。丁度、人の指がハープの沈黙した弦から音楽を弾き出すようにです。完全なメロディーを作りだす為には、弦は何度も何度も揺り動かされなければなりません。その結果、新しい音色の組み合わせを作り出します。柔らかで低いトーンから、今度は最高潮に上昇します。ある時は熱狂的な律動的なリズムで、次はなごりを惜しむ短調の調子に変化します。全ての弦はそれぞれをメロディーの中で命を掻き立てる演奏者のタッチを待っているのです。弦の一つ一つがその歌全体にとって無くてはならないものです。

【解説】

ある時は軽快、そして次の瞬間には重厚な旋律を奏でるハープのように生命の根源なる波動はある意味、非常に活発に物質（弦）に作用し、その意思を表現させようとしています。

この本文に記されているように、物質（弦）は通常は静かに奏者がある旋律の下、その弦をつま弾くまでじっと待っているのですが、そのつま弾かれた音は例え１音であっても全体の音楽には無くてはならない訳です。

同様に私達は、次にやってくる生命波動に従って、自分の役割を果たすことが重要で、弦自身が音を出そうとするようりは、奏者の指に任せて、その強さに従った表現をすれば良いのです。このようにハープの各弦が各々の役割を確実に果たすことによって美しい音楽が生まれるという訳です。また、一度ハープ自体が著名な演奏家の手によって美しい音声を出すことが出来れば、そのハープの価値は高まることは間違いありません。

演奏家の手を待つハープの弦のように、スタンバイして、何時インスピレーションが来ても対応できるよう、準備しておく必要もあるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落049 [2015-11-10]

049 So it is with the Song of Creation - each atom of substance is used eternally, now making up a rose bush or a tree; now mingling within man, now in the beast; descending into form and then once more ascending to invisibiltiy; expressing through fire, water, earth and air, and ether finer than man can know; from the coarse pulsation that produces stone to a motion higher than the speed of light; from radiation down into vibration and back again the Primal Essence moves. From the formless into densest matter and back again into the higher state, each atom relative unto all others, cooperating and exchanging places.

049 ですから、物質の原子は創造の歌と一緒に用いられており、今はバラの茂みか木を作る為、また今は人体の中で混合され、あるいは今は獣の中に混じっています。形あるものに降下し、次には再び目に見えない存在に昇華します。炎を通じて、あるいは水、大地や空気そして人が知っている以上の精緻なエーテルを通じて表現されています。また、石を作り出している粗い振動から光の速さより高い運動に至るまであります。放射線から低下して振動に至るまで、そして再び原初の真髄は動きます。形なきものから最も密度の高いものまで、また逆に、より高次な状況にまで、各原子は他の全てとの関連において協力し合い、互いに場所を交換しています。

【解説】

丁度水面に広がる波紋のたとえがありましたが、伝え来る波によって水は大きく上下し、その受けた波動のエネルギーを精一杯表現します。

本文は更にそれを個々の原子が時々の指令に従って様々な運動を見せることを、植物や動物界にも展開して行く様を説いています。いわゆる元素の循環とも言えるもので、このことは既に私達も知識としては、十分に学んでいる筈です。

一つの形あるものに注目してしまうと、それらには始まりと終わりもある訳なのですが、分子・原子レベルで考えれば、それらの構成要素が一つの個体から別の個体、あるいは別の状態に移行したに過ぎないことが分かります。海の波と同じように、その波を形成している多くの水の分子はそこに留まっており、次々にやって来る波を表現しているに過ぎないのです。波を伝える要素は粘性との言える訳ですが、本文ではそれを互いに協力し合うと表現しているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落050 [2015-11-11]

050 Within the Cosmos there is no destruction but only newness by a ceaseless action; all substance changing and transmuting but never for an instant's time withholding. In an endless array of patterns and designs from formless into formed in unfolding the wondrous picture of eternity.
050 宇宙の中では破壊というものはなく、絶え間ない行動による新しさだけが存在します。全ての物質は変化し、変質しますが、一瞬として保留状態にあることはありません。永遠の目くるめく絵画を紐解く中で、終わりのないパターンと形なきものへの入念な計画があるのみです。

【解説】
よく「万物は流転する」と表現されて来ましたが、本項では私達も含めて個々の生きものの生死に関しても単に変化の過程にあると言うよりも、より積極的に次なる生に向けての生まれ変わりを示唆しており、常に新しい道程を歩む過程にあるとしています。
とかく私達は、自我を失うこと、死を迎えることについて、最後はあきらめに似た精神状態になるのかと思いますが、本項ではそれを新しい進化の過程に踏み出す一歩と捉えています。地球上の火山の活動その他の自然現象もこの地球が変化して行く中で大きな意味を持つものと思われます。
私達はもちろん、これらの変化の影響を受ける訳ですが、それも私達が進化し、新しい存在に生まれ変わる転機なのかも知れません。既に東日本大震災では多くの人が影響を受け、無くなった人々も多く出てしまったことも事実ですが、それを境に私達は多くのことを学んだことも確かですし、これらの経験を受け継ぐことで新しい日本人が形成されることも、同時に期待される所です。
次から次にやって来る出来事に対して、いつも新鮮な姿勢で取り組むことが、宇宙的指令の本質に沿ったことであり、重要な所です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第03章 段落051 [2015-11-12]

051 There is no greater law than that of conscious action, for upon it rests continuous Creation. Energy acting upon itself gives birth to time and space, the relative elements of the Cosmos that cause conception of the state called form. Each thing depends in part upon another and may be traced back to a common source.

051 意識の活動ほど偉大な法則はありません。何故なら止むことの無い創造はそれに支えられているからです。意識の活動において作用するエネルギーは、宇宙の相関的要素である時間と空間を生み出しますが、（その時間と空間は）形あるものと呼ばれる状態の概念をもたらします。各々の物事は、部分的に互いに依存しており、また一つの共通の源泉に遡ることができることでしょう。

【解説】

私達が目の前に広がる全てのもの、壮大なる宇宙をどのように観るか、本章で学んで来ましたが、その結語が本項に記されています。

本項ではあらゆるものは意識の活動から生じたもの、時間も空間もそれらが生み出したものであり、全ては水面を進む波のような意識の作用であると把握すべきなのです。私達はその波の形成の場合のように意識のエネルギーを表現したものであり、やがては元の元素に戻って行くことになります。

しかし、それは個々の元素の集合体が解散するだけで、再び他の集合体の一部として活用される訳で、元の大洋の一部に留まることは間違いありません。また、各々が関連し合い、協力して形が形成されて行く訳です。

こうした中、私達が最も重視しなければならないのは、この創造の原動力、エネルギーである意識の動向です。行動には自ずと目的があり、意図があります。私達は日々の生活の中でも、時々に垣間見る意識の意図に注視して、現象の奥にある創造の意図を学んで行かなければなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落052 [2015-11-13]

4. PERCEPTION AND CONCEPTION
052 "What man can conceive he can also achieve," has been said, but between conception and achievement there lies a middle step which is perception. We are familiar with the use of the word perception as used in relation to a faculty of receiving knowledge of external things by the medium of the senses. This same faculty may also be used to alert the senses to a Cause Intelligence which is beyond its effective scope of perception. Conception is constantly taking place within man; the conscious intelligence of the cosmos is eternally incarnating in matter, but unless there is awareness on the part of the mortal sense mind these thoughts are liable to pass on without ever being recognized in the world of form. We know that thought is the basis of human action and there are millions of thoughts that pass over the highway of mind every day, but man perceives approximately one thought out of every hundred which is conceived within his mind.

第４章 知覚と受想

052 「人が思いつくことはまた、実現することが出来る」と言われて来ました。しかし、思いつくこと（受想）と実現の間には、知覚という中間の段階があるのです。私達は知覚という言葉を、感覚という媒体を通じて外の物事の知識を得る能力に関連させてよく用いて来ています。これと同じ機能は知覚の効果的な範囲を超えた宇宙的知性に感覚を鋭敏にさせるためにも用いることが出来ます。受想は人間の中で常に起こっており、宇宙における意識の知性は永遠に物質の中に体現していますが、肉体の感覚心の側に気付きが無ければ、これらの想念は形あるものの世界の中で認識されることのないまま、通り過ぎてしまい易いのです。想念は人間の行動の基本であり、また毎日、心の大道を何百万もの想念が通過していますが、人は自分の心に受想されるおおよそ１００に１つの想念を知覚するだけであることを、私達は知っています。

【解説】

本項から第４章に入ります。本章ではより精密に想念・印象がどのようにして各創造物を通じて実現までつながって行くのかを学ぶことになります。

その最初の課題として、想念が知覚されるまでどのような経路を辿るかが本項で説かれています。即ち、私達がインスピレーションを得て何かこれまでにないことを成し遂げたという場合にも、その発端は私達がそれらの想念・印象に気付くこと、受想することから始まるという訳です。このConception（ここでは「受想」と訳出しています）は、実はあいまいながらも何らかの想念波動との接触を感じた程度の段階の知覚ということになります。これは漠とした状態であり、その存在を知っただけだと著者は説いているのです。 その想念・印象をより具体的なものとする為には、既存の感覚器官の側でも認識しなければなりません。色調や形状、音や味覚等々、普段の私達が接している感覚が認識しなければならない訳です。つまり応用する為には、単にぼおとして印象をとらえているのではなく、自らの感覚をそれらの合一させて理解することが必要だと言うことでしょう。

これらの作業ははじめの内は容易ではないかも知れませんが、文末に記されているように、既に自分達には現状でも１００倍以上の想念を受想している訳で、少しでも自らの心をその方向に向ければ、アイデアは泉のように湧いていることに気付く筈です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落053 [2015-11-16]

053 There are myriads of thoughts bombarding man's mind every second; some are personal, some are impersonal, many are beyond the conception of the average sense mind. It is true that each thought that enters man's being impresses itself upon the individual cells of his body but the mortal sense mind as a whole does not become aware of it. Conception while being of Cause does not raise man to the Cause state; it is perception which produces growth in the mortal man. In the average man the thoughts are passing at the approximate rate of 1100 per second. In a highly developed person the thoughts run about one-half million per second. The mortal grows through experience and only that which is perceived consciously can be termed as experience. Awareness is the key to wisdom and the only channel to human thought expansion. Awareness must be combined with action so that intelligence may be expressed. Cosmic Cause incarnates in matter whether the mortal mind of man is conscious of it or not, but through perception of that action the mortal expands in the field of growth. The mortal sense mind, having divided itself from the Whole, must evolve again into the Oneness by perceiving the Cause in effects. In the cosmos everything exists and we, being of the cosmos, have everything within us. If we perceive that which is within us we are able to bring it into manifestation. Through perception we actually "mother" or "father" a thing into growth. The whole science of life is based on these two - through conception and perception are all things brought into being in the world of effects. Conception is responsible for putting Cause into motion and bringing forth action. Conception may take place without any awareness on the part of the intellect but the action which takes place due to conception bring forth a quickening that produces what we know as sensation. Perception is the act of becoming aware of sensation and knowing its source.

053 毎秒、人間の心に衝突して来る何万もの想念があります。あるものは個人的なもの、またあるものは非個人的なものであり、多くは平均的な感覚心の受想を超えています。人間に入り込む各想念は、それ自身を人間の肉体の個々の細胞に印象を刻印することは真実ですが、死すべき感覚心は概して、それに気付くことはありません。因に属する受想は人を因の状態にまで押し上げることはしません。死すべき人間において成長をもたらすのは知覚なのです。平均的な人間では、想念はおよそ毎秒１１００個が通過しています。高度に進化した人物においては想念は毎秒５０万個も流れます。死すべき人間は体験を通じて成長するもので、意識的に知覚したもののみが体験と呼ぶことが出来るのです。気付きは人間における想念の拡大につながるカギであり、唯一の道です。また、気付きは知性が表現されるよう行動と結び付けられなければなりません。宇宙の因は死すべき人間の心が意識しているいないに係らず、物質に宿っていますが、その活動を知覚することによって死すべき人間は成長の分野で発展するのです。全体から自分自身を分離した死すべき感覚心は結果における因を知覚することによって、再び一体性の中に進化を遂げなければなりません。宇宙の中に全てが存在し、私達もその宇宙に属する以上、私達の中に全てを有しています。もし、私達が自分自身の中にあるものを知覚すれば、私達はそれを創造の現れとしてもたらすことが出来ます。知覚を通じて私達は実際には物事を成長させる「父母」の役割を果たすのです。生命の科学全体はこれらの二つ、受想と知覚に基礎を置いており、それらを通じて、全ての物事が結果の世界にもたらされるのです。受想は因を動かし、行動を推し進める役割を果たしています。受想は知性の側には何らの気付きもないまま生じるかも知れませんが、受想に起因する行動は私達が湧き起こる感情として知っている状態を作り出す衝動をもたらします。知覚はその感情に気付き、源泉を知る行為なのです。

【解説】

本項では「気付き」や「悟り」と呼ばれて来たものが、具体的にはどのようなものであったかを明快に示しています。

それらは毎秒１０００個もの想念波動が降り注ぐ中にあって、それらに容易に気付ける体質になること、またそれらの精妙な波動の持つ趣旨を理解し、応用する能力を高めることにあることが分かります。

既に私達はこのようにふんだんなアイデアが絶えず注がれている訳ですが、私達自身そのほとんどに気付かずに過ごしてしまうということです。また仮に受想が出来たとしても、次の段階、肉体の感覚による十分な知覚が出来なければ、具体的な理解は難しいと言うことが出来ます。単に受想を待つのではなく、私達自身が少しでも印象を感知したら、しっかりその印象を知ろうとしその印象に従った行動をとることによって、自らの経験となり記憶に残すことが出来るという訳です。

知覚はこれら印象の発信者の意図に耳を傾け、学びたいという姿勢を意味していると著者は説いています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落054 [2015-11-17]

054 In our christian bible we find references to "Life Eternal" and the way we must conduct our lives in order to know, "the only true God," but the application as to just how this is done is not explained. To know God the Father is to perceive Cosmic Cause. Conception has no limitations for it is cosmic, and that which is conceived can also be perceived by the mortal mind so perception knows no beginning or ending; its vastness is all-inclusive.

054 キリスト教の聖書に私達は「永遠の生命」や「唯一真実の神」を知る為に私達が人生を導かなければならない道に関する言及を見出しますが、ただ、これがどのようにしたら為されるのかについては説明されてはいません。父なる神を知ることは宇宙的因を知覚することです。受想は宇宙的属性であるが故に限界はありませんし、また受想されたものはまた、死すべき心によって知覚され得るため、知覚にははじまりも終わりもない訳で、その広大さは全てを包含するものです。

【解説】

現在もまたこれまでも私達の惑星では「神」を巡っての争いや時に殺し合いも多く起こって来た訳ですが、それこそが私達の惑星の「神」に対する平均的な理解度なのかも知れません。

本項では地球上の多くの宗教が説く「神」の本質を知ることは具体的に何を示唆するが明らかにされています。つまりは、受想(Conception)こそが宇宙的な源泉に直結しており、そこから来る印象は無尽蔵、無制限です。それを肉体の感覚器官が受け入れ、学ぶことで創造主を身近に知覚することになるのです。

言い替えれば、印象を受想することによる学びには際限はなく、何処に居ても、また手元に何も無くても実践出来る訓練でもあります。これら印象を大切にする姿勢は日常生活においても様々な進化をもたらすものでもあります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落055 [2015-11-18]

055 Perception includes not only recognition but also comprehension. We cannot fail to recognize the fact that we are sons of the Cosmic Father Principle and heirs to all there is, but how many are there in this world who have actually perceived what that sonship means? Lack of perception leads always to a lack of confidence which prevents man going forward into greater accomplishment. The man who fails to understand his relationship with the whole is but a wanderer having no purpose in life.

055 知覚には認識のみでなく、理解も含まれています。私達は自分達が宇宙の父性原理の息子達であり、存在する全ての相続人であることを忘れてはいけませんが、この世の中にはどれだけの人がこの息子の地位が何を意味するかを知覚しているのでしょうか。知覚の不足は確信の不足に繋がるものであり、それは人がより大いなる達成に前進することを妨げるものです。全体との自身の関連性を理解出来ない人間は人生に何の目的を持たない放浪者でしかありません。

【解説】

私達は日常、自分達の命に特段の感謝の念を抱くことはないでしょうが、時とｈして静かな場に自分を置いた時、自分の指先にまで暖かい命が宿っていることを感じ取ることが出来ます。これらはいわば無償で私達に授けられた命、私達がこの世に生まれてからずっと与えられ続けている贈り物と言うことも出来るでしょう。

本項ではこれらの状態について、私達が宇宙の父性原理の息子であると説いているのです。即ち、私達は父からあらゆるものを相続出来るという恵まれた立場にあるという訳です。広大な宇宙にあるあらゆるものとアクセスでき、親しみ自分のものとするよう父から与えられているということです。

それが、本章で説かれている受想から知覚に至るまでの働きの意味ということでしょう。ここで重要な点は、本項でも記されているように、親が子供に授けるように無償で与えている環境も、本人がそのことを自覚せず、父への信頼感を持てないなら、全ては無意味になってしまうということです。少しでも自らの恵まれた境遇を自覚し、宇宙における自らの役割を理解しようとする姿勢が重要です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落056 [2015-11-19]

056 Lack of perception is the greatest of the sins of omission; why should a man remain in ignorance when all things lie before him and the very fullness of life prevails within his being awaiting the command to come forth.

056 知覚の欠如は怠慢の罪の内、最大のものです。何故、人間は全てのものが自分の面前に有り、自身の中には命令が来るのを今か今かと待っている生命で満ち溢れているのに、無知のまま留まっているというのでしょうか。

【解説】

小椋佳の「愛燦々」がありますが、その歌詞の中にその歌のタイトルにも繋がる「愛燦々とこの身に降って、心秘かな嬉し涙を流したり」というくだりがあります。

私達には絶えず宇宙からこのように愛情が注がれていて、それに気付くことが出来れば、本当に嬉しい限りの感動を受けるというものでしょう。

先ずは自分自身、この注がれる愛情にこそ気付くべきで、無為に何ら感動も無いまま受け流すのは贈り手に対し失礼この上ない、まさに罪とも呼べるべきものです。私達は与え続けられている印象、各細胞への働きかけを知覚し、それらの印象をしっかり受け止めなければなりません。

宇宙から自らのさんさんと愛情が注がれていることを自覚する中で、人生は楽しいものに変わるものだと思います。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落057 [2015-11-20]

057 When an unselfish idea is conceived it is to be perceived and brought forth into manifestation just as a soul conceived in the womb of a mother is to be given birth in physical form. Whatever one becomes aware of that is not contrary to natural law must exist, for how can it be possible to perceive that which is not existent?

057 一つの非利己的なアイデアが受想される時、それは丁度、一つの魂が母親の子宮で受胎し肉体の形をもって誕生するのと全く同じに、それは知覚され具体的な創造物としてこの世にもたらされます。自然法則に反しない限り、どのような事柄も人がそれに気付くものは存在する筈です。何故なら存在しないものをどうして知覚することが出来るのでしょうか。

【解説】

多くの読者がお気付きのように、本項で「受想」と訳出している「Conception」には「受胎」という意味も含まれています。即ち、母体が気付かない内に、妊娠の初期の現象が体内に始まる状況と似たものとして、「受想」という概念を著者は提起しているのです。

当然、その次の段階として、具体的な物質界レベルの創造が進行する訳ですから、それを知覚できる筈という訳です。現実に無いものは知覚できる筈もない訳で、如何に初期の精妙な段階で私達が知覚するかが問われていることになります。

おそらくはこの段階はかなり流動的であり、私達の持つ想念・印象がその創造過程にも大きく影響を与えるのではないかと考えられます。即ち、物事を願い通りに進めるには、私達の非利己的なアイデアも大いに創造作用に活用されるように思われるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落058 [2015-11-23]

058 There is really very little difference between conception and perception; the former is the cause soul awareness and the latter is mortal sense awareness, and the two should be always united

058 実際には受想と知覚の間には、本当にほんのわずかの違いしかありません。前者は因の魂による気付きであり、後者は死すべき肉体の感覚の気付きで、両者は常に一体であらねばならないのです。

【解説】

最終的な姿として、よく「意識と一体になる」と「生命の科学」で表現されているように、「宇宙哲学」においても受想と知覚とは作用する部分が異なるだけで両者は本来一体的に成立することになります。なお、この受想(Conception)はやがて、「生命の科学」では意識(Consciousness)と表現されることになるもので、基本的には同種の概念であろうと考えます。

むしろ問題は、数や量の上で圧倒的に多くの想念・印象を受けている受想に対して、その隣に居る私達の肉体細胞からなる感覚は実に鈍感であり、眠ったまま目の前を通過する印象に気付いておらず、その他の時はもっぱら自分自身の関心事に熱中していることにあります。

この解決方法は先ずは私達自身、自らの身体内にそのような宇宙に直接つながっているとも言えるような受想機能を有する部分があり、そこを通じて多くの情報が絶えず注がれていることをよくよく自覚し、その声を聞こうとすることにあります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落059 [2015-11-24]

059 One of our noted scientists once said, "I find ofttimes that in the moments when I have ceased pondering over a problem the greatest revelations come to me." Such revelation is true perception, for it is the time when the mortal sense mind and the cause intelligence unite. Such awareness is called intuition, and the man who acts intuitively is always right. The mortal mind is usually unable to perceive the thoughts which are conceived from the cosmic source for it is in a constant state of friction and wonderment, lost in the perception of the innumerable forms of the effective world and so unaware of the new ideas that are waiting for birth. It is necessary to perceive the possibilities within anything before those potentials are able to become a reality in one's life. True perception goes beyond the apparent into the cause of the appearance, it goes into the invisible and brings newly conceived ideas into manifestation. Many people consciously perceive wonderful things but have not enough faith to bring them forth.

059 著名な科学者の一人はかつてこう言いました。「私はしばしば、問題について考え込むことを止めた瞬間に最大の新発見がやって来ることに気付いています」と。このような啓示は真の知覚です。何故ならそれは死すべき感覚心と因なる知性とが結びつく時であるからです。このような気付きは直感と呼ばれ、直感的に行動する者は常に間違いはありません。肉体の心は大抵は宇宙的源泉から受想される想念を知覚することは出来ません。何故ならそれは常に摩擦と好奇心の状態にあり、結果の世界における無数の形あるものを知覚する内に迷ってしまい、誕生を待っている新しいアイデアには気が付かないからです。このようなこと（訳注：感覚心と因なる知性が結びつくこと）が各自の生活において現実のものとなることが可能となるためには、それ以前にその可能性を知覚する必要があります。真の知覚とは外観を超える因にまで及ぶものであり、新たに受想したアイデアを創造物としてもたらすのです。しかし、多くの人々は意識上は素晴らしい物事を知覚はしますが、それらを現実にもたらすほどの十分な信頼を持っていないのです。

【解説】

私達一人一人はこれまでの経験の中で、何回かは優れた発想を得てその後の人生の転換、或いは素晴らしい成果につながった事例もあるのではないでしょうか。そのほとんどのケースが本項に記されているように、心が何かの問題への執着をなくした時に浮かんだもののように思われますし、少なくても心が怒ったり、悲しみに浸った状態に起こったものではなかった筈です。

容易には言葉で表せませんが、より素直であらゆる印象に受容的な姿勢であったのではないでしょうか。本項で著者は、そのように現象世界に執着せず十分リラックスして受容的な状態を造り上げ、宇宙の源泉への信頼を保って居れば、必要に応じて解決策の提示を戴けるのだと説いているのです。

浅学の身ながら、実はこれらの真相は、古今東西の宗教全てが説く内容とも一致しているように思われます。

重要なのは、その一瞬得た印象を大切にして直ぐにも行動に移して成果を得るか、或いはそのままにして忘却の彼方に消え去るに任せるかの選択でしょう。少ないこのような機会をしっかり捉えて、自らの人生に活用すること、その支援の為の印象の贈り手を信頼することが大事なのは言うまでもありません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第04章 段落060 [2015-11-25]

060 Learn to believe in your power of perception; give recognition to those things of which you became aware and you will find yourself enjoying a feeling of happiness and well being. Your vision will gradually expand to where you can feel the pulsation of life in all forms. And you will understand the Universal Language of Life, and the limitations that have bound you to the personal ego will vanish into the illimitable vastness of Cosmic intelligence.

060 あなた自身の知覚力を信じることを学びなさい。あなたが気付くようになった物事に認識を与えることです。そうすればあなた自身、幸せと良好な状態を楽しんでいることに気付くことでしょう。あなたの視界は徐々に拡がり、あなたがあらゆる形あるものの中の生命の脈動を感じ取れるようになることでしょう。そしてあなたは生命の宇宙普遍の言語を理解し、あなたを個人の自我に縛り付けて来た諸々の限界は宇宙的知性の限りない広大さの中に消え去ることでしょう。

【解説】

先ずは自分自身、本来的には受想した想念・印象を十分知覚する能力を持っていることを信じることだと著者は説いています。その中で少しずつ学んだことを自分のものとし、その効果・効能を改めて自ら確認することです。

人間は少しずつではあっても、随分と進歩もするように思います。例えば昔の自分の写真を見ると、何と余裕のない表情をし、人生を楽しむとはとても言えないような人物の姿がそこに写っていることに愕然とすることもあるのではないでしょうか。

それは、その後何十年間の毎日の精進の中で、少しずつ自分に改善を加えて来た結果を私達自身に示す証拠でもあるでしょう。同様に、これから先も私達は自らの知覚力を高め、宇宙の印象に従って柔軟かつ誠実な人生を極めて行く必要があります。一つ一つの積み重ねで十分であり、続ける中で道は拓けるものだからです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落061 [2015-11-26]

5. WHAT IS CONSCIOUSNESS?
061 The term consciousness seems to be the foundation of all creation. It is not a physical thing, yet it measures all expressions of physical forms. Without it no form could be or exist for consciousness is life itself. It is the power which gathers the elements into the formed state and it is the intelligent force which causes awareness and animation within the form. Conscious awareness of the All-Inclusive consciousness is that tremendous power which is referred to in the Scriptures as the Holy Ghost. It is a dweller, as power, within that which is created, perpetuating the growth of the form by the constant action which is the law of It's being.

第５章 意識とは何か

061 意識という用語は全ての創造作用の基礎であるように思います。それは物理的なものではありませんが、物理的な形あるものの全ての表現の尺度となっています。意識なしではどんな形あるものも存在することが出来ません。意識が生命自体であるからです。それは諸元素を集めて形ある状態にさせる力であり、形あるものの中に気付きと活気をもたらす知性的な力なのです。全てを包含する意識に対する意識的な気付きは聖書の中で聖霊と称されるあのすさまじい力です。意識は創造されたものの内側にある力としての住人であり、その存在の法則でもある絶え間ない行動によってその形あるものの成長を永続させているものです。

【解説】

たまたま今読んでいる本（中村元編著：「仏教経典散策」）の中に維摩経の紹介が掲載されており、その中に次の記述があります。「文殊菩薩との会話が続くがしばらくして、維摩居士は文殊菩薩に随行した菩薩たちに声を掛け、”みんなに不二の法門（相対の差別をこえた絶対平等の境地）に入るとはどういうことか”という質問であった（中略）。３２菩薩が述べ終わったあと、代表して文殊菩薩が維摩居士に”あなたのご意見を聞きたい”と尋ねた。周りの者たちはどんなことばが聞けるかと期待している。ところがどうだろう。維摩居士は瞎目し黙然として一言も発しないのである。あたりは静寂が漂っていた。と突然、文殊菩薩が”すばらしい。文字もことばもない。これが不二の法門に入ることですね”と讃嘆したのである。」

アダムスキー哲学でポイントとなる「意識」と通じるものがあるように思った次第です。

言葉や所詮私達肉体の感覚の表現であり、実際はそれらに規定されるどころか、遥かに強大なパワーを発揮している存在があり、それを著者は「意識」と表現しているのです。全ての創造物の中にはこの意識が宿っていて、日々の運動や進化を担っているという訳で、このお蔭で私達は命を繋いでいるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落062 [2015-11-27]

062 The story of creation as recorded in Genesis says that God created man from the dust of the earth; out of the elements He molded a form in His image and likeness as a sculptor creates a beautiful statue out of clay. This He did with intelligence and power, and having looked upon His completed form creation He was well pleased, so He incarnated into the form as the Breath of Life and man became a conscious being, a living soul, having the power of intelligent action, which we know as life.

062 創世記に記録された天地創造の物語は、神が人間を大地のチリから創ったとしています。その諸元素から創造主は彫刻家が粘土から美しい彫像を作り上げるように、神ご自身のイメージと似姿で一つの形あるものを型に入れて創ったのです。これを神は知性と力によって行い、自ら完成した創造物を眺め、神は大いに喜び、生命の息としてその形あるものの中に化身し、その結果、人は意識ある存在、生ける魂、私達が生命として知っている知性的な活動の力を得たのです。

【解説】

創世記が記された昔、私達地球人はもとより原子や分子、細胞や遺伝子等、繊細、精妙な科学の知識は無かった訳で、大地のチリから人体が造られたと表現するのが精一杯であったということでしょう。

しかし、やはり「チリ」という、いわば微粒子から人体が造られたと表現することで、原子や分子をイメージする表現になっていることに注目したいところです。

人体創造の最終段階では肉体各部が形成されることになりますが、しかし、それだけではなかった訳です。その作品を見て創造主が息を吹き込んだとされていますが、生命の息として自ら内部に化身したと本文に記述されているところが重要な点です。

つまりは自らの作品に自らも入り込んで、生き生きしたものとした訳です。丁度、赤ん坊が誕生して最初に息をする段階から人間としての全てが始まるのと似ています。私達の中にはこのように本人が知る知らないにかかわらず、誕生のはじめから、創造主は私達の中に入っており、私達自身、その能力を備えているということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落063 [2015-11-30]

063 This intelligent force, then, is actually the Cosmic Whole, for Its limit of knowledge is no where. It is the creator of everything that was, is, and will be. It is not only the soul of man but the very soul of all things, the Father-Mother principle of the Cosmos.
063 この知性ある力は、実際には宇宙全体なのです。何故ならその知識の限界は何処にも無いからです。それはこれまでにあった、現在ある、そして将来あるだろうあらゆるものの創造主です。それは人間の魂のみならず、万物の魂そのもの、宇宙の父性母性原理なのです。

【解説】
要するに本来の生命力というものは、あらゆる創造物とも繋がり、宇宙全体にまで広がっている「魂」だと、本項ではアダムスキー哲学で説かれる「意識」を明解に説明しています。
未だ学習途上にある私達も十分には認識できていない所かとは思いますが、実はこの意識を通じることによって、宇宙のあらゆる存在と"一体化"が得られること、また互いを言葉を用いることなく瞬時に理解し合えることもあるでしょう。
同時にこの意識は創造を司る役割を持っていることから、自らが抱く想念・印象についても具体化に向けて現実世界に作用させ、未来を形作る場でもあるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落064 [2015-12-01]

064 As far as we know consciousness had no beginning and will have no ending for it seems to be all in all, the Alpha and Omega, and is made up of the Trinity; first the power; second, the intelligence; and third, the created form. John tells us -"In the beginning was the Word and the Word was with God and the Word is God.' What is a word? Is it not a thought expressed? And does not thought depend upon consciousness for it's being? Then we must admit that "in the beginning was consciousness and the consciousness was with God and consciousness is God." Out of consciousness, again, proceeded thought so "in the beginning was thought and thought was with God and thought is God." And thought becoming expressed returns us in proper sequence to the Word which is with God and is God. (Cosmic Cause) The incarnation of these three through action brings forth manifestation which is concrete realization in form of that which exists always in consciousness.

064 私達が知る限り、意識には始まりもなく、また終わりもないものでしょう。何故なら意識は全ての中の全て、アルファー（訳注：ギリシャ文字２４個の最初の文字）であり、オメガ(訳注：ギリシャ文字２４個の最後の文字）であるように思うからで、それは三位一体（訳注：「父・子・聖霊」の三位格があることを指す）から成っているからです。即ち第一に力、第二に知性そして第三に創造された形あるものです。使徒ヨハネはこう言いました。「はじめに言葉ありき、言葉は神とともにありき、そして言葉は神である」と。言葉とは何でしょうか。それは表現された想念ではないでしょうか。そして想念はその存在を意識に依存しているのではないでしょうか。そうすると私達は「はじめに意識があり、意識は神であった。そして意識は神である」ことを認めねばなりません。意識の中から更に想念が進み出るため、「はじめに想念があった。想念は神であった。そして想念は神である」ということになります。そして表現された想念は神とともにあり神（宇宙的因）である言葉として適切な順序で私達に戻って来るのです。これら３つの活動の化身は意識の中では常に存在している形あるものへの永続的な現出である創造作用をもたらすのです。

【解説】

著者が説く「意識」がどのようなものか、本項では改めてその働きについて解説しています。

その中でも重要な点は、意識には始まりもなく終わりもないということです。常に存在し、創造の生命力と宇宙の知性、そして全ての形あるものに普遍的に存在し、言わば創造主と一体のものとも呼べるとしています。

この意識さえ理解出来れば他に望むものなどありません。全てはこの意識の中で創造され、世に出る訳で、私達は意識の持つ潜在力に頼ると同時に、謙虚に畏れることも必要です。

自らの身体から宇宙の果てまで浸透する意識について、私達は先ずは自ら知覚出来るよう、自らを澄ませ、それと一体化出来るようその存在に信頼を寄せることが必要です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落065 [2015-12-02]

065 Everything from the mineral to the Cause kingdom is changed, moment by moment, by the everlasting activity of consciousness. It is the avenue of progress; the stream of life ladened with ideas which drop into the consciousness of mortal man with great rapidity and which may be used or discarded, depending upon the understanding of the individual. Consciousness speaks the language of the Soul, for it is the Soul. This Cosmic language is soundless, yet it roars with a voice of thunder, reverberating with a tremendous force upon the mortal form, producing a state of awareness as to the ideas that lie within him - ideas which only he himself knows unless he expresses them in words, and which even then may not be understood by another.

065 鉱物から因の王国に至るあらゆるものは永続する意識の活動により、刻々と変化します。それは進歩の大道であり、大速力で死すべき人間の意識に降り下るアイデアを積み込んだ生命の流れであり、各自の理解力により、活用されるか或いは捨て去られるかになります。意識は魂の言葉を話します。何故ならそれは魂であるからです。この宇宙的言葉は無音ですが、雷ほどの声で叫び、死すべき形あるものにすさまじい勢いで響かせ、人の内側にあるアイデアにいての知覚状態を作り出します。そのアイデアは言葉に表現しない限り、その者のみが知り、言葉に表現したとしてもその時、他の者には理解されないものです。

【解説】

ありとあらゆるものは活動の中、変化の中にあります。「万物は流転する」とは言い得た言葉です。通常、このことは確固たる固定したものでないということから、「空しいもの」、「はかないもの」と解釈されがちでしたが、アダムスキー哲学においては同じ変化の形相を本文のように実に生き生きと語ることが出来ます。このことが従来から地上で染みついて来た宗教教義と他惑星文明から伝えられた「宇宙哲学」と根本的に違うところです。

このように一瞬一瞬変化するような活動的な宇宙の実態なのですが、その中にあって本項で言う意識の働きは大きな役割を占めているのです。無言の意図ではありますが、その印象指導によって全ての変化、創造作用が進められているという訳です。

もちろん私達の内側にもその意識は隅々にまで染みわたっている訳で、少しでもその声を聞こうと努力すれば、たちどころに成果を得ることが出来ます。実に頼りになる存在という訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落066 [2015-12-03]

066 Consciousness is the very substance of all forms, yet itself is formless. It is the ruler and keeper of all elements which compose it in the field of form-action, for through this intelligent force the elements which make the form become conscious. It builds form and disintegrates forms yet it knows neither life nor death. It is motionless, yet it is the all-active power by which the cosmos is maintained; placeless, yet it is everywhere for outside of it there is nothing; inert yet composed of unlimited power.

066 意識とは万物の本質そのものです。しかし、意識自身には形がありません。それは形あるものの活動の分野で組織するあらゆる元素の支配者であり、保護者なのです。何故なら、この知性ある力を通じて、形あるものを作り上げている元素が意識を持つようになるからです。意識は形あるものを作り上げ、また形あるものを分解しますが、それでも生も死も知ることはありません。意識はじっとしていますが、宇宙が維持される全ての活動的なパワーでもあるのです。定まった場所はなく、何処にでもあるのです。何故なら、意識の外側には何もなく、意識は自ら動くことはありませんが、無限のパワーから成り立っているからです。

【解説】

通常の日本語でも、生死の境目の際には「意識の有無」が問われますし、意識という知覚状態は生命の基本なのだと考えられます。アダムスキー哲学においては、この意識にはこれまで私達が考えて来た以上の大きな、生命の本質にかかわる重要な役割があると説かれているのです。

即ち、この意識が存在するが故に、私達は物質でありながら、生命を保ち、自らの存在意義を発揮できるというものです。またその意識は個別の身体に常在すると同時に宇宙くまなく存在する宇宙意識とも繋がるもの、一体感を私達に感じさせる源泉でもあります。

すべての物質に対し、生命活動を促すのはこの意識であり、個々人の自我の心ではありません。その点、私達は生かされているという言葉が生まれる理由にもなっています。

問題は各自が自ら備わり、生きている間は常に人体内部に存在する意識と如何に融和し、助言を受けるかにある訳で、「同行二人」のように常に意識とともに人生を歩むことが重要です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落067 [2015-12-04]

067 The growth of earth and the growth of man is the actual evidence or testimonial of consciousness. Thought, itself, is composed of consciousness. All things of the heavens and the earth have been and will continue to be conceived in the womb of this mother-father principle. Man was born - into a physical form and will grow old and perish while consciousness remains everlastingly young in existence.

067 地球の発展と人間の発達は意識の実際の証拠であり、証明書です。想念自体は意識から成り立っています。天と地の全てのものは、これまでも、またこれからもこの母性父性原理の子宮の中で受想し続けることでしょう。人は肉体の形に生まれ、年老い、死を遂げますが、一方、意識は永続的に若いまま留まります。

【解説】

若い方は別として、ある程度の年代になると、本項で著者が記述していることは良く理解出来るのではないかと思われます。つまり年を重ねるにつれて、自らの想念はかつてのレベルよりは進化しているものです。日々の精進の成果として各自の精神レベルの向上に直結していることは、かつての自分を振り返れば納得されることと思われます。

また同時に、肉体の老化は日常の努力、節制によりその進行を遅くすることは出来ますが、諸般の要因によりいずれは死を迎えることは間違えありません。自分ではいつまでも若い気持ですが、客観的に写真に写った自分の姿には年相応の衰えを見て取ることが出来るものです。

かつてアダムスキー氏は自分はこの老人の肉体のまま他の惑星に移住するよりは、新しい肉体を得て転生する方を望むと語ったとされています。まさにその通りの感がありますが、その時を迎えるまでは各自のかけがえのない身体を慈しみ、意識の発現の場としての役割を果たし、同時に各自の精神レベルの進化に邁進することです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落068 [2015-12-07]

068 One's breath is measured by consciousness, and Heaven is but a man suspended between the Soul consciousness of Eternity and Man's consciousness of earth. It is the mark or center of balance where the true understanding of the cosmos exists. Each conscious being is but a focal point of action within this great limitless ocean of intelligent force. There is no separation between any one of these focal points of conscious action and the Wholeness of consciousness.

068 人の息は意識によって見守られており、天国とは人が永遠なる魂の意識と地上の人間の意識との間に吊り上げられていることなのです。それは真の宇宙の理解が存在するバランスの印、或いは中心です。各々の意識的存在は、この偉大なる限りない知性の力の海の中における行動の焦点です。これらの意識的行動の焦点のいずれの間と意識全体との間には分離はありません。

【解説】

私達の誰もが願う天国とは、そもそもどのような状態なのか、著者は本項で説いています。それは永遠の魂の意識と私達地上の人間の意識との調和、バランス状態のことだとも明言されています。

また、私達の毎回の呼吸が意識により見守られているということは、私達にとって意識は幼児の命を支え守る両親そのものとも言えるでしょう。この呼吸とは創世記の記述にもあるように生命の基本です。ヨガの呼吸法や瞑想にもこの呼吸に着目してその意識の働きを知ろうとする手法の一つかと思われます。

私達も毎回の呼吸を単に何気なくやり過ごすのではなく、呼吸がどのように起こり、何に促されて行われているかについても関心を持つべきでしょう。人生最後の瞬間はこの呼吸も停止することになる等、呼吸は私達の生命活動になくてはならない活動であるからです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落069 [2015-12-08]

069 Those who have become consciously aware of conscious consciousness through the ages have known this and have used the knowledge in their daily life. They have recognized themselves as the unlimited consciousness and thereby have become the controllers of it. The average man who claims himself a conscious being has through the development of a personal ego blinded himself to the reality of his being and understanding of cause consciousness so that he is expressing not more than one tenth of one percent of his potential ability. Think of the possibilities ahead of man when he shall have enlarged his field of awareness.

069 時代を通じて意識的意識について気付くようになった者達は、このことを知り、日常生活の中にその知識を利用しました。彼らは自分自身を無限の意識として認識し、その為その支配者になって来ました。自分自身を意識的存在だと主張する平均的な人間は、個人的自我の発達を通じて、自分の存在の現実性について自分自身を盲目にしてしまい、その結果、彼自身の潜在能力の１％の１０分の１も表現してはいないのです。自分の気付きの領域を拡げた時の人の前に拡がる諸々の可能性について考えて下さい。

【解説】

宇宙そのものに繋がる意識を自覚すること、その知識を実生活に応用することは各自の生活レベルの向上に繋がることはもちろん、その人の真の進化に直結しています。その人が意識とどのように接しているかは本人しか分からないことですが、その成果はその人の物事の達成や人々への貢献その他、具体的な活動成果により、容易に知ることが出来る筈です。

かつて多くの英雄や偉大な芸術家、更には後世の人々の生きる指針を示した思想家等々、多くの人達はこの意識を日常に適用することにより、各自の能力を高めて行ったという訳です。

もちろん、現状の私達も多少は意識の発現もある訳ですが、その大きさは本来の能力の１％の１０分の１も表現出来ていないと著者は指摘しています。このことからも私達の前には進むべき道が遥かに連なっており、一つ一つ問題を解消して行きながら進むべきものであることが分かります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第05章 段落070 [2015-12-09]

070 We have been taught that all things are possible with God. God is consciousness, and man cannot separate himself from consciousness for he is that. Are not all things also possible therefore, with man? Jesus the Christ understood this unlimited capacity for expansion when he said-"Greater things shall you do than I have done." He put no limitations upon himself or upon another. It is through the understanding of the consciousness, which is oneself, expressing through all forms that gives one the power to control all elements. Cannot a being command himself into action? Cannot consciousness direct its own movements? This mighty Cosmic force, with power to do and the intelligence to direct, is the most generous giver of all things to those who utilize every fleeting conscious moment, but it turns a relentless executioner in the hands of those who pay no attention to its gift of Ideas.

070 私達は全てのことが神にあっては可能だと教えられて来ました。神は意識であり、また人は意識から分離できません。何故なら人は意識であるからです。では、全ての事柄もまた、人間にあっては可能ではないでしょうか。イエス・キリストは「私が為した以上の大いなることを貴方は為すだろう」と言った時、この拡大する無制限の能力を理解していたのです。彼は自分自身にも他の者にも如何なる限界を設けていませんでした。それは全ての元素を支配する力を与え、万物を通して表現している自分自身である、意識の理解を通じてのことです。何人であれ、自分自身に行動せよと命令することは出来ないことでしょうか。意識はその運動を指図出来ないでしょうか。この力強い宇宙的力はそれを為す力と指導する知性を持ち、意識的瞬間の束の間のひとつひとつを活用する者達にとって全てのものを与える寛大な贈与者ですが、一方、そのアイデアの贈り物に何らの関心を払わない者達の手にあっては情け容赦の無い執行人に変貌するのです。

【解説】

本来の人間の能力の可能性とその理由について本項では説かれています。

現在、私達はこの「宇宙哲学」をアダムスキー哲学の一環として学んでいますが、実は同様の内容はイエスの時代にも説かれていたことに注目しなければなりません。即ち、他惑星の文明から地球にはこれまで何度となく同じ内容がもたらされ、イエスをはじめとするいわば伝道師が当時の人々に語り伝えていたことになります。おそらくは仏陀も同様でしょう。

時間が経過し、教えのエッセンスが失われつつある中、アダムスキー氏が出現することとなったと思われます。また先にも述べましたが、アダムスキー氏は使徒ヨハネと関係があった（ヨハネであった）とされていますが、本文に記述のあるイエスの言葉の真意を記している部分は、実際イエスの間近に居たヨハネがその時、理解した内容であったと思われます。

いずれにせよ、現在の私達は再びこの真理に向き合おうとしている訳で、自分の中に染みわたる意識の力を知ること、学ぶことを第一にしたいところです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第06章 段落071 [2015-12-10]

6. BODY, MIND AND CONSCIOUSNESS

071 Until quite recently mind and matter have been considered as widely separated as the poles. The materialist has exalted matter into predominance and the metaphysician has given the supremacy to the mind, while consciousness has received scarcely a consideration. There have, of course, always been alerted minds in the world who understand the inseparable relationship of mind, matter and consciousness and have made use of this knowledge in the field of practical evolvement, but the world in general has chosen to remain in the mystery of divisions.

第６章 肉体、心そして意識

071 全くの最近まで、心と物質は両極のように甚だしく分離して考えられて来ました。唯物論者は物質を優位位置に引き上げ、また形而上学者は心にその最高位を授けて来ました。しかし一方では、意識はほとんど考慮すら受けて来ませんでした。もちろん、世の中には心と物質、それに意識について引き裂くことの出来ない関係を理解する鋭敏な心の持ち主がいつも居て、実際的な発展の分野にこの知識を活用して来ましたが、世の中一般はその区分分けという神秘の中に留まることを選択して来ました。

【解説】

これまで私達は身の回りの世界を物質中心、あるいは自分の内側の主体と考える「心」のいずれかを優先させて論じて来ました。地球の経済社会は物質的価値を最大の争点として争い、時に国同士の戦争への進み、また一方の思想の相違についても異教徒に対しては平気で殺戮する行為も行われています。

物質も心も本来の価値はさほど無いのではないかと私自身、最近は考えるようになりました。いずれも永続きすることがないからです。

しかし、本項はこの二つの要素の他に「意識」が存在し、これまで顧みられることがなかったと指摘しています。私達はこれまで意識について十分気付くことなく過ごして来てしまいましたが、本講座では改めてその価値や大きさについて学ぼうとしています。

前章にもあったように、意識が物質の隅々に行き渡っているからこそ、物質は生命を得ることが出来、心も機能することが出来る訳です。今のところ一人一人の理解度によって、この意識へのイメージは異なるものとは思いますが、重要な点は宇宙には意識作用をもたらす巨大な力が働いており、その力無くしては物質も心も存在できないということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第06章 段落072 [2015-12-11]

072 Science has done much in proving many things which the majority of the people of the world previously refused to accept. It has proven, for instance, that all forms are made up of cells which are composed of the same elements as the earth, air and water. It has revealed the fact that the human body is no different in composition than any other form in the mineral, vegetable, or animal kingdom. These cells or atoms of matter possess a certain amount of intelligence and are actually little entities not unlike the human being, but the world has not easily accepted the belief that a particle too small to be seen without the aid of a microscope can be the possessor of a mind, or intelligence. Science has now brought forth the proof of this. It speaks of living and disintegrating atoms of matter, and in working with these tiny cells it has learned to release a form of energy from the atom which is seen as a ray of light. One professor of science has spoken of this as the soul of the atom, which certainly implies intelligence.

072 科学はかつては世の中の大多数の人々が受け入れを拒絶した多くの物事を立証して来ました。科学は例えば全ての形あるものが、地面と空気、水と同じ元素からなる細胞から成り立っていることを証明しました。それは人体が鉱物や植物あるいは動物の王国における他の形あるものと組成において何らの違いが無いという事実を明らかにしたのです。これらの細胞や物質の原子は幾分かの知性を持ち、実際には人間とさほど違いが無い小さい実体なのですが、世間は顕微鏡の助け無しには小さすぎて目に見えない粒子が心や知性の所有者であり得るとの確信を受け入れることが出来ないでいます。しかし、科学はこの証拠を提出しています。科学は物質の原子の生存と分解の状態について語っており、これら微細な細胞について研究する中で、これら細胞が光線として見られるような原子からのエネルギーを放出することを学んで来ました。科学のある教授はこのことを、原子の魂と表現しましたが、それは確かに知性を暗示させるものです。

【解説】

化学の授業の中で原子の発光が電子がそのエネルギーレベルを一段下げる際に発することを習った記憶がありますが、本項にもそれに似た事柄が記されています。これは光の話題ですが、私達の身近なものとすれば太陽の光であり、物が燃える際の光の輝きの背後にある現象を意味しています。

とかく私達は目に見えるだけの現象に囚われがちですが、実際にはそれら現象の奥には肉眼で判別できない繊細微小な世界があり、それらが整然と法則に従った活動をしている訳です。

私達自身についても、私達はほとんど何も知ることなく、一生を終えるかも知れませんが、その生命活動は他の生き物と何ら変わることのない構成となっています。

重要な点は、目に見えない微細世界では各々の塊や粒子が各々の使命を果たし、嬉々として生きているということです。各々には知性があり、家主（人間）の為に一生懸命働いているということです。そしてそれらは互いに意思疎通を果たし、やがては宇宙普遍の想念波動に調和できているということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第06章 段落073 [2015-12-14]

073 It needed not the aid of science, however, to prove the intelligence of matter, for the very fact that bodies act and grow proves that the cells must possess the consciousness to receive instructions from a higher intelligence. We know that nature takes its own course in healing the body when called upon; that a thought given by a man is immediately acted upon by the cells of his body, so matter must have a mind which is capable of receiving the command of either man or nature or it would not act accordingly. Mind, itself, is nothing more than the highway over which consciousness projects ideas to set matter in motion. If matter were not the possessor of mind there would be no avenue through which it could receive the thought impressions; if it did not possess intelligence it could not act upon impressions, and if it did not possess consciousness it would be totally unaware of the command and would remain in a state of complete inertia.

073 しかしながら、物質の持つ知性を証明するのに科学の助けは必要としません。何故なら、肉体が行動し成長するという事実はそれら細胞がより高位の知性から指導を受け取る意識を持っていることを証明しているからです。私達は自然は求められた時、肉体を治癒する上でそれ自身独自の経路をとることを知っています。また、人間によって与えられた一つの想念は直ちにその者の肉体の諸細胞によって行動に移されることからも、物質は人間あるいは自然の命令を受けられる心を持っているに違いありません。そうでなければ、それに応じた行動はとれないからです。心自体は意識が物質を起動させるためのアイデアを放射するハイウェイに過ぎません。もし、物質が心の所有者でなかったとしたら、その想念印象を受け取る大路は無いこととなり、もし、物質が知性を持たないとすれば、印象に基づく行動をとることが出来ないこととなり、もし、物質が意識を持たないとすれば、物質はその命令に全く気付かず、全くの惰性の状態に留まることになります。

【解説】

本章では、肉体と心そして意識について学ぶ訳ですが、その内、心の持つべき本来の機能・役割について本項は明確に説明しています。

即ち、肉体に指令を発するのが心なのですが、もちろんその肉体も各々の細胞が想念・印象を感受する機能を有している必要があるという訳です。更に本文では心の作用を高速道路に例えています。つまり印象が通過する経路ということになります。

よく整えられた何らの障害物もない幅広い平坦な道路であれば、許容交通量も大きなものとなりますが、デコボコ道であれば車の往来も容易ではありません。つまりは心自体が自分の主張を持って入って来る印象を捻じ曲げたり、非協力的な態度をとれば、途端に流れる印象量は激減してしまうのです。

一方、私達がもち、入って来る印象を自由に通し、干渉しなければ益々宇宙的な印象・想念の通過量は増え、多くの利益を得ることになるのです。自らを整えるとはこのような状態を言うのだと思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第06章 段落074 [2015-12-15]

074 We know from actual experience that when a thought is sent over the highway of mind that all of the cells of the body respond in a perfectly unified state in producing that impression in outward form. It is not difficult to know if a man is joyous or angry. The thought of anger will mold the matter composing the body into an exact image of itself - contorted features, flashing eyes, clenched fists, set mouth etc. It may even produce a state of intense trembling throughout the form. If the thought is changed to one of joy the body again responds and matter is molded according to an entirely different pattern - the eyes glow with a soft light, the features are relaxed, and the whole form becomes one of simple grace, a symphony of harmonious action.

074 私達は実際の体験から、一つの想念が心のハイウエイに送り込まれると、肉体の全ての細胞は外向きの形にその印象を作り上げようと完璧に統一された状態で呼応することを知っています。人が楽しく思っているか、怒っているかを知ることは難しくはありません。怒りの想念は肉体を構成している物質をまさにその想念自身のイメージに鋳込み、歪んだ表情、ぎらついた目、固く握りしめた手首、こわばった口等を作り出します。それはまた、身体全体を激しく震えさせる状態さえも作りだすかも知れません。しかし、もし想念が楽しいものに変われば、身体は再び呼応し、物質は全く異なるパターンに沿って鋳込まれ、目は柔らかい光に輝き、表情はリラックスし、形全体は純真な上品さ、調和ある行動のシンフォニーになるのです。

【解説】

本項は私達の中を通過する想念・印象が如何に肉体細胞を動員し、その印象を具体化させる方向で活動して行くかを明確に説いています。即ち、私達の心の中を通過し、心が取り入れる想念は直ちに各肉体細胞が呼応し、その表現者にある訳です。本人が自覚していなくても半ば自動的に肉体細胞は心の受け入れた想念を実現しようとするものだからです。

従って私達が注意すべきは、何時如何なる瞬間も好ましくない類の想念は断固として身体に入れないようにすること、常に好ましい宇宙的な調和した想念・印象を取り入れ発信することです。

人は如何なる人生を送るかは本人次第なのですが、その自らの人生への取組姿勢が重要だとされる点は、まさに日常私達がどの種の想念・印象を取り込もうとしているかに関わっています。生命に対する姿勢こそ最も問われる事項であると考えられます。その背景にあるのが、この想念・印象が肉体の各細胞や他の生命体その他に及ぼすこれら紛れも無い作用なのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第06章 段落076 [2015-12-16]

076 The sense mind personifies the impressions received and distorts them with self opinions. If the radio ethers are disturbed we on the receiving set get the disturbance called static, which means that we cannot get the program clearly. This is also true with man, for when the mind of man is disturbed that which is coming from the broadcasting station of consciousness is not revealed perfectly and matter goes into action with a distorted conception of its mission. The result is a state of confusion within the body. Cosmic consciousness is never confused, it is always in a unified state, so the harmonious manifestation of an idea depends upon the stillness and impersonal attitude of the mind. A clear peaceful mind will always bring desirable conditions. A disturbed mind will cause distorted conditions.

076 感覚心は受信した印象を属人化し、自己の意見で歪めてしまいます。もしラジオエーテル波が妨害されると受信機の所にいる私達は雑音と呼ばれる攪乱を受け、その結果、私達は番組をはっきり聴取することが出来ません。これは人間についてもまた同様です。何故なら人の心が攪乱されると、意識という放送局から来るものが完全には明らかにならず、その使命の歪んだ概念による行為に物事が進むからです。その結果、肉体の中が混乱の状況になります。しかし、宇宙的意識は決して混乱はしません。それは常に統一化された状態であり、その為、アイデアの調和ある現出は心の静寂と非個人的な姿勢に依存しています。明晰で平穏な心はいつも望ましい状態をもたらすでしょう。一方、混乱した心は歪んだ状態をもたらすでしょう。

【解説】

私達が何故自分の心を平安に保ち、受容的な態度を貫かなければならないかを、本項は示しています。時々刻々に贈られて来る宇宙からの印象に対して私達の心が自分勝手な判断を下し、利己的な目的にそれらを用いるようなことを避け、本来のメッセージの内容を私達が理解出来るようにさせる為です。

真の宇宙的印象は簡潔明瞭なものではないかと考えます。究極の解決策を提示しているように思うのです。その為に無駄がなくそれに従えば解決は容易なのですが、これまでの私達はその真実に向き合うことなく、自己流で言わば心の意思に従うだけの行動をとる為、その結果は随分と遠回りする結果となっていたように思われます。

贈られ与えられた助言を素直に受け止め、実生活に活かすことが大切なのですが、その前提として自らの心が自己の尊大化を捨て、宇宙と調和する生き方に改めるとする一大覚悟が必要となる訳です。

宇宙的印象の本来の姿は純粋で一滴のにごりもありません。その印象を自らの体内に素直に取り入れる姿勢ほど、望まれていることはありません。

お詫び **[2015-12-17]**

昨日、第６章－段落０７６の内容を誤って、０７５として掲載してしまいました。
本日、改めて本来の段落０７５を掲載しました。昨日分の記事は本来の段落０７６にタイトルを改めました。
大変失礼しました。

竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第06章 段落075 [2015-12-17]

075 Mortal thought, however, is not the intelligence, it is but an idea projected by consciousness. It acts as a messenger between the sender and the receiver just as an idea consciously projected into a microphone travels on the mind of a radio (the ether waves) to the receiver. The great unlimited force of intelligence, which is consciousness, broadcasts a message in the form of thought; this message travels upon the highway of frequency called mind and contacts every part of the body. Since every cell is the possessor of mind the idea impresses each of them at the same time and they as a whole give expression through and upon the body. This is the same principle used in the operation of radio. Once the message is given over the microphone all space is effected since it can be picked up anywhere by a good receiving set. Thought effects the whole of matter in the same manner. The radio frequency is carried on the waves of ether and is neither seen nor heard outside the studio unless it passes through a receiving set. In this same way consciousness projects itself as an idea through space by an instantaneous action effecting all space at one time and the idea which is supported upon the waves of mind become manifest only after passing through the instrument of matter. In other words, mind is the channel over which man is supplied with conscious awareness just as the ether waves are the channel over which we receive the musical and oratorical expression of the consciousness broadcasting them.

075 しかしながら、死すべき（訳注：肉体の）人間の想念は知性ではありません。それは意識によって放出された一つのアイデアなのです。それは丁度、マイクの中に意識的に放出されたアイデアがラジオという心の上を（エーテル波として）進行し、受信者に到達するようなものです。意識である偉大なる無限の知性の力が想念という形の中にメッセージを放送します。このメッセージは心と呼ばれる周波数のハイウエイを旅して身体中のあらゆる部分と接触します。あらゆる細胞は心の持ち主である以上、そのアイデアは同時にそれらの各々に印象づけ、それらは全体として身体全部を通じて表現を与えるのです。これはラジオの操作で用いられているのと同じ原理です。ひとたびメッセージがマイクを通じて与えられると、全宇宙が影響を受けます。何故なら、良い受信機によっては何処でも拾い上げられるからです。想念は全く同様に物質全体に影響を与えます。ラジオの周波数はエーテル波によって運ばれますが、受信機を通らない限り、スタジオの外では見たり聞いたりは出来ません。それと同様に意識は全宇宙空間を同時に影響を及ぼす瞬間的な行動によって自身をアイデアとして宇宙空間に放出し、心の波動によって支持されたアイデアは物質という装置を通じることによってのみ現出化するのです。言い換えれば心は人間が意識的気付きによって与えられたチャネルであり、丁度エーテル波が私達がそれらを放送している意識の音楽や演説の表現を受信するようなものです。

【解説】

ある意味、本項はこれまでの意識と心、物質の３者の関係をこれまでになく明瞭に説いている箇所だと思われます。アダムスキー氏は著者「テレパシー」の中でも想念伝達はラジオ放送に例えて説明されていましたが、この「宇宙哲学」においては更に進んで「意識の作用」についても関連して説いているのです。

よく昔から「心を空しくして」と表現され、それは創造主を完全に受け入れる為に必須な条件とされて来たように思われます。イエスの「心貧しい者は幸いなり」も同様です。本項での記述から分かるように、心がハイウエイである以上、心の中に何かが留まっているような時、心自身が他に何も考えられない程、自らの執着した想念に埋もれている場合には、意識からの想念・印象を取り込むことが出来ないことが分かります。

いつもスムーズに車が通過できるよう、心の中に何かを留めておいてはいけないのです。

心を無にして、次々に通過する想念・印象を自由に働かせ、制約を設けないようにすることが大切で、その訓練の結果は他惑星の長老のように毎秒、何千何万もの想念が通過する超高速の心の機能に繋がって行くことになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第06章 段落077 [2015-12-18]

077 This proves to us then, that mind is not all there is since it can be used one way or another. Evolution is not the expression of mind but the expansion of mind. Just as an ungraded road is broadened and leveled in order to accommodate more traffic upon it, so must the highway of mind be expanded and smoothed in order to allow consciousness to project more numerous vehicles of thought to their proper destination. Mind is only the channel of expression, the avenue by which consciousness manifests itself in matter. Body, mind and consciousness, then, are one and inseparable. The body of matter would cease to exist if it were not supported by consciousness. Consciousness could not express itself in matter were it not for the conveyer over which it travels, and mind would be a useless nothingness were it not acting as a channel between the two.

077 このことは私達に、心というものはそれが様々な方向に使われ得るということから、心の現状が全てではないことを示しています。進化という言葉は心を表現したものではなく、拡張することが心を表すものです。丁度、未だなだらかに整備されていない道路がより多くの交通を収容できるよう拡げられ、平らにされるのと同様に、心のハイウエイは意識がより多くの想念の乗り物をそれらの適切な目的地に向けて抄出させられるよう、拡張し、滑らかにされなければなりません。心は表現のチャンネルに過ぎず、意識が物質にそれ自身を現出させる大道なのです。肉体と心と意識は、それ故一つであり、分離できません。物質からなる肉体は、もし意識による支援がなければ存在は途絶えてしまうでしょう。意識はそれ自身が通る輸送装置がなければ物質の中にそれ自身を表現することは出来ないでしょうし、心が両者の間のチャンネルとして行動しなければ何ら無用のものになることでしょう。

【解説】

結局、私達の生きる目的は本項に示されているように、心の拡張拡大にあるのです。心自体の価値を高めるなどということは意味が無く、先ずは心を平ら（静かに素直）に保ち、あらゆる想念・印象に対して受容できる包容力を持つということです。

これまで私達は自我を高める為に努力して来ましたが、それでは心が自らをおごり高めるばかりで、進化としては逆効果です。一秒間にどれほどの印象を感受できるか、インスピレーションの感度ほど大事なものはありません。これからの人間の価値はそうした印象の感受能力が問われることになります。

実生活にこれら宇宙的印象を活用する中で、次第に心もそうした経験を増し、常に印象を受容する姿勢に変わって行くものと思われます。人生後半に多くの人が芸術分野に目覚めるのもこうした背景があるのかも知れません。いずれにせよ、自己流でなく、常に宇宙と対話しながら生活を進めて行く姿勢が大切ではないかと思われます。

「心が広い」という表現がありますが、真に私達が目指すのは静かでありながら、幅広い印象に対して常にオープンな心の状態であり、多くの仏像がその姿を象徴しているように思います。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第06章 段落078 [2015-12-21]

078 Remember, mind has the possibilities of expansion. Matter, again, is in the process of evolution; so neither mind nor matter is all in all.
078 覚えておいて欲しいことは、心は拡張の可能性を持っていることです。物質もまた進化の過程にあることです。ですから、心も物質も全て完璧な状態ではないのです。

【解説】
私達全ては進化の途上にあるということです。これは私達の心はもちろん、物質にも言えることだとしています。よく思うことは地層深く恐竜の化石が出土したということが伝えられ、博物館等でその巨大な骨格が展示されていますが、どう見ても獰猛、野蛮な動物達に思えてなりません。まさに弱肉強食の時代が地球上にあったのです。これらの化石は長い時間を掛けた惑星の進化の過程を私達に示すものです。
同様に私達の心も各自、今期の生涯から今日に至るまでの進歩の歩みがあったことは人知れず確認出来るものと思います。何より自分が過去の自身の実態を良く知っている訳で、生涯の歩みはその進歩に繋がっている筈です。
このように物心両面で私達は進化の過程にあり、その目指す目的地は遥か先にあるということでしょう。各人が化石になるまでの年数を要するかは別として、私達は進化の道を歩んでいます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第07章 段落079 [2015-12-22]

7. CONSCIOUS AND SUB-CONSCIOUS MIND

079 There has been, and is, widespread misunderstanding regarding the status and function of the subconscious mind. This lack of knowledge has caused many people to get lost in mysteries which are of no value to humankind. There are books and teachings regarding the subject, which we find by research to be wrong. We know that the so-called conscious mind, which is the intellect that we use daily to govern our normal activities, is very fickle and weak. This mind receives impressions from the senses and formulates its own opinions and is subject to uncertainties, fear, or any emotional change that comes its way. This mind gives credit to a sub-conscious mind which it feels possesses memory of past events and a greater knowledge of things unknown to itself.

第７章 顕在意識的心と潜在意識的心

079 潜在意識的心の状態と機能については、広範囲に拡がった誤解があります。この知識の欠如の為、多くの人々は人類にとって何らの価値のない神秘の中に迷っています。このテーマに関して書物や教えがありますが、私達は調査の結果、それらが誤りであることを見出しています。私達は、日常、私達が普通の行動を支配するために用いている知性である、いわゆる意識的心は、大変移り気であり、弱いことを知っています。この心は諸感覚から印象を受け取り、自分の意見を作り上げ、やって来る不安定さや恐れ、あるいはその他感情への変化に従属しています。この心は過去の出来事に関する記憶や自分自身には分からないより偉大な知識を有していると感じている潜在意識の心に信任を与えているのです。

【解説】

私達が日常、自ら意識している（即ち、"顕在意識"としての）心は、実に危うい存在です。少しでも不安なことがあれば心配で寝ることも出来ず、またわずかでも報われないことがあると憤りや落胆に陥ってしまいます。

未来に起こる事柄を十分信頼出来ないことや、知識を有しない為不安定になる訳ですが、自身の身体活動等、一方では心とは関わり無く宇宙的調和を保っている部分については全て、潜在意識の領域に委ねている訳です。

しかし、問題は、日常、表に立って指図する顕在意識の心が、その潜在意識の部分に教えを請わない所にあります。何かは分からないまま、「任せて置けばうまくやって呉れる」程度の認識であることです。

どのようにすれば知識を有する潜在意識から情報を受け取ることが出来るかについて、本章では述べられていることになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第07章 段落080 [2015-12-23]

080 This so-called subconscious mind is in reality one in consciousness with the ever present Cosmic Intelligence. It is the Soul mind in the body of man; that which built and maintains the body. It fears nothing and respects nothing in the sense of personal respect. The sense mind is negative and the All-knowing mind is positive and they are one. In order to enjoy the full benefits of each, man must discipline the sense mind to follow the dictates of the Soul mind. This mind gives impressions for action that is sometimes beyond the perception of the sense mind, and will continue to do so from time to time until the sense mind executes the impression perfectly, so that it may partake of the experience of right action. Just as a teacher would tell a child to do something in a certain way and the child did not do it, but made a mistake, if the teacher should allow the child to go on that way, would it ever know the right way of doing that which it was told to do? No. Therefore the teacher, in order that the child may know the right way, insists that it be done over and over until it is done right and by so doing the child has the practical experience of how it is done.

080 このいわゆる潜在意識心は、実際には永遠に現存する宇宙的知性と共にある意識状態の一つです。それは人体の中の魂の心であり、身体を作り維持している存在です。それは何ものをも恐れず、人の個人的事項に関し、何ものも尊ぶことはありません。感覚心は陰性ですが、全知心は陽性であり、それらは一つです。それぞれの恩恵を十分に享受するために、人は感覚心を訓練し、魂の心の指令に従うようにしなければなりません。この魂の心は時として感覚心の知覚を超える行動に向けた印象を与え、感覚心がその印象を完璧に実行するまで、時折そうし続ける結果、感覚心は正しい行動の体験を共にすることが出来るようになります。丁度、教師が子供をあるやり方で何かさせようとし、子供がそうしようとせず過ちをしでかす時のように、もし、教師がその子供をそうすることを許していたとすれば、その子供は言いつけられた正しいやり方を知るでしょうか。いいえ、出来ません。ですから、教師はその子供が正しい方法を知るようになるため、正しく行うまで何度も何度もそうすべきと主張しますし、そうすることで子供はどのようにして為されたかの実際的な体験を持つのです。

【解説】

実際には教えを請うべき知性を持つ存在は、私達自身の中の潜在意識と称される部分であると本項は指摘しています。つまりは私達の迷える心には、最も身近に頼れる潜在意識という指導者が居たという訳です。

もちろん、これらの知性ある存在、宇宙と直接繋がっている存在が無ければ、私達自身の生命を保つことなど、おぼつかない訳ですし、私達は通常、何ら顧みることなく日々表層的な事象に一喜一憂しているのです。

この違いを理解できれば、後の進むべき方向は明らかです。日常、これら潜在意識という教師を通じて如何に学ぶかであり、自身の体調を整え、心の状況を整備してやって来る印象を生活に取り入れることが主要な生き方となる筈です。また、そうした印象感受の体験を積み重ね、自らの心の状況と対比させることで、進むべき方向も明らかになる筈です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第07章 段落081 [2015-12-24]

081 To bring ourselves into a broader state of conscious awareness we must transfer the controls from the sense mind to the All Knowing consciousness; and by so doing we transform the body into its natural state. The conscious thoughts that we entertain in our mind draws like conditions unto us. If we wish to expand in conscious awareness of that which we really are we must place the past conditions which have already served us in their proper place, and progress into the vast understanding of a limitless being.

081 私達自身をより幅広い意識的自覚状態にするためには、私達は統制を感覚心から全てを知る意識に移行させなければなりません。そしてそうすることによって、私達は肉体を自然な状態に変質させるのです。私達が自分の心の中で抱く意識的想念は同様な状況を私達に引き寄せます。もし私達が実際にあるがままの意識的自覚を拡張したいと願うのなら、私達は、私達に役立った過去の状況を適切な場所に置いて、無限の存在への広大な理解へと前進しなければなりません。

【解説】

本項は日々の体験に対してどのように処して行った方が良いか、示唆しているように思います。即ち、重要な部分は、「私達が心の中で抱く意識的想念は、同様な状況を私達に引き寄せる」という所です。つまりは、心中に抱くものは、良くも悪くも同種のものを引き寄せてしまう訳です。

従って、常に心の中を清浄に保つことが重要であることが分かります。また、一方で、私達の心の領域を拡げる為に、可能な限り幅広い内容の印象を受け入れ、心を拡げて行く必要があるのですが、その為にも、過去の体験に固執することは好ましくはないのです。仮に良い体験であっても、それに囚われることなく、その体験は自分自身の引き出しにしまっておき、常に新しい体験、新たな理解へ前進せよと説いています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第07章 段落082 [2015-12-25]

082 Knowing what we are, we then have to hold fast to that which we want and eliminate from the conscious sense mind that which we do not want. We are bound to get results if that which we want is the right thing for us to have at that time. Otherwise we will get what we need at the proper time.

082 私達が何者であるかを知った後は、私達は自分達が欲するものをしっかり保持し、望まないものを意識的な感覚心から駆逐しなければなりません。私達はもし、私達が欲するものが、その時私達が得るのに正当なものであるなら、結果を得る筈なのです。さもなければ、適切な時期に必要なものを得ることでしょう。

【解説】

「想いは実現する」ことの本質的な意味を改めて本項は示しています。

もとより、私達の心に抱く想念は、私達の認識の有無に関わらず類似した想念を引き寄せるものと思われます。そのハイウエイを通過する想念は、各々が目的を持っており、物質に作用し続ける訳で、最初は微細な原子・分子レベルの活動から、遂には具体的な物質の変化となって現れるものと思われます。

また、前項（081）でも述べられているように、心の中に長らく想念を留めて置くことも好ましいことではありません。仏教で言う「執着」が好ましくないとされる理由でもある訳ですが、私達は仮に良しとした想念であっても、良しとする認識の後は、それらの想念を放ち解放して、次なる来訪想念に備えることが重要と思われます。

つまり、このようにして行く中で、私達の心は良い想念の通り道となり、物質界に好い影響を与えられる想念の通過経路になるものと思われます。

ご挨拶 [2015-12-28]

皆様、この１年ご支援いただき、有難うございました。
明日から新年１月３日まで、更新をお休みさせて戴きます。

良いお年をお迎え下さい。

１２月２８日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第07章 段落083 [2015-12-28]

083 But man must have faith and confidence in the workings of the eternal law; if he has any doubt he will block the condition from appearing. A doubt as small as a mustard seed will keep it from him, but should he have faith as small as a mustard seed he shall have the desired manifestation.

083 しかし、人はその永遠なる法則の作用に対し、信頼と確信を持たなければなりません。もし、どんなものでも疑いがあれば、現出の条件を妨げることになります。カラシ種ほどの小さい疑いは、その者から遠ざけますが、カラシ種ほどの小さい信頼があれば、望んだものの現出を得ることでしょう。

【解説】

心の中を通過する想念・印象が自身の身体はもちろん、あらゆる環境に同種の影響を与えるということは、私達自身が想念・印象を現実世界に発現させる道具や仕組みの一つであることを意味しています。

即ち、各自が心の中で思うことは現実化するという訳です。このことはジェイムス・アレンその他の思想家やほとんどの宗教に共通する教義でもあります。宇宙の法則という訳です。

しかし問題は、これに対していささかの疑念を私達が抱くのであれば、その逆作用を働かせることとなり、物事は成就する筈もないのです。イエスの言われた「からし種」の話も、私達の持つ想念・印象の絶大な創造力の取り扱いについて注意していることになります。

従って、日常、どのような想念を通過させているかが重要で、この心境を適切なものに保つことによって、私達は宇宙的活動ともリンクした生き方が出来るものと思われます。

御挨拶 [2016-01-04]

新年明けましておめでとうございます。
今年も引き続き、この講座を続けて参りますので、ご支援のほど、宜しくお願いいたします。

２０１６年１月４日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第07章 段落084 [2016-01-04]

084 Man has risen from the savage state to the present civilization only by wanting the better things of life knowing that he could have them.
084 人は野蛮な状態から今日の文明まで、実現出来ることを知りつつ、生活のより良い物事を望むことのみによって立ち上がって来たのです。

【解説】

人類がこれまで紆余曲折はあるにせよ、大局的な時間軸の中では、進化して来たことは間違いありません。現に世界各国の宇宙飛行士が国際宇宙ステーションに乗り込んで研究活動を行い、地上では得られない貴重な体験を積むまでに至っています。
「２００１年宇宙の旅」で表現されているように、猿人から現代文明に到達したことは間違いないのです。しかし、これには要所要所の時代の転換点に、他惑星からの支援があったことも確かでしょう。地球上の多くの宗教の起源はそのことを物語っておりますし、アダムスキー氏の活動も近年のそれの一環ということになります。
しかし、如何に外宇宙からの支援があっても、地球に暮らす私達がそれを生かす努力を続け、自ら取り組まなければ効果は上がる筈もありません。先ずは、自ら実証して見せること、その体験と手法を他者と共有することが重要です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落085 [2016-01-05]

8. MAN IS A FOUR SENSE BEING
085 One of the greatest bits of wisdom ever given to man by the outstanding philosophers of all ages is composed of two words: "Know thyself." That one assignment has kept the seekers of knowledge hard at work for billions of years, and it will still be a supreme admonition a billion years hence. It is an eternal study, for man himself is eternal. In that one statement the philosophers have taken in the whole of the Cosmos.
第８章 人は四つの感覚からなる存在
085 あらゆる時代の傑出した哲学者から人類に与えられた最も偉大な英知の小片は二つの言葉から成っています。「Know thyself（汝自身を知れ）」。その課題は知識の探求者を何十億年もの間、勤勉に働き続けさせましたが、またなお、これから１０億年も最高の説諭となるでしょう。人自身が永遠であるために、それは永遠の学習なのです。その一つの声明の中に哲学者達は宇宙の全てを取り込んだのです。

【解説】
「汝自身を知れ」がソクラテスの言葉であったかどうかは不明ですが、あらゆる哲学・宗教はこの１点について探求することを命題としているように思います。また、問題は精神面と同時に人体を巡る生命活動の不思議に迫る科学分野の探求も促しています。
地球における現状の認識では、精神分野と科学分野、心と物質の世界はそれぞれ何らの交流もないまま進められておりますが、本来の姿は同じ土俵の上の研究分野であるべきで、実はこの自分自身の中では心身ともに連携連続した営みが行われているのです。
既に私達が学んでいるように、全ての必要物は知識や能力も含め、各自に平等、無制限に与えられている訳で、要は如何に自分自身からその宝物を掘り出せるかにあります。各自の努力・精進は各自の心身に顕著に現れますし、私達はその成果を味わい、享受することが出来ますし、贈り主である創造主も日々、そのことを望まれているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落086 [2016-01-06]

086 The desire within all men to understand themselves is increasing tremendously. Theory upon theory has been advanced in the endeavor to throw some new light on the subject. Of late years we have heard a great deal concerning the senseman, and the control of the senses as a means of living above conditions and environments, yet we are still struggling under a misconception concerning them.

086 自分自身を理解しようとする全ての人の内側にある願望は驚くほど増えています。理論に次ぐ理論がその課題に何らかの新しい光を投げかけようと努力の中に繰り広げられて来ました。昨今では私達は、状況や環境を超越して生きる手法として、感覚人や感覚の制御について多くを聞いていますが、それでも私達は未だ、それらについての誤解の下であえいでいるのです。

【解説】

おそらく本項は近年の精神科学や心理学の研究事例について述べているものと思われます。また、今日の各種薬剤による精神性疾患の治療もこの中に含まれているのかも知れません。

しかし、これら学者の研究事例を調べるまでもなく、私達自身、自分がどのような想念を日常的に湧き出し、それがどのように心身や周囲の環境に影響を与えるかは、日常の生活の中で実証出来ます。

それでも全くの系統的な知識の整理が為されないまま、独学路線を走るのは良いとは言えないでしょう。この「宇宙哲学」によって、宇宙を貫く絶対的な法則性を十分理解した上で取り組むことが重要です。

とかく取組対象となる私達の心は巧妙であり、十分な理解の上でなければ長い年月、立ち向かうことは難しいのです。重要な点は世の中の時々の主義主張に影響されることなく、宇宙普遍の真理・法則を自らの土台とすることになると考えます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落087 [2016-01-07]

087 We have looked upon ourselves as a five sense being possessing the attributes of sight, hearing, taste, smell, and feeling or touch. We have drifted along idly contenting ourselves with this analysis of our makeup, but recently we have become quite curious to know just how these senses work and what they are. In our seeking we have run our craft upon a rock. We have been unable to account for certain elements of action which we have encountered in our daily lives and so to relieve the tension of this uncertainty some of our most learned theorists have endowed us with a sixth sense. To this added sense has been attributed all the phenomena that have been unexplainable in the five sense man. In fact there have been those who have sought to add a seventh sense. The mortal mind seems to have a faculty for complicating that which is very simple and thereby creating confusion instead of understanding.

087 私達は自分自身を、視覚、聴覚、味覚、嗅覚そして触覚ないし感触の５つの感覚の属性を持つ存在として見なして来ました。私達は私達の成り立ちをこの分析で無益に満足したまま漂って来ましたが、最近になって私達はこれらの感覚の作用がどのように行なわれるか、またそれらは何であるかについて大いに知りたいと思うようになりました。私達のこの探求の中で私達は自らの乗り物を岩に乗り上げてしまいました。私達は私達の日常生活の中で出会ったある種の行動の要素を説明することが出来なかった訳であり、この不確かさの緊張を和らげるために、私達の最も学識のある理論学者達は私達に第６番目の感覚を授けたのでした。この付け加えられた感覚に５つの感覚の人間となる説明不可能な全ての現象が割り当てられました。本当は第７番目の感覚を追加した人達もいたのです。死すべき人間の心は、とても単純な物事を複雑にする才能があるようで、これにより理解の代わりに混乱を創りだしています。

【解説】

私というものが単に感覚器官から成り立っているとする考えには、もちろん無理があるという訳です。確かにこれら肉体に属する感覚に多くの部分を依存していることは確かですし、その証拠に視力を失った方や、聴覚をなくした人は不自由な生活を強いられることになります。

しかし、これら人間のいわゆる五感を失っても、人間としての本質は何らの差もない訳で、人体で時々刻々紡がれる生命活動には何ら影響はありません。

一方、私達の心の中の動きはどうでしょうか。これら感覚の意見が大勢を制しており、本来の宇宙からの想念・印象の入り込む余地がない状況ではないかと思われます。私達の心にもっと様々な情報が入れるように拡げること、より精妙な想念・印象を受容出来る体制が必要です。

実際には、日常生活の中でも、多くの想念・印象が活躍して人生が成り立っているように思いますし、これら想念・印象を受容する機能を単なる感覚の一種と捉えるべきではありません。肉体細胞の分子・原子レベルに存在する知性の一つとして捉えなければならないのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落088 [2016-01-08]

088
If you have accepted the theory of the sixth sense you will no doubt be surprised by the statement which I am about to make, but as one of the great Chinese sages has expressed it - "The truth that we least wish to hear is that which it would be to our advantage to know."
088 もし貴方が第６感の理論を受け入れていたなら、きっとこれから私が行なおうとする発表に驚かれることでしょうが、偉大な中国の賢人の一人が表現したように、「私達が最も聞きたくないと思う真実は、私達が知ることによって私達の為になるというものが多いのです。」

【解説】
想念・印象の感受・送信を従来の感覚の一種と考えるのでは、真実は捉えられないという訳です。そもそも印象はどのようにして認識されるのかについては、これまで学んで来たところです。肉体細胞、更にはそれを構成する分子・原子が受信し、それらの情報が全身に伝わるのが印象の伝達です。詳しい内容は、私自身まだ理解できていませんが、私達の意識空間にも関係した仕組みがどこにあるものと思います。
そういう意味でも、想念・印象の知覚は、ある専用の感覚器官がある訳でもなく、全ての細胞や分子・原子が共通に持つ知覚経路というもので、決して第６番目に位置する感覚と呼べるものではないということです。
実は、想念・印象による意思疎通こそが、万物生きるものの間で執り行われている訳で、私達が自覚しているいないに関わらず、私達は想念・印象に依存した生活を送っているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落089 [2016-01-12]

089
The purpose of this lesson is to show you by means of practical analysis that man is not the possessor of the five senses but is actually a four sense being. This, we realize may be more difficult for you to accept than the belief in the sixth sense, for we as mortals can more easily accept that which we feel adds to, rather than subtracts from that which we think we have. However, this subtraction, as you will find, is not in the nature of releasing something as a loss, but as the process of gaining something much greater.
089 この教科の目的は、貴方に実際の分析の手法を通じて、人間は５つの感覚の持ち主ではなく、実際には４つの感覚の存在であることを示すことにあります。このことは貴方にとって第６感を信じるよりはるかに難しいだろうと私達は承知しています。何故なら、死すべき存在としての私達は私達が所持していると思っているものから減ずるより、加わることを容易に受け入れられるからです。しかし、この引き算はやがて貴方も分かるように、失うという意味で何かを手放すという性質のものではありません。そうではなく、より大いなる何かを得る過程のものなのです。

【解説】
想念・印象の感受について、日本でも第６感と表現されたこともあったのですが、アダムスキー哲学においては従来の５感に対しても実際には、感覚としては４つしかないことを繰り返し述べられているところです。
つまりは、従来の感覚と呼んできたものの内、感覚と呼べるものは実際には、視覚、聴覚、味覚、嗅覚であることは既に学んでいるところです。今後私達がやらなければならないことは、これらの感覚の実際について自分自身を研究対象としてよくよく観察することです。
最近、「断捨離」という表現をよく聞きますが、年齢を重ね、余命を数える程になった年代においては、身辺を整理することも必要になります。不必要なものは事物だけではありません。知識や情報も自分にとって不必要なものに敢えて関心を持つ時間はないと言うことも出来ます。そういう意味では、この自らの４感の日常の働きや役割、課題についてしっかり学ぶ必要があります。自分自身を理解することが私達各自の最大の課題であり、他者にそれを替わって頼むことは出来ないのです。私達は年々、残された時間を大切にして、自らの本業にいそしむ必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落090 [2016-01-13]

090
Let us, therefore, analyze the sense man. You have believed that man is endowed with five avenues of expression - sight, hearing, taste, smell and feeling. Each of these attributes is supposed to have the ability to act independently of the others. We can close our eyes and hear, taste and smell. It is possible to decipher between sweet and sour without hearing, smelling or seeing the object in question. We can certainly tell the difference between a bit of garlic and a rose without using the sense of sight, sound or taste. So it is possible to prove that four of our senses do work independently of each other. But now let s remove that which is known as the fifth sense; let us deprive man of feeling. What is the immediate result? The result is a state of unconsciousness; the four other senses are ceased to function, even though the organs of sense themselves, are still existing in the body. The eyes, nose, palate and ears are uninjured yet they do not see, smell, taste or hear. Apparently these senses cannot, then, work independently of feeling. Does this not prove that feeling is not a sense, but the conscious power which gives sensation to the senses?
090 それ故、感覚人間を分析して見ましょう。貴方は人が５つの表現の大通りを授けられていると信じて来ました。視覚、聴覚、味覚、嗅覚そして触覚です。これらの属性の一つ一つは他と独立して作用する能力を有しているように思われます。私達は目を閉じて聴くことや味わうこと、香りを嗅ぐことが出来ます。問題の対象物の音が聞こえなくても、臭いが嗅げなくても或いは見えなくても甘いとすっぱいの味の違いを判読することは出来ます。私達は確かにニンニクの小片とバラの違いを視覚や音や味の感覚を用いずに言い当てることが出来ます。ですから、私達の４つの感覚は互いに独立して働いていることを証明することが出来るのです。しかし、第５番目の感覚として知られているもの（訳注：「触覚」のこと）を取り去って見ましょう。人から触覚を取り除いて見ましょう。直ちにどのような結果になるでしょうか。結果は無意識の状態です。４つの他の感覚は感覚器官自体は依然として肉体に存続していても機能を停止します。目や鼻、舌や耳は傷ついていませんが、それらは見ることも嗅ぐことも味を感じ、聴くことはありません。見たところこれらの感覚は触覚から独立して作用することは出来ないようです。このことは触覚は感覚ではなく、感覚に刺激を与える意識的な力であることを示すものではないでしょうか。

【解説】
視覚や聴覚、味覚と嗅覚についての特徴として、各々に特有の感覚器官というものがあることに改めて気づく方も多いものと思われます。つまりこれら四つの感覚の入口である各器官が機能しなくなれば、私達はその感覚を失うことになる訳です。
しかし、触覚はどうでしょう。それは特段どの身体部分に集中しているということはなく、私達全身を覆っているように思われます。それらの具体的機能としては、各感覚器官の受信信号を伝える神経網という部分もあるでしょうが、むしろ本文に記されているように全身の生命体としての様々な情報の伝達を担っているとも言えるものです。
深く瞑想し、想念・印象を観察する場合にも、実際に機能しているのは視覚から嗅覚までの感覚などではありません。瞑想等を行うことにより身体内外に自らの感知範囲を広げているのは、この触覚の機能であるように思われます。いわば自分の意識を拡大させ、想念・印象を受容出来る態勢をとっているように思われるのです。日本語訳では５番目の感覚を触覚と記していますが、原文ではfeeling（印象感受）とも同じ言葉が使われており、従来の触覚の要素が印象・想念の感覚と密接な関係にあることが分かります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落091 [2016-01-14]

091 Each sense is able to operate independently of the other senses only so long as it is supported by the life force of feeling, but the feeling or consciousness is entirely independent of the four senses. The sense of sight, taste, smell and hearing might all be destroyed and yet so long as the feeling remained man would be a conscious, active being, knowing joy and sorrow, peace and pain, and altogether very much alive. The feeling is indestructible. It is the eternal, the everlasting intelligence. The destruction of the body cannot destroy the feeling, which is consciousness. It is like the electricity which flows through the wires to the bulb to produce light. If the bulb is destroyed the electricity cannot produce light through it, but the electricity is not destroyed. On the other hand, if the electricity is withdrawn it matters not how good the bulb may be there will be no light emanating from it.

091 各感覚は触覚の生命力によって支えられている限りのみ、他の諸感覚から独立することが出来ますが、触角あるいは意識はその四感覚とは完全に独立しています。視覚、味覚、嗅覚そして聴覚が全て壊されても、触角が残る限り、人は意識があり、行動でき、喜びも悲しみも平穏さも痛みも感じることが出来、まったく活発に行動できます。触覚は破壊されることはありません。それは永遠であり、永続する知性なのです。肉体の破壊によって意識である触覚が破壊されることはありません。それは光を作り出すために電球に電線を通じて流れる電気のようなものです。もし電球が壊されれば電気は電球を通じて光を作り出すことは出来ませんが、電気は破壊されることはありません。もし電気が取り消されれば、電球が如何に良いものであるかは問題にならず、電球から光が出ることはありません。

【解説】

本項で私達はfeelingと呼ばれる「触覚」について基本的な生命力に繋がる重要な要素であることを学ぶ必要があります。この触覚要素を重要視するのはアダムスキー哲学の特徴でもあるのですが、実はここにこそ生命本質に関わる真理があるという訳です。私達がこのことを如何に自らの取組とするかどうかによって、その後の進化が左右する程のポイントの一つになるものと思われます。

私達各人は医学や生物学者ではないので、手元に実験器具や教科書はないのですが、こと感覚の問題に関する限り、実教材は日々の私達自身であり、取組成果も自分自身が最も良く理解できるという好環境にあります。このことを悟らず、取り組まないことこそ、もったいないことこの上ありません。

この触覚問題ですが、実際には全身くまなく行き渡る神経網を介して自らその触覚的感受性を巡らし、探索することが出来ることはご理解戴けると思います。しかし、その延長には、自分自身のいわゆる意識を拡大すること、移動することも同じイメージで実行可能になるように思われます。つまりは意識というものと触覚というものが本質は同じと言うことも出来ると考えています。

触覚（feeling)は意識と繋がっている生命力と言うことも出来るということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落092 [2016-01-15]

092 Within the last few years the attention of the world of science has been attracted to the many cases of suspended animation where the body remains for months in a state of perfect preservation. The sense organs are normal, yet they cease to function in a conscious way. Why? Because most of the feeling has left the body; approximately ninety-nine percent of the consciousness has left, and while one percent of feeling within the body keeps it from disintegrating, this is not enough to cause any apparent awareness within it. Many of these cases have reentered into active life. The feeling had again taken possession of the body and reanimated the inert organs of sense producing in them a state of conscious awareness. If understood rightly these four senses of man correspond perfectly to the four elements of creation, and the so-called fifth sense is the stimulus which imparts to them the animation necessary to produce conscious functioning.

092 過去数年間、世界中の科学の注目は、肉体は何ヶ月も完全な保持状態である中での生気が中断している多くの事例に引き付けられて来ました。感覚の諸器官は正常なのですが、それらが意識的には機能しなくなっているのです。何故でしょうか。それは触覚の大部分が肉体を離れてしまっているからです。概ね意識の９９％が離れてしまっており、肉体の残り１％の触覚が肉体の分解を抑えており、これでは肉体内部に知覚をもたらすには十分でないのです。これらの多くは再び生気を取り戻しています。触覚が再び肉体内の位置を取り戻し、不活発な感覚器官を再び活性化し、意識ある覚醒状態にしたのです。もし正しく理解していれば、人間の四つの感覚は創造の四つの要素に対応し、いわゆる第五感覚は、意識的機能を作り出す為に必要な活性化を与える刺激ということが分かります。

【解説】

私達の身体はこの触覚(feeling)の要素を失うと生存することは出来ません。よく救急救命の現場で「意識」の有無が問われるのは、こうした状況把握を急ぐ必要があるからです。

実は前項（０９１）で述べたように、触覚（feeling）は意識に通じるものなのですが、それ無くしては生命が存続出来ない程の大きな力と役割を果たしているのです。

こうした触覚的要素という土台の上に成り立っている４感覚ですが、本項で注目したいのは、これら４感覚は４つの創造の要素に結びついているということです。つまり、絵画には視覚が、音楽には聴覚がその責任を担っているという訳です。

そういう意味では、映画作品は視覚と聴覚が融合した芸術作品という意義があることになりますし、自然界ではそれら４つの要素が一体となった創造の美ということでもあるのです。

私達はこれから各自の感覚をそれ自体で機能しているなどとは考えてはならず、それらは創造の経路として表現されるべき存在であることを学んで行かなければなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落093 [2016-01-18]

093
In other words this sense is merely the unification of the four senses with that unlimited conscious feeling which controls, supports and animates every conceivable thing in the universe. It is the expansion of the four senses in the channel of feeling which makes of the mortal sense man, a conscious user of conscious power. Through this education of the senses the sight becomes a microscopic sight extending beyond the gross material forms; the hearing is expanded to catch the soundless sound frequencies. etc. Each of the four senses will themselves into greater fields of awareness through the recognition of Cosmic Feeling which is the mother-father thought supporting them.

093 言い換えれば、この感覚（訳注：触覚）は、宇宙空間の中のあらゆる知覚し得るものを支配し、支持し、活性化する無限の意識的な感じによってその４つの感覚を統合しているに過ぎません。それは触覚の経路への４つの感覚の拡張であり、死すべき感覚人間を意識的な力の意識的利用者にするのです。諸感覚の教育を通じて、視覚は大まかな物質の外観を超えて顕微鏡的な視野となり、聴覚は音のしない音波を捉えるまで拡張します。４つの感覚の各々はそれらを支える母性及び父性の想念である宇宙的な触覚の理解を通して自らをより大いなる気付きの場にもたらします。

【解説】

四つの感覚が私達地球人の課題だという訳ですが、この四感覚こそが深遠なる宇宙を学ぶ私達の四つの窓であることもまた確かです。私達が努力すべきは、これら四つの感覚は触覚によって支えられ、意識に繋がる存在にならなければならないことです。

先ずは事物を表層的な観点で把握するのではなく、その対象が私達と同質、同起源の存在であるとの一体感を持って理解できるよう心掛けることでしょう。その「一体感」の中に触覚的要素や意識的要素が含まれているように思うからです。

相手と意識を融合させることで感じ取れることも多いのではないかと思われます。またこうした触覚的要素を発達させることで既存の四感覚も成長し、進化するものと思われます。外界からの精妙、迅速な印象の流れを感受する為には、私達自身の肉体の細胞一つ一つが印象に鋭敏になる必要があり、その為には私達自身に元来備わっている、より高次な触覚的要素を発達させる必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落094 [2016-01-19]

094 The mortal may be likened to a violin, which is the closest to the human expression known as man. Upon the violin there are only four strings; through the medium of those four strings can the coarsest or the most celestial melodies be played but the Instrument is only a bit of wood and string until it is acted upon by a conscious intelligent force. The sounds produced depend upon the skill of the musician. The four senses in the instrument called man are unable to bring forth any expression of life without the aid of the All-Inclusive consciousness which is feeling.

094 死すべき人間はバイオリンになぞらえることが出来るかも知れません。バイオリンは人として知られる人間的表現に最も近いものです。バイオリンには４つの弦しかありません。それらの４つの弦の媒体を通じて最も粗いものも最高に天上的なメロディーも演奏されることが出来ます。しかし、その楽器は意識的な知性を持つ力によって演奏されるまでは、単なる木と弦でしかありません。作り出される音はその音楽家の技量に依存しています。人と呼ばれるその楽器における４つの感覚は、触覚である全てを含有する意識の助け無しでは、如何なる生命表現をももたらすことが出来ないのです。

【解説】

バイオリンが人間に例えられる訳は、単に弦が四本の楽器という訳でもないかも知れません。何より、演奏者の身体に密着し、一体化する中で音を発することもその理由の一つかと思います。

四つの減が私達の四感覚になぞられる点については、アダムスキー氏も何処かで言及していたように、四つの弦がそれぞれ所定の機能を果たすように調律されていることが重要です。各々の持分を保ちながら、その音色を深めることが求められています。

また、ひとたび演奏者によって演奏が始まるや、弓の引く速さや圧力に応じた音を放出することが各弦の役割であり、楽器（身体）の内部はその発した音に共鳴してその音を拡げる筈です。

私達は自らの感覚を各々の機能を高めると同時に、他の感覚と調和し、自身内部の隅々にその影響を拡げて、身体全てからその音楽楽曲とも言える想念波動を表現する必要があります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落095 [2016-01-20]

095 Feeling is a state of alertness - when expressed impersonally it is conscious awareness of conscious consciousness.
095 触覚は警戒の状態であり、非個人的に表現された場合、それは意識的意識に対する意識的な気付きとなります。

【解説】
ある意味、「意識」というものが、「生命の科学」や「宇宙哲学」等、一連のアダムスキー哲学におけるキーワードになっている訳ですが、その「意味」なるものをどのようにして日常生活の中で自覚し、活用して行くかについては各自の努力と工夫に委ねられています。
本項では触覚（feeling)が「意識」に繋がっている言わば秘伝を明かしている訳ですが、私達はこれを受けて各自の探求を進める必要があるということです。つまり、言葉の上の理解でなく、実感としてどのようなものをイメージしているかが重要な所です。
これまでの経験から、私達は自らの知覚範囲を自分の身体内部から外側にまで拡張できるような気がしています。つまりは意識の拡張です。その意識は通常、私達に声を発することはなく、無口ですが、本講座で学んで来たように実際には私達の生命活動を無言の印象によって支えているという訳です。この沈黙の存在を如何に日常的に自覚し（意識して）暮らすかが重要であり、その為には努めてその（意識の）存在を自覚するよう（意識するよう）に心掛けることです。それは印象を感受しようとする心の姿勢から、「警戒」の状況とも表現されているのです。卑近な例では映画「スターウォーズ」で盛んに取り上げられている「フォーズ」なるものも類似した概念を表現したものと考えています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落096 [2016-01-21]

096 When that feeling is no longer playing upon the senses they lie inert like the muted strings of the violin after the consciousness of the musician is withdrawn to another channel of service.

096 諸感覚に対して触覚が作用しなくなると、諸感覚は演奏家の意識が別の奉仕の経路に引き上げられた後にそのバイオリンの沈黙した各弦のように不活発になったままになります。

【解説】

私達の四感覚は意識と結びついてはじめて機能するという訳です。感覚も含め人体全てにわたって意識（触覚要素）の存在如何にかかっていると言うことも出来るのです。

このように無くてはならない意識なのですが、私達自身は永年にわたってその存在意義に気付くことはありませんでした。その結果、うわべだけの感覚による勝手な判断を許して来たのです。

しかし、わずかながらも意識の力に気付き始めた私達は、日々の生活の中でその力を研究し、その作用を身をもって学んで行く必要があります。その為には、先ずは私達の感覚の反応と意識による無言の忠告について学ぶ必要があります。意識の指導は唯一印象によって授けられる訳ですから、私達は触覚的感性を鋭敏にし、時々刻々やって来る印象を鋭敏にキャッチしなければなりません。そうする過程で、私達の肉体の諸感覚も本来の姿に戻って行くものと思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落097 [2016-01-22]

097
In a television program called "Frontiers of Mind," the Bell Telephone Company presented an excellent scientific demonstration of what touch is and how it reacts to electrical impulses. It showed that touch is not a sense organ but acts as a telegraphic system via the nerves to the brain. It registers that which it contacts and relays that reaction as electrical impulses through the nervous system of the body. Touch is inseparable with feeling, for feeling gives sensation to the nerves.
097 「心の最前線」と呼ばれるテレビ番組の中で、ベル電話会社は感触が何であるか、またそれが電気パルスに対し、どのように反応するかを示す優れた科学実験を提供しました。その番組は感触は感覚器官ではなく、神経を経由して頭脳に通じる電信システムとして機能していることを示しました。それは触れるものを記録し、肉体の神経を通じて電気信号としてその反応を伝達しています。感触は触覚と分けることは出来ません。触覚は神経に興奮を与えるからです。

【解説】
触覚(feeling)そのものについては、私達は「触感・感触」(touch)との関係について整理して置く必要があるでしょう。
本項ではこのことについて、触感とは感覚ではなく神経の伝達反応だとしています。つまり、それ自体には「良い悪い」の判断（裁き）は行っていないとも言えるのではないでしょうか。また、感触は情報を頭脳に伝達する基本的な役割を有していることは本文にも示されているように実験的に示すことも可能という訳です。（ちなみに、この番組(Frontiers of Mind)は当時、有名な番組であったようで、今日インターネットの検索でも一部については1965年当時の放送概要を知ることが出来ます。http://www.imdb.com/title/tt0854625/）
しかし、より重要なのは、これら触感(touch)も触覚（feeling)と一体になっているということです。つまりは触感の働きも触覚の働きも類似しているということでしょう。触感の方は人体の範囲に留まりますが、触覚の方は更に拡がる守備範囲を持っているように思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第08章 段落098 [2016-01-25]

098
Science has now proven that the so-called fifth sense should not be classed with the other four.
098 科学は今や、いわゆる第５番目の感覚は他の４感覚と同類に見なすべきではないことを証明しているのです。

【解説】
既にお分かりのように、feeling（触覚）が他の四感覚とは完全に別物だという訳です。このことは私達が漠然と「feeling フィーリング（感じ）」という意図でも用いている、想念・印象の経路とも通じています。身体各部の神経系統を統括する存在としてfeeling（触覚）があり、またそれらの守備範囲は想念・印象の波動キャッチにも及んでいるということでしょう。
問題はこのfeeling（触覚）要素を如何にして伸ばすかにある訳ですが、その為には先ずは各自の現状レベルにおけるfeelingの反応を信頼し、印象に従った行動をとること、またその経験を積むことだと思っています。
私達の目標は各自を他惑星人を手本として進化、開発することであり、各自の取り組みを工夫、共有し、進化に役立てることが求められています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落099 [2016-01-26]

9. THE HIGHWAY OF PROGRESS
099 The sages of the Orient left to posterity many words of wisdom that might well act as guide posts along the way of life. Among the Chinese proverbs is one statement to the effect that "a journey of many miles begins with one step."
第９章 進歩の王道
099 東洋の賢人達は子孫に人生を歩む中で、案内標識としてよく機能する多くの知恵の言葉を残しました。中国のことわざの中に「何マイルもの旅も一歩から始まる」（訳注：「千里の道も一歩から」）という意味の言葉があります。

【解説】
これから歩みを進める時、著者はその道程が実は遥かに続く長いものであることを、中国の格言を引いて私達に伝えようとしています。進歩の道は実に厳しい道であり、決して容易なものとは言えません。
このアダムスキー哲学の道においても、最初は"空飛ぶ円盤"や"UFO"から関心を持ち、次いで他惑星人との関わりに入った後、彼らの精神性と地球上の既存宗教との関連に気付き、その後ようやく宇宙文明の真髄とも言えるアダムスキー哲学の分野に入ることになります。
それでも余程の関心が無ければ、興味本位のレベルで終わってしまう人も多いものです。何より、地上の既存勢力は一般人に目覚めてもらっては困る訳で、大衆向けの娯楽番組や表層的ニュースしか取り扱わないよう、操作しているからです。
一方、アダムスキー哲学の中に真理を見出した方々の中にも、進んで行くにつれて、自身のエゴや周囲の無理解等、様々な困難に出逢うものです。そこで挫折して再び元に戻ってしまうか、それを乗り越えて新たな展望を拓くかはご本人の努力と工夫次第ということになります。
しかし、明らかにして置きたいことは、たとえ困難があっても、一歩進めば、それだけの成果があり、またその成果を拠り所として、次に進むことが出来るということです。そういう意味では、前に踏み出す一歩は着実に人生を目的地に導いてくれることになるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落100 [2016-01-27]

100 In these days of restless activity and innumerable new discoveries, in the babble of uncounted creeds claiming space contacts and guidance, and in the uncertain whirl of diversified circumstances it is well to contemplate this bit of wisdom and stabilize oneself in the thought that action begins with one single step. That regardless of how far or how near the goal may be there can be only one step taken at a time. It is the first stride forward or backward that will carry a man in that direction. This is true of every act of our daily lives and is just as true in our start to live a unified life. It takes but one step at a time to lift us out of the rut of the old habits and start us on the highway of the new, but that step must be complete; we cannot put one foot forward and keep the other in the rut, for in such cases we will have made no progress. That is what many people are doing in their effort towards moving into the newness of cosmic life - trying to go forward into the vastness of Cause while clinging to the limited sense conceptions of traditional belief and opinions.

100 今日の落ち着きのない活動と無数の新しい発見の時代、宇宙人とのコンタクトや導きを得たと主張する無数の信条のたわごとや様々な状況下におけるはっきりしない渦の中にあっては、この知識の小片をじっくり考え、行動は一歩から始まるというその考えの中で自分を安定化することは良いことです。ゴールが如何に遠いか、あるいは近いかに係らず、一時に一歩しか進むことはできません。前進であれ後退であれ、その方向に人を運ぶのは最初のひとまたぎです。これは私達の日常生活のあらゆる行為についても言えることで、統合された生命を生きる上で私達がスタートする上でも同じことです。古い習慣のわだちから私達を引き上げ、新たな王道で私達をスタートさせる為に一時にただ一歩が必要なだけですが、その一歩は完全でなければなりません。私達は一方の足を前に、他方をわだちの中に置いたままにしておくことは出来ません。そのような場合、私達は進歩することはありません。それは多くの人達が宇宙的生活の新鮮さの中に移行しようと努力している中で行っていることでもあるのです。因の広大さの中に行こうとする一方で、伝統的な信念や意見という限定された感覚の概念にしがみついているのです。

【解説】

今も昔も宇宙人とのコンタクトやいわゆる超能力の発現事例など、人々の関心を惹きつける話題は多いものです。しかし、その中でどれが真実であるかの見極めは難しいものです。本人に悪意が無くて何らかの勢力が仕組んだものもあるでしょうし、もちろん本物もあるのです。

そうした中、私達は自らの力で真実を見極め、有用な事例を学んで行く必要がある訳ですが、その判断基準はこれまで学んで来た事柄をベースにする必要があります。もちろん、真実は普遍のものですから、たとえ時間が経っても色あせることはありません。そういう意味では直ちに飛びつくことなく、冷静に観察する慎重さも必要でしょう。

最も望ましいのは、自らの力で自身の歩む道を開拓して行くことですが、それも一度に一歩ずつの前進で良いのです。しかし、本文で述べられているように、進歩の道に足を踏み出しても、もう片方の足が古い習慣のままにいるのでは、進歩の妨げになります。少しの歩みでも、翌日はその経験を踏まえて、改善させる決意が必要な訳です。習慣に流されてはならないこと、また、日々の少しずつの歩みが有効であると著者は説いています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落101 [2016-01-28]

101
It takes courage and faith to walk the road of progress; the doubter will remain forever in the same old rut. He may turn his vision towards greater knowledge but it will remain forever a dream of mystery unless he releases himself from the spot upon which he stands and takes one step forward.
101 進歩の道を歩むには勇気と信仰を必要とします。疑う者は永久にその同じ古いわだちの中に留まります。その者はより大いなる知識の方向に自分の視野を向けるかも知れませんが、自分が立つその場所から自身を解放し、一歩を前に踏み出さない限りは、永遠に夢の中に留まることでしょう。

【解説】
実際、進歩の道を行くには勇気と決心が必要です。私達は過去の実績や慣習に捉えられてとかく安易な流れに身を委ねがちです。その中にあって一日一日を新たな心境で迎えることは貴重と言わざるを得ません。
私達にはまだまだ学ぶべき世界が多くある中、各自独りで課題に取り組むという困難な状況にあることも確かです。アダムスキー氏亡き後、現在では適当な指導者も無くまた、表立った他惑星人の働きかけも無い中、独りアダムスキー氏の残した著作の中から真理を学び取ろうとする私達は貴重な存在と言えるかも知れません。
しかし、振り返れば仏陀やイエスの生誕も今考えれば大きなスペースプログラムの一環であった訳で、今期の一連のアダムスキー氏の活動もそれに並ぶイベントであったとすれば、その後、私達がどのように教えを開花させられるかが、後世の人達から問われることにもなるでしょう。
本文に戻れば、毎日の朝日のように私達に贈られる一日を如何に自分の前進に活用出来るかが重要であり、今日の現状維持は決して明日の自分に役立つことはないのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落102 [2016-01-29]

102
What would this country be today if the pioneers who set sail from lands across the sea had lost faith and courage and spent their days merely dreaming of the new land while their ships remained anchored in the ports of the old world?
102 もし大西洋を横断した大陸から帆を上げた先人達が、信仰と勇気を失い旧世界の港に錨を降ろしたまま、単に新大陸のことを夢見て彼らの時を過ごしていたとすれば、この国（訳注：米国）は今日どうなっていたことでしょう。

【解説】
新大陸（アメリカ）を目指そうと思った者は当時も数多かったのでしょう。しかし、未知の大陸にどれほどの長い航海が必要であるか、当時は分かる訳もなく、多くの者は航海を計画し、実行するまでには至らなかったものと思われます。
しかし、唯一その航海を計画し、実行した者のみが成果を残せたという訳です。即ち単に夢見ているだけでは、その実現は遅いものと思われます。むしろ、一歩ずつでも行動して様々な経験を得ながら、前進し続ける中で、事態は急展開し、想定よりはるかに早く物事は成就するように思う訳です。
この際の秘訣としては、ひとたび宇宙の流れを引き起こせれば、その後は自然と物事が流れて行くということです。大事なのは最初のステップとその後のある程度のまでのフォローです。後は物事が全体としてその目標に向かって動いて行くことになります。以上の事柄は、これまでの体験によるもので一般的ではないかも知れませんが、ある程度の努力によって物事全てが賛同し、助けてくれるように思うのです。最初の段階でその目的や意義など、具体的な内容を広く周囲に示し、その実現に向けた初動に力を注ぐことだと思っております。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落103 [2016-02-01]

103
The thousands of scientific discoveries that have benefited humankind would be still in the realms of Cause if some few men had not had the faith to bridge the gap between the known and the unknown and had the courage to take the first step upon the bridge. The many things that we enjoy today may be laid to the credit of the few who were courageous enough to move forward into new realms of perception.
103 人類に恩恵をもたらした何千もの科学の発見は、もしわずかの人達が既知と未知との隙間に橋を掛けようとする信仰を持たず、その橋の上に第一歩を乗せる勇気を持たなかったとしたら、それらは依然として因の領域にあるままになっていたことでしょう。私達が今日享受している多くの物事は、新しい知覚の領域に進み出ようとする勇気を持った極少数の人達の貢献に帰すると言えるでしょう。

【解説】
今日、私達はこれまでの昔の人々と比較し、快適な生活を送ることが出来る環境にあります。寒さや暑さから身を守り、電気やガス、水道そしてテレビやパソコン等、十分に活用出来る社会に暮らしています。しかしそれらを可能とした技術や発見は各々に先覚者（パイオニア）の努力がありました。私達はその功績の上に現在の生活を享受しています。

しかし、私達はこのような先人の恩恵を利用するだけの存在であってはなりません。一人一人が各々の才能を発展、開花させて、一人一人の功績を残すことが求められています。また、その分野は技術だけのものではありません。絵画その他の芸術や理学や哲学についても言える訳です。人々のより良い生活、人生に役立つことの全てが望まれています。

特に資金や材料が無くても、私達自身が最も良い研究材料であり、人の生き方、想念・印象の感受メカニズム等、多くの分野が実践可能です。「生命の科学」というタイトルから分かるように、それら全てが生命メカニズムの理解を目指しているのです。

お知らせ [2016-02-02]

いつもご覧いただき、ありがとうございます。
都合により、次回更新は２月４日（木）になる予定です。

竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落104 [2016-02-02]

104
It is true that the step into the wholeness of life carries us into the unexplored but what would our existence be if we remained always in the world of the obvious? Delving into any subject takes us from stagnation to knowledge and progress. There is no need for any one remaining in the state of disintegration or static mental condition when everyone is privileged to step into the newness of things and study in the school of everlasting advancement. There is no place to which a man is bound; he may go forward freely whether it be in a world of acts or in the universe of facts. There is no standing still; one must go either up or down, and the upward step is always the proper one to take. All of the storehouses of earthly knowledge in which various manuscripts are treasured contain not even a beginning of the wisdom that is held within the storehouse of the cosmos.
104 生命の全体性への歩みは私達を未踏に運び入れますが、もし私達が明らかな世界にいつも留まっていたら、私達の存在意義は何なのでしょう。どんな課題でもそれを掘り下げることは、私達を停滞から知識と進歩に連れ行きます。誰もが物事の新しさへの一歩が与えられ、永続する前進の学校での学習が与えられているというのに、誰一人、崩壊或いは静止した精神状態に留まっている必要はありません。人が縛りつけられている必要のある場所は存在せず、人は行動の世界や事実の宇宙の中であれ、自由に前進することが出来るのです。静止しているものは何一つありません。人は上昇するか下降するかのいずれかであり、上向きの一歩は常に取るべき適切なものです。様々な原稿が収蔵されている地球上の知識の宝庫の全てをもってしても、宇宙の宝庫の中に保存されている英知の冒頭さえも含んでいないのです。

【解説】
ひとたび原因の世界へ探求に踏み出せば、私達には様々な未知の世界が待っていることが分かります。実は一見して何でもないように思えるものでも、その内部には私達が知らない様々な要因が働き合っているという訳です。これら自然の営みを観察することも、またそれらの姿を絵画に写生することも楽しいことですし、その隠されたメカニズムを解明することも良い研究でしょう。

私達自身も含めて、全てのものが一瞬一瞬を生きており、大いなる因の発する想念・印象によって生かされているのです。それらに気付かず、日常目にする自然の中に生命の活動を感じない者は退化の道を歩んでいることになるのです。本文に述べられているように、私達には進化か退化の２つの選択肢しかありません。現状維持はあり得ないとしていることには、注意したいところです。

もちろん、私達は進化の道を進むべきで、せっかくのこれまでの歩みを無にしてはなりません。次々に目前に広がる新しい環境に対応しながら、前進・精進する生命の探求者に私達はなるべきなのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落105 [2016-02-04]

105
One step can set a man on the highway of eternal learning - the everlasting revelation of facts that exist only in the laboratory of Cause which knows no limitations or boundaries. But after you have taken the first step, learn the lesson of patience so you may not try to travel faster than your understanding will permit, One step will set you on the highway, but there are billions of steps ahead of you, for after you have reached a goal you still must travel through Eternity. Man can never attain the totality of all that is to be known, for if he could do that there would be an end to all things. Knowing that this is true, why be impatient to forge ahead? Each step we take is new; each step is the first one from the point that we have previously reached. It is well to have ideals; we are given glimpses now and then of the fullness of the life ahead of us so that we may be inspired to continue action, but if we keep our eyes totally upon the future we are sure to miss the beauty of the present and we may stumble into a briar patch and endure much suffering while trying to extricate ourselves.
105 一歩の踏み出しが人を永遠の学びという王道、制限も境も知らない因という実験室の中にのみ存在する事実の永続する現出の場に据えることが出来ます。しかし、貴方が第一歩を踏み出した後は、貴方は自分の理解が許すより速く旅しようとはしないよう、忍耐の教科を学ぶことです。踏み出す一歩は貴方を王道に乗せはしますが、貴方の前には何十億もの歩みがあるのです。何故なら、貴方が一つのゴールに到達した後も、貴方には永遠を通じてなお旅する必要があるからです。人間は知るべき全ての全体性を決して達成することは出来ません。何故なら、もしそれが出来たとすれば、あらゆるものに終わりがあることになるからです。このことが真実だと知ったからには、どうしてせっかちに先頭を切ろうと突進するのでしょうか。私達が毎回、踏み出す一歩は新しいものです。私達が時折、私達の将来にある満ち足りた生活を先立って見せてもらえることもありますが、もし私達が未来のみに全て着目していたとすれば、私達は間違いなく現在の美しさを見失い、イバラの小畑の中につまずいて、自分を救い出そうと、より手ひどい痛みに耐えることになるかも知れません。

【解説】
一度に何歩も進むことは難しいのです。毎朝登る駅の階段からも分かることですが、一度に斜面を登ろうと失敗しながらも努力するよりは、歩幅は小さくても一歩一歩着実に進んだ方がはるかに効率的だという訳です。
また、決して急ぐ必要はないことも著者は説いています。永遠の時間軸においては進化の道を歩んでいることが重要で、焦ったからといって目的地に到達出来る訳でもありません。私達は一歩ずつ学んだことを十分理解し、その成果を享受した上で、次なる一歩につなげて行けば良いことになります。
「生まれ変わり」については、アダムスキー氏も金星旅行記で確認している訳ですが、人の一生というものが今生のみでなく、未来にも継続されて行くことを考えれば、私達は現状で学べることを快く学び、それらを将来の生き方に生かして行くことが重要です。
進化の道とは毎日毎日の過ごし方や行動経験によって築かれて行くのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落106 [2016-02-05]

106
Remember that youth is the result of constantly renewed thoughts and life is activity - it is progress. The first step taken in any field of accomplishment is an initiation into a new endeavor and requires a certainty that is born of perception - an assurance of a vastness that lies beyond our present line of vision. Neither you or I know what each new step will bring but the journey must be made and only faith will reveal truth to us.
106 覚えておいて欲しいのは若さとは絶え間なく更新される想念の結果であり、生命とは活動であり、進歩であるということです。如何なる達成の分野でも踏み出された最初の一歩は新たな努力へのはじまりであり、私達の現在の視界の境界線の奥に横たわる広大さの知覚への確信を必要としています。貴方も私も新しいそれぞれの一歩が何をもたらすのか知るものではありませんが、その旅は為されなければならず、唯一、私達の信仰が私達に真理を明らかにすることでしょう。

【解説】
既に私達は「同乗記」等により、他惑星人がその年齢に比較して著しく若々しい肉体を維持していることを知っています。また、”新鮮さは若さの源である”ことも実感しているところです。これについては、本来の生命活動には衰えがなく、未来永劫継続する活動であることにも関連するものです。この生命の流れに抵抗することなく、それに従って行動すれば、生き生きとして人生を送ることが出来るというものでしょう。
本項では具体的にどのような姿勢でそれを実現するかを説いている訳です。つまりは常に新しい事柄に取り組むこと、未知なるもの、未経験の事柄に対してもそれを支える因に対する畏敬と信頼感を持って進めるということです。もちろん、その姿勢の中には緊張感はありません。その後、目前に現れる新しい世界への期待があるだけです。
このように、”因”への信頼があれば、何事も楽しみながら努力出来る訳で、その結果、次々に開ける新しい世界や新たな心境に共鳴することで、その人の全身の細胞は老いに結びつく停滞という要素が無くなるということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第09章 段落107 [2016-02-08]

107
Through our life on earth we have learned a great deal; how much more we shall learn as we venture into the realms of Cause. We shall know much more beauty than we have known in the world of effects. Our admittance to such knowledge is not difficult - just one step can prove itself the key that will unlock the chambers heretofore unknown to us. "There is nothing," we have been told, "that shall not be revealed." To the vision of the brave in heart no truth can be concealed. One single sacrifice - the releasement of old thought habits, may bring rewards far greater than you have ever dreamed

107 地球上における私達の生活を通じて、私達は多くを学んで来ました。私達が因の領域に足を踏み入れれば、更にどれほど多くを学ぶこととなるでしょう。私達の結果の世界で私達が知って来たよりも更に大きい美しさを知ることになるのです。このような知識に対する私達の入場の権利は難しいものではありません。ただ一歩の踏み込みが、私達にこれまで知られていなかった特別室を開けるカギであったことを明かします。「明かされないものはない」と私達は教えられて来ました。心の勇敢な者の視野には如何なる真理も隠されていることは出来ません。ただ一つの犠牲、古い思考習慣の解放は、貴方が夢見たこと以上に大きな報酬をもたらすことでしょう。

【解説】

本項では著者は私達にこれからは何を学ぶべきかについて語っています。即ち、私達が学んで行くべきは既存の物質世界だけではなく、”因”の世界とも言うべきものだという訳です。

そこに至る道については詳しくは語られていませんが、先ずはこれまでの私達の思考習慣、想念パターンを打破する勇気を持って未知の世界に一歩踏み出せとしています。

しかし、それらの領域に入る為には何らの装置も道具も必要ありません。「生命の科学」等でも述べられているように、私達自身に”因”に気付くことが出来る能力が備わっているからです。これらを仏教では「悟り」という表現でその心境を表現しているものと思われます。

その世界、如何なるものかは私自身未だ掴めてはおりませんが、正座瞑想した仏陀の像のように、因の世界では居ながらにして、三千世界を巡ることも出来るように思われます。映画「２００１年宇宙の旅」の後半、主人公がめまぐるしく輝く光の洪水の中を進む自分を発見しますが、それはこうした因の世界をイメージした映像表現であったものと思われます。重要な点はこれら因の世界は常に私達を暖かく迎え入れて呉れるということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落108 [2016-02-09]

10 FAITH
108 Faith is perhaps one of the most widely discussed topics in the world, yet it is the least understood. Teachers, ministers, psychologists, etc., all advise the development of faith and proclaim it as the basic quality of life but find difficulty in explaining this particular faculty.

第１０章 信仰
108 信仰はおそらく世の中で最も広く議論された話題であり、また最も理解されていない話題でもあります。教師や聖職者、心理学者その他の人々は皆、信仰の発達を推奨し、それが生命の基本的な質であると宣言していますが、この特別な機能について説明することは難しいとしています。

【解説】
以前にも述べたかと思います。"faith"という言葉の訳出については、これまで多くは「信念」と言葉を充てていました。もちろん特に異議を唱える者ではありませんが、日本語で「信念」と表現される中には、かたくなに自己の意見を押し通そうとする意志も含まれているように懸念した為、本項ではあえて「信仰」と訳出しています。「信頼」でも良いのかと思っています。
さて、この"faith"ですが、これから学習を進める私達にとって大変重要な要素であると本文は説いています。しかし、同時にこれまで私達の多くが"faith"の真の意味を理解出来ていないとも諭しているのです。
著者による"faith"についての解説は、次項以降も続きますが、私としては、"faith"（信仰）とは”因”への”信頼”であると考えています。目に見えない因の存在を知覚するには、印象・想念を知覚できなければなりません。印象・想念の源泉に信頼を置くことで、何らかのつながりやパイプのようなものが構築されるような気がします。つまり、信頼を置く者同士は想念・印象のやり取りがスムーズに行くということです。
そういう意味で、因とのパイプが太くなれば、画期的な印象を容易に感受でき、人生に生かせるという訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落109 [2016-02-10]

109 We know that all things in the manifested world are possessed of the positive and negative aspect. Faith is one of the positive aspects of man's character so what is the opposite of faith? Fear, of course! Therefore, to understand one we must understand the other; they are the two ends of one pole. Fear is the lower expression so let us begin with an analysis of it and work upward to faith.

109 私達は、創造されたこの世界の全ての物事は陽と陰の側面を有していることを知っています。信仰は人の性質の陽の側面の一つですが、それでは信仰の正反対は何でしょうか。もちろん、恐怖です。ですから、私達は一つを理解するには、もう一つも理解しなければなりません。それらは一本の棒の両端なのです。恐怖は低次な表現ですから、私達はその分析から始めて、信仰まで昇って行くことにしましょう。

【解説】

物事を「陰陽」として観る姿勢は、東洋的感性に似るものですが、アダムスキー哲学、更には他惑星文明においてもこれに似て現象をプラスとマイナスの性質として捉えることには注目したいところです。

この内、人間の「陽」の性質として、ここでは"faith"を取り上げ、その対極のものとして"fear"(恐怖）を挙げています。もちろんこれらの両極を善悪として裁く訳ではありませんが、”信念の度合”が両極をつなぐ軸を表現するものと言えます。

そのように考える時、私達は自分には十分な"faith"があるかを評価することも時に必要でしょう。キリスト教の歴史の中では多くの殉教者が出ましたが、信仰の故に殺される苛酷な状況の中で死をも恐れぬ心境は、本項で言う「恐れに対極する」"faith"の象徴とも言えるものです。

今日、幸いにも多くの私達は信仰の故に弾圧される世の中に生きるものではありませんが、むしろそれ故に私達にとって真の"faith"（信仰）とは何を指すのかについて、自ら明らかにする必要があるように思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落110 [2016-02-11]

110 If we analyze fear we will find it to be produced by a state of wondering in regard to our support and safety. In most every case fear is focalized about one's personal being or self-interest. Most men look upon the activities of life in the light of the effect that they will have upon themselves and those dear to them. They are living in the consciousness of the effective world, depending upon outer things for their support, and the recognition of the instability of outer effects produces a condition of uncertainty within their own minds. We may say then, that fear is the self-centered state and faith is living the impersonal state of being. Fear is based on effects; faith is based on Principle or Cause.

110 もし私達が恐怖を分析すれば、私達はそれが私達への支持と安全に関する不安状態によって作り出されることを発見するでしょう。ほとんどの場合、恐怖は自分の個人的な存在か自身の関心に焦点が当てられています。ほとんどの人達は、それらが自分自身や自分達にとって大切なものに与える影響という光で人生の活動を見ています。彼らは結果の世界の意識で生きており、自分達の支えを外側の物事に頼り、外側の結果物の不安定さの認識が心の中に不安定な状況を作り出しています。ですから私達は恐怖とは自己中心の状況であり、信仰とは非個人的な状態と言うことが出来ます。恐怖は結果に基づくものであり、信仰は法則、即ち因によっているのです。

【解説】

そもそも何故、恐怖が私達を支配して来たのか、本項は明瞭に述べているのではないでしょうか。答えは本文の最後に示されているように"faith"が宇宙を流れる原理・原則に根拠を置いているのに対し、恐怖は現実世界、結果の世界を拠り所としている点に集約されます。

これまで多くの仏教の教えからも、「行く川の流れは絶えずして·····」の表現にあるように、結果の世界は常に変化する過程にあり、「無常」と言わねばなりません。そのいわば不安定とも言えるものに拠り所を置くとすれば、心配事に尽きることはありません。

そうした中で、私達は長年、この不安定な結果の世界を生きて来た訳ですから、年を重ねるにつれて、ストレスや疲労で身体は酷使され老化も早まるものと思われます。それに対して、不変原理に常に視点を置いて人生を歩むことで確実に目的地に到達出来るというものでしょう。丁度、昔の航海では北極星を目印として自身の進む方向を定めることに似ています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落111 [2016-02-12]

111 How often quoted is the expression of the Christ, "If ye have faith as a grain of mustard seed ye shall say to this mountain, remove hence to yonder place, and it shall remove; and nothing shall be impossible to you." (Matthew 17:20) This statement has been used to show how little faith is necessary to bring forth manifestation. Notice, however, that the words are not "faith as great as a grain of mustard seed" but "faith as a grain of mustard seed." Not the quantity of faith but the quality of faith is called to note in this statement. Let us study the consciousness of the mustard seed. Is it ever overcome with fear in regard to its personal existence? What causes it to grow? Is it not the conscious impulse force within it which promotes it into action? The seed knows nothing but this urge within itself which causes it to expand, burst its shell and proceed upward into the light. It does not seek to resist this force of natural growth nor does it wonder if it is right to act in this manner. It acts unquestioningly according to the law or principle of its purpose. It does not look to effects - neither to man, to earth, water, or sun. It expands into a mature bush because the forces within it command it into such growth.

111 これまで何回、キリストのこの表現が引用されたことでしょう。「もし、汝に一粒のカラシ種ほどの信仰があれば、この山に対し、ここからあそこの場所に移れと言えば、その山は移るであろう。貴方に不可能だというものはない。」（マタイ１７：２０）。この表現は創造作用をもたらすのに、如何に小さな信仰が必要なだけであるかを示すため、用いられて来ました。しかし、それらの言葉は「カラシ種一粒の大きさの信仰」ではなく、「一粒のカラシ種ほどの信仰」としているのです。信仰の量ではなく信仰の質がこの声明の中で求められていることに注意して欲しいのです。カラシの種の意識を研究して見ましょう。それはその個人的な存在に関して恐怖に打ち負かされているということはないのです。何がそれを成長させるのでしょうか。それを行動に突き動かすのはその種の中の意識的衝動ではないでしょうか。種は自分の中にあるこの衝動しか知っておらず、それが膨張し、殻を弾けさせ、光に向かって上方に進み出します。それは成長のこの力に抵抗しようとはせず、またこのように行動することが正しいかどうか迷うことはありません。それは法則あるいはその目的の為の原理に沿って、疑問を持つことなく行動します。それは人間、地面、水や太陽に対する影響を見てはいません。内部の諸々の力がそのような成長を命じる故に、成長した茂みになるのです。

【解説】

イエスの「一粒のカラシ種の信仰」の言葉を通じて、"faith"（信仰）の持つ力とカラシ種が持つ"faith"（信仰）について、本項は明瞭に示しています。

アダムスキー氏は多くの著作の中でイエスの言葉を引用し、これまでに無い解説を加える事例が多いのですが、それにはかつてイエスの弟子の一人であった彼の実体験、即ちイエスがその言葉を発した場面に居た体験があるように、最近、私は思うようになりました。

さて、植物の種という結果を見れば、特にカラシの種等は大変小さく、その中身に何が秘められているのかは、私達の目では捉え切れません。同様に人間の卵子その他も同様にミクロの大きさではありますが、実はその内部に持つ遺伝情報は膨大なものがあり、適切な環境が維持されれば、各々立派な創造物になることは、皆様お分かりの事実です。

本項で、著者が解説するイエスのカラシ種の話は、種の中にある"faith"（信仰）が如何に力のあるものかを表現したものと思われます。ひとたび環境が整えば、何ら躊躇することなく、殻を破って芽を出し、成長する種の発芽には力強さがあります。今日、スプラウト野菜が人気なのは、その「生命力の発現」を私達にも取り込みたいということにあります。

日常の私達がどれほどその生命力に近づけるかは不明ですが、植物の種一粒から私達は多くの事柄を学ぶことが出来ます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落112 [2016-02-15]

112 At this point you will, of course, say, "But the seed could not grow without the support of the earth, air, water and sun." This is true, but as the seed obeys the command of the Cosmic or Cause intelligence all necessary elements unite to bring it forth. The seed is not commanded to push through the ground in the cold winter months nor does it seek to grow without that urge from within. It waits patiently till it feels that the time for growth has come. What would happen if the seed questioned the urge to grow as man questions new ideas of a broader conception of life that try to impress themselves upon his mind? As the seed by not resisting the urge grows into a beautiful bush, so man, likewise, may be assured that if an idea or desire arises that is impersonal, it is there for a purpose and if acted upon will produce beneficial results. A desire can be kept from manifesting only through the effort of the personal will in resisting action. For the thought or desire is the actual Cause which fathers the outward conditions.

112 この時点で貴方はもちろん、こう言うでしょう。「しかし、種は土や空気、水や太陽の支援無くしては成長出来ない。」このことは真実ですが、種は宇宙の、或いは因の英知の指令に従うため、全ての必要な要素が種の発芽を実現するため、結束するのです。種は寒い冬の月日に地面を貫いて突き進むよう命ぜられることはありませんし、そのような内部からの衝動無くしては成長しようとはしません。それは成長の為の時期が来たと感じるまで忍耐強く待っています。もし種が人間が自分の心に印象付けようとしているより広い生命の新しい概念を疑問視するように、成長への衝動に対して疑問に思ったら、どうなることでしょう。種がその衝動に抵抗することなく、美しい茂みに成長するように、人間も、もし非個人的なアイデアや願望が起こった場合には、それ（訳注：アイデアや願望）は一つの目的の為にそこにあるのであり、もしそれに応じて行動すれば恩恵のある結果を作り出すことでしょう。願望は抵抗的行動をとる個人的意志の影響によってのみ現象化から遠ざけられるのです。何故なら、想念や願望は外側に向けての状況を生み出す実際の因であるからです。

【解説】

本文を読んで気付くことは、植物の種も私自身も基本は同じ存在だということではないでしょうか。じっと内部に湧き起る因からの印象を待って、その印象が示唆する絶好の機会を逃さず、自らの使命を発現する為、結果の良否に頓着することなく、行動するということです。果たして従来の小さな自分の殻を破って芽の出た後の結果については不確かなことは否めませんが、それは次のステップの話であり、種にとっての当面の問題ではないのです。

植物の種の中には何千年も生き続けるものが居ます。古代ハス（大賀ハス）として知られるハスの種は２０００年以上も前のハスが今日花を咲かせた事例です。２０００年もの時間が経過しても種は忍耐を続け、希望を断念することはなく、遂には条件が整い芽を出して多くの人々に祝福されたという訳です。

この講座を続けていて分かることは、この因から来る印象というものは、実に精緻なもので、余程、心を鎮めて置かないと気付かずやり過ごしてしまうことです。それ程、私達の感性が鈍いということでしょう。私達も印象を待つ以上は心を穏やかにして印象を待つ心境も必要です。止水明鏡と表現されているように、心の中をかすかな波が通過しても明らかになる状況を造り上げる必要があるようです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落113 [2016-02-16]

113 The development of faith in man is the growth out of the personality into the impersonal expansion of awareness; from effect to the cause back of all effects.

113 人における信仰の発達は、個としての自分から非個性的な知覚の表現への成長、結果から全ての結果物の背後の因への成長のことなのです。

【解説】

これまでご覧になっていてお分かりのように、”因”を知覚することは、印象（想念）という大変精緻な波動が心の中を通過することに気付くことでもあるのです。それには自らの内部を常に整え、上辺の空騒ぎを無くして、いつでもインスピレーション（瞬時的な想念波動の衝突）や表現すべき印象が通貨するのに気付かなければなりません。

このことは同時に”因への信頼”、即ち本文で言う"faith"（信仰）がその基礎となっています。つまりは先ず、発信元を信頼した上で指導を受けることになる訳です。実はこうする中で、種自体を長年守って来た殻のような私達各自の自我というものは次第に薄くなり、やがては因の世界までも拡大、生長するということでしょう。

硬い殻で守られて来た種が芽を出し本来望まれる大木にまで生長する上で、因の指導に従って自らの殻を破っての発芽、いわば殻を包む因の世界に自身を拡大することが飛躍の一歩になる訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落114 [2016-02-17]

114 There is no such thing as absolute unbelief; there is only a growth from the lesser faith to the greater faith. As the teacher Zoroaster explained, "Evil is but unripened good." Likewise, fear is but undeveloped faith. Man has come from Cause Intelligence to the world of effects; his mortal sense mind lost the memory of Cosmic Cause and he is now in the process of reestablishing himself; he is on his way back to oneness with the Principle where selfishness with all of its innumerable effects is dissolved. It is through the recognition and realization of Cause that faith is stabilized.

114 絶対的な不信心というようなものは存在しません。より少ない信仰から、より大きな信仰への成長があるだけです。教師ゾロアスターが「悪とは未成熟の善である」と言ったようにです。同様に恐怖は未発達の信仰なのです。人は因なる英知から結果の世界に生まれ来たり、その死すべき感覚心は宇宙的因の記憶を失い、今や自分自身を再構築する過程にあります。人は利己心がその無数の結果物と溶け合う一大原理と一つに戻れる道の途中に居ます。信仰の安定化は因の認識と実感を通じてなされるのです。

【解説】

本項は私達全てが長い進化の道を歩んでいる者であることを説いています。人間一人一人はその理解の度合いは異なりますし、本講座でいう"faith"（信仰）の状況も異なる訳ですが、それは一人一人の道程の違い、到達点の違いに過ぎません。基本的には私達は進化の道を登り続けるべきで、急ぐ必要はないとも言えるでしょう。

実は本文を読んで分かることは、この内容は決して人の一生で終わる話ではないということです。そもそも因と一体になる認識に至ることは、生涯を掛けて容易に成し遂げられるようには思われないのです。それほどに私達の訓練対象である自我は強力な殻となって私達を支配しているのです。

その意味でも著者アダムスキー氏は本文の表現を通じて、暗に私達が地球での今生涯を終えた後においても、再び何処かの星に転生し、継続した精進の道を歩むことになっていることを示唆しているように思われるのです。私にはこれら転生問題については、当時の米国等、キリスト教国では認められていない教義とされていたことも関連しているように思われます。本書も含め、アダムスキー哲学は地上の宗教の枠を超えて、自由な立場から宇宙的真理を説いていることに改めて注目すべきでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落115 [2016-02-18]

115 Why do we have perfect confidence that the sun will rise each day? Have you ever known a man rising each morning, hours before dawn, to sit wringing his hands in tense anxiety over the prospect of eternal darkness? No, we have no such fear, and the primal reason that we do not doubt in this case is because the action of the suns and planets is greater than our mortal mind can conceive and therefore we leave such actions entirely in the hands of the All-Knowing Principle which understands and perpetrates all action. In this case we realize our personal insufficiency and so do not concern ourselves by exerting mortal effort in regard to it. We simply allow it to take place.

115 何故、私達は毎日太陽が昇って来ると完璧に確信して来ているのでしょうか。貴方はこれまで毎朝起きては夜明け前に永久に闇が続くことを恐れる余り、両手を握り締めて座すような人を知っていますか。いいえ、私達にそのような恐れはありません。また、このような場合に私達が疑いを持たない主な理由は、諸太陽や諸惑星の行動は私達の死すべき心が計り知りえるより偉大であり、それ故、私達はこれらの行動を全ての活動を理解し、それを為す全知の法則の手に完全に委ねているからです。この場合、私達は個人的な力量不足を自覚し、その為、それに対して死すべき者の努力を行使して自分自身を係らせようとはしないのです。私達は素直に起こるに任せているのです。

【解説】

前項（１１４）でゾロアスターの言葉で"faith"(信仰）の度合いが表現されていた訳ですが、実際、私達自身、どのような者でも持っている"faith"の例を本項は示しています。毎日昇る太陽への信頼です。

毎朝夜明け前、鳥達はじっと東の水平線に向かって日が昇るのを待っていますが、それは全ての生命活動の源として太陽を来迎する姿勢、一日の始まりを待つ姿勢かと思われます。また、決して太陽の出現有無を心配する姿ではない筈です。

一方、私達の日常はこれら太陽の動き等、あまり関心を持つことなく、当たり前の自然現象として感謝の気持ちすらありません。それはそれで大いに問題とすべきでしょう。本文では毎朝の日昇に対するこれら私達の姿勢について、もちろん良しとしている訳ではなく、これら太陽や惑星の運行が私達の心など影響されない強大な宇宙の活動であることを説いています。また私達自身もそのような事項に対して自分ではどうすることも出来ない為、全てを宇宙に委ねているとしています。

これら私達が宇宙に委ねると表現する訳ですが、その背景には単に無頓着な状況と私達生命を支えて呉れる日常的な惑星運行に感謝する中で、”因”に自らも含め委ねることの間には、大きなひらきがあることに気付く必要があると言わなければなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落116 [2016-02-19]

116 Do we worry that the rivers will start flowing up hill, or drop a weight and hold our breath that it might rise again, or throw a ball into the air and doubt that it will return to earth? No, for again we know the principle governing such action.
116 私達は川が丘を遡って流れるかも知れないとかを心配し、或いは重りを落として再び昇って来るかも知れない、或いは空中にボールを投げて再び地面に戻って来ないかと息を凝らすことがあるでしょうか。いいえ、ありません。何故なら、この場合もやはり私達はこのような行動を支配している原理を知っているからです。

【解説】
本項では恐怖の原因は法則への理解の不足であると説いています。
重力はあらゆるものに作用し、その法則によって惑星全体が成り立っている訳で、その作用は到底人間の及ぶところではありません。本項で示される川の流下や重りの自由落下等、私達の目にするものは、この重力法則の現れであるのです。
同様にもし、私達が自然界に流れる真の生命波動のことや、想念・印象の持つ強力な創造作用の法則を知れば、それら法則を理解することで、未来に対する不安も解消するように思います。現在、心に抱く想念・印象がそのまま自分の未来を形作ることを理解すれば、重要なのは現在の自らの姿勢、心境であることが分かり、未来の状況を心配する必要はなくなるからです。
極端に言えば、恐怖や不安を抱くのは地（球）上の人間だけだということでしょう。他の創造物はたとえどのような未来が待っているとしても、それを快く受け入れる覚悟があり、現実を享受し、生命を謳歌しているように思うからです。因への信頼の程度の差がそのことに大きく現れているという訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落117 [2016-02-22]

117 Our lack of fear is not due to our confidence in matter but our inherent faith in the principle supporting and controlling matter. I say inherent because Cosmic Cause which produces faith is within every one. It is closer than hands and feet and whether or not we as mortals openly admit its existence we do realize it or we would not be conscious, living beings.

117 私達に恐怖が無いのは私達が物事に確信があるからではなく、物事を支配し、統制している原理に対する生まれながらに存在する信仰がある為です。私は信仰を作り出す宇宙的因は誰もの中にある為、生まれながらに存在すると言っているのです。それは貴方の手や足よりも近くにあり、死すべき私達が外に向かってその存在を認めるかどうかによりません。何故なら、そうでなければ私達は意識があり、生き物にはならないからです。

【解説】

私達が日常、何ら不安を持たず安心しているのは、個々の物質に信頼を置いているからではなく、宇宙を貫く法則に信頼を置いているからだと著者は説いています。即ち、個別の物体、結果物に信頼を寄せていては、一つ一つ毎回のチェック確認が必要となる訳で、私達はそのようなことは行いません。前項（１１６）の例で言えば、重力の法則を理解し、その普遍性に信頼を置いているから安心しているのです。

更に著者はその法則、即ち宇宙的因は、実は私達が生まれながらに継承していると説いています。私達自身の内側、手や足よりも、もっと私自身の近くに持っているのだということです。”私”だとしている自分の心を直接包み込むようなイメージかと思われます。それほどに私達個々人は恵まれた存在だということです。私達が学ぶべき事柄は全て、自分に用意され、私達がその気になればいつでも取り出し学べる環境にあるという訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第10章 段落118 [2016-02-23]

118 It behooves us then to study Principle instead of focusing all of our attention upon the effects of Principle (source of origin). When we direct our attention towards that inner guiding force we become fully awake and feel the inter-relationship of all life. There has never been a time when one released the personal ego to this inner force that he has not seen some immediate result of action; so as one becomes more fully aware of his oneness with the All-Intelligence his faith is increased and consequently his fear is decreased. Faith is the result of one's unity with the Whole, and such unity cannot take place until every thought of selfishness with its whole category of resultant fears steps aside and leaves the highway of understanding free of barriers. So we may see that absolute faith is not of easy attainment - it must come through a gradual growth just as all things change by degrees. Faith is actually an expansion of conscious awareness to include more knowledge and certainty of action.

118 ですから私達がその注意をすべて法則（源泉）の結果物に集める代わりに、法則を学ぶべきということは当然なのです。私達がその内なる導きの力に向かって注意を向ける時、私達は完全に覚醒し、全生命の相互関係を感じ取るようなります。人が個人的エゴをこの内なる力に解き放つ時、行動の直ちに起こる結果を見ないままで終わることはありません。ですから、人が自身が全英知と一体になっていることに、より完全に気付くようになるにつれて、その者の信仰は増し、その結果、その者の恐怖は低減します。信仰とはその者が全体と一体になった結果であり、このような一体化は全ての結果に及ぶ利己的なあらゆる想念が脇にどいて、理解の王道から障害が無くなるまでは有りえません。ですから、私達は絶対的な信仰というものは容易には達成できるものではないことは分かると思います。それは、丁度、全ての物事が少しずつ変化するのと同じように、なだらかな成長を通じて実現する筈です。信仰とは実際には、行動に対するより大いなる知識と確かさを含む意識的知覚力の拡張であるのです。

【解説】

私達の日常の生活の中で、そのような探究の姿勢が大事なのかを第１０章の最後に著者は説いています。

要点は即ち、個別の物質、更には（私の意見としては）個別の事象に囚われるのでははく、もっとその奥に流れる法則を学ぶことに徹することだと思われます。

私達は良きにつけ悪きにつけて様々な体験を得て生きています。その中でとかく私達はその得た結果に固執するあまり、その体験で得た法則性についての考察、研究が不足しがちです。その結果、再び同様の失敗を起こすことも多いのです。

重要なのは、その結果がどのような法則の下で起こったかを学ぶことだと考えます。当然、私達は良い結果を求める訳ですから、何故今回はうまく行ったのか、何故前回はうまく行かなかったのかを考察することが重要です。その中で、当時の自分の心境、心構えが事態の進展に大きく影響していたことも分かりますし、更に進んで行動の際に自分がインスピレーションにどのように対処していたかもポイントになります。

ひとたび良い結果が得られた時に、当時自分が”因”に対して素直であり、想念・印象に対して受容的であったことが分かれば、今後はその心境を維持すればよく、支えて呉れる因への信頼（"faith"）も高まり、恐れというものが次第に消失して行くものと考えます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第11章 段落119 [2016-02-24]

11 TO BE BORN AGAIN
119 "Verily, verily, I say unto you, except a man be born again he cannot see the kingdom of God." (John 3:3)
第１１章 再び生まれるために
119 「まことに、まことに私は貴方に言って置きます。人は再び生まれなければ、神の王国を見ることは出来ません」（ヨハネ３：３）

【解説】
よく気付くことは、生まれたばかりの赤子や幼児は皆、何の畏れもなく、また何事にも楽しく微笑んでいるということです。彼らには全てが物珍しく面白い存在なのです。その次にいつも思うのは、もし生まれ変わりがあり、前世を病や事故等で苦しんで亡くなった方であったら、再び新しい肉体を得て生まれ変わったとしたら、全てが楽しい気分であろうということです。
本項の場合、イエスの諭すように神の国に生まれる者は皆、至福の念に満たされることは間違いありませんが、イエスは死んだ後のことを言及しているのではないことは、後続の本文の記述から分かります。それではイエスは何故、”生まれ変わり”が必須条件であると説いたのかを考える必要があります。
死すべきものは何かという場合、それは各自の自我（エゴ）の部分を指すものと思われます。自我を融解、消失させると相対的にその奥にある真の存在が重きをなすように現れて来るように思われます。従来の四感覚の支配から抜け出た段階で現れる宇宙的な存在です。これは前章の信仰と恐怖の間にある様々な度合いと同じです。イエスはその信仰（"faith"）がある段階に到達した時、生まれ変わりに相当する大きな転機が現れると説いたものと思われます。私達も毎日の研鑽を積み重ねる中で、必ずやその転換点を迎えるものと思います。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第11章 段落120 [2016-02-25]

120 Thus spoke the Christ, to whom Life had revealed her mysteries. This statement has been made the very foundation of religion, but Nicodemus of old, who asked of the Master, "How shall this be? Can a man enter the second time into his mother's womb?"(John 3:4) is not alone in his ignorance of the second birth.

120 生命がその持つ神秘を明かした相手であるキリストがそのように話されたのです。この声明は宗教の基礎とされていますが、年老いたニコデモは、導師に「どのようにすれば、これが為されるのですか。人は自分の母親の子宮に二度目に入ることが出来るのですか（ヨハネ３：４）」と尋ねましたが、それは彼一人がこの第二の誕生について無知であった訳ではありません。

【解説】

イエスが語った”第二の誕生”の内容は、当時のニコデモのみならず、今日の私達でもその理解度に大差はありません。イエスの言葉は実に比喩的であった訳ですが、その理由についても私達は考える必要があります。つまりは例え理路整然と説いたとしても、当時の人々（或いは今日の私達も同様かも知れませんが）に理解出来る訳もなく、単なる言葉の上の知識に留まり、自ら理解することはなかったと思われます。大切なことは各自が自らの体験・実感として理解することであり、直接的な解説を避けていたように思います。

このことはイエスのように他惑星から地球の救済に派遣された聖人にとって、派遣先の惑星の支援やアドバイスはするものの、強制は出来ない事情によるのではないかと思っています。その惑星の発展は何よりその惑星住人の手によって為されるべきであり、良い方向に進むよう見守ることが基本的な姿勢であるからです。

イエスの説いた”第二の誕生”をどのように各自が探究し、自分のものとするかが問われるのですが、実は本章では当時、イエスに随伴していたヨハネ（アダムスキー氏）が改めてイエスの真意について説いているように思われるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第11章 段落121 [2016-02-26]

121 The Master said, "No man ascendeth up to heaven except he that came down from heaven, even the Son of Man which is in heaven."(John 3:13) Meaning that the second birth is the conscious return into the original Cause state out of which all things proceed into the world of form. Man has descended from Cosmic Cause and he has the privilege to return again to that impersonal state of conscious awareness of Cosmic Cause. When he was born into the world of form he became lost in the appearances of matter and no longer understood the vast Cosmos. He has given himself over to the dictation of the senses and his mind is slow to accept the guidance of the soul. His understanding of the universe has become limited to the effective world - his whole attention is given to the analysis of form and he has been blinded to the Cause back of form. So before he can come into his own original self, he will have to be born again - born into the unlimited perception of the All Intelligence. As the first birth has given man an understanding of the form world like himself the second birth will expand his awareness of the unmanifested Cause world. Man's duty now is to burst the bonds of ignorance - to emerge from the matrix of earth and perceive the vastness of Cosmic Cause.

121 その導師は言いました。「天から降りて来た者以外に天に昇る者はいないのだ。天にいる人の息子でさえも。」（ヨハネ３：１３） それは第二の誕生は全てのものが形ある世界に向けて進行して来た源の原初の因の状態に意識的に帰って行くことを意味しています。人は宇宙的な因から降り来たったものであり、人は宇宙的因の非個人的な意識的気付きの状態に再び帰る特権を持っています。人が形ある世界の中に生まれた時、人は物質の外観の中で迷子になり、広大な宇宙をもはや理解しなくなってしまいました。人は自分をその諸感覚の指図に差し出してしまい、人の心は魂の導きをなかなか受け入れようとはしません。人の宇宙への理解は結果の世界に限定されるようになり、その関心の全ては形あるものの分析に注がれ、形あるものの背後にある因に対しては盲目になっています。ですから人が自分自身の原初の自分になるには、再び生まれる、即ち全英知の無限の知覚の中に生まれる必要があるのです。最初の誕生は人に自分自身のような形あるものの世界についての理解を授けたように、第二の誕生は未だ現象化していない因の世界についての気付きを拡げることでしょう。今日の人の義務は無知の束縛を破裂させること、地球の地殻から抜け出て、宇宙的因の広大さを知覚することです。

【解説】

私達自身、即ち肉体に宿る魂とも言うべき本質的なもの自体は肉体とは別に存在することを、本項は示唆しているように思われます。つまり、魂は元来、”因”に属するものであり、その魂の部分は私達が生まれ落ちて物質世界の中で埋没し、自分の正体を見失っていると説いているのです。

また、私達が日々探究しなければならないのは「物質」ではないこともポイントの一つでしょう。自らが本来所属している”因”について学ぶことの方が遥かに重要で、その過程を通じて本章で言う”第二の誕生”を成し遂げることが出来るという訳です。

元来は”因”の世界に居た者が、物質世界に生まれ出て、本来は創造物溢れる素晴らしい環境を享受出来る筈でしたが、自らの感覚器官や物質世界に支配されて、自分の本質を見失ってしまったということです。これはアダムとイブの物語を連想させるものでもあります。

この一連の流れはもちろん、宇宙的学習の課程とも言える訳で、第二の誕生を通じて物質世界と”因”の世界とを自ら融合させることが、私達共通の課題となっている訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第11章 段落122 [2016-02-29]

122 The second birth does not necessitate the death of any form of consciousness nor the death of the body; it necessitates only the uniting of the two phases of consciousness into the awareness of oneness. The second birth produces unlimited awareness, uniting heaven and earth. The sense consciousness and the all inclusive consciousness become equally balanced and man begins to learn about the Cosmos.

122 第二の誕生は意識の如何なる形式の死も、肉体の死も必要とするものではありません。それは唯一、意識の２つの側面を一体性の自覚の中に統合することだけを必要とします。第二の誕生は無限の気付きを作り出し、天と地とを一つに結び付けます。感覚の意識と全てを包含する意識は互いに等しくバランスし、人は宇宙を学び始めるのです。

【解説】

これまで私達の実体、即ちこの肉体を除いてもなお残る魂のような存在について、段落（０２６）や（０２７）等で説かれた”意識”であることを改めて確認しています。この第二の誕生とは自らの中の実体であるこの意識の２つの側面を融合させることだと説いているのです。

実は”誕生”と言うからには”死”が前提にあるように思われますが、本文では如何なる”死”も不要だと説いています。つまりよく”自我を捨てれば”と言われますが、その自我を殺す必要はなく、因と統合されることで、一大変化が起こるとしている訳です。

私達の肉体を操作することを主題とする自我や感覚に起因する意識の部分と、因の世界に繋がる静寂、広大な宇宙意識とを融合することを目指せと説いているのです。そうする中で私達には新しい展開が拓かれ、本来の進化の道を歩む道筋が示されることになります。映画「２００１年宇宙の旅」の最後に、主人公の魂が胎児のイメージで地球に帰って来る場面がありますが、それはこの第二の誕生をイメージしているように思うのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第11章 段落123 [2016-03-01]

123 Not until the teachers understand this can they save anyone or themselves. Many scientists are closer to the second birth than is any so-called spiritual student. One of our greatest scientists made the remark, "When I am fatigued with mental effort and have ceased to ponder over a problem I find that is the time when the truth of the question is most clearly revealed to me." This is a glimpse of the second birth-when the mortal consciousness is released into the hands of the vast consciousness the veil of limitation is rent asunder and truth is vividly perceived.
123 教師達はこのことを理解するまでは、誰もまた自分自身も救うことは出来ません。多くの科学者達はいわゆる霊的学者より、この第二の誕生に近づいています。今日最も偉大な科学者の一人はこのような所見を述べました。「私が精神的努力で疲れ切り、問題について考え込むのを止めた時が、その問題の真理が最も明瞭に現れる時になることは分かっています」。これは死すべき肉体の意識が広大な意識の御手の中に解放される結果、制限のベールが引き離され、真理が鮮やかに知覚される第二の誕生を瞬間的に見ることになるのです。

【解説】
科学の発見というものが、どのようにして生まれるかを端的に本項は伝えています。
先ず第一に科学者はその問題について様々な角度から自我の努力として考え続けますが、既存の延長では問題は解決出来ず、遂には疲れ果てて何も考えられなくなります。そこにインスピレーションが来て、解決法を発見するという事例です。
実は大抵の場合、このような事の成り行きになることが多いように思われます。つまり、最初から何らの努力もぜずに居れば、インスピレーションも来ないように思いますが、先ずはその解決策を求める気持ちがあって、その回答については”因”を信頼して印象がやって来るのを待つ姿勢が重要です。
”他力本願”とも言えるこの姿勢の中には実は”因”への誠実な信頼があり、私達はそもそも”因”によって生かされているという感謝の気持ちが重要なところです。また、結果を当てにせずあらゆるものを受容する心境、オープンな気持ちも想念・印象の感受には重要なポイントです。
こうした印象とのやりとりが自在に出来ることが第二の誕生に近づいているしるしと思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第11章 段落124 [2016-03-02]

124 It is man's duty to be a happy child in his Father's house, and to do this he will have to be aware of the house. He must be aware that he is now in the heaven that he is seeking to enter and that within his form of self is the ever present all-inclusive intelligence.

124 自らの父の家の中で幸せな子供になることは人の義務であり、それを為すためには、人はその家の存在に気付かねばなりません。人は自分が現在、入りたいと求めてきた天国の中に居ること、また自身の形あるものの内側に全てを包含する永続する英知があることを気付かねばなりません。

【解説】

必要なもの、生きる力となるあらゆる知識が必要に応じて与えられる環境を”天国”と言わずして何と呼ぶべきかということでしょう。私達自身の内側、手や足よりも近くにその湧き出す源が各自に備わっていると本項は説いています。

自然界を見て分かることは野の草の葉１枚、或いは花びらの一片にも驚く程の美しさがある訳で、創造物の中で本来、最高位を占めるべき人間にはそれら以上に美しく幸せな生き方が用意されているのです。またそのような状態に戻ることが創造物としての義務である訳です。

すべてが自分の中にあるとなれば、敢えて外に求める必要はなく、状況を快く受け入れ、心の中に湧き起る印象を大事にする生活が始まります。結局、これまで”努力”して来たことの多くは知識の無い自我がガムシャラに結果を追い求めて疲弊するだけの毎日でありましたし、少しでも思い通りにならないことに落胆することも多かったように思います。

それに引き替え本項で説かれている内容は、決して未来を悲観することなく、私達自身の可能性と明るい未来が待っていることを私達に説いています。”愛燦々”の歌詞に「過去たちは優しく睫毛に憩う」、「未来達は人待ち顔して微笑む」とあります。つまり涙が睫毛につくことがあっても、愛が燦々と自分に降りかかってくる環境の中では、人生は嬉しいものだと歌っており、本項のイメージを多少汲み取っているのかと思う次第です。

ご連絡 [2016-03-03]

いつもご覧いただき、ありがとうございます。
都合により、明日の更新はお休みします。

２０１６年３月３日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第11章 段落125 [2016-03-03]

125 Here lies the answer to the question as to the constant urge in the heart of every human to know more about the composition of forms as well as the cause and purpose of action, for it is the Cause Parent impressing the effective child to know more about the vast possibilities so that he may enjoy all that the Father has to give.

125 ここにあらゆる人間の心の中に行動の理由と目的と共に、形あるものの構成について更に知りたいとする絶えざる衝動に対する答えがあります。何故なら、結果である子供が父が与えるべき全てを楽しめるよう、広大な可能性について知りたいとする印象を子供に与えているのは因の親であるからです。

【解説】

やはり結論的には、素直になることが基本であるように思います。つまりは、内なる因から絶えず助言の声があり、それに気付き受け入れる為には、何事においても受容的な姿勢が必要であるからです。とかく歳を重ねると人間が固まってしまい、頑迷さが顕著になりますが、本項を読んで分かる通り、柔軟性を無くすということは、老化の典型であり、進化の終わりということになります。

自然界では、目に見えない”因”からの印象が生き生きと湧き起っており、それに従う限りは生命の躍動感は衰えることはありません。次々に新しい分野が拓かれ、本来の創造の世界が明かされるからです。

私達は一瞬たりともその基本的な流れを阻害することなく、流れ来る印象を大切にして毎日を送る中で、遂にはイエスの言う「第二の誕生」に至るものと思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落126 [2016-03-07]

12 EMOTIONAL BALANCE
126 As we all know there is a great unrest all over the world. The conditions existing in the national, home, and personal life all display quite clearly the loss of equilibrium which now exists. Each individual feels the need for security and the people of the earth are demanding something that will bring about more stable conditions. The desire for equality and balance and some feeling of assurance have caused some people to return to the churches and many to follow the teachers who profess to know all of the answers concerning the new dispensation. Unfortunately there are extremely few individuals who are equipped with this type of knowledge.

第１２章 感情のバランス

126 私達全てが知っているように、世界中を大きな不安が覆っています。国家や家庭そして各人の生活の状況は皆、明らかに今や均衡を全く失っている事態を示しており、実際そうなっています。各自は安心の必要性を感じており、地球の人々はより安定な状況をもたらすものを求めています。公平さやバランス、そして確かさの幾分かの感じへの願望は人々を教会に立ち戻し、また多くの者をその新たな摂理に関する全ての答えを知っていると称する教師達に従わせています。しかし、残念なことにこの種の知識を備えている者は極めて少ないのです。

【解説】

この書が執筆された1961年当時、既に地球社会は戦後再びの変動時期を迎えます。最近もNHKの「映像の世紀」という番組でその後のベトナム戦争やその反戦運動等の多くの社会運動、更には旧来の社会主義への反旗等々、その状況を見ることが出来ました。

著者は当時の一連の不安材料に対して、それに助言すべき教師、聖職者が十分な知識を持っていないことを指摘しています。結局は暴力に走ることになってしまう現状の奥には本章で学ぶ私達自身の「感情のバランス」問題があるように思われます。

怒りや憎しみが社会環境を変革するとは、本講座では決して説くものではありません。怒りは再び相手の怒りを生み出し、問題をエスカレートさせるだけです。

本章で私達は自らの行動の原動力とも言える「感情」について常にバランスを保つことを学ぶことになります。もちろんその成果は日々の各自の生活の中に次第に表れてくるものと思われます。調和に至る道程は真っ先に取り組むべき課題です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落127 [2016-03-08]

127 We find that students who have studied under one teacher or another are very confused and living in a state of dissatisfaction concerning the world they must call home. They are looking to the day when they will be privileged to become the inhabitant of another planet. They can see no beauty in this world, being conscious only of the pain and misery which exists.

127 私達はある一、二の教師の下に学んできた生徒達が大変混乱していて、自分達が我が家と呼ばなければならない世界に関して不満足な状況の中で暮らしていることに気付きます。彼らは自分達が他の惑星の住人になれる日を待ち望んでいます。彼らはこの世界に何らの美しさを見ることは出来ず、そこにある苦痛や悲惨さのみを意識しているのです。

【解説】

私達誰もが「同乗記」の中でアダムスキー氏が伝えた他惑星人の生活と地球の私達の日常とがかくも大きな隔たりがあることに驚くものです。私達は他惑星の人達の生活ぶりに憧れる一方で、自らの日常が抱える問題ばかり注目しがちです。

これまでの多くの人達がアダムスキー氏の著作を読み、他惑星人の生活に感動したものと思われます。しかしその内かなりな割合の人達は途中で興味を失って旧来の日常に戻ったり、地上の問題ばかりを注視するあまり、非難するだけの姿勢に陥りやすいのが現実かも知れません。

本項は当時も同様な、あるいは当事国としては更に大きな規模で問題が起こっていたことを示唆するものと思われます。もちろん、偽宇宙人も多く居たことでしょうし、それらの状況を著者アダムスキー氏は良く承知していたものと思われます。

今日振り返ると、他惑星から地球に支援活動に入る際には必ず偽者による妨害や未熟な教師、生徒による誤解も多く発生していたものと考えます。

私達は自ら考え、自分に必要な事柄は何かを常に着目して、事柄の本質を見極める視点が必要であり、自分達が暮らす地上の中にある本来の美と調和を学ぶことがまず必要であり、現実は自らが播いた種がもたらした結果であることを悟らねばなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落128 [2016-03-09]

128 Teacher and students have made the mistake of separating heaven and earth and so have been carried from one false balance to another. The impersonal man will unite heaven and earth; will incorporate idealism and practicality; will bring the peace and beauty of the celestial into the concrete materialism of the earth. Anyone who cannot live a happy useful life here in the present world will find it no easier in another world. The Father, by whose breath we live, has but one Law that governs all things. He created this planet as He created all others, and the same principle directs its action. All worlds in the cosmos are alike in principle and to one who lives according to the Law there is no division of perfection.

128 教師と生徒達は天と地とを分離するという過ちを犯しており、その為に一つの誤ったバランスからもう一つの誤ったバランスに運ばれているのです。非個人的な人は天と地を結びつけますし、理想主義と実践主義を結合させ、天上の平安と美しさを地上の確固たる物質主義の中に注入します。現在の世界で幸せで有意義な生涯を送ることが出来ない者は誰一人、他の世界でも決して容易ではないでしょう。私達がその息で生きる父は全てのものを統括する一つの法を持っています。神はその他の惑星と同様にこの惑星を創造し、それと同じ法則が法則の行動を指揮しています。宇宙のあらゆる世界は原理において同様であり、その法則に従って生きている者にとって、完全さに何らの分裂はありません。

【解説】

確かにこれまで学んで来たことを振り返るなら、私達は宇宙を支える"法則"である"因"と称される原理にこそ軸足を置くように本講座から指導を受けて来ました。その原理も一たび物質の世界に現れると、結果物として時間や空間の制約の中に生きることは避けられないことも学びました。

このように物質の世界には変遷があり、不安定な状況にあることは間違いありません。しかし私達はこの"因"と"結果の世界"をそのように分離して捉えることは誤りであることを本項は説いています。即ち、もちろん"因"こそが重要なのですが、この私達が暮らしている物質の世界、結果の世界こそが"因"が発現している具体的な姿、創造作品であるのです。

たとえどのような状況であろうとも、"因"の発現には違いなく、その中に生きる私達は自らの世界を非難し、裁くことは本来の姿勢ではありません。相手を非難するだけでは問題解決にはつながりません。何よりも相手に本来の姿を気付かせる為に、惜しみない愛情や受容的姿勢が必要だからです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落129 [2016-03-10]

129 In Matthew 5 :34-35 is the admonition against division plainly given: "But I say unto you, Swear not at all; neither by heaven; for it is God's throne; nor by the earth; for it is His footstool; neither by Jerusalem; for it is the city of the great King."

129 マタイ５：３４-３５には、この分割に対する訓戒が平易に授けられています。「しかし、私は貴方に言う、天にかけて誓ってはならない、それは神の王座であるからだ。また地にかけて誓ってはならない、それは神の足台であるからだ。またエルサレムにかけて誓ってはならない、それはその偉大な王の街であるからだ。」

【解説】

私自身、現行のキリス教の聖書のこの部分の正式な解釈は知りません。しかし、本項で引用されているイエスの言葉は、何か私達がこれこそ私の信じる絶対的なものとして天も地も、更には現代の文明にも軸足を置いてはならないと諭したように思えてなりません。

つまりは、どちらかを正しい、確実なもの、不動なものとすると、他のものは不安定、不確実という議論になりがちで、不動のものしか信じないという思考になるからです。

本項では、このように世の中を良否の二元的なものと捉えることを戒めているのです。聖書の中でイエスは天も地も創造主のつらなった一体のものであり、社会自体も創造主の街であると説いており、どちらが優れているというような議論に陥らないよう戒めています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落130 [2016-03-11]

130 Neither heaven, the place of cause, nor earth, the place of effects, nor Jerusalem; symbolically used to represent the earth's inhabitants, can be called one greater than the other. These instructions were given against discriminating or calling one part better than the whole, Heaven and earth are not two but one, each expressing the other; man is no lesser for he is both, an integral part of the Whole. Divisions exist only in man's opinions when he calls one greater than the other, for in so doing he is judging and setting himself above the Creator.

130 因の場所である天も、結果の場所である地も、地球の住人達を代表させるべく象徴的に表現されたエルサレムもどれ一つ他のものより偉大だと見なすべきではありません。これらの訓戒は差別したり一部分が全体より優れていると見なすことに対して授けられ、天と地は二つの存在でなく一つであり、互いに他を表現しているのです。人は劣るものでなく、両方の存在、全体の統合された部分であるからです。区別は人が一方のものを他より、より優れたものとして見なす時の人の意見の中にのみ存在します。何故なら、そうすることによって人は裁きを行い、創造主より上位に自分を置いているからです。

【解説】

"汝裁くな"という表現の中には本項で説かれているような深遠な意味があったことが分かります。良否・善悪を査定することは、そのままその者達より高い位置からの視点であり、本来私達被創造物が立つべき位置ではありません。

ここで重要なのは、私達自身そして地上の全てのもの達が、結果としての状況はどうあれ、"因"と"結果"が融合した存在であることです。物質だけでは静止した状態のものですが、それに行動を与えるのは"因"からの指図によるからです。

そういう意味では、あらゆる行動・活動は先ずは"因"と"結果物"が融合、共同した作用の中で行われるということでしょう。しかし、本来は創造的、芸術的な活動であるべきそのような行動が、人間の場合には多くが誤った方向に起こされるという実態がある訳です。

何故、そのような事態になっているかについて、本章では章のタイトルにあるように私達自身の不安定な感情の問題に行き着くことが示唆されているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落131 [2016-03-14]

131 From the heavens comes the cause and power of creation and yet the earth, being the Father's footstool, it is the foundation upon which He stands. So instead of desiring to live elsewhere one should learn all there is to know concerning his present earth home and recognize it as a garden of beautiful, heavenly things, the actual garden of the Father.

131 諸々の天から因と創造の力がやって来ますが、それでも地球は父の足台であり、父が拠って立つ基礎です。ですから、何処か他の地に住みたいと願う代わりに、人は自分の現在の地上の家庭についての全てを学ぶべきであり、それを美しい天上の事物の庭、父の実際の庭として認識すべきなのです。

【解説】

私達が何を目指して精進すべきか、２０００年以上も前にイエスが私達に説いた訳ですが、今日の中東シリアの地の悲惨な状況を見ると、この間まったく私達の置かれた状況は変わらないどころか、悪くなっているように思います。

宗教の名を借りて相手を滅ぼし、街を破壊することが平然と行われていることに、この星の問題が象徴されています。

私達は一刻も早く正常な状態に戻す必要がありますが、宗教指導者がそれに邁進出来ないのであれば、実際既存の宗教の存在意義はありません。

私達は再度、私達のものの見方、考え方を改め、本項で述べられているように宇宙からやって来る印象・想念を地上で発現・開花させる自らの役目を自覚する必要があります。その上で、本来の地上の楽園での生活を享受することであり、楽園を汚したり、浪費することではありません。まして破壊する等は、もってのほかの蛮行でしかありません。

ご連絡 [2016-03-15]

いつもご覧いただきありがとうございます。
都合により、次回更新は来週３月２３日頃になってしまいますが、ご了解下さい。

２０１６年3月１５日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落132 [2016-03-15]

132 Innately every human feels an ideal life that he is seeking to find but each individual wants this heaven to be according to his specifications. Many groups have started with high ideals but when the personal opinions prompted by the ego of some of its members have not been accepted the ideal was lost in the fog of emotional differences.
132 生まれつきあらゆる人は自分が見出したいと求めている理想的な生活を感じ取っていますが、個々人はこの天国が自分の明細仕様に従ったもので有って欲しいのです。多くのグループが高尚なアイデアを持ってスタートしましたが、そのメンバーの何人かのエゴによって促された個人的な意見が受け入れられない時には、その理想は感情の相違という霧の中に失われてしまいました。

【解説】
多くの宗派が生まれ、互いに反目する話は、地上においては様々な分野で行われています。政治もそうですし、アダムスキー哲学の学習者にとっても十分に起こり得ることです。
私達はとかく自我を満足させるよう行動し、意見を主張する訳ですが、それは互いに反発させることとなり、本来の融和的心情から離れ、各々独自の道を行くことになりかねません。
もちろんそういう事態になれば、力を結集した社会への影響行使という側面も薄れますし、互いに協力し合わなければ旅も続けられないように思います。渡り鳥は集団で移動しますが、それは衆知を集め、外敵から身を守り確実に目的地に到着する上で必要なことではないかと考えています。一人で理想を求めて精進することももちろん大事です。しかし、更に他人と融和してともども本来の道を進むことは、その道程を確実なものとするだけに、はるかに貴重なものではないでしょうか。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落133 [2016-03-23]

133 The everlasting spark of life which allows man to express as a form is never separated from Cosmic Cause; when man controls his mortal sense mind to think beyond apparent effects he begins to understand the purpose of life and gain a margin of emotional balance.

133 人を形あるものとして表現させる生命の永続する輝きは、決して宇宙的因から離れることはありません。人が自らの死すべき感覚心をコントロールして外観上の結果物の背後を考えさせる時、人は生命の目的を学びはじめ、感情のバランスの余裕を掴みはじめます。

【解説】

結局、私達の身体は宇宙根源からの精緻なスパークとも言える想念・印象と同期することで自らの活動を維持できていることになりますが、肝心の私達の心は外観の変化や結果物に囚われている為、それらの背後にある”因”に気が付いていないということです。

この場合、私達の心の役割・機能を深く考えれば、それはこの人体を具体的に行動させる原動力となるべきものであることが分かります。つまり、これら精緻な信号を人体を動かす為に必要なパワーにまで高めるいわば増幅器なのかも知れません。微細な信号を大きな音に変えるスピーカーアンプのようなイメージです。

しかしその場合、増幅器の性能に安定さが欠けると音がひずんだり変調を来たして本来の音源信号を再現することは出来ません。私達の心（増幅器）の内部をバランス良く保ち、常に安定な状態を保つことではじめて本来の音源を現実世界に再現できるという訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落134 [2016-03-24]

134 The emotional force which rises in the mind when one's will is crossed by another's is very destructive for it draws the actor into a whirlpool of unbalanced action, and he is blinded to reality.

134 ある者の意志が他の者の意志と行き違いになった時、心に起こる感情の力はとても破壊的です。何故なら、それは役者をアンバランスな行動の渦の中に引き込み、その者は現実が見えなくなってしまうからです。

【解説】

自分がよかれと思ったことが相手に受け入れられなかったり、他人から誤解されたりすると、私達地球人は容易に憤慨し、暴力的にさえなることがあります。それほど私達は感情の起伏が激しい困った存在だと言うことが出来ます。

自らの感情を制御することは私達の最も基本的な命題であり、それを達成することがひいては戦争や傷害事件等の発生を抑制することにも繋がります。

重要な点は私達自身、日常的にこれら不安定な感情に自らを左右されがちである事実をしっかり把握して、その暴走をコントロールする必要があることです。仏陀はこのことを何度も弟子達に語っていますし、沈想はその感情を抑制するための修行でもあるのです。昔、英語を習っていたあるキリスト教の米国人宣教師の家族の一人から、実は自分は「映画」を見ないと告げられたことがあります。何でも映画を見て「感情」を高ぶらせることは良くないと思っているということでした。当時は、変なことを言う人達だなあと思っていたのですが、日常的な感情のコントロールとはそういうことも含まれると今になって気がつく次第です。

もちろん、感情のすべてが悪いという訳でもなく、本来の姿、宇宙の因からの印象の指令に対し、快く自らを開放し、その意思を自らの肉体全体で再現させるという、静かではあるものの、本来の姿に特化する必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落135 [2016-03-25]

135 All that man is in reality - is the thought that he is consciously aware of for the moment. Each moment follows the preceding moment and the key, if there be one, is to keep constant vigil over our reactions so that the next thought will be one that we can enjoy entertaining in our mental house.

135 現実における人の全ては、その人がその時、意識的に気付いている想念なのです。各瞬間はその前の瞬間の後を付き従っており、もしカギがあるとすれば、それはその次の想念が私達が自分達の心の家で楽しむことを可能とさせるものであるよう、私達の反応を絶えず見張り続けることです。

【解説】

結局、感情というものは私達が身体に取り入れ、受容する想念であることを本項は示唆しています。
次々に私達が抱く感情は私達が受容する想念の連鎖ということでもあるのです。

この場合、どのようにすれば問題の感情制御が出来るかということですが、それは絶えず私達が次にどのような想念を取り込むのか、観察・監視することだと著者は私達に説いているのです。

このことが重要であることが分かれば、それらの観察・監視は必ずしも端座沈想することよりも、日常生活を活発に行動しながらでも、刻々と自らに取り入れる想念・印象を観察し、好ましくない要素が入り込むことを防止することの方が効果的であることに気付きます。自らを望ましい想念の宿とすることが重要であり、感情をコントロールすることに繋がります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落136 [2016-03-28]

136 There is so much bickering over personal opinions, and what does it profit man? Nothing, for it is a consumer of time and energy. This does not mean that there should not be an intelligent discussion about a subject but when the mortal sense mind is quiet and receptive it can see the picture clearly.

136 各自の意見に対してあまりにも多くの口論が為されておりますが、それは人に何の利益をもたらすのでしょうか。何もありません。何故なら、それは時間とエネルギーの浪費であるからです。これはテーマに対する知的な議論をすべきでないと言うことではなく、死すべき感覚心が鎮まり受容的になる時、感覚心は情況をはっきり見ることが出来るということです。

【解説】

とかく私達は相手と話す場合、自分の意見を如何に立派なもの、貴重なものに見せるかに努力する一方、相手の意見に寄り添うことはほとんどありません。ディベート等に及んでは、如何に相手を屈服させるかの争いにまでなっています。

しかし、これらはいずれも本文に説かれているように時間もエネルギーも浪費するだけで真の発見は望むべくもありません。心と心のぶつかり合いのレベルだからです。

私達にとって重要なことは、真実や解決策等、すべての答えは自分自身の意見からではなく、因から授けられるということに気付くことです。互いに自身の意見を披露することは良いことですが、実際の解決策はこれら会話の隙間、いわば心が空虚になった瞬間に印象が来る訳で、私達は心を常に空しくして置く必要があるのです。いたずらに表層だけの議論に加わることは貴重な機会を逸することに注意すべきことは間違いありません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落137 [2016-03-29]

137 Emotional balance maintained under all conditions is essential if one wishes to have lasting happiness and good health.
137 永続する幸せと健康状態を持とうとするなら、全ての状況の下で感情のバランスが保たれることは必須です。

【解説】
逆に言えば私達は自らの感情を調和のとれた状態に保てないが故に多くの問題を抱え、身体の支障を背負って生きているのだという訳です。
それほどに私達が日常抱く感情は私達自身にもまた、周囲の環境にも大きな影響を与えているということです。しかし、この感情という問題の解決には他人がどのような支援を与えようとしても、最終的に対峙するのは本人でしかありません。自ら蒔いた種を自らが刈り取っている訳ですが、少しでも多くの事例を学び、自分の中にある法則やメカニズムを学んでよりよい生活へとスタートを切ることが必要です。
かつて多くの教師は人間の感情に関する制御について説いて来ましたし、どのような事態にあっても冷静に自分を見つめられることで、あらゆる困難に対処することが出来ます。感情が持つ大きな影響力を知り、その力を活用出来るようになる為には、まず、それらを統制することを学ぶ必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落138 [2016-03-30]

138 Any emotional extreme disturbs the normal frequency action of the chemicals of the body. Excitement, whether it be caused by extreme joy or fear or anticipation, allows the normal amount of certain chemicals that go into the blood stream to be changed; thereby changing the normal action of the heart. This in turn affects the nervous system and the cells of the body and causes one to feel weak or ill.

138 如何なる感情の過度も肉体の諸化合物の正常な振動活動を妨げます。興奮はそれが歓び或いは恐怖、予感によって引き起こされるに係らず、血流に入るある種の化学物質の量に変化をもたらします。その結果、心臓の正常な動きを変化させるのです。この結果、それは神経系統が肉体の諸細胞に影響を与え、その者に疲労感や体調不良を感じさせます。

【解説】

現代では人間が興奮状態になるとドーパミン等の化学物質が分泌され、それらが血液を通じて全身に拡がって身体各部に様々な作用をもたらすことが知られています。

本項はこうした身体の機構について示唆すると同時に、過度な感情の高ぶりはその後の身体に悪い影響をもたらすことを警告しています。

私達は自分の感情をより安定した状況に保つことの意義についてもう少し深く考える必要もあるでしょう。表層的な事象に振り回されて本来の目標を見失っている自我（エゴ）に何時までも引きずられてはならないのです。本来の私達は穏やかさの中にあって、心身がより柔軟に保たれ、その中を想念・印象が自由に駆け巡るような創造的状況を保つ必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第12章 段落139 [2016-03-31]

139 This change is similar to a high precision motor that causes a frictional deterioration on all of its parts when it is not properly synchronized. Each emotional unbalance curtails the free life flow and causes damage to the body, until the mortal sense intelligence comes to the realization of its limited and destructive influence and releases its personal ego to the Cosmic Life Force.

139 この変化は高精密なモーターが適切に同期が取られていないと、その全ての部品に磨耗を引き起こすのと類似しています。死すべき感覚の知性がそれ自身の限界と破壊的な影響を自覚するようになり、宇宙的な生命力に個人のエゴを解き放つまでは、感情のアンバランスの一つ一つが自由な生命の流れを短縮し、肉体に損傷を与えるのです。

【解説】

私達は日常、自分自身に対しても、また周囲の者に対しても自らの心の意思を押し通すことで如何に大きな悪影響を及ぼしているかを自覚しなければなりません。私達の地上でも生活はこれらの相互影響の下で行われている訳で、良くも悪くも相互に影響を与え、また同時に受けているのです。

本項について言えば、その心の理解度が低い為に、多くのイザコザや意見の衝突が生じ、それが各自の身体状況にも影響を及ぼしているのです。その為、この状態が長く続くと身体細胞は悲鳴を上げ、急速な劣化・老化が生じてしまいます。

結局、私達は何の為に生まれて来たのか、本来はその集大成とも言うべき老境である筈が、残念ながら実際には反対に、悪い要素・誤った要素だけが現実化した中で人生を送る事例も多いように思われてなりません。日々のわずかであっても、絶え間ない精進だけが未来を切り拓くカギであるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落140 [2016-04-01]

13 FREE WILL OR SELF-HYPNOTISM?
140 The choice is yours, for the acts of today bring the rewards of tomorrow. Enjoyable rewards will come to those who are living according to the laws set in motion by Cause Intelligence - giving honor to the All-Creative Principle of Life, and such honor does not incorporate the characteristics of emotionalism or self hypnotism.

第１３章 自由意志か自己催眠か

140 選択権は貴方自身にあります。何故なら、今日の行動は明日の報いをもたらすからです。因なる知性によって起動させられている諸法則に従って生きる者、生命の全ての創造的法則に栄誉を捧げている者には、喜ばしい報いが訪れることでしょうし、このような栄誉は感情主義の性質のものや自己催眠とは組することはないのです。

【解説】

一日一日の暮らし方が私達それぞれの明日を造り上げているのです。毎日を宇宙を流れる法則に沿って生きることが調和した未来を生み出します。前章では私達の永年の課題である「感情」のコントロールについて学んで来ましたし、種々の悪影響について考察して来ました。本章ではその上に立って、本当の意味での自由意志について学ぼうとしています。

本章における最初の項として私達が本来享受すべき宇宙的生活は全て宇宙の創造的法則によってもたらされるものであり、感情とは自己催眠とかとは一切無縁のものだと説いています。

言い方を変えれば、私達がこれまで自ら、或いは他者の感情に支配された生き方や自己催眠により自らの意志を失ったまま行動する結果、多くの失敗や悲惨な出来事を生み出して来たことを十分に反省し、より穏やかで生命力に溢れた法則にこそ従う必要があるという訳です。

このような自らの心の安定性を図ることは仏教では昔から教えられて来たところですが、絶えずやって来る外乱に対し、自分の感覚の過剰反応や裁きの姿勢を取り去って、ありのままを受け入れ、対処する自由な心境が大切だと思うものです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落141 [2016-04-04]

141 Religion and so-called spiritual teachings have not, in most cases, brought true realization to the heart of humanity. Some of these organizations practice rituals and affirmations which produce a temporary intoxication during the performance of the rites but tend towards a tremendous "let down" after the service has been completed. Most of the individuals attending, upon returning to their worldly pursuits revert to the old ways where the survival of the fittest attitude takes over, and man continues to take advantage of his brother instead of being his brother's keeper. In the religious sanctuary the individual feels that he would help anyone according to their needs and where hate had been, there arises an emotion that is interpreted as love, but outside of the sanctuary these emotional influences change, which proves that they were nothing more or less than a form of hypnosis induced by the service that he attended.

141 宗教そしていわゆる精神主義的教えは、ほとんどの場合、人間の心の底に真の悟りをもたらしては来ませんでした。これらの組織のいくつかでは、その間だけの一時的な陶酔を作り出す儀式や宣誓を実施しますが、その礼拝が完了した後は、とてつもない「落ち込み」をもたらす傾向があります。出席している個々人のほとんどは、それぞれの世俗的追求の場に戻るや、適者生存の原理が支配する昔ながらの方式に復帰してしまい、人は自分の兄弟の後見人になる代わりに自分の兄弟を利用し続けるのです。宗教的な聖域の中では各自は必要があれば誰をも助けようと感じ、憎しみがあった所でも愛と解釈される感情が湧き起こるのですが、その聖域の外側ではこれら感情の影響は変わってしまい、自分が出席した礼拝によって誘引された催眠の形態以上の何物でもなかったことを立証するのです。

【解説】

これまで自己の改革にどれほど宗教や精神主義（スピリチュアル）が役立っているかについて、著者は私達に問い掛けています。もちろん多くの人がその分野での学習を経て目覚めて行った訳ですが、依然として大多数の者は益にもならない宗教やスピリチュアルと未だに係っていることにも注意したいものです。

実は先日、東ヨーロッパに友人と旅行に行って来たところです。街並みは古くはローマ帝国の時代に遡る建造物からはじまり、最も栄えた１８世紀１９世紀の建物の中に現在も多くの人々の暮らしがありました。中でも中心となすのが協会であり、大聖堂が君臨しています。そこで宗教指導者が全てを取り仕切る社会が存在していた訳です。人々は日々の祈りを教会の中で捧げる一方、日々の商売に従事する姿は基本的に今も変わりありません。

しかし、本項では教会の中、あるいはセレモニーの中で一時的に光悦感で満たされたとしても、日常生活の中に何らの反映が無ければ意味は薄いと指摘しています。つまりは、専門家集団（教団）に委ねることを止めて、自らの探究心や感性を拠り所として、身辺を流れる宇宙的波動を取り入れ、自らの暮らしに役立てる努力こそ、重要だということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落142 [2016-04-05]

142 Is it not true that when a hypnotist wishes to put a subject under his control he suggests something which he asks him to hold steadily in his mind? If the subject does this he becomes the victim of the hypnotist's will and is forced to obey whatever thought is presented to him. The hypnotist can make his subject believe anything that he tells him. He can cause the individual to eat onions thinking that they are apples and he will not discern the difference, which proves that the subject has lost his reasoning as well as his will power.

142 催眠術者が被術者を自分の支配下に置こうとする際、術者は被術者に何かを自分の心に常に保持しておくようほのめかすことは、本当に行われていることではないでしょうか。もし被術者がこのようなことをするなら、被術者は術者の意志の餌食になり、自分に示されるどのような想念にも従わざるを得ないことになります。催眠術者は自分の被術者を自分が語るどのようなことをも信じさせることが出来るようになります。術者はその者にタマネギを食べさせ、それらがリンゴであると思わせることも出来ますし、その者が違いを見分けることはなく、そのことは、自分の意志力同様、推論の力も失っていることを示しています。

【解説】

これまでの歴史の中で多くのカリスマ的指導者が現れて民衆を誤った方向に導いて来たことは歴史が証明しています。同様に宗教や精神分野でも似たような事態が起こっていたということでしょう。人々は神秘を好む為、また一時的な光悦感を得る為に、そのような誤った道筋を辿ることが多いとも言えるでしょう。

そもそも何故著者は本章を新たに設け、「自由意志か自己催眠か」という課題を取り上げたかについて、私達も考える必要があります。これについては私達の実生活の中に類似した多くの要素があるからだと私は考えます。

毎日のテレビや新聞その他メディアを通じて私達は誰か支配者の意向に沿った形で絶えず一定の方向の情報を与えられ、やがてそれを受け入れて行く状況にあるようです。

世の中に出回る情報は真実ばかりとは限りません。現に宇宙や他惑星に関する情報は包み隠され、真実とはかけ離れた状態のままですが、それらは為政者の望むところでもある訳です。

イエスが十字架に掛けられた２０００年余の昔から、地上は脈々と為政者の勢力が支配して来た訳で、それらに対処する上で、情報操作やマインドコントロールには注意する必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落143 [2016-04-06]

143 Religion in the early days held the upper hand over the masses through such actions as this. The Soul-seeking populace were thrown into a state of emotional hypnosis which made them an easy prey to the more clever individuals who perpetrated such methods of worship.

143 初期の頃の宗教は、これと同様な行動を通じて大衆を支配しました。魂を求める民衆は感情的な催眠状態に陥れられ、このような礼拝の方法を実施したより悪賢い者達へのたやすい餌食になってしまったのです。

【解説】

古代人は現代人よりはるかに純心であった訳で、時の為政者は人々を様々な手法を用いて光悦状態にさせ、言わば催眠状態の中で自らに従順にさせて来たものと思われます。もちろん本項が示唆している「宗教」とはキリスト教も含まれる訳です。

ヨーロッパに行って分かることは、教会が全ての中心であり、人々の生活の隅々にまで浸透していたことです。一見理想的なように思われますが、実際に行われていたことは、異端者への見せしめや宗教指導者への権威の集中でありました。

確かに荘厳な教会内部で執り行われる儀式は当時の人々の厚い信仰心とあいまって、人々を一時的な光悦状態にさせたものと思われます。また庶民の貧しい生活の中から、このような教会建造物を建てるには、多くの負担を庶民がしていたことは間違いありません。

問題は人々が如何にして真理を学ぶかにある訳で、指導者はその一点に目標を定める必要があるのです。しかし地球においては依然として本項のような事態が起こっており、中東各地で起こっている野蛮な行為は背景に本項で説くマインドコントロールがあると見なければなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落144 [2016-04-07]

144 Did you ever attend a camp-meeting where the participants threw themselves into such a high emotional state that they were finally hypnotized into performing things they could never have done when in a normal state of consciousness? After coming out of this emotional spell they were asked if they knew what they had done and the answer would be a negative one. All that they were conscious of was the fact that the Holy Spirit had them under control. This proves that they were under an imposed influence which deprived them of their power of reasoning and will.

144 貴方はこれまで、参加者達が、このような激しい感情状態に陥った結果、最終的には催眠状態にかかり、正常な意識状態では出来ないような事柄を成し遂げるような野外集会に参加したことはありますか。この感情の魔法から抜け出した後、彼らは自分達が何を成したかを訊かれますと、否と回答するでしょう。彼らが意識していたことの全ては、聖なる魂が自分達を統率していたという事実だけです。このことは彼らが自分達から推論と意志の力を奪った、ある押し付けられた影響力の下にあったことを示しています。

【解説】

本章に入ってから、何故著者は「自己催眠か自由意志か」という命題について、章を改めて説く必要があったのかについて考えて来ました。その結果、辿りついたのは以下の結論でした。

即ち、私達の発達の過程としては、まず自己の問題提起として自我の専制問題があり、想念の発動結果として感情の暴走というものがあります。それへの対処として心を受容的な姿勢に改変し、想念・印象を感受出来るよう改める訳ですが、外部からの印象を無制限に受け入れることにも問題があるということです。

つまり、邪悪な者達が多く棲む地球においては、他人を支配し、隷属させようとする者も多く、本来道を求める者に対しても、餌食にしようとする者がいます。一見、もっともらしい主張をしていても、その中身は醜い団体も多いのです。そのような現状の中では、しっかり自立し、自らの判断で良否を見極める必要がある訳で、あらゆるものを一律に受容する態度は良くないということでしょう。他者の言いなりになることは危険でもあるのです。

従って、全ては自らの責任において自由な意思で行われ、自分の力で印象・想念を監視し適切なものを受け入れる覚悟がどうしても必要ということになります。自分で結果を味わい、次に応用することが重要なのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落145 [2016-04-08]

145 Some self-acclaimed Truth Centers are using this emotional hypnosis, induced by various methods. Innumerable individuals are testifying to healings but permanent healing or the regeneration of the body must be attained through an understanding of the conditions to be dealt with, and the execution of all actions must be taken in a free and conscious state of will. True faith is not a state of self hypnosis, it is a knowing, a willing of the personal ego will to the guidance of the All Intelligent Cause Will. The Will is the man and if the Will is restricted or held in dominance by another the individual ceases to exist as a thinking, reasoning being. Man must understand the forces of his being and control those forces to bring about the desired effects in his life.

145 幾つかの自称真理センターは、様々な方法で誘導される、この感情催眠を用いています。無数の個々人が癒しについて証言していますが、永続的な癒し或いは肉体の再生は取り扱わるべき条件を理解した中で得られるものであり、全ての行為の実行は自由で意識的な意志状態の中で行われなければなりません。真の信仰は自己催眠の状態ではなく、知っていることであり、個人的な自我の意志が全知の因意志の導きに喜んで従うことです。意志とは人そのものであり、もしその意志が他の者によって制限を受け、或いは支配下に捕捉されるようなことがあれば、その者は考え、推理する存在ではなくなります。人は自分自身の存在の諸々の力を理解し、自分の生涯の中で望ましい結果をもたらすようそれらの力を制御しなければなりません。

【解説】

本人が何らの自覚のないまま、一時的、一方的な施術体験を受けたとしても結局はその状態は長続きすることはなく、そのまま他人の意志に従っていては、本人の意志を弱めるだけのことになりかねません。特定な（宗教）団体に属することは、このような問題もあるという訳です。

もちろん、全ての団体に問題があるとは言いたくないのですが、組織を維持、発展させるには収入源が必要であり、入会者を確保する上から、人集めのイベントが求められることになります。

しかし、一方で真の求道者は他人の助けを借りずに、自ら沈想、探求して真理を自覚しようと努めます。丁度、仏陀が竹林で瞑想したように、大自然の中に真理・法則を自覚しようと探求を続けたようにです。原始仏教ではそれを「サイの角（つの）」のように一途に行うことだと教えています。本文で言う自らの意志で道を求める作業がそこにあります。

本来、この種の修行は自分自身の中に備わっている宇宙的要素を発見し、それに親しむためのもので、先の本文にあったように「自分の手足より近い場所」にその捜し求めるものがあることを悟ることが究極の目的でもあります。遠くを求める必要はなく、自身の中に捜し求めるものがあるということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落146 [2016-04-11]

146 It is true that many effects similar to the desired actions can be produced through self-hypnosis but when the person has returned to his normal state of mind he is unaware of the process by which he gained the experience. It therefore does not benefit him for he is never able to contact that particular experience again, and he has weakened his will. The Will is the controlling element of man's being - the element that makes the individualized consciousness a man or a beast, god or devil.

146 望んでいた行動と類似した多くの結果が、自己催眠を通じて作り出され得ることは確かですが、自分の心の正常な状態に戻れば、その者は自分がその体験を得たプロセスに気付くことはありません。それ故、その者にとって恩恵をもたらすものではないのです。何故なら、その者がその特別な体験と再び接触することは出来ず、その者は自分の意志を弱めてしまったからです。意志とは人の存在を支配する要素であり、個々の意識を人にするか野獣にするか、神にするか悪魔にするかを決める要素なのです。

【解説】

既に私達はこれまでの学習経過から、自分の成功体験が重要であることを知っています。その理解には、宇宙にはくまなく一定普遍の法則が流れており、自らが紡いだ原因が積み重なって結果が生じることの自覚がある筈です。

つまり、同様な心境と行動を積めば、再び同種の成果が得られることを知っているのです。これら自ら悟った法則性は何度か同種の経験を積み重ねればご自身にとって次第に揺るぎない法則になることでしょう。もちろん反対に失敗事例はそれに至る過程を考察して次回からその誤りを改めることになるのです。

いずれにせよ、この間、自らの体験過程をよく覚えていることが大切で、ましてや他人の意志に自らを委ねることをしていては記憶も体験も残らずに、全く意味のないことになります。

私達は長い道程の中を歩んでいます。どの道を選択するか、何処を目指すのかは各自の意志に任されており、私達は自らの人生を自分の意志で選別、進んでいく必要があるのです。そういう意味から本項で著者は意志が重要だと指摘しているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落147 [2016-04-12]

147 Success in any endeavor comes not through self-hypnosis but through self-control. The perverted will is the cause of all mortal suffering but that suffering cannot be permanently lessened by a mere suppression of the will through any form of hypnosis. The will and understanding must be united to produce a worthwhile life of service and accomplishment. Emotionalism can very easily produce illusionary effects and lift an individual into a temporary state of ecstacy but it will never bring about the regeneration of the mortal body or the changing of the ego-will to the cause-will which is necessary for an all-inclusive understanding of life and the cosmos. There is but one way, into the sheepfold and that is through the expansion of conscious awareness in the field of understanding and a systematic training of the will rather than the deadening of the will.

147 どのような努力においても成功とは自己催眠を通じてではなく、自己統制を通じてもたらされます。堕落した意志が全ての死すべき苦難の原因ですが、その苦難はどんな形をとるにせよ、催眠からの意志の単なる抑制からでは永久に緩和されることはありません。意志と理解は有意義な奉仕と業績の人生を作り上げる為に統合させなければなりません。感情主義は大変容易に幻想上の諸効果を作り上げることが出来、個人を一時的な恍惚状態に引き上げることが出来ますが、死すべき肉体の再生や生命と宇宙の全包含的理解に必要な自我の意志の因の意志への転換をもたらすものではありません。目的とする羊の囲いには唯一つの道しかなく、それは理解という分野における意識的気付きの拡張を通じてであり、意志を強めるのではなく、意志を系統的に訓練することによるのです。

【解説】

結局のところ、私達は自らの自我と生涯を共にして人生を歩んで行かなければなりません。いくら問題があろうと、現状で見苦しい状況にあろうともそれを自分の姿を写す鏡として認める必要があります。

もちろんその自我が本来の道を辿るようになれば、その状況も変化します。そういう意味で私達の未来は明るいとも言うことが出来ます。

しかし一方で、一時の光悦状態や他人の意志に委ねた生活を送ることはこの問題の自我が現実に直面しないこととなり、「原因と結果」の因果関係を学習するチャンスを失くしている点に注意しなければなりません。

長い時間を掛けても達成しなければならないことは、私達の自我が宇宙を流れる法則性を学び、経験することによって、その存在を自覚することなのです。「悟り」という意味合いはその状態を示唆しています。ひとたび私達がこの法則性を自ら知覚すれば、以後次々に万物の真の姿が視界に広がり、実は私達は素晴らしい宇宙の庭の中に暮らしていることが分かるということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落148 [2016-04-13]

148 The Christ said, "Fear not the man that slays the body but fear the man that slays the soul." This individualized soul is the reasoning and will-power of man.

148 キリストは言いました。「肉体を殺す者を恐れず、魂を殺す者を恐れよ」と。この個別化された魂とは人間の推論と意志の力のことです。

【解説】

既にアダムスキー氏の著書をご覧になっている方はご存知のように、地球はイエスが来訪するずっと以前から様々な惑星から多くの人々が移住して来た惑星でありました。多くの問題児の収容場所でもあったと言われています。

本項はイエスが当時既にこれら悪人が善良な人々をたぶらかし、支配しつつあったことを警告していたことを意味しています。最初は相手を感心させ、相手を惹きつける一方で最終的には相手の意志を弱めて自分達の教義に染め上げ、自分達の思い通りに行動させるというやり方でしょう。

私達各人にとって、自我は問題である一方で、それが無くてはならないものであることを十分自覚する必要があります。重要なのは自我を本来の姿に育成することであり、自らの魂を他者に売り渡すことではないのです。

現代に生きる私達はイエスの時代に比べて格段に魂を切られる危険に取り囲まれています。多くの誘惑があり、誘いの手が差し出されています。それらの誘いに乗らないこと、自らの信念を揺るぎないものとして自分の道を歩まなければなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第13章 段落149 [2016-04-14]

149 Newness, constant action, progression of thought, substitution and replacement of ideas keeps one in pace with life. If you seek a broader understanding of the cosmos you need not affirm or deny but use your emotional power with reason for the betterment of yourself and others. Control your emotions instead of being a slave to them, for uncontrolled emotion which is temporary self-hypnosis is the cause of crime. You may never take the life of a fellow-being but if you indulge in self-hypnosis you will be guilty of killing your own soul.

149 新しさ、絶えざる行動、向上する想念、アイデアの交換や取替えは人を生命に遅れず付いて行かせます。もし貴方が宇宙のより広い理解を求めるなら、貴方は貴方の感情の力を肯定も否定もする必要はなく、貴方自身と他の人達の向上の為に用いる必要があるのです。貴方は感情の奴隷になるのではなく、それらを制御するのです。何故なら、制御されない感情は一時的な自己催眠であり、犯罪の原因であるからです。人は決して仲間の命を奪ってはならないのですが、もし貴方が自己催眠に身を任せるとしたら、貴方は貴方自身の魂を殺す罪に問われることになるからです。

【解説】

私達は想念・印象に対してどのように向き合うべきか、本項は教えています。

先ずはそれら想念・印象を感受する自分（自我）があり、やって来る想念・印象がある訳ですが、第１３章ではその内、想念・印象を受け止めるべき自分自身を他人任せにしたり、自己催眠状態にして放棄してはならないと諭しています。

重要な点は私達の進歩の上からは自分（自我）を育成することが重要であり、想念・印象は常に宇宙に湧き出ているということでしょう。それらの資源を適時適切に活用しながら、人生を歩んで行けば良いことになります。

その為には、より良い想念・印象に対して門戸を開放すると同時に、私達自身がそれを如何に自分に取り入れ応用するか自らの統制化で全てを実践することかと思われます。絶えず新しいアイデア、想念・印象を呼吸し、それらを他者の為に活用すること、行動することが重要です。どのような人生を歩むかはご自身が決めるべきもので、良き人生、精進の道を歩もうとするご自身の意志がその行く末を定めるものとなります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落150 [2016-04-15]

14 RELAXATION
150 One of the most ascribed methods of attaining physical and mental well-being is the development of the ability to relax. Psychology, medical science, athletes, etc., all acknowledge the beneficial results obtained when the body is not tense, but the average individual finds it difficult to relax at will.

第１４ 章 リラクセイション
150 身体的及び精神的健康を達成する上で最も要因となる方法の一つは、リラックス能力の発達です。心理学、医学、スポーツ選手その他全てが、肉体が緊張状態に無いときに有益な結果が得られることを認めていますが、平均的な個人は、思いのままリラックスすることを難しいことだと思っています。

【解説】
本章ではリラクセイションについて学びます。これまで私達は自我を如何にして育成するかを学んでいますが、その過程で問題となる自我ではあるものの、それを他人に委ねたり、一時的な麻痺状態にする形での自我の喪失には大きな問題があることを学びました。

その上でどうすれば日常的に自我を本来の姿に持って行けるかについて解説されているのが本章かと考えます。

これまでの様々な分野での経験から、各自の精神状態、即ち自我（心）が同調している想念波動が実に大きな影響を持っていることが知られています。極端な不安や恐怖の状態から、優越感や支配感に至るまでとかく私達の心は不安定な状態のまま推移しています。

そうした中にあって、静けさや冷静さを保ち、平穏な心の状態を創り出すことが大きな成果に繋がることは周知の事実なのです。このことを考える時、如何にしたら心の平安を保てるのか、リラックス状態を創り出せるかが重要となります。

私達の学習教科の中では、想念・印象を保持・共鳴する心がどのような状態にあるかによって、その現実世界への作用や実現力にも大きな影響を与えることを身に染みて学習することが大きなポイントになっています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落151 [2016-04-18]

151 I believe that there is a misconception regarding relaxation. It is often thought of as a state of inertia, and people will be heard to remark, "Oh, I haven't time to relax; my work keeps me busy every minute." If relaxation were truly understood such ones would realize that there is ofttimes much greater relaxation in work than in so-called periods of rest. The law of nature demands purposeful action and if a person is intensely interested in his work he is making of himself an open channel for the free expression of energy which is always waiting to be used. In other words, a person who has lost himself in some particular piece of work forgets to set up the usual mortal resistance to free-flowing energy and so opens himself automatically to its benefits.

151 私はリラクセイションに関しては誤解があると思っています。しばしばリラクセイションは慣性状態のように考えられており、人々は「ああ、私にはリラックスする時間が無い。仕事が休む暇なく忙しくさせている」と言うのを聞くことがあるでしょう。もしリラクセイションが本当に理解されるなら、このような人はいわゆる休んでいる間よりは、しばしば働いている時の方がはるかにリラクセイションにあることに気付くでしょう。自然の法則は目的のある行動を要求しており、もし人が自分の仕事に対して情熱的な関心を抱く場合は、その者は常に使用されるのを待っているエネルギーの自由な表現の為の経路に自分自身を成しているのです。言い換えればある特定の仕事の断片の中に自分を没入させた人物は自由に流入するエネルギーに対する通常の死すべき抵抗を打ち立てることを忘れてしまい、自分自身を自動的にその恩恵に対し開くのです。

【解説】

本項の内容に関してよく言われる例として、自身がパイプになって宇宙根源から湧き出す知識・活力を地上に表現するというような表現が為されます。即ち自身は何ら自らの判断や意見というような情報の乱れや抵抗を持たず、自身にやって来る想念・印象の表現者・体現者に徹するということです。

この場合、パイプを通して高速で大量の水（情報）が湧き出ている訳で、パイプ自身は流れの抵抗となるものはなく、パイプ自身は大変リラックスしている状況になります。同様に私達も因からの想念・印象の完全な表現者になれば、それは同時に本項で言うリラクセイションを保っていることになります。

いずれにせよ、物事を成就させるためには、因の創造的作用は欠かせないので、私達は自我（エゴ）にその役割をこのような因の情報を伝え表現するためのパイプ（輸送手段）であることを認識させ、日頃から抵抗なく因からの情報を無尽蔵に表現する者となるよう努力することが重要となります。

ご連絡 [2016-04-19]

いつもご覧いただき、ありがとうございます。
都合により、明日の更新はお休みします。

４月１９日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落152 [2016-04-19]

152 Relaxation should be used as a process of reestablishing harmonious, non-resistant action; the true way of expressing those words of the Christ, "Not my will but Thy Will be done."
152 リラクセイションは調和ある無抵抗の行動を再構築する過程として用いられるべきです。その道はキリストの言葉、「私の意志が行われるのではなく、汝の意志が行われるのだ」が表す、真の道です。

【解説】
本文で言う"Thy"を文字通りに訳出すれば「汝の」となる訳ですが、本項でも意味はもちろん「創造主の」という意味であることは明らかでしょう。実はそれほどにイエスは創造主と近い関係、すぐ近くに意識していたということです。
自分の意志はもちろん重要なのですが、それより大切にすべきなのが因からの印象・想念であり、その指示に従うこと、それに対して疑問を差し挟まないことが、リラクセイションの効用ということでしょう。自らの意志は重要視しつつも、それらを創造主の意志の前に完全に従わせることが重要なのでしょう。
本来の創造的想念に従っていれば、本人の体内に不要な摩擦は無く、各細胞は本来の活動に邁進して行ける筈です。こうしてリラクセイションは各人の健康にも大きな役割を果たすことになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落153 [2016-04-21]

153 Relaxation is not inertia! A person may be very quiet and still not be relaxed. It is possible to be in a state of lethargy which may be interpreted as relaxation but such a condition is no more than the effect produced by loss of equilibrium which lowers the frequency of the body cells and puts them in a state of partial coma. Such a condition is to be avoided for it is actually destructive. Relaxation does not include the creation of a mental vacuum or the cessation of action. It is the means by which the mortal consciousness releases itself to the greater action of the Cosmos and therefore should not and cannot produce a dormant condition in any part of the body. If a person is not aware of a finer and more intense activity taking place within his being he can assure himself that he is not relaxed but has merely dropped into a state of indifference.

153 リラクセイションは惰性状態のことではありません。人はとても静かであってもリラックスしているとは限りません。リラクセイションと解釈されるかも知れない無気力状態もあり得ますが、このような状態は肉体細胞の振動数を下げ、それらを昏睡状態にさせるような均衡を失ったことによってもたらされた影響でしかありません。このような状態は避けなければなりません。何故なら、それらは実際には有害であるからです。リラクセイションは精神的空白や行動の中断を作り出すようなことは含み得ません。それは死すべき意識が自分自身を宇宙のより大きな行動に解放する手段であり、それ故、身体のどの部分にも休眠状態を作り出すことはありません。もし、ある人が自分自身の中により精緻で、より激しい活動が生じていることを感知しないのであれば、その者はリラックスしているのではなく、単に無関心の状態に落ち込んでいるに過ぎません。

【解説】

真のリラクセイションとはどのような状態であるかを本項は説いています。とりわけ私達はリラックスを単純な弛緩状態、即ち何もかもへの関心を無くし、精神及び肉体は惰性のまま捨て置くものと考えて来ましたが、それは大きな誤りであることが分かります。

自身の身体や自然を観察すれば、世の中に静止しているものなど無いことが分かりますし、こうしている間にも私達の心臓は絶え間なく鼓動し、身体くまなく血液を輸送していますし、毎回の呼吸は私達の生命を支え続けています。

このように考える時、本来の宇宙的生命の流れは「活動状態」であり、それらに従うこと、その流れに逆らわずに従うことが最もリラックス出来る状態であることが分かります。もともと疲労するのはそれらの基本的流れに対して抵抗となるからであり、流れに乗る限り、無用な労力を費やすことなく、自由に自分の進路を進むことが出来る訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落154 [2016-04-22]

154 A person may quiet the body through a form of self-hypnosis, but this is not relaxation, for it destroys the free action of the body elements. The body is composed of tiny cells in each of which there is a spark of potential energy capable of unlimited radiation. This spark or nucleus within each cell is the animating energy of the body, but because the particles surrounding this central force are generally held in the tense state they act as barriers or resisters to the energy within. When this tense condition is released the outer substance composing each cell becomes receptive to the energy at its center and is set into a higher frequency through the action of the interpenetrating force.

154 ある人は自分の肉体を自己催眠の形を通じて鎮めるかも知れませんが、それはリラクセイションではありません。何故なら、それは肉体の構成要素の自由な活動を破壊しているからです。肉体は小さな細胞から構成されており、それら一つ一つの中に無限の放射能力が秘められたエネルギーの生気があるのです。この生気、もしくは細胞核は各々の細胞の中にあって、肉体の活動的エネルギーとなっています。しかし、この中央の力を取り囲んでいる粒子群が極度の緊張状態にあって、内側のエネルギーに対する障壁や抵抗になっています。この緊張状態が解放されると、各細胞を構成するその外側の物質は中央部にあるエネルギーを受け入れることが出来るようになり、その貫通する力の活動を通じて、より高次な振動数にセットされるのです。

【解説】

これまでは漠然と「生命力」とか「宇宙的活動力」とかと表現されて来ましたが、本項ではそれを具体的に説明しています。即ち、各細胞の核がその細胞を活性化させる源であり、細胞の英知の中心であるということかと思われます。

もちろん、今日の科学知識によれば、その核の内部にDNA等のいわゆる核酸成分が多く含まれ、細胞活性化の具体的な知識・情報が蓄積されていると解釈できます。

そのように考える時、大は私達太陽系惑星群の中心は太陽ですし、小は細胞の核、更には原子における原子核の役割も互いにシンメトリーな関係にあることに気付きます。

重要な点はこれら活動の源として「核」なるものが存在し、その指示に従い支えるのが周囲の者の役割であることです。従来はかたくなに受け入れられないでいたことが、「緊張」につながり、各細胞の老化に結びついていた訳です。私達はこのことを踏まえて、中心の核から発せられる活動的な印象波動を快く受け入れ、協働的になることが重要です。そのことが身体内部の不要な抵抗を無くし、健康を取り戻すことにも繋がります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落155 [2016-04-25]

155 Relaxation reduces the friction within the body by eliminating the resistance of one cell-form to another. For instance, if a large number of fish were placed in a very small bowl there would be constant friction due to the inevitable contact between them, and the action of each would be retarded because of the congested condition existing within the bowl; but if these same fish were released into a large
pool they would swim about easily without interference with one another. They would be in a position to use the potential energy which they possess. The cells in the body act in the same manner and it is the mortal sense mind which must release them for free execution of their purpose.

155 リラクセイションは、細胞と細胞との抵抗を取り除くことによって、肉体内の摩擦を低減します。例えば沢山の魚がとても小さな鉢に置かれたら、それらの間には避けがたい接触に起因する恒常的な摩擦が生じるでしょうし、各々の行動はその鉢の中の混み合った状況のため、遅らされることでしょう。しかし、これら同じ魚が大きな池に放たれるなら、魚達は互いに干渉されることなく、たやすく泳ぎ回ることでしょう。彼らは自分達が持つ秘めたエネルギーを用いる立場になることでしょう。肉体の中の細胞も同様な行動を取りますし、細胞もそれらの目標に向けて解放しなければならないのは、死すべき感覚心なのです。

【解説】

私達自身、活気があるとか無いとかと描写するのは、実はその人の身体の各細胞の状態から来るものであると思うべきでしょう。活発であるか否かは実は微細な個々の細胞の活動状況に由来しているのです。

通常、私達は心配事や不安定な感情の影響から、各細胞は不要なストレスを受けており、自由な行動が出来ないでいます。それが長く続くと細胞は耐えられず斃死したり、老化を早める訳です。しかし、本来の自由、新鮮な環境に置かれれば、以後は自由に自分を表現でき、若さを取り戻します。

実は人間以外の生きもの達はそのような生活を享受していることに気付きたいものです。小鳥や昆虫達が陽春の中、自由に飛びまわっている姿は、宇宙的な真の生き方を私達に身を持って示して呉れています。

リラクセイションはこうした本来の生き方に通じる心身の状態を表すものだと考えています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落156 [2016-04-26]

156 The average individual does not realize how completely he is bound and limited by his own opinions. Tenseness is wholly a condition caused by the personal ego; possessiveness, greed, fear, covetousness and self desires all produce a set and unyielding condition within the body. The person who is of a very positive nature finds relaxation a most difficult accomplishment, for relaxation consists of releasement and non-resistance. It is a natural state of being which should be maintained at all times but cannot be held by one who is absorbed in self interest only.

156 平均的な人間は自分が如何に自分自身の意見によって完全に縛られ、制限を受けているかが分かっていません。緊張状態は個人的なエゴによってもたらされた全くの状態なのです。所有欲、欲張り、恐怖、どん欲そして自己願望、これら全てが一派を作って頑固な状態を肉体内部に作り出します。とても独断的な性格の人はリラクセイションを最も達成が困難なものだと思っています。何故なら、リラクセイションは解放と無抵抗から成り立っているからです。それは常時保持されるべき自然な状態なのですが、自己の関心のみに没入している人には掴むことは出来ません。

【解説】

あらゆるものを受け入れる受容力が整わなければ、真の意味のリラックスは出来ないということでしょう。私達は長年、自己保身と自我の欲望によって自分自身を縛って来たのです。

その呪縛を解くにはまず、自我を解放・拡張しなければなりません。最初は抵抗があるかも知れませんが、自らの運命を宇宙に一切任せ、自身はひたすら湧き起こる印象類に従って行動し、その結果を観察するだけで良いのかと思われます。その過程で良さそうな結果が出れば、自分の方向は誤りないことが分かる筈です。

仏陀の昔より、如何にしてリラックス（自在な心境）に到達するかが求められ、またその道程が問われて来た訳で、仏陀も弟子達にその解決策を説いていたように思われます。

リラクセイションへの道は、多くの人々が願っていることでもあり、今私達はその鍵となる教えに接していることになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落157 [2016-04-27]

157 In the beginning, man dwelt in the state of contentment and relaxation for he knew no "thine and mine" - he was guided totally by the Father and his every conscious thought was executed freely and perfectly in its pure state of perception. It was only when man set up resistance to free-action that he became tense; the results of which are pain, disease and death

157 原初において、人は満足とリラクセイションの中で暮らしていました。何故なら、「貴方のものと私のもの」という概念を知らなかったからです。人は父によって全てを導かれ、人が意識するあらゆる想念は、その純粋な感受の下、自由かつ完全に実行されていました。人が緊張状態になったのは、唯一人が自由な行動に対して抵抗を打ち立てた時なのでした。そしてその結末は苦痛、病そして死なのです。

【解説】

幸福とはどのようなものか、私達はじっくり考える必要があります。人々は幸福を求めて各自の人生を歩んでいるのでしょうが、実際、終生時にあたってそれらが満たされたかどうかは、心もとないのではないでしょうか。

しかし、自然界を見ると若干様子は違います。現在、この文章を記述しているのは４月下旬ですが、木々はさっそうと芽吹きを始め、その新緑の葉に卵を産む為に、モンシロチョウはパートナーと舞い踊ってカップルを遂げています。

もちろん、これらは誰かに強要された訳でなく、自分達で適切な時季の到来を感じて行動している訳ですが、そこには自然への信頼が背景にあることでしょう。彼ら自然界に生きる者にとって全ては自分のものであり、同時に他人のものでもあるのです。つまりは自分の所有物はなく、常に「借りている」ものではないかと思われます。その借り物の中で自分の子孫を残し、存続させる必要がある訳で、唯一自分の身体一つを拠り所として、一生を自然の中で過ごす訳です。またその一生は人間に比べて非常に短いものであることは皆さまご存知の通りです。

本項においては、人間の全ての緊張状態の源は「自分のもの」と「他人のもの」との所有の区別にあるとしています。それ故、古来から全てを捨て去り、即ち「自分のもの」を無くすことが必要だと説かれているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落158 [2016-04-28]

158 When relaxed one is flexible and receptive to unlimited conscious energy which is free to all who draw upon it. Life and energy are limitless but we can have only as much as we are willing to accept.

158 リラックスしていると人は柔軟になり、それを求める全ての者に自由に与えられる無限の意識的エネルギーを受け入れられるのです。生命とエネルギーは無限ですが、私達は受け入れようとするだけしか得られないのです。

【解説】

リラックスしない限りは、宇宙からの新鮮・有益な印象を感受することは出来ません。スポーツマンの多くは競技の始まりに当たり、如何に不要な緊張状態を解消するかに取り組むものと思われます。

同様なことは、日常の私達にもある訳で、一つの事柄に執着している間は、自由にアイデアが湧き起ることはありません。芸術家がその作品制作に取り掛かる際、先ずはその下準備として気持ちを鎮め、創造主と近づけるよう心境を整えることから始めるのと同様でしょう。

ひとたび私達が自身の心境を適切なものにコントロールし、あらゆる事態に対応できる状況に心身を整えれば、あとはやって来るアイデアを待つだけになります。

そのいずれにせよ、心身の状況が受容的になれば、自ずと想念・印象の自由な出入りがあることになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落159 [2016-04-29]

159 The people on Venus live this law and thereby do not have to endure the unpleasant conditions that we must contend with on earth

159 金星の人々はこの法則に生きており、それ故、地球で私達が向き合わなければならないような、不愉快な状態を耐え忍ばなければならないということはありません。

【解説】

いわゆるアダムスキー哲学というものが単に真理の教え、ある種の思想・哲学の一つとして打ち出されていたとすれば、もっと大衆に受け入れられ易く、その信徒も多くなったのかも知れません。

しかし大切なことは、その教えの内容は単にある優れた人物が見出したセオリーというものではなく、現実に他惑星社会で生かされ、実践されているということでしょう。特にアダムスキー氏自身の体験として金星や土星の人々と交流して得た知識が基礎となっている点は見逃せません。

現時点においても、金星や土星に生命があることすら地球上ではタブー視され、隠ぺいされていますが、いつかはその現実に向き合う時も来ることでしょう。同じ人間が何故かくも異なるのか、アダムスキー氏の著作を見て、他惑星社会と地球との差異を嘆く者も多い訳ですが、その差異の最大の要因が本項にあるように、他惑星ではこれら生命の科学とも言うべき諸法則を身をもって行動している点にあるということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落160 [2016-05-02]

160 Man is capable of expressing the fullness of life but he must become non-resistant to cosmic energy if he would have it express through him. He has lost the true course of action by exalting the personal ego; he has created the habit of believing that all accomplishment is brought about through the exertion of personal effort. He fatigues himself unnecessarily by trying to force conditions which will come about perfectly in a natural way if allowed to do so. Much energy is wasted because of personal dominance. It is difficult for the mortal to understand that impersonal non-resistance allows a free flow of energy, that in peace there is more intense activity than in friction. Man has become so aware of the coarser frequencies that he cannot realize action in its finer, more quiet and peaceful state. One who does live the non-resistant, receptive attitude has found the highway of true happiness, for he knows no fatigue, no pain, no disappointment.

160 人は生命の完全さを表現できる能力を有していますが、それを自分を通じて表現するには、宇宙エネルギーに対して無抵抗にならねばなりません。人は各自のエゴを高ぶらせた結果、真に歩むべき行動の道を見失ってしまいました。人は全ての達成物は各自の努力の行使を通じてもたらされると信じる習慣を作り出してしまいました。人はもしそうすることが許されれば自然と完璧に訪れるような状況に対して、無理強いすることで、不必要に自身を疲労させています。より多くのエネルギーが個人の優位のために浪費されています。死すべき者にとって、非個人的な無抵抗がエネルギーの自由な流れを与え、平穏の中には摩擦状態よりはるかに強烈な行動があることを理解するのが難しくなっています。人はより粗雑な振動に対してあまりにも敏感になってしまったため、より精緻でより静かな平穏な状況における行動を知覚することが出来ないのです。こうした中、無抵抗で受容的な態度で断固生きる者は真の幸福の王道を見つけています。何故なら、その者は疲れや痛み、失望を知ることはないからです。

【解説】

同じ肉体構造を持つ他惑星人が何故私達地球人より豊かに、また驚異的に高いレベルの生活を営んでいるか、本項ではその理由を指摘しています。

即ち、肉体である以上、様々な限界もある訳で、その点は私達地球人とも同じ訳です。唯一の違いは彼らはある意味疲れることなく、活動を行うことが出来ることです。私達はガムシャラに働き、苦労を重ねる訳ですが、その結果多くの場合には、うまく事が進まずに挫折したり、心身共に疲れ切ってしまうものです。

しかし、彼ら他惑星人はもっと自由、伸び伸びとした心境で、心配や無用の努力をすることなく、因からの印象による指示に従って適切な時、適切な状況の下、ベストタイミングで事を成すことで、最小限のエネルギーで物事を達成してしまうということでしょう。

それを可能とする為には、決して自我の視点からでなく、全ては因の指示、即ち宇宙を貫く創造主の意思を印象を介して察知し、それらに従うことが必要です。テレパシー能力により先を見越すこと、繊細は印象世界に気付いていることがある訳です。

既にお分かりの通り、一度これらの存在を悟ったからと言って、その瞬時の体験で留まっていてはならないのです。その後、その心境を自らの実生活に活かし、周囲の者にも感化影響を及ぼすことが望まれています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落161 [2016-05-03]

161 The idea that one must become strenuous in outward action or must display an appearance of great personal effort in order to accomplish outstanding things is a false belief. The person who reaches the greatest heights of accomplishment is he who holds all of his actions in a serene and peaceful state, recognizing the fact that he is not the instigator or projector of intelligence but only the form through which it flows into manifestation; and the more fully the recipient is cleared for action the greater the action will be.

161 人は顕著な物事を達成する為には、外に向かっての行動に奮闘し、或いは大いなる個人的な努力をしている姿を示さなければならないとする考えは誤った信念です。最高位の達成に行き着いた人は、自らの行動を澄んで平安な状態に維持し、自らを英知の扇動者や計画者としてではなく、自分が創造物に流れ込む形あるものでしかないという事実認識をしている者です。そして受容者が行動の為、より完全に空になればなる程、より大いなる行動が起こることになります。

【解説】

ここでの教え、即ち何故リラクセイションが必要かについて説かれた部分は、浅学の身ですが、何か般若心経等、仏陀の教えの「空」を想起させます。私達は自らの、即ち自我の力量で成し得る事柄は実に大したものではありません。より大切な物事の達成には内なる因から湧き起る印象を体現、実践することによって初めて成されるという訳です。

その為にも、絶えず自分というものを落ち着かせ、印象の到達に気付くことが出来るよう、監視・警戒しておく必要があります。自分の意見で心を満たしてしまっては、それらを受け入れる余裕も無くなるのです。

私達はやって来る印象の表現者であり、楽器のようなものでしょう。楽器自体で音楽を奏でることは出来ませんが、優れた音楽家があやつれば、絶妙な調べが奏でられることになります。

その為には、楽器自体の整備はもちろん必要ですし、いつ演奏家が来ても良いように普段から備えておく必要がある訳です。

「空」という仏教の概念は本章で言うリラクセイションに繋がるように思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第14章 段落162 [2016-05-04]

162 It is not the exertion of the personal will but the releasement of the personal to the impersonal will which brings increased energy and wisdom into our lives. We need only to remove the barrier of "self"-ishness and a tide of understanding will flow in and through our being until we become immersed in its activity

162 エネルギーの増加と知恵を私達の生活にもたらすのは、個人的意志の行使などではなく、個人的意志の非個人的意志への解放によって行われます。私達は只、自己中心的障壁を取り除くだけでよく、そうすれば理解の潮流が流れ込むようになり、遂には私達を通じてその活動の中に没入することになります。

【解説】

他人から命じられたり、自分の意志を失って自我が消滅した上での自我の放出ではなく、自分の意志として、自ら進んで自我を大海の中に融和浸透させることが重要だということでしょう。リラクセイションという心境はその為に無くてはならない条件という訳です。

今まで私達は自分の力で努力し頑張れば物事は達成出来ると励まされて来た訳ですが、本章を学んで見るとどうもそれは真実ではないようです。もちろん習慣に流され怠惰な生活を勧めるものではなく、日々努力すべきは自身の心の頑迷さを削り取り、より多くの印象を感受出来るような態勢に自分自身をもって行くことです。

因からの印象の流入が盛んになれば、日々の進歩は間違いありません。”他力本願”の真意もそこにあるものと思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落163 [2016-05-05]

15 THE LANGUAGE OF THE COSMOS
163 In recent years there has been a greater trend towards the brotherhood of man than ever before in the history of this civilization. The advent of radio, television, etc., have united the world into a common relationship. There has been much discussion among the learned men of every nation regarding the possibility of formulating a common language so that intercourse between peoples of different nations may be facilitated.

第１５章 宇宙の言語
163 近年、この文明の歴史の中でこれまで以上に人間の兄弟愛に向けてのより大きな傾向が生まれています。ラジオやテレビその他の到来は世界を共通の関係に結びつけて来ました。異なる国々の人々の間での交流を促進できるよう、共通の言語を形成する可能性に関し、あらゆる国の学者達の間で沢山の議論がなされました。

【解説】
移動手段や情報連絡手段が限られていた昔は山一つ離れた村とも互いの行き来は少なく、ましてや海を越えた国々とは全く異なる世界であり、異民族、異文化の世界とみなして来ました。
しかし、昨今では容易に諸外国にも出かけられ、ビジネスでも相互依存が急速に進行しています。
以前にも書いたことですが、アダムスキー氏は生前、これからの世界共通語はアメリカ英語になると言明していたことがありました。当時、私はある高校でドイツ語か英語を選択する時期だったのですが、この言葉を受けてその学校の特色（ドイツ語）をやめて、英語を選択したことを覚えています。
果たして、半世紀後の今日の世界、ほとんどの場面では英語によるコミュニｋーションが一般的となっており、アダムスキー氏の指摘が証明されたことになります。
さて、このような延長線上にあるもの、即ち人々の交流が進むと必然的に共通語が必要だとする認識が生じることは、今後も高まるものと思われます。更に人間のみならず、植物や動物達など身近な生き物達との交流、他惑星との交流等においては、印象による交流、テレパシーへと道は続いています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落164 [2016-05-06]

164 Although few men are aware of its existence there is a universal language - a language which includes not only the expressions of man but that of every living thing; a language so simple that even a new-born babe can understand

164 ほんのわずかの人しか、その存在に気付いていませんが、宇宙普遍の言語は存在するのです。人間による諸々の表現のみならず、あらゆる生きものの表現を含んだ言語で、あまりに簡単なため、生まれたばかりの赤ん坊さえ理解することが出来ます。

【解説】

実は宇宙には全ての生きものが分かりあえる共通言語があるという訳です。その存在に気付いていないのは、音声言語にのみ依存している人間だけかも知れません。

既に私達はこの一連の講座で、想念・印象による意思の交流について学んで来ました。本章では、更にその持つ意義を学ぶことになります。

想念・印象の感受には何らの知識は不要です。生まれたばかりの赤ちゃんですら自在にその能力を発揮できるのです。言葉を未だ学んでいない赤ちゃんは相手がどのような気持ちを持っているか、大人以上に鋭敏に感じ取れます。それ程にテレパシーは簡素な基本能力ということでしょう。

あらゆる生きものには共通にこれらの能力が備わっており、私達が素直になり、自らの心を本来の素朴無垢な状況に解放すれば、自ずとその能力も現れて来るというものです。自然界で遊ぶ生きもの達は、この印象感受、宇宙の言語を活用することによって、厳しい環境の中でも実に楽しく毎日を送っているのではないでしょうか。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落165 [2016-05-09]

165 We have conceived the idea of a universal language among men because we are aware of being able to understand the human voice and have developed the habit of expecting the voice of man to interpret for our benefit the thought which passes through his mind, but we have not included in our efforts of unification any but the man kingdom. Why should this be so, for are the sounds which make up the various languages so different than those of nature itself? As the different races of men speak with various sounds and combination of sounds; each form of life in this world does the same, yet we do not seek to understand them. Man has limited himself to one phase of life and has closed the door upon the vastness of the Cosmos. This is due to the fact that he has given recognition only to the mortal senses which gain their impressions from outer things. He expects to hear only those sounds that are coarse enough to affect the physical organ of hearing and so he loses the ability to interpret the cosmic language as a whole. And what is this cosmic language? It is conscious feeling - the voice that speaks through every form and which, therefore, unites All into an inseparable unit. There is nothing in the cosmos that cannot speak to man with the voice of conscious feeling and there is not one thing that cannot understand that language. It speaks as clearly through the smallest thing as it does through the greatest.

165 私達は人間の間にある宇宙普遍の言語についてのアイデアを思い付いて来ました。何故なら私達は人間の声を理解出来、自分の心を通過する想念を私達のためになるよう翻訳しようとする習慣を発達させて来たからです。しかし私達は私達の統合化の努力を人間界のみに留めて来ました。何故そうなってしまったのでしょう。様々な言語を作り上げる音は自然自体の音とは違い過ぎるからでしょうか。様々な異なる人間は異なる音や音の組み合わせで話しますし、この世界の各々の生きものも同じことをしますが、私達は彼らを理解しようとはしません。人は自分自身を生命の一つの側面に限定させており、宇宙の広大さのドアを閉めているのです。これは印象を外部のものから得る死すべき感覚のみに認知を与えて来た事実によるものです。人は肉体の聴覚に影響を与える程の粗い音声のみを聞き分けることを期待しており、その結果、全体としての宇宙的言語を翻訳する能力を失っています。そしてこの宇宙的言語とは何でしょうか。それは意識的フィーリング、あらゆる形あるものを通じて語られる声であり、それ故、全てを離れられない単位に結びつけるものです。それは、最も大きなものを通じるのと同様に、最も小さなものを通しても明確に話し掛けています。

【解説】

宇宙普遍の言語は音声によるものではありません。また、あらゆる生きものが自身の音声による表現の他に想念・印象の相互交流を行っており、私達地球人もその印象によるコミュニケーション能力を発達させることが出来れば、人間通し互いにその意思を理解出来るのみならず、他の動植物とも同じ生きもの同志共通の一体感や意思疎通を図れるものということでしょう。

このことは、もし皆様のご自宅に犬や猫を飼っている方があれば、それらは家族の一員として、用いる言語は異なっても互いに理解し合えることはお分かりだと思います。相手が何を感じているかが分かる程、想念・印象は生きもの同志、容易に感じ合えるものだと思われます。

問題は私達の側にあって、そもそも宇宙普遍の言語を新たな音声言語を造り出そうとすることに無理があるということでもあるのです。私達の既存の四感覚に頼らず、本来の印象への感受性に目標を置いた取組が重要だということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落166 [2016-05-10]

166 You are related to everything in the cosmos. The language of consciousness is spoken by all, and if you will be continuously aware of this fact the time will come when you will understand every living thing. The leaves upon the trees, the chirp of the birds, the croak of the frog, the hum of the bees - all will speak to you and you will understand life as it manifests through each individual channel. Every slightest sound will become a voice no different than the voice of another human and you shall partake of the consciousness of each thing that lives.

166 貴方は宇宙の中のあらゆるものと関連しています。意識の言語は全てのものによって話されており、貴方がこの事実に絶え間なく気付いていれば、貴方があらゆる生きものを理解する時が来ることでしょう。木々の葉、鳥達のさえずり、カエルの鳴き声、ミツバチの羽音、これら全てが貴方に話し掛けるようになり、貴方は各々の経路を通じて生命が現れることにより生命を理解するようになるでしょう。一つ一つのわずかな音が他の人間の声と何ら変わらない声になることでしょうし、貴方は生きるものの意識を分かち合うことになる筈です。

【解説】

既に本シリーズを学んで来た多くの皆様は、本項で著者が説く”意識状態”について、何らかのイメージを掴んでいるものと思います。とかく”意識”という場合、難しい哲学概念のように思われますが、実は違います。赤ちゃんでも分かる程、シンプルなものと言えるものです。日常、私達自身の中にあるもので、もちろん形は無く、自由自在に自ら望む場所に移動でき、相手と容易に融和出来るような存在かと思います。

その意識こそが実は生命を根本的に支えるという大きな力を持っている訳で、本項で言えば、鳥のさえずりに私達が気付けば、それと同時に意識がその声を発するものと融和し、互いに理解出来るという具合です。

今までは自らの心が頑なで、自分の関心事以外には無頓着であった私達がより広い自然の中にも大切なもの、美しい存在があることに気付き、それらに心を開く時、同時に私達の意識もそのものと一体、融和することが出来、互いの理解が深まるようになるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落167 [2016-05-11]

167 Why is one affected by music, for instance? It does not speak words as a human speaks and still one melody will produce a feeling of great joy, another of sadness, and still another will carry one into a state of exaltation. It effects a person who has never studied the science of harmony just as it affects the one who is a musical master. Music is a universal language for it is interpreted through the Cardinal Sense of Feeling.

167 例えば何故、人は音楽によって影響を受けるのでしょうか。音楽は人間が話すような言葉を語ることはありませんが、それでも一つのメロディーは至福感を作り上げ、他のメロディーは悲しみを、そして更に別のものは聞く者を高揚感の中に導きます。それは和声学を学んだことのない者も、音楽の巨匠である人に作用するのと同様に影響を受けるのです。音楽とはフィーリングの中枢感覚を通して翻訳されるが故に、一つの宇宙普遍の言語と言えるのです。

【解説】

宇宙普遍の言語について、私達は既に知らず知らずの内に少しは活用しているのだと思います。本項に説かれているように、音楽は誰でも共通に理解することが出来ますし、絵画、その他も同様でしょう。実は私達の生活のかなりな部分が音声言語以外の意思疎通、相互理解が行われているのです。

そのメカニズムについて、著者は音楽を聴いた際に自身の中のフィーリングという中枢感覚を通じて音楽波動が解釈されるのだと説いています。つまり重要な点は、確かに耳（鼓膜）を経由して音が伝わる訳ですが、それらの「音」を「音楽」として解釈するにはフィーリングという本質的な感覚による解釈が必要だという訳です。

感覚器官から伝達される単なる信号を如何に解釈するかは、このフィーリングの機能だということです。一方、私達は元来知らない内にこの機能を用いている訳で、いわば誰でも生まれながらにこの機能を有していることになり、それこそが宇宙普遍、万物共通の意思疎通の源となっているということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落168 [2016-05-12]

168 Why is one very joyful in the springtime and vibrant with life? Why does the feeling of quiet releasement come with the fall of the year? Because nature speaks the cosmic language and man, though he realizes it or not, understands that language and is affected by it.

168 何故、春に人はとても楽しく生気に溢れるのでしょう。何故、秋とともに、落ち着いた解放感がやって来るのでしょうか。それは自然がその宇宙的言語を語っており、人は認識するしないにかかわらず、その言語を理解し、それに影響を受けているからです。

【解説】

私達も知らない間に、この宇宙普遍の言語に多少は気づき、影響を受けているということでしょう。自らの心が自我の束縛から解放され、広く受け入れる態勢になった時、私達には更に多くの宇宙的印象が湧きだし、宇宙を理解することが出来ることでしょう。

人間以外の生きもの達は日常的にこれらの知覚作用を活用しており、本項にあるように春の芽吹きや秋の落ち着いた雰囲気を直に感じ取り、必要な準備を進めるのです。彼らは十二分に季節の恵みを享受しているという訳です。

しかし、一方地球の人間達はどうでしょうか。自らの主義・主張との些細な違いから相手と殺し合いの戦いに明け暮れたり、文化財を破壊したり、凡そ宇宙的調和と反対する行為を続けています。結局は自我の行き着く先はそうした争いでしかないのです。まさに自滅の道という訳です。

これに対し、宇宙普遍の言語は永続する調和を象徴するものです。今日的にはsustainable（持続可能）な要素が溢れています。過度な努力を不要とし、適宜適切な行動を起こすよう呼びかける印象の声という訳です。私達はインスピレーションを絶えず受けることによってのみ、進化を遂げることが出来ます。”野のユリ”はこうした姿を象徴するものでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落169 [2016-05-13]

169 If it were not true that a universal language exists how is it possible to train animals to act according to man's command? Even a little insect like the flea can be trained to perform perfectly. It is certainly not the human voice or the words spoken in French, English, Spanish or any other tongue that guides their actions; it is the voice of conscious feeling which speaks more clearly than any audible word.

169 もし、宇宙普遍の言語が存在するということが真実でなかったとしたら、どうやって動物達を人間の命令に従って行動するよう訓練することが可能となるのでしょうか。ノミのような小さな昆虫でさえ、完璧に演技するよう訓練され得るのです。彼らの行動を導いているのは人間の声、或いはフランス語、英語、スペイン語その他の言語で話された言葉ではないことは確かです。それは耳に聞こえる言葉よりも更にはっきり話される意識の声なのです。

【解説】

分かりやすく言えば、”気持ちは伝わりやすい”ということでしょう。個別の音声言語は習得に多くの努力を要しますが、”気持ち”（想念・印象）は実に容易に相手に伝わるものです。本項に例が掲げられている動物の調教の場合などは、如何に種を超えて意思交流が行われるかと示すものです。

実際はむしろ人間以外の動物の方がこうした想念・印象を察知できるものと思われます。相手の心情を鋭敏に感じ取る能力は、私達がペットに癒される等の実例からも良く分かります。

こうした想念・印象への心の解放こそが、これからの私達の努力の目標であり、心の解放が進むにつれて、多くの印象が心に湧き上がることとなります。従来は途中で挫折していたであろう状況においても、心は余裕を持って次なる打開策の提案を印象から得ることが出来るからです。多くの発見が生まれるでしょうし、その結果、無用な心配事は消え失せ、宇宙への信頼が増すことになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落170 [2016-05-16]

170 The language of the cosmos is the vibration or frequency of sound, of light and of thought. It is all one voice - the great voice of feeling. It speaks with deep reverberation in the thunder and it speaks in the silence of our deepest repose.
170 宇宙の言語は音、光そして想念の振動ないし周波数です。それら全ては一つの声、フィーリングの大いなる声です。それは雷鳴の深い反響と共に、また私達の深い安らぎの沈黙の中でも語っています。

【解説】
宇宙普遍の言語とは波動であると本項は説いています。人の発言や動物の鳴き声、その他想念も含めあらゆる意思の表現の背景には波動があり、その波動こそが基本的な意識伝達機能を持っているという訳です。
よく若者が音楽プレーヤーを片時も離さず聞いている姿を目にしますが、音楽に惹かれる原因はそれが伝えたい意思に共鳴するからかも知れません。音楽は聞く者の心を同調させる力があるように思われます。
一方、多くの方は同乗記の中に宇宙船内でアダムスキー氏が様々な変動するグラフィックスを見たことを覚えていると思いますが、他惑星の人々はこれら波動を計器で検出し、応用する装置を既に有しているということでしょう。
私達が自らの意見を言葉で相手に伝えようとする時、その発生と同時に想念も発せられ、それら全てが波動となって相手に伝達されます。それら波動を受け止め同調して理解出来るか否かが宇宙普遍の言語の取扱い能力になります。日本には「言霊（ことだま）」という概念がありますが、言葉を発すると同時にこれらの波動が空間を伝搬し、様々な作用をもたらすこと、言葉にはこうした実現力があることを古くから戒め、自らの想念を正すよう教えていることにも通じる内容です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落171 [2016-05-17]

171 Man's greatest power lies in his recognition of this cosmic language, for when he realizes that every tiniest atom is able to comprehend the language he speaks he will impersonally command with greater certainty and all lesser forms of life will obey him. Man, himself, will rise to vaster heights of accomplishment for he will know the greatest and the smallest and can guide them into united action.

171 人の最大の能力はこの宇宙的言語の理解の中にあります。何故なら人があらゆる最小の原子は人が話す言葉を理解することを理解するや、人はより大いなる確かさで非個人的に命令を下すことでしょうし、人より下位の全ての生きものは人に従うだろうからです。その結果、人は自分自身、達成のはるかの高みに昇ることでしょう。人は大いなるものも小なるものも合わせて知り、それらを結束した行動に導くことが出来るからです。

【解説】

最近は仕事上、ラオスに行く機会が多くなっており、現地では休日に仏教寺院を訪れることを楽しみにしています。その中で目にしたものに本項で説かれた内容に近いことがあります。

多くの寺の建物の壁や天井には、いわゆる仏陀の一生や逸話を表現した色鮮やかな絵画が描かれています。その絵を見れば文字が読めなくても仏陀を巡るその逸話の内容が良く分かるようになっているのです。

その中に仏陀があらゆる生きものを従えさせる能力を有していたことも大きなテーマになっています。大蛇や象を従えさせたり、歩く足跡から次々に花が咲いた等々の事柄が描かれています。

実はこうした事柄は、これまで仏陀の持つ奇跡と思われて来たのですが、本項を読めばそうではなく、私達自身、宇宙普遍の言語を理解すれば、各原子達もそれに従い、私達の指令に従うという訳です。互いに理解し合えることになれば、協力出来ることは普遍的な原理なのです。
かつて仏陀が自らやって見せた事柄の意味を後世ようやく理解する段階に至ったということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落172 [2016-05-18]

172 We have spoken about this language as it expresses through the medium of sound, which is one of the lower voices of consciousness, but let us now consider thought. Here we have taken a step higher for through this form of communication we have eliminated time and space. Through the medium of thought we are able to speak to another although we are thousands of miles away and the contact is made almost instantaneously. Through this means of transmitting a message we can contact another person even though their body is in the state of sleep. Conscious thought is a messenger that works unhampered by time, space or conditions.

172 私達はこの言語というものについて、意識の低次な声の一つである音の媒体を通じて表現されるものとして語って来ましたが、更に想念を考えて見ましょう。ここでは私達は一段高いステップに立っています。何故ならこのコミュニケーションの形態を通じて私達は時間と空間を取り払っているからです。想念の媒体を通じて私達は何千マイル離れていても他者と話すことができますし、その接触はほとんど瞬間的に行われます。このメッセージを発信する手法を通じて私達は相手の肉体が睡眠状態にあっても相手と接触することが出来ます。意識的想念は時間や空間、あるいは状態に妨げられることなく働くメッセンジャーなのです。

【解説】

宇宙普遍の言語とは、音声言語ではなく、更に高位な位置づけにある想念・印象であると本項は説いています。注目すべきはこれら想念について、本項では実に優しく解説されていることです。

つまりは、著者は私達が想念・印象を従来の声に代わって用いる”言語”にすれば、その作用ははるかに容易に相手と意思疎通が図れるものとなると説いているのです。距離は関係なく、瞬時に相手に伝わりますし、仮に相手が寝ていても想念・印象は相手に伝達されます。”夢のお告げ”や”まさゆめ”等がそれです。

重要なことは、これら想念・印象を取り扱う機能は生きもの全てに最初から授けられているということです。従来の自分達が作り出した音声言語より、はるかに使い易い想念・印象のコミュニケーションが、私達にもたらす恩恵は計り知れません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落173 [2016-05-19]

173 It has been said that such form of communication cannot be relied upon but that is untrue. We are being guided constantly by the voice of conscious thought, whether projected from a cosmic source or through a personal channel. There is no man who is not to some extent aware of his power of intuition which is nothing more or less than the voice of consciousness.

173 このようなコミュニケーションの形成は信頼できないとされて来ましたが、それは真実ではありません。私達は宇宙的源泉から投影されたものにせよ、個人的な経路からにせよ意識的想念の声によって常に導かれています。意識の声以外の何物でもない自らの直観力について幾分かも気付いていない者は誰一人居ないのです。

【解説】

昔、この道の先輩から、”直感に従って間違ったことはない”というお話を伺ったことがあります。多くの発見や多数の芸術作品がこの瞬時に訪れ、最終形を直接私達に授ける直感から生まれました。この”直感”こそが本項で説かれている宇宙的な源泉から来る想念であり、意識作用を持つものです。

また、これらの要素は実は日常的にわずかではあるものの、私達自身が既に活用しているという訳です。

とかく心は理屈を求める為、一つ一つの根拠を探し回る訳ですが、それでは検討するケースの数が増えるだけで、効率的ではありません。しかし、直感として私達が認識する想念・印象は直接、最終的な答えのみを私達に授けるように思います。その為、直感に従えば私達は無駄な努力せずに済むという訳です。

もちろんその為には、先ずは直感を授ける源泉を信頼出来ることが条件となり、何一つ疑いなく直感に従えるかがポイントになります。その際、いろいろ失敗も得るでしょうが、その時の誤りについてどのような心境が原因であったかを学習して行けば良くいのです。常に心を解放し、精妙で素早い印象の流れに鋭敏な存在になる必要があります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落174 [2016-05-20]

174 When the Christ, made the statement, "I and the Father are one" He was professing absolute knowledge of the cosmic language, for the Father is All and how could the Christ be one with all unless he was able to enter into communion with it and acknowledge his relationship to it.

174 キリストが「私と父とは一つだ」と述べた時、キリストは宇宙的言語についての絶対的な知識を持っていることを明かしたのです。何故なら父は全てであり、キリストはその中に一体化して入って行き、自分とそれとの関係を自覚していなければ、どうして全てと一体になることが出来ることになるのでしょう。

【解説】

イエスも仏陀も同じ心境に達していたことでしょう。本項では私達のゴールの目的地を明確に示しています。本章のテーマである”宇宙の言語”とは、その源泉には創造主・父とも言うべき存在があり、その存在と如何に密接な関係で居られるかが、鍵（カギ）ということになるでしょう。

この場合、イエスは「私と父とは一つだ」と言い切っているのです。それほどに宇宙の源泉を理解し、身近に感じられる状態に至っていたという訳です。

私達は日頃、この父に助けを求めながら、父の元に心を寄せて、人生を歩んで行くべきで、単なる一時的な能力開発を目指してこの精進の道を歩むべきではありません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第15章 段落175 [2016-05-23]

175 The Great Ones who have performed so-called miracles in the controlling of elements could not have done those things if they had not understood the language of feeling and realized that every living thing also possessed the same awareness. Intuition in man, instinct in animal, affinity and attraction of atoms in matter are all evidence of the cosmic language. Every smallest frequency in the whole system is a word spoken by the voice of consciousness and when man has alerted his mortal sense mind to the place where it becomes aware of even the slightest motion of energy he will have torn away the veil of mystery that separates himself from the Cosmic Halls of Wisdom.

175 元素群を制御する中でいわゆる奇跡を演じた偉大なる者達は、もしフィーリングの言葉を理解せず、あらゆる生けるものもまた同じ知覚を有していることを自覚していなければ、そのようなことを成し遂げられはしなかったでしょう。人間における直観、動物における本能、物質における原子の親和性と引力は全て宇宙的な言語の存在の証です。全体体系の個々の最小の周波数は意識の声によって語られた言葉であり、人が自らの死すべき感覚心をほんのわずかな動きのエネルギーにも気付ける場所に注意を喚起する時、人は自分自身を宇宙的な智恵の感覚から切り離して来た神秘のベールを引き裂いていることでしょう。

【解説】

実に世界は波動に満ちており、その波動の各々が意識の声を伴っているという訳です。

以前にも、私達は宇宙を構成している原子の一つ一つが知性を持っていることを学びましたが、それら原子が印象を波動で伝え合い、互いに一体化しているのです。

もし、そのことに私達が気付けば、その効果は比類ない大きなものとなる筈です。悠久の昔から存在し、記憶を蓄積している原子から、その問題の解決策を学び、また遠隔地の存在からも素敵な情報を得られるからです。

このように私達が自らの心を解放し、身の回りに溢れる波動を感受し、あらゆる生きものと親しくなることが出来れば、もはや何ものも必要とせず、満ち足りたそして充実した人生を歩むことが出来るというものでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第16章 段落176 [2016-05-24]

16 THE CHEMICAL UNIVERSE
176 There is nothing in this world that does not speak the universal language and reveal the secrets of the Cosmos if we are alerted to the frequency of that which we observe. It is through this small world of ours that we can gain our understanding of the cosmos, and such knowledge can come through unceasing research regarding the elements which compose our earth, atmosphere, and the various forms upon the earth.

第１６章 化学的な宇宙

176 私達が観察するものの周波数に私達が鋭敏であれば、この世界で宇宙普遍の言語を語り、宇宙の神秘を明かさないものは何一つありません。私達が宇宙の理解を得ることが出来るのはこの私達の極微の世界を通じてであり、こうした知識は私達の大地や大気、そして地上における様々な形あるものを構成する元素に関して絶え間ない研究を通じてもたらされることが出来るのです。

【解説】

本項で注目すべきは、”極微の世界”を通じて全宇宙を理解できると説かれていることです。端的に言えば、身近な自然の生きもの達への観察や自身の身体の働きを考察することによって宇宙を貫く原理・法則を知ることだということです。

もちろん、その奥には極微な原子の持つ知性と接し、それらから発せられる宇宙普遍の言語である想念・印象を知覚することで、自らもその宇宙の真の構成員となることが出来るという極意があることでしょう。

その為には、先ず、本文にあるように、私達が接するあらゆる”波動”に対し、それが含有するメッセージを同時に感受することが必要になります。優れた感性こそがその者の進化を導く源という訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第16章 段落177 [2016-05-25]

177 The Cosmos is ever active, constantly changing, and regardless of how little interest the average layman has in scientific subjects there is not one individual in the world who is not conscious of that ceaseless activity which is going on about him every moment. The growth of flowers and trees, the falling of rain and snow, the evaporation of liquids, the expansion of metals under the influence of heat and their contraction under cold, the fermentation of vegetable matter, the oxidation of minerals, the perpetual construction and disintegration of forms cannot possibly escape the attention of even the least observant of men. If we were to carefully gather all the gases that rise from a burning log and the ashes that were left after the fire had done its work we would find that nothing had been lost in the process of transmutation. There is no such thing as total destruction. The religionist looks more or less indifferently upon all of this changing phenomena, labels it the "work of God" and accepts at its surface value but the men of science have gone beyond the surface and uncovered the interesting and illuminating fact that life as a whole is the effect of an eternal process of chemicalization and that in the knowledge of Cause chemistry lies the victory over life and death, creation and recreation, joy and pain. The universe is nothing more or less than an immense chemical laboratory in which elements are combining constantly to produce the innumerable forms of expression or manifestation. The water, fire, earth, air, and the inconceivably fine ethers above the atmosphere of the earth are all chemical compositions. Light and darkness, love and fear are all chemical reactions.

177 宇宙は永久に活動的であり、常に変化し、平均的な通常人が科学的課題に対して如何にわずかしか関心を持たなかったとしても、自分について毎瞬起こっている休むことのない活動について意識しない者は、この世界に誰一人居ません。花々や木々の生長、雨や雪の落下、液体の蒸発、熱の影響下の金属の膨張や寒さの中でのそれらの収縮、植物性物質の発酵、形あるものの永久的な形成と分解は皆、どんな鈍感な観察者の注目をも見逃されることはあり得ません。もし、私達が燃える丸太から立ち上る気体を全て集め、火がその仕事を終えた後に残った灰を注意深く集まるなら、私達はその変質過程において何一つ失われたものが無いことに気付くでしょう。完全な破壊というようなものは存在しないのです。宗教家はこの変化の現象の全てを多少とも無関心に眺め、それを「神の御業」とレッテルを貼り、表層的な価値を受け入れますが、科学に根ざす人はその表層を越えて、全体としての生命は化学作用の永遠なる過程の結果であることや宇宙的化学の知識の中に生死や創造と再生、喜びと苦痛を超えた勝利があるという興味深く啓発的な事実を発見して来ました。宇宙空間とは諸元素が無数の表現の形あるものや現出物を常に結合させている巨大な化学実験室以外の何物でもありません。水、火、土、空気そして地上の大気の上部にある思いもよらない微細はエーテル体等、全ては化学的化合物です。光と闇、愛と恐怖も皆、化学反応なのです。

【解説】

私達自身の身体も含め、あらゆる自然界の活動、即ち世の中の全てのものが常に元素の間の反応から成り、”静止”ということは一瞬たりとも無く、皆変化の途中にあるということです。

私達はこれら常に動く世界の中に居る訳で、この状況に気付かない人は居ない筈です。問題はそれらの変化に関心を持ち、その仕組みや存在を探究することによって、宇宙における創造作用を学ぶことが出来るかどうかです。

本項ではその探究の必要性を特に説いている訳で、単に”神の御業”とラベルを貼って済ませることには発展性は無いと指摘しています。

更にこのような活動要素は私達自身の身体内部はもちろん、感情の作用も化学物質が関連していると指摘しています。今日では精神医学でよく知られているセロトニン等の精神作用のある物質が人間の気分に関係していることを既に著者は以前から説いていたことになります。

私達を取り巻く世界、仏国土はかくも豊かな諸活動によって埋め尽くされており、常にある状態に留まっている訳ではありません。その活動に気付き、共鳴・同調することが出来れば、私達の進化の歩みも一層早まることでしょう。

ご連絡 [2016-05-26]

いつもご覧戴きありがとうございます。
都合により、明日の更新はお休みします。

５月２６日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第16章 段落178 [2016-05-26]

178 Even our thoughts are of chemical composition. We are well aware that our bodies are composed of numerous chemicals; we are also aware that our bodies will not act except when permeated with a conscious thought. When a man is in a state of unconsciousness his body is inactive. It is true that the organs of the body continue to function due to the slight chemical reaction which takes place between the composing cells of the structure but even this will not continue indefinitely. The movement of any body will not take place without a chemical reaction of the elements composing the body, for it takes chemical reaction to produce energy. Potential force exists as the Father-Mother Chemical within each atom of matter but it is the reaction of these elements that produces what is known as kinetic energy which is necessary to the service of any form-action. Only another chemical will produce chemical reaction and the fact that thought is necessary to the action of the body means, then, that thought itself is chemical. For instance, when a person is in a peaceful state of mind he can partake of food and his body will assimilate the minerals without the least opposing reaction, but eat a good meal and then take into the body a highly concentrated thought of hatred or fear - the reaction of the chemicals will very soon demand either the doctor or a good dose of bicarbonate of soda. Fear, hate, selfishness, envy, etc., are elements which produce violent reactions when incorporated with the chemical contents of the body. A fit of anger, which is nothing more or less than a chemical combustion, will tear down the body structure to a surprising degree and produce what is known as pain. If the scientist in his laboratory combines certain elements according to the law of affinity and produces a harmonious result he is rewarded, but if he mixes the wrong chemicals he may blow himself to bits. Just as logs placed upon a fire serve their purpose and their elements are changed but not destroyed, the original elements of any form are eternal. A place where water has been may become dry but the hydrogen and oxygen which compose the liquid go on forever and may at any time return into form. It is the action and reaction of chemicals that produce the personality which consequently must be ever changing, but the soul which is the sum total of the original elements remains forever the same - indestructible and eternal.

178 私達の想念さえも化学的組成物です。私達は私達の身体が無数の化学物質から構成されていることを良く知っていますし、私達の身体が意識的想念で染み込まない限り、行動しようとしないことにも気付いています。人が無意識の状態にある時、その身体は不活発です。それでも身体の諸器官は構造を構成する細胞間で生じるわずかな化学反応により機能を継続することは確かですが、これさえも無期限に続くことはありません。如何なる身体の運動も身体を構成する諸元素の化学反応抜きに起こることはありません。何故ならエネルギーを作り出す為には化学反応が必要だからです。各物質の原子の中には父母性の化学としての潜在力が存在しますが、如何なる形式の活動奉仕にせよ必要な動的エネルギーとして知られるものを作り出すのはこれら諸元素の反応なのです。唯一、別の化学物質が化学反応を作り出し、身体の行動に想念が必要だという事実は、想念自体が化学物質であることを意味します。例えば、人が平安な心の状態に在る時、人は食物を摂取し、その身体はわずかの反対する反応もないまま鉱物を同化するでしょうが、良質な料理を食べ、その後、憎悪或いは恐怖で高濃度に集中した想念に身体を置いた場合、化学物質の反応は直ちに医者やかなりな量の重曹を必要とさせることでしょう。恐れ、憎しみ、我がまま、妬みその他は身体の化学成分に一体化した暴力的反応を作り出します。怒りの発作は化学的燃焼以外の何物でもなく、身体の構造を驚く程、引き裂きますし、痛みとして知られるものを作り出します。もし、実験室内の科学者が親和の法則に従ってある種の元素を組み合わせ、調和的成果を作り出せば報われますが、誤った化学物質を混ぜれば、自分自身を粉々に吹き飛ばすことになるかも知れません。火に置かれた丸太がその目的を果たすように、それらの元素は変化を受けますが、破壊はされず、如何なるものも元の元素は永遠です。水が有った所は乾くかも知れませんが、水を構成する水素や酸素は永遠に継続し、いつかは再び形あるものに戻って来ることでしょう。常に変化し続けることになる個性を作り出すのは化学物質の作用であり、反応ですが、元来の元素の全体合計である魂は永遠に同じまま、破壊されることなく、永続するのです。

【解説】

私達が未だ知らない多くの要素が想念・印象更には意識という精神作用の中にもありますし、自然界の物質世界の中にも存在するということでしょう。

本項は詳細な事例を説きながら、如何にこれら精神作用と物質世界の活動が互いに連動して動いているかを私達に解説しています。日頃私達は自身を研究材料とする中で自らの心の状態が自身その他の肉体に影響を及ぼしていることを知っています。これらの「事実」を見れば、生命体を基本的にコントロールしているのが、意識その他の精神作用であることがよく分かります。

私達は未だそれらの真相について全てを知る者ではありませんが、そのメカニズムを自ら探究する過程

で、様々な真理、中でも想念・印象に呼応する物質の動きを学ぶことが出来るという訳です。植物と会話が出来たルーサー・バーバンクや身近な昆虫の世界を描いた熊田千佳慕等、素晴らしい先人の業績にも出会う機会が得られることでしょう。

究極的な表現をすれば、想念も化学物質だと言える程、私達の精神作用は物質と同等、あるいはそれ以上の影響力を有しているのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落179 [2016-05-30]

17 ANCIENT WISDOM OR MODERN PROGRESS?

179 There is some strange characteristic of the human mind that seems to find a great satisfaction in glorifying the past. The Oriental has expressed this characteristic in his ancestor worship; the Occidental has always had its hero-worship for deceased greatness; the patriarch of all nationalities sits back in his easy chair and reminisces on "the good old days." Perhaps it is that time assuages the actual realities of the past and leaves only the colorful pictures of self-created images. Perhaps it is that distant fields look greener on which ever side of us they lie, but, in any case, we find so many people living in the past that we wonder what good the present is doing at the present time.

第１７章 古代の知恵か現代の進歩か

179 人間の心には過去を賛美することに非常に満足を覚えるような何か奇妙な性質があります。東洋では自分の祖先を崇拝することにこの特徴が表わされていますし、西洋では死去した偉人に対し常に英雄崇拝があります。全ての国の民族において長老はその安楽椅子に背を寄りかけて「古き良き時代」の思い出にふけっています。おそらくは時間が過去の実際の現実を和らげ、自ら作り上げた華やかな映像のみを残しているということでしょう。おそらくは何処にあろうと、遠くの畑は緑がより深く見えるでしょう。しかし、いずれの場合も私達はあまりに多くの人々が過去に生きている為、私達は現代が何か良いことを成していないか不思議に思ってしまう程です。

【解説】

様々な側面や問題があるにせよ、全体として私達、地球の現代人は進化していると言えることでしょう。もちろん世情は悪化し、悪人達も巧妙化していますが、それでも全体としては様々な機械や都市施設、ネットワークは進化を遂げており、確実に私達の生活の質は向上して来ています。

唯一、劣っていると懸念される事項は、あまりにも物質や金銭に価値を置き、精神面についての進化は滞っていることではないかと思われます。万物に神性を見出すような繊細な感受性、言葉に依存せず、印象による日々の行動選択等において、私達は未発達であり、古代人より劣ってしまったのではないかと思われます。

確かに地球には、支援・救済の為に多くの優れた教師が来訪し、私達を指導して来た訳ですが、その教えを私達は自ら応用、活用することなくただ、恩恵・ご利益を求めて、その面影を慕っているのかも知れません。私達は今となっては不確かな過去の教えを鵜呑みにすることなく、自らの科学的な探究を基礎として、これら精神作用の真理を学んで行く必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落180 [2016-05-31]

180 Among many religious groups, and particularly those of an occult nature, we hear much about the great wisdom of the ancients. "If you expect to evolve to a state of masterful action," we are told, "you must go back and study the teachings of the old." It sounds a little twisted, doesn't it? To evolve we must go back! But why? Evolution is an expansion, a growth. Does the tree in its process of attaining maturity grow backwards into the roots? If it did I am sure we would never taste its fruits.

I suppose no man ever appreciates the thing that he has in his hand, and while it is right that he should reach out for something new let it be an advancement, not a retrogression. Why dig up the peaceful past - it has served its purpose. It brought us to the present day - let it rest. The works of the past cannot serve us now and so far as the laws of the past are concerned we are now using them, for there is in the whole cosmos only one principle of action. It is used in the billions of varying manifestations but itself never changes. The only way in which we can prove the principle is by the effects produced and surely we are producing effects on a much vaster scale than did the ancients. In those days if a man discovered something of use to humanity he was considered divine and his revelation a miracle. Today we have a new invention almost daily and think nothing of it.

180 多くの宗教グループの中で、とりわけ魔術的性質を持つものの中にあって、私達は古代人達の偉大な知恵について多くを聞かされます。「もしマスターの行動状態にまで進歩したいと思うなら、立ち戻って昔の教えを学ばなければならない」と教えられます。しかし、それは少しねじれた考えではないでしょうか。進歩する為に立ち戻る必要があるなどということがです。しかし何故でしょう。進化は拡大であり成長です。成熟を達成する過程にある樹木が根の中に向かって下に伸びるでしょうか。もし、そうなれが私達はその果実を味わうことは出来なくなることは確かです。私は誰も自分が手にしているものを享受していないのではないか、また何か新しいことに手を伸ばすことが正しい時には進歩があるべきで、退化することはありません。何故平穏になっている過去を掘り起こすのでしょうか。それはその目的を務め終わっているのです。それは私達を今日にもたらしたのであり、休ませましょう。過去の業は今日の私達に仕えることは出来ず、過去の法則に限って、私達はそれらを用います。何故なら全宇宙の中には唯一つの行動原理しか存在し得ないからです。何十億もの異なる創造物に用いられていますが、それ自体は決して変化しません。私達がその法則を証明できる唯一の方法は、作り出された結果によってであり、確かに私達は古代人が成したより、はるかに広いスケールで結果を作り上げています。当時、もし人が人類に有用な何物かを発見したとすれば、その者は聖なる者であり、その者の発見は奇跡と見なされました。今日、私達は毎日のように新しい発見をしますが、それについては何ほども考えはしません。

【解説】

歴史から学ぶことは大切ですが、それはあくまで"反省"の一環として取り組むべきであり、過去を美化すべきではありません。本項では、とかく私達が陥りやすい懐古的姿勢が現代の私達に役に立たないことを諭しています。

その理由は客観的に見れば明らかなように、私達は昔の人達より進化した社会の中に暮らしており、水や電気も自由に手に入る生活の中に居る訳で、古代人より優れた生活レベルにあります。もちろんそれこそが進化の道であり、紆余曲折をしながらも私達はこれまで進んで来たのです。

その上で、私達は自らの取り組むべき課題を少しずつであっても解決し、未来に訪れる人達に提供した上で、この世を去る必要があります。内村鑑三の『後世への最大遺物』はそうした人間の生き方を説いたものです。

本章では特に、当時米国西海岸で多く湧き出ていたと思われる、太古の文明を起源とする新興宗教に対して警告しているように思われます。物質主義の当時の米国の中にあって、新たな精神主義の芽が出始める頃に、著者がその精神性に目覚めかけた人々に対して贈った重要なメッセージであったように思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落181 [2016-06-01]

181 "We have not yet been able to discover the whole greatness of the Ancient Wisdom," we are told. Well that may be true, but I dare say if a few of the ancients suddenly found themselves in one of our big cities today they would stand aghast at the miraculous works of our people. They would probably assume that they had reached some World reserved for especially advanced minds, and after having lived here for a while and trying to adjust themselves to our present understanding would decide that they were not of the elect and must have stumbled into this amazing place by mistake.

181 「私達はまだ古代の知恵の偉大さの全容について発見し得ていないのだ」と私達は告げられて来ました。それは真実かも知れませんが、敢えて言えば古代人の何人かが突如、今日の大都会の一つに身を置いたとすれば、彼らは私達の人々の奇跡的な業に驚嘆して立ち尽くすでしょうと言いたいものです。彼らはおそらく自分達が特に進化した心の持ち主のために用意されていた世界に到着したと思い込みますが、しばらくここで暮らした後に、自分達自身を私達の今日の理解に適合させた後は、彼らは自分達が選ばれたのではなく、誤ってこの驚くべき場所に転がり込んでしまったと判断することでしょう。

【解説】

３０数年前、仕事の機会で米国を約２ヶ月旅した中で見た驚きの光景は、今日、日本ではごく当たり前の姿となって実現しています。”ダイエット”、”スポーツジム”、”スイミングプール”、”レストランのサラダバー”等々、当時目にした光景はごく普通の姿として今日では目にすることが出来ます。

また、少しでも知りたいことがあれば、図書館に行かなくても自宅から様々な資料を見ることが出来ますし、知識や情報は刻々と人々の間で共有出来るインターネット環境が整えられています。

そうした中、それらを生かし、次なる進化を遂げる為に私達が何をし、何が出来るかに取り組むことが重要であり、不確かな古代の智慧の断片に頼るべきではないのです。著者は私達は決して古代の人達と比べて劣っている訳ではないことを私達に諭しています。

私達現代地球人は、もっと自らの成し遂げた事柄の意義を学んで、次なる世代に引き継ぐ努力をする必要があります。間違いなく次は宇宙との関係、他惑星文明との接触の時代を迎える訳で、私達はいち早くその対応に備えなければなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落182 [2016-06-02]

182 Why should we base our life of today upon ancient philosophies? Should we enjoy going back to the ox-cart? I am sure that a great percentage of the population of the world would starve with only ox-cart transportation. Some of our so-called spiritual students are starving on the meager supply of mental food that is carried to them on the slow-moving vehicle of ancient myth and ritual. We are moving faster than we have ever done and we are compelled to keep up with our existing state of progress. Our mental expansion must coincide with and support our mechanical progress. Those who live too much in the past ask why we are rushing and where we are going;
may I answer in this way, we do not need the aimless rushing but we must keep pace with the fast moving events of life.

182 何故、私達は今日の私達の生活を古代の哲学の上に基礎づけるべきなのでしょうか。私達は牛車に立ち戻ることを楽しむべきなのでしょうか。私は世界の人口の大部分が牛車の輸送によっていては餓死してしまうことを確信しています。私達のいわゆる霊的学徒はゆっくり動く太古の神話と儀式の乗り物に乗って来る精神的食料の貧弱な供給に対し飢えています。私達はこれまで成したよりも速く動いており、私達は現在ある進歩に追いつかざるを得ないのです。私達の精神的拡大は私達の精神的進化に呼応し、それを支えなければなりません。過去に対し、余りにも多くを生きている者達は、何故私達が走っているのか、何処に私達が行こうとしているかを問います。それに対して私はこのように答えても良いでしょうか。私達は無目的に急ぐ必要はありませんが、生命のすばやく動く出来事にペースを合わせ続ける必要がありますと。

【解説】

本項で印象的な言葉は"mental food（精神的食料")という著者の表現です。長年著者は哲学について、また人間の生き方について人々に教えて来たことは皆さまよくご存知の通りです。著者アダムスキー氏はロイアルオーダーをはじめとして、1952年のデザートセンターでの宇宙人との会見以前から、この方面の活動に生涯を捧げて来たのです。

その著者が長年の体験から人々は"mental food"を必要としていると表現しているのです。またこの言葉はイエスの"人はパンのみにて生きるにあらず"の一節とも呼応しています。つまりは著者は人々には日常的に絶えずその精神性を高める上で、先を行くものの助言や至言、教えを必要としていることが、実感として分かっていたということです。

本来の進むべき道を求める人には、皆それぞれの足元を照らす光が必要であり、導きがあることに越したことはありません。手さぐりで歩む中で少しでも先導して呉れる言葉が求められていることになります。

様々な社会インフラが整備され、各自の生活も活発になる中で新しい事態にふさわしい導きの発信、提供こそが求められている訳で、本シリーズも微力ながら、その一つとして役目が果たせれば幸甚です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落183 [2016-06-03]

183 There are those who prophesy that this civilization is nearing its destruction because of its lack of wisdom. Well perhaps, but what would it profit us to go back and study the wisdom of the ancients? You could say that the ancient civilizations did not heed the words of wisdom that were given to them, and that is true. Lemuria, Atlantea, Egypt and Rome, were all great civilizations and they are gone. This is a new day with new problems and the door to the Cosmic Storehouse of Wisdom and Knowledge is wide open for each individual to enter. Our present problem is to maintain our balance; living in the world of effects and understanding causes.

183 この文明は知恵の不足から破滅に近づいていると予言する者達がいます。たぶんそうかも知れません。しかし、私達が立ち帰って古代人の知恵を学んだからといって、私達に何の利益があるでしょう。貴方は古代の文明は与えられた知恵の言葉を心に留めなかったとも言うことが出来るでしょうし、それは確かです。レムリア、アトランティス、エジプトそしてローマは皆、大いなる文明でした。そしてそれらは過ぎ去ったのです。新しい日には新たな諸問題があり、英知の宇宙的倉庫への扉は入る人、一人一人に対し広く開いています。私達の現在の問題は私達のバランスを保つことです。結果の世界に生きながら、因を理解することです。

【解説】

私達が向き合うべきは古代の文明ではありません。仮に各々の文明には今日の私達とは違う進化した側面があったとしても著者の指摘のようにそれらは致命的な問題を抱えたまま解決出来ずに滅びてしまった訳で、決して参考にはなりません。

現代の私達にはまた別の問題があり、それらを解決することが求められているのです。

おそらく物質的には現文明はかつてない程に発展させて来ましたし、人々の生活レベルもかつての消えた文明をはるかに越える程、向上したものと思われます。その上で、私達に必要な事項として著者は改めて、物質面と精神面のバランスを説いていることに注目しなければなりません。

両側面を各々均等に発達させ、バランスが取れた生活こそが理想であり、その為に既に物質的側面について十分学び応用出来ている私達が、次に探求し、応用すべきはもう一方の側面、即ち、因の存在とその作用、宇宙意識と呼ばれる普遍の精神体の作用と私達の関わりになります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落184 [2016-06-06]

184 The Hindus have a saying to the effect that the more wood you pile on the campfire at night the greater becomes the illumination but greater also becomes the circle of surrounding darkness. Our present wisdom like the light of the campfire is great and the more we learn the greater becomes our scope of perception regarding the possibilities we have not yet deciphered. The more knowledge we acquire the more we know how much there is yet to learn. Our field of perception has become so vast that the encircling darkness is almost appalling but the very fact that we have such a vast perception of unproven things means that they shall one day be proven. We have had the perception of ships traveling through space to other planets and that day is not too far in the distance when this becomes a reality just as jets and airplanes are now a common means of conveyance.

184 ヒンドゥ教には要約すると、夜キャンプファイアにマキを積み上げる程、その輝きは増すが、周囲の暗闇の輪もまた大きくなるという格言があります。そのキャンプファイアの光のような私達の現在の知恵も大きなものですが、私達が更に学ぶ程に、私達がこれまで解読して来なかった可能性について私達の展望はより大きくなります。私達が身に付ける知識が多くなる程、私達はこれから学ぶべきことが如何に多いかを知るのです。私達の知覚分野がそれ程に広がると、取り巻く暗黒はぞっとする程のものとなりますが、私達がこのような広大な未検証の物事を知覚していることは、それがいつの日にか証明されることを意味しています。私達は宇宙空間を他の惑星に向けて航行する宇宙船を知覚したことがありますし、今日ジェット機や飛行機が皆の輸送手段であるのとまさに同様に事実になる日は遠く離れたものではありません。

【解説】

間違いなく私達地球人も近い将来、宇宙旅行に出られる時代が来ることでしょう。現在も多くの民間企業がビジネスとして宇宙旅行を実現させるべく準備をしています。

今までは極く限られた宇宙飛行士のみが大気圏外から地球を見た訳ですが、これからは誰でも安全に宇宙に出ることが出来るようになることでしょう。そしておそらくはその効果は地球の現文明にとって大きな転機となる程の影響を与えることでしょう。今までの国家という概念は崩壊消滅し、惑星という社会概念が生まれて来るものと思うからです。

一方、このように私達の視野が広がると同時に未知なる領域も増して来る筈です。宇宙には私達が未だ知らない多くの現象があり、今まで私達はそれらに頓着なく狭い領域に暮らしていたため、それに気付くことはありませんでした。

探求の領域が拡がる程、それらを囲む未知なる領域も拡大するという本文の言葉は実に言い得た表現です。私達の進化には終わりが無く次々に探求すべき分野が現れ、探求の道に際限は無いことを良く表しています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落185 [2016-06-07]

185 We hear a great deal about the alchemists of the early days - Paracelsus, for instance, who was supposed to have transmuted baser metals into gold. "Miraculous!" the people say. Our scientists of today are able to produce gold from other substances; but the process is too costly to be of practical use.

185 私達は古代の錬金術師達についてとても多くのことを聞いています。例えばパラケルススは卑金属を金に変えたとされています。人々は「奇跡的だ」と言います。今日の私達の科学者達も他の物質から金を作り出すことが出来ますが、その方法は実用的使用にはあまりに費用がかかるのです。

【解説】 中世の錬金術の実像は今となっては知る由もありません。しかし、金属酸化物を還元処理して元の金属の光沢を見せる程度のことは行われていたことでしょう。彼らは物質相互の反応性に関する知識を有する化学者であった訳です。 しかし、当時の一般人にとっては、それは魔術の一種と思えたものでしょうし、錬金術士達はその秘密を魔術のように人々に見せ、自らの優位性、特異性を見せびらかしていたのかも知れません。問題なのはそれらを"神秘"として扱った為にその後の人々の知識や科学の発達には何らの貢献もして来なかったことです。 私達は誰もがこれらの知識を共有し、探究の道を進むべきであり、一部の人々の間の秘密の技術とすることでは、人々の進化に貢献するものとはならず、却って科学の発展を遅らせる元凶をなってしまいます。テレパシーも同様に、特殊な能力として片づけている限り、発展はないのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落186 [2016-06-08]

186 The priests of the ancients were the only scientists of that day and whatever they achieved was used for selfish purposes of dominating character. It is said that they could prepare chemical substances which when used as incense would put an individual into a trance state, but what benefit was actually derived from such practice? No doubt there was quite a bit of benefit to the priests, for while their subjects were under such a spell they could be very easily relieved of all of their possessions and the act laid at the door of the most convenient gods.

186 古代の僧侶達は唯一の科学者でしたし、彼らが何を達成したにせよ、それは支配的性格の利己的な目的に用いられたのです。彼らは香料として用いられると個人を恍惚状態に陥れる化学物質を調製することが出来たと言われています。このような行為で何の恩恵が得られたのでしょうか。無論、僧侶には大変大きな恩恵がありました。何故なら彼らの臣民はこのような魅惑の下、容易に自分達の持ち物全てを捨て去り、その最も都合が良い神の扉に身を横たえたからです。

【解説】

本項は地球における宗教団体の悪行について警告しています。おそらく創始者、教祖は純粋な意図と実際の自らの神秘体験に基づいて精神集団を創ったものと思われます。しかし、時代が経過するにつれて、団体を運営維持するために「金」が必要とされ、集まって来る求道者達からそれらの資金を得るよう改変されて行ったものと思われます。

この現象は決して古代だけのものでなく、今日でも懸念される現象と言えます。多くの宗教団体がそれぞれ豪華な建物を有し、人々からその資金を得ているからです。

一方、それら多くの教祖の生涯はいずれも質素で、シンプルなものでした。先日もラオスの寺院巡りをしていた際、案内して下さった方から、ラオスでは僧侶が黄色の僧衣を身に付けていますが、その黄色の由来について伺ったことがあります。ご存知の方も多いのではないかと思いますが、ゴータマ・ブッダは釈迦国の王子であり、ある意味、優雅な生活を送っていました。ブッダはその出家の際、身に付けていた全てを出会った者に呉れてやった訳ですが、その際、着ることとなったのは、死者を包んでいた白い布であったとのこと。そのいわば汚れた布を洗い、菩提樹の葉で染めたものを着ていたというのです。草木染の色があの黄色であったという訳です。

現在でもラオスの僧は自らは一切の労働はしない代わりに、人々から与えられる托鉢物しか口にしないこととなっています。また同時に自分達が食べきれないものは寺に集まる貧しい人々に施しをしています。これらの光景を見ると、本項とは反対の真の宗教者の姿が見えて来るように思いました。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落187 [2016-06-09]

187 Today our chemists make practical use of their knowledge. They produce new metals to meet the needs of increasing mechanical achievements and are harnessing the forces of nature to facilitate the turning of the wheels of progress. They whom the religionists have called godless men are today becoming the masters of the elements by acknowledging that One Principle governs all things.

187 今日では我々の化学者達は自分達の知識を実用的な用途に用いています。彼らは機械的性能を高める必要性に応える為、新しい金属類を作り出していますし、進歩の歯車の回転を促進させる為、自然の諸力を利用しています。彼らは宗教主義者からは神を否定する者達と呼ばれている一方で、唯一の法則が万物を支配することを自覚することによって、今日、諸元素の支配者になりつつあります。

【解説】

既に私達は鉄に様々な金属や炭素を混ぜるとその性状が大きく変化することを知っていますし、古来から武器の製造等の分野で応用して来ました。また、今日では希少金属等との融合により様々な性質を呈することが知られているようです。

これらの成果は一時代前は"錬金術"等の魔術、神秘として一括して取り扱われ、科学的な探究の道を歩むことはありませんでした。しかし今日では、それらは極細部に及ぶ探究の目を通じて、徐々に内容が解明されつつあります。即ち、古代の秘術が解明され、誰もが学べる科学の一知識になった訳です。

そこで重要なのは、それらが個別特有の現象でなく、宇宙普遍の法則の下に探究され解明されていることです。時間や空間を超えて成立する法則を学ぶ中での応用例として、これらの成果が位置づけられている点にあります。従って、私達は如何なる側面に対しても、それが宇宙普遍の法則性として、どのような要素と関連しているかについて、常に考える必要があります。日常生活の中でもその背後で働いている宇宙普遍の法則性にこそ、気を配る必要があるということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落188 [2016-06-10]

188 We are expecting an era of brotherhood among men of this earth and it is science that is making the greatest strides towards this accomplishment by unveiling the actual laws of action. Science is working under the law of relativity while religion is working under the law of divisions. The work of scientific research carries one into such a vast conception of the universe that there is no room for egotism, bigotry, fanaticism or intolerance. The individuals who really study creation are so absorbed in its unlimited activity that they become undiscriminating. They regard all men, whether they be black or white, as brothers and grant them the right to believe according to their ability to understand. They are not bound by the limited concepts of cast or creed or dogma but are always open to new revelations. They do not allow even the human form, itself, to block their path of research in the field of knowledge, for they are willing to sacrifice their own bodies for the benefit of other researchers and mankind as a whole.

188 私達はこの地球上の人々の間に兄弟愛の時代が来ることを予想しており、行動の実際の法則を明らかにすることによって、この達成に向けて大きな歩幅を成しているのは科学なのです。宗教が分裂の法則の下に作用しているのに対して、科学は相関性の法則の下に作用しています。科学的探究の作用は人を広大な宇宙の概念に連れ行き、自分本位や頑固さ、熱狂や偏狭の余地はありません。創造を本当に学んでいる各個人はその無限なる活動に没頭するあまり、その者達には差別が無くなります。彼らは全ての人間が黒人であれ白人であれ、兄弟であると見ますし、それらの理解力に応じて、彼らを容認します。彼らは階層や信条、或いは教義の限られた想念に制約されることなく、常に新しい発見の受け入れに寛容であり、率直です。彼らは人体でさえも知識の分野の研究を妨げることはさせません。何故なら、彼らは進んで自らの肉体を他の研究者や人類全体の利益の為に捧げるからです。

【解説】

現在の中東地域における過激な宗教主義者の行動やその結果を見れば、もはや私達は宗教の限界というものを自覚しなければならない時期に来ていることが分かります。宗教の掲げる「教え」そのものは立派なものであり、当初は優れた役割を果たしていたものであっても、時代が移り、狂信的な人間その他、暗黒の勢力の手にかかれば、かくも残忍な狂信集団と化してしまう事実にこそ直視しなければなりません。

これら宗教に対して科学の貢献がはるかに勝っていることを本項は説いています。誰もが同じ立場、共通の視野で科学知識を探求し、法則性を研究することによって、この文明は発展して来ました。これら科学の成果がこの文明を発展させて来たことは明らかである一方、もう片方の宗教分野・精神分野においては混乱し、時代遅れの概念のまま停滞していると言えるかも知れません。

しかし、人々は精神性についてまだまだ向上心を有しており、それに対してどのような支援が行われるべきか、考えるべき時代となっています。アダムスキー氏の教えの集大成となった「生命の科学」は、この私達が探求すべき因の世界、精神作用に対し、従来の宗教的手法ではなく、科学的手法や観点から、精神性について取り組むべきことを説いたものとなっています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落189 [2016-06-13]

189 Science has progressed very rapidly in the last few years. Now, with the aid of fine instruments, the I.G.Y. research and the satellites, the scientists are able to delve deeper and deeper into the realms of Cause. They are beginning to understand and use Nature's Creative Mathematics; which is, one and one equals three. Old accepted theories are being replaced with more factual knowledge as the field of research broadens.

189 過去数年の間に科学は急速に発展しました。今や精密な装置やI.G.Y.(訳注：国際地球観測年）での研究、そして人工衛星のお蔭で、科学者達は宇宙の領域の奥深くまで掘り下げることが出来るようになりました。彼らは自然の創造的数学を学び始めています。その創造的数学とは１＋１＝３というものです。古くから容認されて来た諸理論は研究分野が広がるにつれて、より事実に基づく知識に置き換えられています。

【解説】

実際のところ、まだ著者が本項で言う「１＋１＝３」の真意は計りかねますが、既に宇宙空間を取り扱う際には、平面上の座標をもってしては取り扱うことは出来ず、地上の座標についても既に球座標の値がGPS等で用いられているようです、従来の平面的な概念で宇宙空間を取り扱うことは出来ないようです。

現実に飛行機の航路についても空間座標を元に最短飛行ルートが決定されるように、従来の座標系とは異なる概念が必要となっています。また、これらの基礎情報は私達が知らない間にも、GPSに接続したカーナビや携帯電話等、身近なところで既に実用化され、私達は気付かず利用しているという訳です。宇宙に関する情報は、日々の天気予報に観測衛星からの画像が用いられるなど、宇宙空間の情報は私達の生活と直結している時代を迎えています。

更に私達はこれら宇宙に流れる法則性について探求を深める必要があることは間違いありません。宇宙の活動には「１＋１＝３」の効果があるとされています。互いの努力が新たな成果を生む等、その意味するところは更に深遠と観るべきでしょう。私達は万物の活動の中にその実像を観るように努力しなければなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落190 [2016-06-14]

190 We can say that scientific research is allowing the people of the world to have a closer view of Cosmic Reality.
190 私達は科学的研究が世界の人々に宇宙の現実性についてより綿密な見識を与えていると言うことが出来ます。

【解説】
今日では極く普通の科学研究と同じレベルで、宇宙ステーションでの研究活動が行われていますし、宇宙は私達にとっても、また身近な世界となって来ました。地上では難しい実験条件も宇宙では容易に設定でき、その法則性を検証出来るということでしょう。
私達は宇宙に出ることによって、私達の暮らす地球のことや太陽系について多くを知ることが出来ます。映画「２００１年宇宙の旅」が上映された頃は、夢であった宇宙旅行の話も今日ではいよいよ現実味を帯びて来ています。
このように私達の視野が広がるにつれ、私達の概念は飛躍的に拡大し、宇宙への理解も拡がるということでしょう。
私達一人一人が生まれて来た真の目的を果たす為には、いくつになっても宇宙への関心や物質の奥にある因の存在への探究心を無くしてはなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落191 [2016-06-15]

191 The science that we speak of here has reference to the abstract scientists who work from cause to effect; not the dogmatic orthodox ones who refuse to see beyond the effective world.
191 ここで私達が言う科学とは、因から結果へと研究する理論科学者に関連して述べており、結果の世界の先を見ることを拒否する教条的な正統派を指すものではありません。

【解説】
物事の真理を洞察し、普遍的な法則を導き出す科学者の業績は私達一般人の宇宙に対する概念を向上させて来ました。まだ実用化されない段階であっても、私達は物質の本質について多くの事柄を学んでいます。素粒子の発見等は、物質世界を見る新しい視点を私達に与えつつあります。
このようにある側面から発見された新事実はやがてより大きな視点の中に組み込まれ、再び全体を見回すことによって、私達の概念は一新されることになります。丁度、ジグゾーパズルのように、１片を本来の場所に組み込むことによって、思いも寄らない新しい世界、新たな概念を手にするのに似ています。
私達ははじめから自らの心の意志で「こうあるべきだ」と教条的な姿勢で物事を見てはいけません。柔軟に事実を直視し、その持つ意義を探求することです。求める答えは既に与えられており、私達がそれに気付くまで自然はじっと待っていて下さるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第17章 段落192 [2016-06-16]

192 Perhaps I should explain why one and one equals three in Nature's Creative Mathematics. When a positive and a negative get together there is a manifestation; in electricity it is light, with male and female it is an offspring and so it is with all nature. In order to understand a manifested effect the conditions that caused it to be must be understood.

192 おそらくは、ここで自然の創造的数学においては何故、１＋１＝３になるかを説明すべきでしょう。陽と陰は結合した時、創造の現出が起こるのです。電気においては光、男性と女性の場合は子孫ですし、自然全てについて同様です。現出した結果を理解する為には、それをもたらした諸条件が理解されねばなりません。

【解説】

本章最終項において著者は「１＋１＝３」という法則性の解釈について説いています。生物の生殖の話はその通りですが、更に重要な点は、「プラス」要素と「マイナス」要素という互いにあい対する側面を有したものが、相互に共有する状況になると、新たな成果が生じるということでしょう。

相違あるもの同士が融合するとそれまでに無い新たな要素が生まれるという訳です。これについては「酸とアルカリ」、「酸化と還元」等、様々な側面で成立することになります。酸素の有る好気状態と酸素の無い嫌気状態の相互を繰り返し経験することで下水や排水の処理を高度化出来ること等は、極一部の関係者しか馴染みの無いことですが、排水処理の分野では著名な現象として活用されている技術です。

著者が示唆している内容の内、最も大切なころは、物事を生じさせる背景にはこのような２つの力が互いに働き合ってその現象を生み出しているということです。あらゆるものの背景にこれら２つの要素が働いていることに気付くよう諭しているのです。

ご連絡 [2016-06-17]

いつもご覧戴き、ありがとうございます。
都合により、来週月曜日の更新はお休みします。

６月１７日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落193 [2016-06-17]

18 PAST CIVILIZATIONS
193 I have recently reread the accounts of Lemuria and the Triterian race, and will give them to you for whatever points of interest you may find in them. My friends from other planets have told me that many of the people living on their planet at present have lived upon the earth.

第１８章 過去の諸文明

193 最近、私はレムリアとトリテリア族の記事を読み返した所なので、貴方が興味がありそうな点について何なりとお伝えしようと思います。他の惑星からの私の友人達は私に現在、彼らの惑星に住む多くの人達がかつて地球に住んでいたと教えてくれました。

【解説】

本章では地上にかつて有った古代文明の実情について著者は私達の為に特別な章を設けて語っています。前章で太古の文明について論評を加えていた為、その根拠となる実際の歴史について、他惑星人から提供された情報を元に私達に語っているのです。

また、本項では他惑星人もかつて、このような古代文明の興隆時に地球で暮らしたこともあると記されています。即ち、進化を遂げた他惑星人についてもかつては私達の地球で暮らし、学んでいたことを告げているのです。そういう意味では、各惑星は教室のようなもので、そこで私達が何を学ぶことが期待されているかをよくよく考えることが重要です。

もちろん、順調に進級し、より進化した惑星へ転居（転生）される方もいるでしょうし、またいつまでも同じ教室で過ごさざるを得ない魂もある筈です。そのいずれにせよ、現在、各々が直面している課題を避けることなく直視し、解決を図って行く姿勢がその後の飛躍をもたらすのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落194 [2016-06-21]

194 In the cosmic book of memory, often referred to as the Akashic Records, there lies the story of action as it has passed through millenniums of time. The ever-active fingers of consciousness have inscribed upon the Primal Essence of the Cosmos the indisputable and indestructible pattern of all motion and manifestation. The history of man as written upon the tablets of stone or upon parchment or paper is but a limited record of existence and is easily lost to the knowledge of future generations, but the Cosmic Record is a permanent structure and he who is able to read therefrom need have no missing pages in the history of life.

194 しばしばアカシックレコードと称される宇宙の記憶の書の中には、何千年もの時を経る行動の物語が眠っています。常に活動的な意識の指先は宇宙の根本的本質の上に全ての行動と創造の現出のパターンを刻み付けて来ました。石板や羊皮紙あるいは紙に書かれた人間の歴史は存在が限られた記録でしかなく、将来の世代の知識に対して容易に忘れ去られるものですが、その宇宙的記録は永久の構造を持ち、そこから読み取ることが出来る者にとっては、生命の歴史において如何なるページも失われることはありません。

【解説】

どのようなものであれ、行為や活動作用には意識の力が必要であり、その結果、意識の中にそれらの記憶が残されるという訳です。虚空（Akashi）と称されてきた「意識」には、あらゆる行為や活動の記録が残されており、この記憶に親しむことが出来れば、居ながらにして世界の歴史を観ることが出来る筈です。

いわば空間に記憶される訳ですが、そのことは今日的に言えば、ロギングが残されるということであり、携帯やパソコンの利用履歴が全て記録される現在の私達の実生活にも行われています。

こうした中、私達も太古の地球の状況を知る為には、このアカシックレコードに到達しなかればなりません。かつてアダムスキー氏は膨大な知識を有しておりましたが、手元にあったのはわずかの辞典でしかなかったとされています。氏はその講演で様々な事例を紹介していますが、実はその知識はこのアカシックレコードを自ら読み取ることが出来た為と思われます。

先ずは必要な情報はすべてこのアカシックレドードから提供されることを認識することが重要で、私達も日頃からその存在に親しむことが求められています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落195 [2016-06-22]

195 Out of the Book of Memory, which the scriptures tell you shall be opened unto all, we have read the story of Lemuria, that mysterious land which sank beneath the dark waters of the Pacific Ocean.
195 聖書が言う全ての者に開かれるとされる記憶の書から、私達は太平洋の暗い水の下に沈んだ神秘の大陸、レムリアの物語について読んだことがあります。

【解説】
太平洋に沈んだとされるレムリア大陸については、チャーチワード他、多くの著書が知られています。その文明の詳細については断片的な伝承があるだけで、全体を知る由もありませんが、このアカシックレコードに到達出来れば、その記憶を辿ることが出来ると著者は説いています。
多くの文明がかつて地上に興隆したのですが、結局は長続き出来なかったとされています。その原因の多くが、自己崩壊の道を辿り、自然が持ちこたえられずに天変地異として滅びてしまったということでしょう。
それらの文明が去った後、再びゼロからの出発として歩んで来たのが現代の地球文明ということになります。しかし、最近ではその文明活動も先々怪しくなって来てしまいました。相次ぐ戦闘が中東で起こっていますし、無差別テロ殺人や詐欺行為も平然と行われるようになってしまいました。これらはこの文明を構成する人々がもはや正常な精神状態を維持できなくなりつつあることを示していますし、経済的にも行き詰まりを見せています。
本シリーズの最終に近い段階で著者が太古に滅んだ文明について章を改めて説明する理由について、私は分かる気がします。それは現代の私達はかつて滅んだ文明と類似した道筋を歩みつつあること、その先には文明の崩壊があることを警告しているように思うからです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落196 [2016-06-23]

196 Lemuria was a vast continent which included most of the islands of the Pacific - Hawaii, the Easter Islands, New Zealand, the Philippines and other smaller island groups. These islands were at one time the highest mountain peaks of the now submerged land. Lemuria was at one time a civilized part of the world; her people were highly cultured and possessed advanced knowledge of cause and effects. They lived not for self but for the All, recognizing each form as the expresser of Cosmic Intelligence. Each individual knew himself as a servant of the universal force. They went about their duties in a peaceful manner without thought of one man being greater than another, or of one piece of work being more important than the rest. No jealousy or greed existed among them - Lemurian land was the home of one happy family where discord was unknown and equality reigned.

196 レムリアは太平洋の島々のほとんど、ハワイ、イースター島、ニュージーランド、フィリピンその他を含む広大な大陸でした。現在のこれらの島々はかつては海に沈んでいる大陸の高い山の頂でありました。レムリアは一時期、世界の中で文明が栄えた地域でした。その人々は高度な教養を持ち、因と結果について進歩した知識を持っていました。彼らは自分の為に生きるのではなく、各々の形あるものが宇宙的知性の表現者であると認識し、全てのものの為に生きていました。各個人は自分自身が宇宙普遍の力に対する下僕であることを知っていました。彼らは自分達の仕事をするに、一人の人間が他の者より優れているとか、一つの仕事が他よりもより重要だとかの考えを持ちませんでした。彼らの間には嫉妬や貪欲は存在しませんでした。レムリア大陸は不協和音を知らず、平等が行き渡る一つの幸せな家族の家であったのです。

【解説】

本項で著者アダムスキー氏は実際、太平洋のかなりな部分を占めていたレムリア大陸が存在し、その範囲はイースター島からニュージーランド、フィリピン、ハワイ等をカバーする程の巨大な大陸であったことを明言しています。

そして、その文明の進化レベルは高く、人々は一大家族として暮らしていたことを伝えています。このレムリア大陸については、多くの著書が出版されているものの、消滅の年代も明確ではなく、今なお謎につつまれています。

しかし、このようなケースに対してもアカシックレコードに触れることが出来れば、私達は直接、どのような日常であったかを察知することが出来るという訳です。その消滅に至る原因については追って説明がある訳ですが、このレムリアについては日本民族の起源にも当然関係があると考えています。

レムリア沈没の一大異変の後、生存出来た人々の多くが周辺の地に逃れたものと思われますが、その一つが日本の地、当時は湿地帯の芦原の原野であった可能性もあります。湿地にトンボが飛び交う新天地にレムリアから移り住んだのが日本人のルーツかも知れないのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落197 [2016-06-24]

197 The Lemurians were of the brown race and their average height was about five feet three inches, while here and there a giant would appear. The Alaskans of today resemble them more closely than any other race.

197 レムリア人は褐色人種で、彼らの平均身長は５フィート３インチ（訳注：160cm）である一方、そこここに大柄な人物も現れました。今日のアラスカ人が他の如何なる人種よりも似ています。

【解説】

レムリア人を祖先とする種族について、本項はあくまで外見上としながらも、アラスカ人が最も似ているとしています。即ち、レムリア人は褐色人種にであり、アジア系の人達であった訳です。

しかし、残念ながら私の知る限り、アラスカにレムリアの文明の痕跡が残っているとは思われません。極寒の中、狩猟で暮らす当地の人々がもし太平洋のレムリアから辿りついた人達とすれば、随分と厳しい環境で暮らすことになったと言える訳です。現在の学説では遠くベーリング海峡を渡ってアジアから渡って来たとされていますが、詳細は不明です。

この太平洋を大きく占めていたレムリアがあったとすれば、そこから南北アメリカ大陸にもレムリアの人々が移り住んだということも有り得ることになります。実はこれについては以前、仕事でブラジルのパラナ州に何度も滞在したことがあります。その中で聞いた話の中に、昔探検家がジャングルの奥に進むと、そこにはあたかも日本人の体型をした現地人が居て大変驚いたとされているのです。クリチバという都市に長らく滞在したのですが、その地名は元来インディオの言葉で、「クリ」は「栗」、「チーバ」はインディオの言葉で「沢山取れる」という意味だとか。実際、当地はパラナ松と称される松があり、その実は「栗」のようで、食用になります。日本の「千葉」も「たくさん」という意味があるのかと考えさせられたことを思い出します。”ブラジルのインディオの言葉が日本語に近い”という奇想天外の話も、これらレムリアの沈没に関係しているとすれば、一応の整理が出来そうに思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落198 [2016-06-27]

198 They were a very industrious and active people, highly sensitive and intuitive. They were able to converse with each other through a form of mental telepathy and their actions were mainly guided by the greater intelligence of their being so they were able to obtain marvelous results. They were highly advanced in the science of the cosmos and through their understanding of the laws of action they had a remarkable control over the elements of the earth.

198 彼らはとても勤勉、活発で、高度な感受性を持ち、直観力がある人々でした。彼らは精神的テレパシーの形態を通じて互いに会話することが出来、彼らの行動は彼ら自身の存在のより大いなる知性によってもっぱら導かれていたために、彼らは驚くべき結果を得ることが出来ました。彼らは宇宙の科学において高度に進歩しており、活動の法則の理解を通じて、地球の各元素に対する驚くべきほどの統制を行っていました。

【解説】

レムリアの人々の精神性について、著者は本項で語っています。それはあたかも著者自身がその遠い昔、その地で暮らしていたかのように、当時の人々の暮らしぶりについての記しているのです。これらの知識をどのようにして著者が得ることが出来たのかは不明ですが、本章で言うアカシックレコードの中には、こうした人々の精神活動が記録されており、それらに親しむことにより、当時の状況を手に取るように分かるのではないかと考えています。

また、これらレムリアの人達が万物に神性を見出し、想念・印象に深い感性を有していたことは、私達日本人の基本的精神性にも通じる所があるように考えます。議論や論調で相手を打ち負かし支配するというような西欧的なものとは大きく異なり、自然の中に息づく法則を大切に、また畏れるという日本神道の基本にも繋がるものと言えるでしょう。

毎日を誠実に、また力の限り行動して、理想を実現する中で、当初のレムリアは黄金期を迎えたという訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落199 [2016-06-28]

199 Because of their alerted feeling the minerals in the earth were not hidden from them and they made use of all of the elements.
199 彼らの鋭敏なフィーリングの為、地球内部の鉱物は彼らから隠されることなく発見され、彼らはそれら全ての元素を活用しました。

【解説】
私達の究極の目標の一つである鋭敏な知覚力について、当時のレムリア人は既にその段階に達していたということでしょう。生活の隅々にテレパシックな側面が応用され、科学技術や鉱工業の分野では目を見張る発展があったという訳です。
私達が各自の感性を磨くということは、目に見えない因からもたらされる想念・印象により多く気付くことであり、未開拓の資源や未知の元素の発見等の分野において、計り知れない恩恵を当時の文明に与えたものと思われます。
結局は滅びてしまったレムリアですが、私達の中にそれら知覚力を高め開発したいという欲求は、記憶の中にかつてそのような時を送った人達が居るからかも知れません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落200 [2016-06-29]

200 Their architecture and works of art were magnificent in structure and beauty. Their temples were not so much for worship as they were a monument of beauty dedicated to the All-Power whom they served in their daily actions. For these ancient people needed no temple in which to worship - they recognized the All-Being dwelling in themselves and in every form of life upon the earth. Their idealism in the beginning was the virtue of God which was meant to be expressed in man, and because of this idealism they were bestowed with powers unknown to man today. The Lemurians did not abuse or misuse the laws of nature and while they were building up their empire it was an actual heaven upon earth. But like practically all civilizations they had their downfall in time. Virtue became lost in greed and selfishness, and towards the end of their existence they were no different than the present civilization. At last nature took a hand and sunk the land beneath the waters of the Pacific ocean.

200 彼らお建築と美術作品は構造や美しさにおいて壮麗なものでした。彼らの寺院は彼らが日常行動において仕える全能者に捧げられた美の記念塔であった為、拝礼の為ということではありませんでした。何故ならこれら太古の人々は中に入って拝礼する寺院は必要無かったからです。彼ら自身及び地上のあらゆる生命体の中に全能者が住んでいることを認識していたのです。初期における彼らの理想主義は人間に表現されるべき神の徳目でありましたし、この理想主義により、彼らは今日の人間には知られていない諸々の力を授けられていました。レムリア人達は自然の諸法則を乱用したり誤用することはありませんでしたし、彼らがその王国を建設している間、それは地上における本当の天国でした。しかし、実際には全ての文明と同様、やがて没落の時を迎えました。徳目は利己主義の中に失われ、彼らの存在の終り近くには、彼らは今日の文明と何ら変わりなくなりました。遂には自然は手を挙げてその大陸を太平洋の水の下に沈めたのです。

【解説】

本章でレムリアのことについて記されていたことを受けて、現在、チャーチワードその他のレムリアに関する書籍を読んでいますが、それらレムリアの位置に関する記述は前項（１９６）と同じであり、おそらく真実に近いものと思われます。

一方、本項では更に詳しく当時の人達の精神性についても述べています。まさに太古の一大黄金時代が築かれていた訳で、それをもたらしたのは、ひとえにレムリア人の精神性の高さ、即ち万物に因の働きを観て、自らをそれに仕える下僕と見做していたことによります。全てが平等で、またつつましい生活ぶりであったという訳です。

しかし、それは長くは続くことなく、遂には一大災害とともに海中に没したのです。この件について、本文で気になるのは「レムリアの終わり近くには、彼らは今日の文明と何ら変わらなくなった」と記されていることです。著者は、私達の文明もレムリア同様の破綻の日も近いと暗に警告していることにも、気付く必要があります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落201 [2016-06-30]

201 The Golden Age of the Lemurians lasted for approximately three thousand years. During this time they were in contact with Egypt and in fact all of the Asiatic countries but it was not until the fourth of the thousand year periods that their country was invaded by self-seeking individuals from other parts of the world. At that time there were people who came from the territory that is now known as Greece and Rome and settled in Lemuria. These people were of the lighter races; they won the confidence of the Lemurians, intermarried with them and gradually perverted the pure thought of the happy people. This foreign element slowly took upon themselves the rulership of Lemuria. They were hard, fearful rulers and greedy for wealth and power. They began to show favoritism and to instill in the minds of the Lemurians the thought of inequality. Where the people had once served each other for the love of action they were now forced to serve to enrich and empower the few. They learned the meaning of rebellion and selfishness and greed - those things which had never before found place among them. They learned to follow the example of their rulers and work for self instead of the All. They closed themselves to the guidance of their creator and turned into the mortal channel of expression.

201 レムリアの黄金時代はおおよそ３０００年続きました。この間、彼らはエジプトと、また実際にはアジア諸国の全てと接触していましたが、４期目の１０００年を迎える頃、彼らの国は世界の他の地域から自己を追求する人達によって侵入を受けたのです。その当時、今日ギリシアやローマとして知られる領域から来て、レムリアに定住した人々が居ました。これらの人々は肌の色が薄い人種でした。彼らはレムリア人達の信頼を勝ち取り、彼らと混血し、次第にその幸せな人々の純粋な想念を堕落させて行きました。この外来の要素はゆっくりレムリアの支配権を獲得して行きました。彼らは厄介な恐ろしい支配者で、富と権力に対して貪欲でした。彼らはえこひいきを表し始め、レムリア人の心の中に不平等の考えを染み込ませて行きました。かつて人々が愛の行為として互いに尽くしあった所に、今や彼らは少数の者を富ませ、権限を与える為に奉仕することを強制されました。彼らは反乱の意味や利己主義、貪欲について学んだのです。彼らは支配者達の例示に従い、全ての者の為ではなく、自身の為に働くことを学んだのです。彼らは自分達の創造主の導きに対して自らを閉ざして死すべき表現の経路に向きを変えてしまいました。

【解説】

本章に関連してこのところ、ジェームス・チャーチワードの「失われたムー大陸」（たま出版、平成７年）を読んでいますが、本章では１９３１年に米国で出版されたその本の記述と多くが一致する内容が記されています。

本文ではレムリアは「エジプトやアジア諸国の全てと接触していた」と記述されていますが、チャーチワードも同様に、レムリアを中心として世界各地に人々が進出して各々の文明を築いたと述べています。

しかし、本項で記されているレムリアに白人が入り込んで来た顛末についてはチャーチワードの本には記されていないようです。他惑星人が保持する歴史の記録や宇宙空間に保持されているアカシックレコードは風雪にさらされた古代の遺物に比べて、はるかに明らかな歴史の流れを私達に提供して呉れることがよく分かります。

レムリアが如何にして滅んだかは、同様の瀬戸際にある私達にとって重要な事柄です。かつての日本がレムリアの子孫であったとしても、現代の社会はそれに相応しいものである必要があり、私達は各自で自らの精神性を高める努力を惜しんではなりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落202 [2016-07-01]

202 This went on for several hundred years until at last the forces of nature demanded payment for their unbalanced conditions - the payment of suffering. They were given warnings of their future destruction if they continued in their unbalanced state but they heeded them not, so the elements turned against them. The earth became unsteady beneath their feet; tidal waves swept their shores and eventually a steady trembling took hold of the entire Lemurian country. For approximately seven months the earthquakes continued and gradually the land began to sink. The waters rushed in and covered the one-time Heavenly kingdom and another civilization was lost.

202 この状態は数百年進行し、遂に自然の諸々の力は彼らの不均衡な状態に対する代償、苦痛の償いを要求しました。彼らはもしそのような不均衡な状態を続けていたら将来は破滅するとの警告を受けていましたが、彼らはそれを心に留めることはありませんでした。その為、諸元素が彼らに反抗したのです。地面は彼らの足元で不安定となり、大波が彼らの海岸を一掃し、遂には間断の無い揺れが全レムリア国を支配しました。約７ヶ月その地震は続き、次第に大地は沈み始めました。水がなだれ込み、一時期天国のようであった王国と文明の一つが失われたのです。

【解説】

レムリアは太平洋に沈んだ訳ですが、本項ではそれは自然災害や突発的な何かの事情というようなものではなかったことを説いています。つまりは巨大な大陸が沈むというような背景には何百年と続く人々の貪欲その他問題行動や破壊的な想念に対する自然界の反動であったということです。

そういう意味では、１万数千年後の現代文明も同様な断崖の渕に居ると言えるかも知れません。貪欲さが世界に浸透していますし、環境の汚染も地球規模で広がっています。ある意味、レムリアの時代とは異なる形で、現代文明も危険な水準に到達しているものと考えます。

地震や火山活動の活発化、激しい気象現象等は、宇宙からの私達への警鐘として捉える必要があり、何とかこの危機を乗り越えるべく、各自身近な所から、改めて行く必要があります。その長いスパンで物事を見る時、イエスや仏陀が説こうとした背景事情についても多少は知ることが出来るのかも知れません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落203 [2016-07-04]

203 The earthquakes and the sinking of the continent were due to natural causes. A shift or change of the surface of the earth comes at certain intervals, but the people of Lemuria had become so immersed in the mortal world of effects that they paid no attention to the warnings given by nature. Had they been alerted to these signs they could have moved to safer territory

203 地震や大陸の沈下は自然の原因によるものです。地球表面の移動や変化はある間隔でやって来ますが、レムリアの人々は結果である死すべき世界にどっぷり漬かってしまっていたために、彼らは自然によって与えられた警告に注意を払わなかったのです。彼らがこれらのサインに注目していれば、彼らはより安全な地域に移動することが出来たことでしょう。

【解説】

ここでは大陸の沈下の理由を地球の長年月の周期における活動の一環だとしています。私達は”生きている大地”の上を一時的に借用して生活している以上は、それに従った対応をとる必要があるという訳です。

自分自身のことで頭が一杯で、これら変動に対して鈍感な私達は自然からの事前のサインに対して無頓着、無関心である為、災害から被害を受けやすいということでしょう。事実、野生動物達は如何なる災害に対しても被害を受けないよう、実に適切な行動をとります。逆に私達はこれら動物達の行動を地震その他自然災害の前兆現象として頼りにする始末です。

同様な意味において、現代を生きる私達も自分の身を守る為にも、自然界の変化について鋭敏になり、変化の兆候をいち早く察知しなければなりません。アダムスキー氏が逢っていた宇宙人達も、宇宙空間の変化についていつも監視していると知らされておりますし、絶えず太陽系その他の変化に注視しているのです。

自分自身も含め、精妙な変化を印象を通じて感知する能力を伸ばして行くことが重要だということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落204 [2016-07-05]

204 In the bible of every race there is an account of creation and the suggestion of an Eden where man dwelt in the perfect state of being, but there is little more than the suggestion and it has been accepted by humankind as a beautiful bit of mythology that has an indifferent effect upon the progress of man in his present state of being. In the annals of consciousness, however, is revealed the truth concerning a race of God-men and their Edenic homeland.

204 あらゆる種族の聖典の中には、創造の記述と人間が完全な状況の中で暮らしていたエデンの園と呼ぶべきものの示唆が書かれていますが、それは示唆以上のものではなく、これまでは人間の今日の状態への進歩にとってどうでも良い程度の神話の美しい小片でしかないとされて来ました。しかしながら、意識の年代記の中では、神人族とそれらのエデンの母国に関する真実が明かされています。

【解説】

著者はレムリアの歴史を語った後、多くの民族の神話に登場して来るエデンの園について、本項で言及しています。

つまり、レムリアは滅びた訳ですが、それとは別に神と人間が合一状態にまで融合した人達の存在を示唆しているのです。

私達日本人には竜宮城の神話もあるのですが、それらも含め、エデンの園は遠い過去の話であり、現代では痕跡すら残っておりません。

しかし、アカシックレコードにはこれらの記憶が残されていると著者は説いているのです。私達が思いも寄らない程の長年月を経過しても、この意識に残る記憶は消えることが無いということでしょう。私達が日々発する想念は克明に空間に記憶されると思った方が良いのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落205 [2016-07-06]

205 This civilization was called the Triterian race and from the memory of those people rose the Triton God of the early Greeks. This Grecian god was pictured as half man and half fish, symbolically corresponding with the cosmic record which speaks of the Triterions as the "people of the waves." They were not, of course, half man and half fish but they were the masters of both the waters and the earth.

205 この文明はトリテリア族と呼ばれ、これらの人々への思い出から、初期ギリシャのトリトン神が起こりました。このギリシャの神は半人半魚として描かれ、トリテリア人達を「波の人々」と称する宇宙的記憶に対応しています。彼らはもちろん半人半魚ではなく、水と大地の両方の支配者であったのです。

【解説】

このトリテリア族については、今もってなお具体的な探究は行われたことはなく、遠くギリシャ神話に登場する”海の神トリトーン”として伝承されているのみのようです。また、これまでの本文の記述から、この文明はレムリア以前の人達であったことが分かります。

その由来である「波の人々」に関連して以前、どこかで紹介したかとは思いますが、日本の民話の”浦島太郎”にも多少類似した箇所が出ています。日本の場合、竜宮城の乙姫様が登場しますが、この”乙姫”には、”音を秘める”という音を充てるという話を以前聞いたことがあります。また、”竜”といい、”音（波動）”といい、太古の文明に関する本質を示唆する言い伝えかと思っています。

いずれにしても、”波”を統制していたとすることは、重要なポイントです。水面の波の他にも、想念・印象は波と表現されますし、それらを十分に感知、統制出来ていたことは、宇宙意識とも十分交流が出来ていた人達だからです。

これらの人々は災害に遭って絶滅した訳ではなく、平安の内に地球を去ったものと思われます。そして去るに当たって、自分達の遺物を地上に残さない選択をしたのではないかと考えています。今日、私達も自然を大切にする観点から、残骸を残さず、立ち去ることはうなずけるからです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落206 [2016-07-07]

206 Idealists have ofttimes visualized the perfect man as an etheric being who dwelt only in the planes of celestial glory and had powers to overcome the laws of nature, but we find the Triterians to be dwelling on the earth in physical bodies and cooperating fully with the laws of nature.
206 理想主義者達は、しばしば完全なる人間を天上の栄光の中にのみ暮らし、自然の諸法則を征服する力を持つ霊妙な存在のように思い描いて来ましたが、私達はこのトリテリア人達は肉体を持って地上に暮らし、自然の諸法則と完全に調和していたことに気づきます。

【解説】
精神面を探究して行くと、その素晴らしさに現実の物質世界を無視し、そのまま霊的世界のみを探究しがちですが、それはあるべき本来の姿ではないことを本項では注意しています。
何より、その手本が他惑星の人々の暮らしぶりにありますし、アダムスキー氏が彼らとの交流について世界に発信した理由もそこにある訳です。私達同様の人間がしっかり地についた理想的な生活を送っていることを示した意味は大きいと思っております。
つまり、太古の昔は「神人」とされ、天空に昇って行ったとされるこれらの人達は、具体的には私達と何ら変わらない人体を持っていた訳で、科学技術やその精神能力が私達より秀でていた為、何か別格の神の使いのような存在に思えたに過ぎません。
理想は実現するとあります。私達もこの手本を目標に毎日の生活を送る必要があります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落207 [2016-07-08]

207 These were large people and their color may be likened to our bronze or rust, which was probably caused by the intensity of the sun's rays which shone upon the earth at that time

207 これら（訳注：トリテリア）の人々は大柄な人達で、彼らの肌の色は今日で言う赤褐色もしくはさび色に近いかも知れませんが、それはおそらく当時、地球を照らしていた太陽光の強さから引き起こされていたのかも知れません。

【解説】

確かに熱帯・亜熱帯の地域は日差しが強く、油断しているとあっと言う間に日焼けしてしまいます。本文ではトリテリアの時代、太陽から降り注ぐ光線が今日より強かったと記しています。

肌の色については、一般にアジア人の黄色、アフリカの黒色、アメリカの赤色、欧州の白色等々、地球上には様々な肌の色を持つ人間が昔から暮らしていましたが、それもそれぞれの祖先が長年暮らした環境に適応した結果が残っているのかも知れません。

一方、これらとは異なる色調もあります。ラオスでは通称「エメラルド仏」と呼ばれる緑色の仏像の存在が伝えられています。今は経緯があってタイに安置されています。また、ビエンチャンのお寺（インペン寺）には肌の色が緑色の「神人」の象が建立されています。寺の伝承では本尊を建立する際、どうしても最後の工程がうまく行かず、工人達が落胆していたところ、見慣れない３名の人が来て、手伝って呉れるという。その後工人達がその場を離れたわずかの間に本尊は完成してしまったとのこと。その３人はその後、２、３日その寺に滞在した後、消えてしまったという。寺の人達は天から神が人の形に変身して降りてきて、助けてくれたとしてその神人の象を建立したという。何とその神人像の肌の色は緑色となっています。神人を表す色として緑の肌色が設定されているのです。

他惑星人との交流の中でも、アダムスキー氏が同乗記その他で述べているように、様々な肌の色をした人達が居たとされており、多様な人達が天（宇宙）の中には存在するということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落208 [2016-07-11]

208 These master-men were cosmic beings and during the time they spent in gaining their earthly experience they did not once separate themselves from the Totality. They worked with the elements of the earth as men work with them today but they understood the cause of their manifestations. They were sent to this solar system to partake of the knowledge of matter and this they did under the guidance of Cause Intelligence. This was easy for them to do for they were aware of the natural laws governing all action and they were wise enough to use their knowledge without perversion. The Law of Affinity held no mystery for these people and the elements obeyed their commands to the fullest. The earth was a perfect expression of Edenic beauty.

208 これら達人達は宇宙的な存在で、彼らが地球上の体験を得る為に過ごした期間中、彼らは一度として自分達を全体性から分離させたことはありませんでした。彼らは今日の人々が働くように地球の元素とともに働きましたが、彼らはそれら創造物の因を理解していました。彼らは知識にあずかる為、この太陽系に送られ、彼らは因の導きの下、これを行いました。これは彼らにとって容易でした。何故なら、彼らは全ての行動を支配する自然の諸法則について気付いており、彼らは自分達の知識を誤用することなく用いる程に賢明であったからです。その親和の法則は彼らにとって神秘ではなく、これらの諸元素は彼らの命令に完全に従いました。地球はエデンの美しさの完全な表現となっていたのです。

【解説】

本項の内容を読み返して分かったことは、著者アダムスキー氏はこのトリテリア人は聖書で言うエデンの園に暮らしていた人達であったこと、最初に地球に人間が住むようになったケースであったことを示唆していることです。表だって”アダムとイブ”を指している訳ではありませんが、地球上の物質世界の知識を学ぶ為、派遣（移送）された人達であったように思われるのです。

いずれにせよ、創造後、誰ひとり人間が暮らしていなかった処女地にトリテリア人は移住して来たと思われ、彼らの高い精神性とみずみずしい当時の地球環境とはよく融合し、物心両面で理想的なパラダイスが形成されたということでしょう。

その遠い記憶がトリテリア人が去った後もわずかに残され、聖書のエデンの園に繋がって行ったのかも知れません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落209 [2016-07-12]

209 The Triterians had no religion as it is accepted today - they were a race of scientists, for they worked not on supposition or myth but on facts. They had no gods but recognized the all-intelligent force and themselves as expressers of it. They did not make the mistake of allowing their mortal mind to judge the creator for they understood cause and effect. They gave no thought to any division between themselves and the cosmic consciousness; they acted with a freedom and assurance of results. Therefore life was peaceful and harmonious. They were not bound by gods or devils for their only state of awareness was that of interblended action. They recognized the necessity of duality in creation but they did not separate the force into good and evil.

209 トリテリア人達には、今日認められているような宗教はありませんでした。彼らは科学者の種族であったのです。何故なら、彼らは想像や神話に基づいて働くことはなく、事実に基づいて働いていました。彼らには神がありませんが、全英知を認識し、自分達をその表現者であると自覚していました。彼らは自分達の死すべき心に創造主を裁かせる誤りをさせませんでした。何故なら彼らは因と結果を理解していたからです。彼らは自分自身と宇宙意識の間に如何なる分け隔てをするような想念を持ちませんでした。彼らは自由に、また結果を確信して行動しました。それ故、生命は平穏で調和あるものでした。彼らは神や悪魔に束縛されはしませんでした。彼らの知覚の唯一の状態は融和混合した行動のそれであったからです。彼らは創造における二元性の必要性を認識していましたが、その力を善と悪とに分離することはしなかったのです。

【解説】

今日私達の目指すべき目標が、このトリテリアの人達の生き方であると著者は本項で説いています。

万物に英知を見て、その融合を感じる中に日本の古代文化にある「草木ことごとくよくものいい」とする「神人融合」（「日本文化史序説」（二） 西田直二郎著）の世界は、それに近いものであったと考えます。

トリテリアの社会には宗教は無く、特段の礼拝対象もない訳で、身の回りのもの、目にする全てが「神宿る」ものになっていた筈です。このような社会においては、自然探究が重要な仕事であり、その成果は皆が共有でき、各自の進化に役立ったことでしょう。

重要なのは、一たびこの生活姿勢に基づく生き方が出来れば、その後は安定した進歩の道を歩むことが出来ることです。自我を統制し、調和ある生き方を続けて行ければ、前途洋洋の歩みになることは間違え有りません。自然の中に宇宙を流れる真理を見出し、指導の声に耳を傾けることです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落210 [2016-07-13]

210 Due to the lack of friction or resistance to the life force their bodies remained always youthful and death as we know it did not exist.
210 生命力に対する摩擦や抵抗が無い為、彼らの肉体は常に若々しく保たれ、私達が知るような死というものは存在しませんでした。

【解説】
トリテリアの人達がどのような文明であったかは、本文の記述以外、知るすべがありませんが、アダムスキー氏が同乗記等で記している他惑星人の暮らしぶりから、実際に1000年近くも生命を保つ人達であり、不老の民であったことは容易に想像できます。
最近のテレビ番組でもストレスが諸々の病の原因となることが説明されていましたし、少しでも毎日の自分の精神状態を顧みれば私達は自らの生命力に対して、それを損なう活動、即ち自らを害するような想念・印象をまき散らしていることが分かります。
先日もある所で多くの蝶が舞う光景に出合いました。平凡な道の脇の草むらなのですが、そこの咲く小さな花々に何種類もの蝶が各々楽しげに飛び交っていました。普段、人が立ち入ることの無い彼らの楽園のようでした。それら美しい光景を見て思ったことは自然界の他の生きもの達は皆、毎日を楽しく暮らしており、生命力を発揮しているということです。熱帯地方の雨季の季節、雨上がりの晴れ間の中、楽しげに舞う色とりどりの蝶の舞いは本当はこの世界は楽園なんだと感じた次第です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落211 [2016-07-14]

211 There was no greed or selfishness among these masters of the earth. (In our terms of today we could say that they had achieved their Master's Degree in every
subject.) They knew that the substance of the universe is unlimited and indestructible and that there would always be sufficient to meet every need. No man among them engaged himself in the accumulation of material wealth.

211 これら地球の達人達の間には貪欲や利己主義はありませんでした。（今日の私達の言葉を用いるなら彼らはあらゆるテーマにおいて修士の学位を達成したと言うことが出来るでしょう。）彼らは宇宙空間の物質には際限が無く、破壊されることがないこと、そしてそれらは常にあらゆる需要に見合うに十分存在することを知っていました。彼らの間には誰一人として物質的な富を蓄積しようと忙しくする者はいなかったのです。

【解説】

目下の文明の最大の問題は富の偏在、貧富の格差です。富める者はますます富み、貧しい者はその子孫も含め大多数の者がその貧しさの中に留まらざるを得ないという訳です。この問題は現代社会の根源的な問題であり、富む為には戦争をも辞さないといった所でしょう。

しかし、この貪欲さを捨てることが出来れば、少しずつ私達も本来の社会の姿に戻って行けるものと思われます。もっと私達は貪欲が何処から生まれて来るのかを考えるべきでしょう。将来への不安、支配欲は自らが全てを与えて下さる創造主を身近に感じられない為に起こる、心の不遜に由来しているということでしょう。

かつてトリテリアの人々は、この同じ地球でエデンの楽園に暮らすことが出来たのは、自らの貪欲の要素を克服していたからに他なりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落212 [2016-07-15]

212 There are no descendants of the Triterians, for they served their destined time on this planet earth and were transferred by space craft to another solar system. This is the race which dwelt upon the earth prior to the Biblical records. The fall of man was not brought about until the advent of the Lemurian race. The Triterians left the earth in a virgin state and went on for greater service, but all of the races who followed them are still endeavoring to regain their cosmic birthright. The Triterians worked with the cosmos through intuition and obedience; the other races have chosen to gain their perception through suffering and the observation of effects; living in the bondage of mortal concepts.

212 今日、トリテリア人達の末裔は居ません。何故なら彼らはこの惑星地球における彼らの定められた時間を勤め、別の太陽系に運ばれたからです。これは聖書の記録以前に地球に住んでいた民族です。レムリア族の出現までは人間の堕落はなかったのです。トリテリア人達は地球を原初の状態にして立ち去り、より大いなる奉仕の為に進んで行きましたが、彼らの後に続く全ての種族は未だに自分達の生まれながらの宇宙的な権利を取り戻そうともがいています。トリテリア人達は直観と従順さを通じて宇宙とともに働きましたが、他の種族は自らの認識を労苦と結果の観察を通じて得ることを選択し、死すべき概念の束縛の中に生きているのです。

【解説】

トリテリアの人達は生きる拠り所を直感と従順さに置いていたことは、今日の私達にとって最も注目すべき要点です。

私達、現代の地球人は後世、どのような人達であったと言われるかは知りませんが、物事の基礎を文字に記された内容や物質主義、更には貨幣経済の下、科学技術を特化して発展させ、感受性その他の精神面では随分と発達が抑制された文明と評価されるのかも知れません。

これまでのところ、レムリアから今日の文明まで、さまざまな変遷があったことでしょうが、常に興亡を繰り返しており、今日再び様々な側面でこの文明も行き詰って来ているということです。前にも触れましたが、富の格差や宗教に名を借りた狂気、経済活動と称する侵略等、どの一面を見ても大変危うい状況にあります。

こうした中、本シリーズを学ぶ皆様は、真実を知った者として責任は重く、またこれら諸問題の解決にも期待されているのです。かつてこの分野の同行の士が「直感を大切にする」と盛んに仰っていたことを思い出します。日常生活の中で「直感」即ち、「印象」に気付くような静かな心の状態、鋭敏な心の状態を維持して行くことで私達は自らを本来の状態に戻して行くことが出来るということでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落213 [2016-07-18]

213 Our return to our natural heritage shall be as glorious as that of the Triterians if we allow ourselves to awaken once more into the unification of all life!

213 もし私達が再び全生命の統合状態に自分自身を目覚めさせるなら、私達の自然の生得権への帰還はトリテリア人達のと同様に輝かしいものとなるでしょう。

【解説】

本章の終わりに著者は改めて現状の私達もトリテリアの人達のように人間本来のあるべき姿勢に立ち返るのであれば、彼らと同様に輝く存在になれると励ましています。

私達各自が生きる目的はまさに、この一点に集約される訳です。そしてこのことはイエスも同様に「放蕩息子」の話を通じて当時の人達に示していたのです。

こう考える時、一方で科学技術を手にした現代の私達は、今度はもう一方の手で宇宙を貫く精神性、アダムスキー氏の言う「宇宙意識」を感じ取り、自らの心をその存在に添わせて行くことが大切です。直感力もその中で養われ、因の世界の本当の姿を知ることが出来る筈です。結果（物質）と因との相互関係、関連性を理解するようになれば、トリテリアの人達に近づくことが出来るという訳です。

ご連絡 [2016-07-19]

いつもご覧戴き、ありがとうございます。
都合により、明日の更新はお休みさせて戴きます。

７月１９日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第18章 段落214 [2016-07-19]

214 The Brothers have told me that they have records that have been kept on their planet regarding the civilizations on the earth, and that these accounts of Lemuria and Triteria are correct.

214 宇宙兄弟達は地球上の諸文明に関して保存されて来た記録を彼らの惑星に持っていること、また、こうしたレムリアとトリテリアの記述は正しいと私に伝えてくれました。

【解説】

他惑星の資料室には地球という惑星の歴史が記録され残されているという訳です。これらの資料を見れば過去どのような文明の変遷が起こったかが分かりますし、それはまた今日の文明がどのような場面にいるかも的確に理解出来るということでしょう。

先日もラオスの著名なお寺（オントゥ寺）のお坊さんからその寺にある珍しい首を後ろに向けたライオン（獅子）像のいわれをお聞きしました。それによると後ろ向きの意味は、「国の発展には歴史を振り返ることが重要であること」と「人生を振り返り両親や恩人のことを思うべきである」という二つの意味があるということでした。

私達もこれまでの歴史を振り返り、国としてどのような行動を執って来たかを反省し、同時に今日の自分がどのような方々の恩を受けて成り立っているかに心を留めなければなりません。歴史を学ぶことは私達j自身の歩みを確認し、未来にとって役立てる教訓を掴むことでもあるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落215 [2016-07-21]

19 THE PARABLE OF THE APPLE TREE
215 It was a warm evening, the discussion which for me was all absorbing overshadowed the beauty of the night, as we relaxed in a patio in suburban Los Angeles.

第１９章 リンゴの木の寓話

215 それはある暖かな晩であり、私達はロス・アンジェルスの郊外のある中庭でリラックスしながら、私にとって全てがその夜の美しさをも陰らすほど夢中になる議論でした。

【解説】

当時、あるいは現在も地球の各地には秘かに他惑星人も暮らしているということでしょう。彼らは私達地球人を支援する為に派遣された方々で、アダムスキー氏の周囲にはこのような人々が多数配置され、氏の活動をサポートしていたものと思われます。

太古の昔から伝わるエデンの園のリンゴの木の寓話について、その真の意味を当時、アダムスキー氏に伝えられた経緯が本章で記されています。

パティオ（中庭）について思い出すのは、かつてグアダラハラのディアス博士の所に滞在した際、当地の家の造りとして中庭があり、涼しくなる晩にはゆったりとした時間をそこで過ごしたことが思い出されます。また、帰国時に車で空港に向かう途中、”ここが他惑星人の家だ”とそっと教えてくれたことも記憶に残っています。今となっては確かめようもないのですが、他惑星人とコンタクトを持つ人物の周囲には、これら数多くの宇宙からの支援者グループが存在していたものと思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落216 [2016-07-22]

216 Firkon and another gentleman had brought me to the home of some of their people who are living here.
216 ファーコンともう一人の紳士が私を、ここに住んでいる彼らの仲間の誰かの家に連れてきたのでした。

【解説】
当時、ロスアンジェルス郊外に他惑星人が住んでいたことを本項は明かしている訳ですが、アダムスキー氏の周囲には様々な形で他惑星人からの支援体制が構築されていたことがこの記述からも分かります。
氏の活動はもっぱらこれら他惑星からの支援の人達によって支えられており、氏の近くにいた当時の方々からは、よく正体不明の人達が氏の周囲を出入りしていたことを伝え聞いています。
中でも私の記憶に鮮やかなのは、マデリン・ロドファー夫人から聞いたお話の中で、あのワシントン近郊でスカウトシップが低空で出現した際、夫人の家に滞在中の氏と夫人に見知らぬ青年達が家のドアを叩いて、「彼らが来ている」とスカウトシップの飛来を伝えたということがあります。
また、氏の病が最終段階を迎え、最後に病院に救急車で搬送される時、救急車の後ろをしばらく伴走する車があり、やがてライトを点滅させて去って行ったことなど、夫人からは「きっとブラザーズの車だった」という強い印象を受けたとお聞きした時のことは、私にとって今もって鮮やかな記憶となっています。
今日、私達はこれらアダムスキー氏の残した著作は、こうした他惑星からの支援の下で私達の為に残されたものであることを自覚したいものです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落217 [2016-07-25]

217 Firkon addressing me said, "We had planned to have you meet the One you call the Master, who we call the Wise One, but as those plans were not possible to carry through, He asked me to give you this parable to be shared with the people.
217 ファーコンは私に話しかけてこう言いました。「私達は貴方を貴方がマスターと呼び私達が賢者と呼ぶ人物に逢わせようと計画して来ましたが、そうした計画が実行出来なかったため、その方から私がこの寓話を貴方に贈って人々に分かち合って欲しいと頼まれたのです。」

【解説】
どのような経緯かは分かりませんが、再びアダムスキー氏と「同乗記」で言う長老との面会がその後も計画されていたということでしょう。おそらくはアダムスキー氏を再び母船に同乗させる計画があったものと思われます。
ここで私達が注目したいのは、何故改めてその長老（注：原文ではtheが付いており、同乗記に記されているアダムスキー氏が会ったあの長老を指すものと思われます）が、リンゴの木の寓話について話す必要があったかということです。
実は前章では地球太古の時代のトリテリアやレムリアの文明について解説がありました。滅びてしまったレムリアは問題なのですが、それよりも今日の私達にとっては完全な任務遂行を終えたトリテリアの人達が地上をエデンの園として暮らしていたことが重要です。その後の文明でエデンの園の暮らしが送れなくなったきっかけと伝えられるリンゴの木の寓話の真意を正しく理解することが大切なのだということでしょう。
リンゴはこのことに関連したイメージを持っている訳で、コンピューターやiPhoneのApple社が人が食べかけのリンゴをデザインとしているのは、このことをイメージしているに違いありません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落218 [2016-07-26]

218 "The apple tree lends itself very nicely as a symbol of creation and re-creation. The tree as a parent for the apple started from a seed within whose heart was the cosmic urge to express

218 「リンゴの木というものは、創造と再創造の象徴として、大変良く自らを役立てています。そのリンゴにとって両親となる木は、その内部の芯の中に表現したいと促す宇宙的衝動がある一つの種からスタートしました。」

【解説】

全ての生きものはその大本を小さな一粒の種、一つの細胞に置いています。

生命出発の源が一つの細胞に由来することは明らかなのですが、その意義について私達はより深く考えて見る必要があります。

即ち、種はその発芽の時期や周囲の環境条件が適した時に的確に活動を開始しますし、大賀ハスのように何千年経過してもその時が来るまで待つことも出来る忍耐強さも持ち合わせています。発芽するというその内部の衝動に従って、ある意味その後の保障は何も無くても種達は迷うことなく発芽し、精一杯の生長活動に転じる一方、その後は許される範囲内で必要な成分を周囲から摂取し、自らに期待される成長に向けて人知れず努力するということでしょう。

私達が特に重視しなければならない点は、これら種の行動には迷いがないということです。最近、食卓に上るスプラウトのように一斉に発芽する様子は生命力がそのまま表現されているものです。その迷いの無さは、自らを支えて呉れる自然への信頼によるものと言えるでしょう。種が発芽する時のように、私達も宇宙の因のサポートに信頼を置くことが大切なポイントです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落219 [2016-07-27]

219 "From the bosom of mother earth the seed grows to a beautiful and productive tree expressing its full potential in bringing forth fruit. According to the
seasons., tender new leaves grow into maturity, delicate blossoms proudly display their color and fragrance attracting pollen and the elements required for the growth of the individual apples. Slowly the blossoms release their beauty that the fruit bearing the re-creative seed may fulfill its purpose.

219 「母なる大地の胸元から、その種は一本の美しく、そして果実をもたらす完全な潜在力を表現する木に成長します。季節に従って柔らかな若葉は成熟へと成長し、繊細な花々はそれらの色や香りでひきつける花粉やその他の一つ一つのリンゴの成長に必要な要素を誇らしげに表現します。花々はゆっくり、その再創造の力を持つ種がその目標を成就する実を付けるよう、その美しさを解放するのです。

【解説】

一粒の種が大地の中に播かれると、その種は大地の庇護の下、自身に託された創造の目的の実現に向けて活動を開始します。それは種から発芽し、若葉を出し、やがて幼木から花を付ける成長した木になるまで、休むことはありません。

何ら迷いもなく、ひたすら自身の発現の為、内なる使命を成就する為に働くのです。しかしここで注意したいのは、彼らは苦難の中ガムシャラに努力しているというよりは、静かにしかも豊かに自身を通じて自然の豊かさ、生命の美しさを体現していることです。

植物がこのような自然（宇宙）の法則の中に身を置いて生きていることを実感することが大切です。私達は本来、自然との調和の中に暮らすことで、少しでも彼らに倣った心境を保つことが求められているように思います。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落220 [2016-07-28]

220 "When the fruit is fully mature it is either picked from the tree, or it drops to the ground - thus it is separated from the parent. If the apple were like man it would exult in its own beauty and free-will, developing the self ego in the world of effects only, forgetful of the Cause parent.

220 「その果実が完全に成熟する時、それは木からもぎ取られるか、地面に落ちることになります。そのように両親から離されます。もしリンゴを人間とするとしたら、それは自らの美しさに有頂天になり、自由意志は自己のエゴを結果の世界のみに発達させて宇宙的な両親を忘れさせることでしょう。」

【解説】

リンゴの場合はその元となったリンゴの木のことは忘れることはない訳ですが、地球人の場合、とりわけ西欧社会では誕生後、自我の発展を望ましいとする幼児教育が行われているのではないでしょうか。自分で物事を選択させ、その結果に責任を持たせるやり方は、子供の頃から自身で決定する生き方を勧めています。

しかし一方で、このことが独善となったり、エゴを高め、自他の区別、更には弱肉強食の世界へと繋がって行くような気がします。全て平等の条件の下でスタートした後は、個人の努力や才覚次第だという訳です。もちろん事業を成功させ、金持ちになる者もありますが、競争社会の下では圧倒的大多数が敗者として人生を終わるものです。

これに対して、先ずは自らの出生の源にある宇宙根源の生命体を畏敬し、ひたすらその指導に従い、自らに託された使命を全うしたいとする心境には、エゴを高める要素は一つもありません。

私達が先ずしなければならないことは、自我を増長させることでも、自我を取り去ることでもない、自らの由来や本来の使命について思いを致すことだと言えるでしょう。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落221 [2016-07-29]

221 "Man has not experienced the full potential of his being, for he too is forgetful of his cause parent. As a result he wanders in a maze of effects, ever searching for that which has lasting value.
221 「人間は自分の存在の最大限の潜在能力を経験したことはありません。何故なら、彼もまた自分の因の両親を忘れたからです。結果として彼は結果の迷宮の中をさまよい、価値が長続きするものを求めていつも探しているのです。」

【解説】
目の前の現象に目を奪われている私達は、真実の、そして不変なる私達の源について、ついつい忘れがちです。その結果、自分の目の前の一見、確かそうな物質に私達の拠り所を見出そうとしているのです。
しかし、この一見確かそうに見える物質世界は実は大変移ろい易いものです。私達自身、数年前の自分の写真を見ても、変貌する様子は確認出来る筈です。このように変遷、流転するのが物質界の定めということでしょう。常に同じ形を保つことは難しく、地球自体、宇宙自身も絶えず変化して行く過程にあるのです。
そう気付く時、私達はそれら物質界の更に奥の因の世界にそれらの永続性を見ることになります。即ち、これら宇宙の活動を支え続けている存在に対して、畏敬し信奉することが唯一不変な生き方であるからです。
他の動植物はどこまで理解しているのかは知りませんが、少なくてもこの厳しい生存環境の中でも、穏やかに生涯を送り、自らの役割の実現に向けて迷うことなく邁進している彼らには、この不変なる因の生命力について、誰にも負けない信頼を置いていることは間違いありません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落222 [2016-08-01]

222 "Untold opportunities are granted to man to return to his Father's household for there is no smallest part of essence or intelligence that is lost or is not ever active. When the garment known as the body, releases the flame of life to continue its activities elsewhere, the cell intelligence is busy changing the elements of the body into the dust from whence they came. But the flame of Cosmic Intelligence has found a new vessel which contains renewed energy, in which to express. Thereby continually granting to individualized portions of matter the opportunity to evolve to a higher state of service and understanding."

222 「人には自分の父の家庭に戻る為の明かされていない機会が認められています。何故なら、失われたり永久に活動しない真髄や英知はどんなに細かい部分と言えど無いからです。肉体として知られている衣服がその活動をその後何処かで続けるべく生命の炎を解き放つ時、細胞の知性は肉体の諸元素をそれらがやって来たチリに変化させるべく忙しくしています。しかし、宇宙的知性の炎はそれを表現すべき再生したエネルギーが入っている新たな容器を見つけています。その結果、各個人に分かれた物質に対して奉仕と理解においてより高い状態に進化する為の機会を与え続けているのです。」

【解説】

本項は人間が死を迎える際、どのような事態が起こるかを端的に教えています。

即ち、私達はその際、本来の「父」の家庭に戻れるチャンスが与えられているという訳です。恐らく死に行く私達は意識も朦朧とし、肉体もその維持から分解へと舵を切っている訳ですが、そうした中にあって、私達の宇宙的知性は宇宙の中に新しい肉体が準備されていることを知り、その元に私達の本性を移行する準備を整えているのです。

こうして死から新たな誕生へと生命活動は途切れることなく継承されますし、個性も移行されるということでしょう。私達が死を迎えた際にどのような心境になっているかが大事であるということでもあります。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落223 [2016-08-02]

223 Firkon continued, "As we have told you before, your book of records that you call the Holy Bible, contains these laws that we tell you of, for did not Jesus the Christ say to the thief on the cross beside His,
'Verily I say unto thee, Today shalt thou be with me in paradise.'? * (Luke 23:43). Therein expressing immediate rebirth.

223 ファーコンは続けた。「私達が以前、貴方にお話したように、あなた方が聖書と呼ぶ記録の書には、私達が今お話しているこれらの法則が記述されています。何故なら、イエス・キリストは傍らの盗人に向かって『まさに私は汝に言っておく。本日、汝は私とともにパラダイスに居るだろう（ルカ２３：４３）』と言ったではありませんか。その言葉の中には即座の復活が表されているのです。」

【解説】

生命体の生涯は死で途切れることはないことを聖書は伝えています。また、同種のことは仏教でも教えるところであり、輪廻転生の法の下に私達はあるという訳です。

とりわけ、イエスは身を持って私達に人の死後、速やかにしかるべき場所に生まれ変わることを教えたのです。十字架の激痛の中にあっても、傍らの改心した盗賊人に優しく生まれ変わりを諭しており、穏やかに死を迎えるよう説いています。

ここで、ファーコンは聖書を記録と表現してアダムスキー氏に語りかけているのですが、その背景には聖書には時々の状況にイエスが語った言葉を正確に記録したものであること、同時にまたイエスの弟子であるヨハネとしてアダムスキー氏が当時、イエスと行動を共にしていたとされることを暗に示しているように思われます。

聖書の中のイエスの言葉は２０００年余の歳月を経過した今日でも、その真意に迫ることが出来るように思われます。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落224 [2016-08-03]

224 "Tomorrow you will be privileged to meet the one that you have known as your earthly wife. She is now a young woman living on Venus. She will not recognize you as her husband, but rather as a Cosmic brother. Neither will she wish to be reminded of her life upon earth, for her present life is free from the bondage of self and self interests."

224 「明日、貴方は貴方の地球での奥様であった方にお会いすることが許されるでしょう。彼女は今、金星で少女として生きています。彼女は貴方を夫としてではなく、宇宙的な兄妹の一人として受け止めることでしょう。また彼女は地球上での自分の人生を思い出したいとも思わないでしょう。何故なら、彼女の現在の生活は自己や自己の興味による束縛から自由になっているからです。」

【解説】

前々項から続く「生まれ変わり」について、彼ら宇宙兄弟達は具体的な例を先に金星に転生したアダムスキー氏の妻メアリーに逢わせていることが本項で記されています。

もちろんアダムスキー氏自身も人間は転生することをよく知っていた訳ですが、氏に具体的な検証を果たすことで、それらの報告を読む私達にとって、好事例になることは明らかであり、そうした意図の下で計画されてものと思われます。詳細については「金星旅行記」に記載があることは皆さまご存知の通りです。

一方、本文に記されているように、地球では夫婦であっても転生後は別の関係、言い換えれば過去生とは離れて新しい生き方が用意されることに注目したいところです。各自の人格の形成にとって足りなかった側面を異なる環境で学ぶ為の新しい学校、新たな環境が用意されるという訳です。そこにはかつて仏典にあるように、他の生きものに生まれ替わったりするようなことはなく、次回も人間として生きて行くことになることも重要なポイントです。今期の成果の上に来期の生活があるという訳です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第19章 段落225 [2016-08-04]

225 On the following day this promise was fulfilled. It was an experience that I shall never forget and proof positive that we never die.
225 翌日、この約束は果たされました。それは私が決して忘れることのない体験であり、私達が決して死ぬことはないという強い証でした。

【解説】
実際、この体験を経てアダムスキー氏は人間の生まれ変わりについて、より明確な展望を持ち、以後の人々への教えの中で確固たるイメージを伝えることが出来るようになったものと思われます。
死は一瞬の生命の切り替わりのターニングポイントでしかありません。しかし、死後何処に転生するのか、そこには宇宙の法廷、審判なるものがあるのかも知れません。死に行く者の波動が十分に高まっていなければいくら願っても高次な惑星への転生は叶う筈もありません。そこには厳然とした法則がある訳で、物理で言う電子軌道のエネルギーがそれぞれの軌道に定まっており、十分にエネルギーを帯びている者しか、その高い軌道に移行することは出来ないのです。
一方、戦争や災害等で一度に多数の者が死亡するような事態はどうでしょうか。その場合、はっきりとは分かりませんが、多少の待機状態はあるのかも知れません。しかし、私達は間違いなく死後は無に帰す訳ではなく、再び新たな環境で生命の歩みを続けることが出来ることの意味は大きなものがあるのです。赤ちゃんがかくも楽しげ、穏やかに眠ることが出来るのは、こうした新たな生命を享受し感謝しているからに他なりません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第20章 段落226 [2016-08-05]

20 CONCLUSION
226 The old accepted thought patterns of people all over the world are changing rapidly. The underprivileged are crying for peace and equal rights with those who have enjoyed the good things of life. Even the orb of earth is shifting her position and yielding to the influences that are playing upon her body. There is nothing awesome or supernatural in this change, it is an urge that is felt by the earth and the inhabitants upon it at the change of every cycle.

第20章 結び

226 全世界の人々の古くから容認されて来た思考パターンは急速に変化しています。恵まれない人々は人生のうまい仕事を享受して来た者達と同じ平安と平等の権利を要求して叫んでいます。地球の球体でさえ、その位置を変えようとしており、その惑星体へ及ぼす影響を生み出しつつあります。この変化には何ら恐ろしいことでも、超自然的なことでもなく、それは毎回の周期の変化において地球と地球上の住人によって感じ取られる一つの衝動なのです。

【解説】

現在の私達の混乱も元は地球自体の変化に関連しているという訳です。私達はかつて無い変動期を生きており、多くの者がその変化に対して不安感を抱いています。それが今日の社会情勢にも繋がっているのです。

このように変化の激しい時代にあって、本書をはじめとする他惑星文明の根本原理が伝えられた意義は大きかったと言うべきでしょう。時代は地球文明の宇宙開発というかつてない新しい時代に移行する最中、伝えられ、従来の古い宗教形態でなく、誰でも学べる科学の形をとって私達にそのエッセンスが伝えられました。

残念ながら、現状では社会動向は混乱を増しており、人々は方向性を見失っているように思われます。本講座を学ぶ私達は一人でも多く本来の落ち着いた場所に到達出来るよう、他人にも影響を与える存在になる必要があります。残された時間を有効に使って、私達が託された機能を果たすことが望まれています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第20章 段落227 [2016-08-08]

227 We are in the Space Age and many of man's egotistical opinions will have to go to make room for our place as a member of the interplanetary family. Theories will be replaced with facts, and our perception will be broadened to encompass, to even so small a degree, the possibilities and purpose of life.

227 私達は宇宙時代の最中に居ますので、人間の自己中心的な意見は惑星間家族の一員としての私達の居場所を作り出す為にどけなければならないでしょう。諸理論は事実と置き換えられて私達の知覚は、ほんのわずかであったとしても、生命の諸々の可能性や目的を成し遂げるべく拡がることでしょう。

【解説】

今日の時代に生きる私達は、かつて中世その他の時代に生きた人達より、はるかに恵まれた社会環境の下に生きています。興味を持った事柄は容易に調べることが出来ますし、自らの意見を発信することも可能となる社会に生きています。

実はその延長線上には、私達が他の惑星文明との近づける間柄になりつつあることを、本項は説いています。もう少しで他の惑星文明と交流出来る段階に至っているのかも知れません。

その際に問題となるのは、各自の内面の精神レベルかと思っております。単にテレパシー能力があるとか無いとかという話でなく、その者の持つ「概念」、「心境」が彼ら他惑星文明のそれと比較してどうかという問題です。

これらの課題は、もちろん一挙に解決出来る訳でもなく、一人一人が毎日どのような心境、どのような想念を取り込んでいるか、またそれらについてどれ程の理解力を有しているかによります。毎日をどのように暮らすかによって、その人、更には関連の人々がどの程度まで精神レベルを高められるかが決まる訳で、毎日の生活こそが目的地に近づける原動力になるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第20章 段落228 [2016-08-09]

228 Those who have accepted the reality of visitors from other planets are most desirous to meet these people and wonder how they can tell the real ones from the imposters.

228 他の惑星からの訪問者達の現実性を受け入れて来た人達は、これらの人々にとても逢いたいと願っていますし、どのように本物を偽物から区別できるか思い巡らせています。

【解説】

アダムスキー氏の体験から多くの他惑星人が地球に暮らし、人知れず支援の仕事に就いていることが分かります。とりわけアダムスキー氏の周囲にはそのような多くの他惑星からの人達が居て、氏を支えていたことは容易に想像できます。

同様な事柄は仏教にもあります。仏陀の周囲には様々な魅力ある菩薩や諸天が集い、仏陀の教えを授かる一方、衆生を導く機能を果たしています。仏陀と一体となった上で、それらの教えを広める役割を果たしました。

現代の私達も状況は似ています。やがて仏陀は弟子達が悲しむ中、入滅の時を迎えますが、その後も仏教はアジアに広がって行きます。仏教寺院は自ら仏典を学び、自らを訓練する場として多く建立され、人々の祈りの場としても大きな存在となっています。このアダムスキー氏を中心とした他惑星文明の生きる哲学も今後、誰かの手によって脈々と伝え続けられなければなりません。その過程で、必ずや他の惑星の人々から適切な時、適切な形で支援を受けることもあることでしょう。先ずはこれらの真実を知った者から後に続く者に自ら学んだ事柄を伝え継承する義務があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第20章 段落229 [2016-08-10]

229 And the people may truly wonder, for our new friends will be recognized only by those who are consciously alerted to impersonal feelings; they will not be recognized by their personal appearance for they will be as any other person upon the street, but they may be known by their words which will be totally impersonal and without judgment of any condition or person.

229 そして人々は本当に思い巡らすことでしょう。何故なら私達の新しい友人達は非個人的なフィーリングに対し意識的に警戒している人にのみ認識されるだろうからです。彼らはその個人の外見からは認識されることはないでしょう。彼らは通りのその他の人と変わりはないものの、彼らが話す全くの非個人的で如何なる状況や人物に対しても裁きを持たない言葉によって気付かれるかも知れません。

【解説】

私達自身、他惑星人に気付く為には何が重要かについて本項は説いています。

アダムスキー氏を取り巻くエピソードの中には、多くの他惑星人の存在が出てきます。私の聞いている範囲だけでも、元映画俳優、冷蔵庫の販売員、その他氏の講演会を見守っていた人々等々、いずれも外見上私達と何らの差異は無く、実は地球人ではなかったことが後で判明するケースがほとんどです。アダムスキー氏の生前中はこれら他惑星から多くの支援者が地球に人知れず来訪し、氏の活動を支えていたのです。

一方、これからの私達は自らの努力により、兄とも言える他惑星の人々を見出し、可能であればその方々との交流により、自らの進化の為にアドバイスを戴きたいものだと思っていることでしょう。もちろん、これら支援のみを求めるのではなく、自ら進んで自分にとって必要な要素を日常的に学び訓練することが重要ですし、悠久の時間の中では他惑星からの人々と出会える機会も少なからずあることも間違いありません。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第20章 段落230 [2016-08-12]

230 Appearances! what imps of deception they are!
230 外見！ それらは何という騙しの小悪魔でしょう。

【解説】
自らの修行を通じて仏陀の教えを学ぼうとする者にとって、髪を落とすことは以後、外見に左右されない生活を送る一歩となる筈です。先ずは、自らを外見とは無縁の者にすることから修行が始まる訳です。
この例からも分かるように私達は日々、自分の外見に過度な関心を持って生活していますが、それは私達の自我の驕りや恐れに起因しています。私達の本体はこのような肉体ではなく、内部の精神的存在であることを忘れてはなりません。また、生命にとって重要な肉体においても、肝心な部位はこのような外見とは無縁の存在であることも重要なところです。
とかくこれら外見上の印象を多く受ける訳ですが、実際のところその良し悪しは私達の目が瞬時に相手に下した判断（裁き）に過ぎません。そこの根本を是正し、感覚の支配を取り除くことが大切です。また、自分の目が下した裁きが本当に妥当と言えるかについて、よくよく調べることも必要です。次々に来る対象に対し、勝手に良否の裁きを下しているのが現在の私達であるからです。
もちろん寺の本尊を眺める中でその仏の顔からかもし出される優しさや厳しさの表情を見る時、私達は心に響くものがありますが、それ程、視覚が重要な器官であることは分かりますし、私達は自分の感覚を訓練しながら、それらが調和した機能を果たすよう心掛けること（即ち、修行）が必要です。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第20章 段落231 [2016-08-15]

231 Shall we know the space people by the miracles that they perform? Shall we acclaim a man Messiah because he may walk through fire unscathed or multiply a loaf of bread to feed a multitude? No, for there are many magicians who can to all appearances to the physical senses do the same; and did not the Christ say of the latter days of his dispensation, "False Christs and false prophets shall rise and shew signs and wonders to seduce if it were possible even the elect." So we cannot tell a man's true value by his ability to read our mind or perform works of magic.

231 私達は宇宙人達を彼らが演じる奇跡によって知ることになるのでしょうか。私達はその者が火傷を負うことなく火の中を歩き、あるいは大勢の者に食べさせる為、一個のパンを増やしたりすることで、その者を救世主と称賛することになるのでしょうか。いいえ。何故なら、肉体の感覚にとってこれら全ての見せ掛けの同じことが出来る多くのマジシャンが居るからです。また、キリストはその時代の晩年にこう言われました。「偽キリスト達と偽預言者達が起こり、選ばれた者をも出来れば誘惑しようと、しるしと不思議を示すだろう」と。ですから、私達は人の真の価値をその者が私達の心を読んだり、マジックの業を演じる能力によって語ることは出来ないのです。

【解説】

これまで私達は自らを他惑星人とのコンタクト経験を持ち、人並み外れた能力を有すると称する人達に会ってきました。確かにそれらの人達は自らの体験の中でUFOの撮影や予言もどきの事柄を私達の前で話し聞かせたものです。

しかし、長い年月が経過する中で、それらの人達は次第にその内側の人間性があらわになり、嘘やごまかしも明らかになって行きます。もちろん、出現した当初は多くの人達を惑わし、金儲けの餌食にしたことは言うまでもありません。

私自身は他惑星人が個人的に支援するようなことは、ほとんど有り得ないことと考えています。よほどの危機的状況の時にのみ直接的な支援はあるかも知れませんが、彼ら（他惑星人）は私達地球人の暮らしに直接介入してはいけないのだと思われます。他の世界の者が直接、干渉してはいけないのです。見守り、時々に応じてアドバイスを与えるという訳です。

私達の社会の事柄は私達自身で決定し、実行して行く必要があります。もはやイエスや仏陀の時代のように全てを導かなければならないレベルから、既に私達は自分達なりに文明を築いて来た訳で、これからは他の惑星社会と対等の立場に立てるよう、一段と精神レベルを上げることが望まれています。こらからの他惑星人についての対処の姿勢も従来とは異なり、より対等の立場に立つことが求められています。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第20章 段落232 [2016-08-16]

232 The space people will speak of nothing but the practical life - a life that is established upon earth, for earth is an integral part of the universe - a life that is livable here and now, for if there is to be heaven it must be established upon earth. No visitor from another planet has yet given any teachings that were impossible to live in this world; they all work according to the law of the Cosmos which is itself practical. They, as the wayshowers who have come before, will teach nothing that is mysterious or fanatical nor will they deal in emotionalism. They will speak of the unity of all life by the Breath of the Cosmic Father expressing through the forms made of the substance of the Mother Planet.

232 宇宙人達は実生活についてのことしか語ることはないでしょう。それは地球上で確立された生活についてです。何故なら地球は宇宙の統括された一部分であり、今日ここに生きて行ける生涯であり、もし天国というものがあるとするなら、それは地上において打ちたてられなければならないからです。他惑星からの訪問者は誰一人この世界で活かすことが不可能な教えを授けることはありませんでした。彼らは全て、それ自身実用的である宇宙の法則に従って働いています。かつて訪れた導師としての彼らは神秘なものや狂信的なものは何一つ教えることはありませんし、過激な感情を授けることはないでしょう。彼らは母なる惑星の物質から作られた形あるものを通じて表現されている父なる宇宙の息吹による全生命の一体性について語ることでしょう。

【解説】

本項は「宇宙哲学」の本文最後のテキストになります。その中で著者アダムスキー氏は自らのこれまでの体験を踏まえ、他惑星から地球に来る支援者は皆、私達にとって不可能なことは何一つ教えることはなく、全ては私達が実践可能な内容のみを教えていると諭しています。

イエスも仏陀も、また多くの教師は皆、これら他惑星からの支援者であり、この他にも人知れず多くの方々が私達の間に入って活動しているのだと思います。

私達にとってはUFO着陸等、一大事件が起こり、その宇宙船の中から宇宙人が公然と現れることを期待しがちですが、それよりはより実践的な生活のあり方、心の訓練等々、私達にはまだまだ基本的に学んで置くべき事柄が多いのです。その上で要らぬ恐怖心を起こさなくなった時、はじめて他惑星人も公然と姿を現す時代が訪れるものと思われます。

いずれにせよ、私達は太陽系の住民の一人として宇宙と調和した生活を送る必要があり、相手構わず自国の領土・領海を拡大しようとする私達地球人のレベルではそのような未来も遠い先と言わざるを得ないことも確かです。先ずは貪欲さを捨て、調和した生き方を学ぶことが私達には必要なのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第21章 段落233 [2016-08-17]

21 PRACTICE
233 An easy method that you may use if you wish to keep a check on your thoughts through the day is this:
第２１章 実践
233 貴方が日常を通じて貴方の諸々の想念をチェックし続けたいと望むなら、貴方が用いることが出来る簡単な方法があり、それは以下の通りです。

【解説】
宇宙哲学の執筆を終えた段階で、著者は私達に一つの実践法を伝授しています。日常的に私達は各自の心に去来する想念を監視せよと言うことです。

これには深い意義があるように思われます。つまり自らの想念を批判するのではなく、ただひたすら見守るという訳です。そこには良否の批判は必要でなく、ただ観察し、眺めるだけで良いのです。

これには客観的に見守る者の存在によって、より高次な想念を起しやすくし、低次なものは湧き起こらなくなるという訳です。

通常、私達はこれを想念観察と称していますが、重要なのはただ眺めるところにあります。禅の修業は端座にあるといわれますが、それと同様、私達は日常生活の中で自分がどのような精神生活を送っているかを学ぶ必要があるのです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」第21章 段落234 [2016-08-18]

234 Make a ledger -
On this side write

And on this side
Unselfish - Understanding.

Selfish
Thoughts that remind me

Disturbed
of my Cosmic Unity with

All Life.

Dissatisfied

Judgment of others. Seeing effects not causes

Become the observer of your own mental process and place a check under the column representing your thoughts. At the end of the day tabulate your score. If this is done over a period of time you will find that your old thought habits that caused confusion and disorder in the mind and body have disappeared.

234 帳簿を作りなさい。
こちら側には以下の内容を記入 こちら側には以下の内容
非個人的－思いやり 利己的
全生命との宇宙的一体性を思い 不安感
起こさせる想念類 不満
他人への裁き。因を観ずに結
果を見ること

貴方自身の心のプロセスの観察者になって、貴方の想念を代表する列の下にチェックを入れます。一日の終りに貴方の点数を集計して下さい。これがある期間為されますと、貴方は心と肉体にこれまで混乱と無秩序を引き起こして来た貴方自身の古い想念習慣が消失しているのに気付くことでしょう。

【解説】
私自身、まだこの提案を試したことはないのですが、本項は著者アダムスキー氏が私達に日常の想念活動について、観察と全体評価をどのようにして進めるかを示しています。
具体的には、あらかじめ「非個人的、友愛的な想念パターン」と「自己中心の想念パターン」をと分けて記載しておき、一日に湧き出る想念をそれらのいずれかに区分してカウントせよとしています。想念の出現は瞬時であり、直ちに通り過ぎることから毎回、その内容をメモすることは難しく、事前に出現しそうな想念パターンのリストを作っておき、想念の認識と同時にその項目をチェックし一日の終わりに集計することを勧めています。
このように自分が感受し、発信する想念はその素早さといい、把握することは容易ではありませんが、このように自らの心の動きを観察することで、心が現在どのような状況にあるかを知ることができます。また、知ることによって、心は本来のあるべき姿に近づいて行くことも確かです。
明日の自分は本日、私達が抱く想念が造りだします。正しい想念、健全な想念を身体に響かせること、身体から放つことは、ご自身の心身の健康を創り出すものです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」巻末参考 段落235 [2016-08-19]

IMPORTANT
INSTRUCTIONS
235 To get best results from this book, keep a pencil and a sheet of paper hand,
As you read each page and each line, jot down each impression that you receive. Do not read too much at one time.
Best results will be obtained by reading one page and then writing down all your impressions before proceeding on.
重要な説示
235 この本から最良の成果を得る為には、鉛筆と紙１枚を手に用意しなさい。貴方が各頁、各行を読み時、貴方が受け取った一つ一つの印象を書きとめなさい。一時にあまり多くを読んではいけません。最も良い成果は１頁読んだ後、先に進む前に貴方の得た全印象を書きとめることによって得られることでしょう。

【解説】
以前にも記したと思いますが、本項以下の"Important Instructions（重要な説示）"は、元来、「宇宙哲学」の一部として印刷されたものではありません。それは「宇宙哲学」の本に挟まったアダムスキー氏の名前の下に記された１枚のメモが元来の姿です。「宇宙哲学」に挟み込まれた経緯は分かりませんが、その内容から生前アダムスキー氏が生徒達に学習方法の留意点として述べた要点であると想像されます。特に今日の私達にとって重要だと思う為、「宇宙哲学」の一部として掲載しています。

その説かれている内容は本シリーズ発足の源でもありました。「生命の科学」、「テレパシー」、「宇宙哲学」のいわゆる３部作は、単に本を読んで身につくようなものではありません。著者が何を示唆しているのかを一段落ずつ考え、自ら理解し、実生活に応用して自ら確認するという一連のプロセスが重要なのです。

単なる知識ではなく、実体験の積み重ねが重要なのです。自ら実践する中で得られた知見や経験だけが、本人の記憶として次の生涯まで持ち運べるものと思うからです。

その為に、これら著作については少しずつ読み返し、読み進んで自らが得た印象即ち宇宙から授けられたヒントを書き留め、蓄積することで、自分で自分用のテキストを作ることが出来るということです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」巻末参考 段落236 [2016-08-22]

236 After you have read the whole book, read it again, This time you will notice that your impressions have changed, yet they will blend with the first impressions. This is the self-developing process. Read the book over and over, taking notes of your impressions each time. You will get new impressions with each reading.

236 一冊全部読み終わった後は、再び読むことです。今回は貴方の印象は違ったものになったと気付くでしょうが、それでもそれらの印象は最初の印象と混和したものになるでしょう。これが自己開発の手順です。その本を何度も何度も読んで、毎回貴方の印象類のノートをとることです。貴方は毎回読む毎に新しい印象を得ることでしょう。

【解説】

実はこのシリーズ、開始から既に９年以上経過しています。この間、「生命の科学」、「テレパシー」、「宇宙哲学」をこれまで２回読み返しており、次からは３回目に入ります。

毎回、これら著作の一段落を読んでは、時々に浮かぶ印象を記述し、皆さまにもご紹介している訳ですが、不思議な程、毎回新しい印象を持つことも多いものです。

もちろん、その中には時々に体験している事柄や、その後深まったあるいは広がった視点も影響しているとは思いますが、何と言ってもその原因の一番はこれらの著作が本来示唆する内容は奥が深いということでしょう。

仏典は釈迦が説いた教えですが、それを後世の者が学び、要点を掴むこと、理解することを目指して僧侶は修行を続けます。それと同様に、私達も各自それぞれが真理の理解を求めて、探求する過程がどうしても必要であり、その一例としてこのような手法も求められているように思います。

ご連絡 [2016-08-23]

いつもご覧戴き、ありがとうございます。
都合により、明日の更新はお休みします。

２０１６年８月２３日
竹島 正

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」巻末参考 段落237 [2016-08-23]

237 This shows that you are evolving higher and higher as you read the book. In this way you become your own teacher. Don't forget to keep notes at all times. Read these notes over from time to time and see how they blend with one another. Keep doing this until you no longer receive new impressions from the book.

237 このことは貴方はその本を読むに従って、より高く進化して行くことを示しています。このようにして貴方は貴方自身の教師になるのです。いつもノートを取り続けることを忘れないで下さい。時々はこれらのノートを読んで、それらが互いに如何に融合しているかを見ることです。このことを貴方がその本からもはや新しい印象を得なくなるまで続けるのです。

【解説】

このように毎回ノードを付けながらこれらの著作を読むことの大切さについて、著者は本項で説いています。私も本旨に従ってこれまで続けて来ましたが、その中で気付いたのは読む中で得た印象を素直に書きとめるということは、因から来る印象に耳を澄ませ、それらを書き写すことであるということです。

どのような事柄を著者が訴えているのかを考える時、私達はそのテーマについての印象を得ようと自分のアンテナをその方向に向ける訳で、その結果やって来る印象を書き留めることで、次なる自分の進路に役立たせることが出来るということでしょう。教師につかず自習する方法として著者は勧めているのです。

実際のところ、このような学習法を採れば私達は他人に頼らず、たとえ一人でも学習を進めることが出来ます。また、現代ではこれらの作業記録を保存することも読み返すことも容易でしょう。私達はこれら恵まれた環境条件を無為に過ごしてはなりません。答えは因から与えられることに信を置くことです。

ジョージ・アダムスキー「宇宙哲学」巻末参考 段落238 [2016-08-25]

238 In the meantime you have written your own book. To continue in the development of yourself, follow the same process with the notes you kept as you went along. In this way you keep developing as long as you live without any further help. You are using your REAL SELF as the teacher of your present self. There is no end to learning in all fields of life if you use these methods.

GEORGE ADAMSKI
238 こうする内にも貴方はご自身の本を書いたことになるのです。貴方自身の発達を継続させる為にも貴方が進む際にノートをつけるという同じ手順に従うことです。このようにして貴方はそれ以上の助けを借りることなく、貴方が生き続ける限り、進歩し続けます。貴方は貴方の「真の自分」を貴方の今日の自己に対する教師として活用しているのです。もし貴方がこれらの手法を用いるなら、生命の全ての分野に学習の終りというものはないのです。
ジョージ・アダムスキー

【解説】
このようなノートはやがて、自身が書いた本でもあると著者は述べています。自らが感受した宇宙的印象が書き留められ、他の人にも読んでもらえるような現実の形あるものに固定するという一つの仕事がこれで成し遂げられたことにもなるのです。

この方法を続けることで、たとえ身近に教師が居なくても、一人で学習を続けられるという訳で、大変優れた方法だと著者は私達に勧めているのです。

私自身、長らくこの線に沿って毎朝コメントを綴って来て、既に１０年近くにもなりました。次回から第３周目に入る訳ですが、今求められていることは、これまで何が理解出来て、具体的にどのような効果があったか、或いはどのような部分で探求が弱いかということを整理することでしょう。いずれにせよ、過去の自分よりは程度はとにかくも、進歩していることだけは確かですし、周囲の環境もその活動を支援して呉れているように感じています。